

わ-6-9



はたらく魔王さま! 9

和ヶ原聡司

和ヶ原聡司

9

イラスト ■ 029

Satoshi Waghara

Illustration ■ Oniku

はたらく魔王さま!



いいか、勇者エミリア、

DVD&Blu-ray

好評発売中だ!!

20th

大規模プロジェクト
電撃文庫

ひろゆきプロデュース

フリーター魔王さまの
庶民派ファンタジー!!

特製グッズ大プレゼント実施中!

年間1万名様に当たる!

詳しくはサイトで詳細を! (抽選)



電撃文庫

20th

はたらく魔王さま! 9

異世界エンテ・イスラから戻らない恵美と、ガブリエルに攫われた片座を救うため、世界を渡る決意をした魔王たち。必死にバイトのシフトをやりくりする魔王は、鈴乃と何を持って行くかについて喧嘩したりしながらも、エンテ・イスラを目指しゲートに飛び込む。

一方、恵美がオルバの手に落ちた理由とは何だったのか……。故郷の村へと向かった恵美が父ノルドの残した記録の中から気付いた秘密。それは、自らの母や、世界の成り立ちに関わるもので……?

異世界でも相変わらずの庶民級ファンタジー、今回はファンタジー成分多めでお届けです!

1年間で1万名様に当たる大プレゼント! 電撃文庫創刊20周年大感謝プロジェクト 夏

夏の特別賞(200名様に当たる)

5

著者直筆サイン入り電撃文庫1年分
(2014年1月号〜2014年12月号)

ふっふふり賞(30名様に当たる)

20

著者直筆サイン入りコミックス1巻5冊セット

夏の大型圖書賞(3名様に当たる)

10

著者直筆サイン入り限定複製映画

夏の読み聞かせ賞(2名様に当たる)

1,000

特選しおり10枚セット(限定バージョン)

夏の特等チャンス賞(おれたちの平均の価値でプレゼント)

1,480

特製ノート(限定バージョン)

応募方法と応募締切は反対側のオビ折り返しeCheck!



9784048918541

ISBN978-4-04-891854-1

C0193 ¥610E



1920193006100

ASCII
MEDIA
WORKS

発売 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 610円

※消費税が別に加算されます

**はたらく魔王さま!」DVD&Blu-ray第1~2巻好評発売中!****第1巻**

収録巻: 第1巻・第2巻

魔王様降臨記念DVD、魔王様降臨直下をしのぐ小悪工とくわい画工の対決! 50巻! 4巻! 魔王様が山で登場! 魔王文庫も出る! 1巻から50巻まで読むのボリューム大!

**第2巻**

収録巻: 第3巻・第4巻

初回生産限定付録には、海外版の魔王様小悪工イラストCD! 1巻版と勇者と女子高生-A happy new year-が同梱!

価格

ブルーレイ 各巻 828円(税別)
DVD 各巻 648円(税別)
DVD 1巻 778円(税別)
1巻8巻9巻14巻15巻17巻18巻

送料 別途
ご注文ください

リリース予定4巻
生産予定仕舞情報

第3巻 2013年9月4日発売 「スペシャルイベントの巻(前編)」同梱
第4巻 2013年10月26日発売 「スペシャルイベントの巻(後編)」同梱
第5巻 2013年11月6日発売 「50巻まで読む小悪工の巻(OX)」同梱
第6巻 2013年12月4日発売 「魔王降臨直下をしのぐ小悪工」同梱

詳細はアニメ公式サイトもチェック! <http://maousama.jp/>

© 2013 アスキー・メディアワークス All Rights Reserved.
本誌掲載のキャラクターは登録商標です。



わが祖らとし
和ヶ原聡司

「闇を理由に逃げ和ヶ原と呆れる相棒。」

和「フレフレハサンマダ」

相「一緒にすんな。あと何で色戻ってるの」

和「サンマトンテタダンイイロナノダ」

相「……適当に返したら仕事に戻りなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1～9

イラスト: ^{おしく}029

続! 魔界王! アンイスにちびっこ店長そして子ビブロ
コレ、エンテ イスフ側の狂人。カラーでようやく出てました。
サリエル プレない飯だ。(冷たい啊)

**20周年
記念企画**

発表16年間に、おぼろの仕舞・色名・年表・電話番号・色調(写真)豊富な大増巻版は2013年7～8月発売の電撃文庫の年がかり希望する作品名を下記にし、図書館蔵から取り出した図書館(コピー)も必要がインク印刷にて、下記宛先までご連絡ください。

●販売 〒102-8584 千代田区富士見1-9-18

(株)アスキー・メディアワークス 電撃文庫編集部「20周年・夏」係

●発行の予定発刊日 2013年10月9日(水)※発行順序あり

フェア増巻中に掲載される電撃文庫・電撃文庫増刊品雑誌発行のコミックス・電撃文庫は各品A2版紙製とに付いている図書館で、レアグッズをゲットしよう!

※この企画は2013年10月9日より開始
※この企画は2013年10月9日より開始

<http://magazine.assmedia.co.jp/20th/>

※「電撃文庫増刊品」の発行は、電撃文庫のコミックス・コミック増刊品・雑誌・年表・色調(写真)豊富な大増巻版は2013年7～8月発売の電撃文庫の年がかり希望する作品名を下記にし、図書館蔵から取り出した図書館(コピー)も必要がインク印刷にて、下記宛先までご連絡ください。

はたらく魔王さま! 9

**20周年
記念企画
1冊1冊**

わ-8-9



はたらく魔王さま! 9

和ヶ原聡司



電撃文庫

和ヶ原聡司

9

イラスト ■ 029

Satoshi Waghara

Illustration ■ Oniku

はたらく魔王さま!



電撃文庫

はたらく魔王さま! 9

異世界エンテ・イスラから戻らない恵美と、ガブリエルに攫われた声優を救うため、世界を渡る決意をした魔王たち。必死にバイトのシフトをやりくりする魔王は、鈴乃と何を持って行くかについて喧嘩したりしながらも、エンテ・イスラを目指しゲートに飛び込む。

一方、恵美がオルバの手に落ちた理由とは何だったのか——。故郷の村へと向かった恵美が父ノルドの残した記録の中から気付いた秘密。それは、自らの母や、世界の成り立ちに関わるもので……？

異世界でも相変わらずの庶民派ファンタジー、今回はファンタジー成分多めでお届けです！



9784048918541

ISBN978-4-04-891854-1

C0193 ¥610E



1920193006100



ASCII
MEDIA
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 **610円**

※消費税が別に加算されます





わが国を代表する
和ヶ原聡司

「暑さを理由に逃げ和ヶ原と呆れる相棒」

和「フレフレハサンマダ」

相「一緒にすんな。あと何で色戻ってるの」

和「サンマトンテタダンイイロナノダ」

相「……適当に涼んだら仕事に戻りなさい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1～9

イラスト：^{おしく}029

桃：「魔界王! アンエスにちびっこ店長そしてチビフロ
コ、エンテ、イスラ側の住人、カラーでようやく出てました」
サリエル：「ブレない飯だ。(冷たい)」

はたらく魔王さま! 9

和ヶ原聡司

 電撃文庫



はたらく魔王さま! 9

和ヶ原聡司

電撃文庫 2587



DENGKI BUNGO



大正ロマン 恋文

大正ロマン
恋文
029



エンテ・イスラ

北大陸

スローン村

魔王城

【ルイファ・マントホルム】

ファミゴン

カンアス城塞市

西大陸

東大陸

（エアサハーン）

セント・アイレ伯爵

ホンファ

サント・イダノレッド

グエンザン

帝都蒼天宮

南大陸

王Xh王-VΨ王G

大天使の一人で、センタッキーの役員に扮し聖剣を狙っていた。魔王たちに敗れた後、木桶に一目惚れをし、マッグに遇いつめるも出禁を言い渡される。今は解放されている模様。

エンテ・イスラ西大陸神聖セント・
 アイル帝国宮廷注進士。かつての勇者
 の仲間。おっとりとした雰囲気だが、
 実力より年上でかなりの法師の使い手。
 甘いモノが大好き。

セフィラ・イエソドの化身で、アラス・ラムスの妹。自由奔放な性格で愛な口調の日本語を喋る。千鶴の学校での親いでは、魔王と融合して進化聖剣・片翼と同じ姿を顕現させた。

結と合流、皆で一緒
 じゃあでもこれ
 さん、おーあるよー

Contents

Chika
Kasaki

序章
P010

魔王、就征を決意する

P015

勇者、故郷に誘う

P067

魔王、余念なく準備し出立する

P171

魔王、今昔物語

P231

続章

魔王、吐く

P334



和ヶ原聡司 9

ヤンクト ■ 029

Satoshi Waghara
Illustration ■ Oniku



序章

エンテ・イスラ東大陸全土を支配する大帝国エフサハーン。

国を統べる絶対的な皇帝、統一蒼帝の住まう城と城下町は、その威容と建築としての美しさ、そして何より広大な大陸を一国で支配する偉大さを、このエンテ・イスラ全土を覆う青い空になぞらえ『蒼天蓋』の名を冠され称えられていた。

かつて東大陸、即ちエフサハーンのみならず、エンテ・イスラ全土を恐怖の巷に陥れた魔王軍。その腹心の四天王にしてエフサハーンを制圧した悪魔大元帥アルシエルですら、あまりの美しさと偉大さに心打たれ、蒼天蓋城とそこに住まう統一蒼帝の一族を自らの物と称し誇つたと言ふ。

「ってなんかここ一年くらいで編纂された歴史書に書かれてただけで、それ本当？ 君、どっちかってゆーとこういう無駄に豪華な、維持管理にお金かかりそうなもの嫌いな感じがするんだよね。こんだけ広いと掃除も大変そうだしねー」

蒼天蓋城の内部は防衛上の問題もあって複雑な迷宮と化している。

その上層部。貴人のみが足を踏み入れられる場所で、汚れ一つないトーガの下に「I L O

「V E L A」と書かれた安っぽいTシャツを着込んだ大柄な男が、傍らに声をかける。

そこには屈強な鎧武者が随伴しているのだが、トーガの男が声をかけたのは、鎧武者の肩に担がれている別の人物だった。

「……」

全身をごくシンプルなデザインの衣装で纏めている人物は、声をかけられても無言のまま答える様子はない。どうやら意識を失っているようだ。

「まだ目覚めないかい。大分無理させたもんね。あれだ、とりあえず彼は『玉座』に拘束しておいて。目が覚めたら多少暴れさせても構わないから絶対にお前進だけで対処しようとせずに、僕を呼んでね」

トーガの男が鎧武者の男にそう命ずると、鎧武者は頷きつつも、問い返してきた。

「ガブリエル殿、一体この男は何者なのですか？ 悪魔大元帥アルシエルと何か関係が？」

ガブリエルと呼ばれた男は、薄い笑いを浮かべて首を横に振った。

「君は知らない方がいい。多分知ったら仕事にならなくなる。そうすると僕が自分で運ばなきゃならなくなるからかったるいんだよ」

ガブリエルの返答に、鎧武者はむっとしたように眉根を寄せた。

「お言葉ですが、私はエフサハーン八巾騎士団の頂点、誇り高き正義巾騎士団の一員です。何があっても、職務を遂行できないことなどあり得ません」

「そ？　じゃあ言っちゃうけど、君が担いでる男、その悪魔大元帥アルシエルなんだよね……ほら、言わんこっちゃない。きちんと立ちなさいよ」

ほんの数秒前の言葉を即座に違えた鎧武者は、簡素な服の男を担いだままだらしなくも廊下へへたり込んでしまった。

「今は特別な措置を施して魔力を封印してるけど、目覚めたらそんな封印ソッコー擦ね退けられると思うから僕に教えてって言ったの……だめだこりゃ、だから言いたくなかったのに」
我こそは正着巾騎士団と豪語していた鎧武者は既に恐怖で目の焦点が定まらなくなっている。
「あーあ、アルシエルをそこまで恐れる君達に見せてあげたいよ。スーパード六個人りの罪にするか十個人りのにするかで真剣に悩んでた彼の姿をさ。よいしょっと」

ガブリエルは人事不省に陥った鎧武者の手から意識の無いアルシエル、すなわち芦屋四郎を抱え上げると、そのまますたすたと蒼天蓋の上へ上へと歩いてゆく。

そして、蒼天蓋城天守閣の玉座の間に辿り着いた。

本来ならばエフサハーンを統べる統一蒼帝のいるべき玉座に、全身をユニシロ服で包んだ魔王城主夫・芦屋四郎を座らせる。

「懐かしいだろう？　でも、これから君にとって、もっと懐かしいイベントが起こるはずだから楽しみにしてな」

天守閣の中の大御薙、ちよっとしたスタジアムほどもありそうな巨大な玉座の間に芦屋を置

いたガブリエルは、そう言ってからにやりと笑った。

「まあ、僕はそのイベントを引っ掻き回す気満々なんだけどね。ヒットの後追いするほどつまらないことってないだろ？」

ガブリエルは小さく独りごちて肩を練めると、書棚の隅を尽くした豪華な調度品を集めた部屋にはまるで似合わぬ電子音が響き渡り、

「つと、おお、ようやく来たか」

ガブリエルはトーガの懐から音の発信源を取り出した。

着信中の携帯電話だ。

「どっちだろ、一流かな。それとも一流の家主かな」

表示された発信元は、非表示となっていた。

隠しようもなくうきうきしながら、ガブリエルは電話を取った。

「はいもしもし、エチゴヤです。あ、間違えたミカワヤです。……はいゴメンゴメン、言ってみただけ。はいはいガブリエルさんですよ」

関口一番飛ばしたギヤダがお気に召さなかったらしく、相手に思い切り怒鳴られてしまう。

「お、よく分かったね、僕が東大陸にいるって……え？ 彼が？ さすがだねー！ 知将の名は伊達じゃなかったんだねー。んー？ いや、さすがにそれは言えないよ。でもまあ東大陸のどこかにいるのは間違いないし、あとはこれは言ってもいいかな。エミリアも、もうすぐ僕ら

んところに来ることになってるんだ」

ガブリエルはどこまでもマイペースのまま、相手の反応を楽しんでいた。

魔王、親征を決定する



耳に当てた携帯電話のコール音が四回鳴ったところで、相手が出た。

「もしもし、カワっち？ 今電話大丈夫？ ああうん、あのさ、急な話で申し訳ないんだけどさ、明々後日のシフトって、変わってもらえたりしない？ そそ、ああ、全部じゃなくて半分だけでも全然大丈夫！ 昼でも夜でもどっちでも。おお、マジか、ありがとー 今度お礼すっからさ。……え？ いやいやいやいやそれは自分で本人に頼めよ、さすがに俺は……うん、うん、んじゃよろしくな、本当ありがとね、はい、はいはーい……」

電話を切ると、カジュアルコタツの上にあるシフト表に、一つOKが書き込まれる。

「よっし、あと誰だろ？ カトリンにはもう二日もお願いしちゃったし、コウタとアキちゃんケンちゃんあたりは……試験勉強忙しいっつってたから無理かな……」

シフト表の際には「従業員名簿」と題された紙が並べられており、そこにもシフト表と同じように書いている人間にしか分からない記号で人の名前が分類されている。

「あとは……こんなときに限って日曜の夜に入ってるんだよなあ……シゲさんは土日は絶対出られないって言ってたし、ヨーコさんとミッツーも大抵シフト重なってるし」

ああでもないこうでもないと思ひながら、シフト表と従業員名簿と交互ににらめっこ。

「……こうしてみると、この状況でよくカフェが回ってるよな……これからデリバリーとか始まったらどうなっちゃうんだこれ」

考えが一瞬外に反れて、即座に首を横に振ってシフト表に顔を戻す。

「だからこそ一週間でカタつけなきゃいけないんだ！ えっとリユータは夜ダメで……」
頭を抱える青年の耳に、

「大変そうだねー」

全然大変そうでない若い女性の笑いが響く。

だが、部屋の中にいるのは彼一人。耳に聞こえた声の持ち主はどこにいるのか。

「大変なんだよ実際！ 店長がいなくて俺がいけないとことか結構あるから、俺が休むと店舗に責任者が不在になっちまうんだ！」

「セキニンシヤって、いなきやいかんノ？」

「あのなあ」

黒髪の青年真奥貞夫は、さっきからやたらと茶化してくる見えない声に向かって、いらだたしげに唸る。

「いなきやいかんから『責任者』って言うんだよ！ 忙しいんだからちよつと黙っててくれ！」

「イタズー」

「うがあああああ！」

真奥は無駄な抵抗と分かりながら、頭を掻きむしって叫ぶことでどうにか声を黙らせようとするが、

「キンジヨメイワタだよーマオウ」

一向に堪える様子のない声は、けられらと面白そうに笑うだけ。

「……とにかくあと二日と半日なんとかなれば予定がつくんだ！」

「もうイイジャンそんなの。マオウ早くネーサマ探しにきア……」

「ちっと頑冷やしたら、もう一度電話攻撃だ！ 誰か頼むから代わってくれ！」

「魔王ってもっとイゲンあるかと思つてたのに、随分コシが無いんだネー」

取りあうから、相手も面白がるのだ。真奥は頭の中の、意図しているのかいないのか分からない諷刺中傷的言い間違いにも突っ込まないことに決める。

休憩のために立ち上がると腰り固まった腰をほぐし、キツチンの冷凍庫の扉を開けた。

「あれ？ 買つておいたバリバリくんのマッシュポテト味が……」

「あ、ゴメン食べちゃった」

「テンめえええええ！ アレ人気すぎて生産中止になっちまって当分手に入らないんだぞちくしょおおおお!!」

取りあわないと決めたわずか五秒後、取つておいたお気に入りのおアイスを横取りされて、悪魔の王にしては珍しく怒りにまかせて怒鳴り散らす。

「真奥さん？ 真奥さん大丈夫ですか!! どうしたんですか?」

と、錯乱するあまり柱に頭をぶつけようとしていた真奥は、部屋の外から飛び込んできた慌てふためく声にはっと我に返った。

「ち、ちーちゃんか？」

「は、はいあの、今なんか凄（こわ）い声が聞こえて、あの、だ、大丈夫ですか？」

外から聞こえてきたのは真奥のアルバイト先の後輩で、真奥の正体や異世界の存在、地球の神秘を常に共に見てきた日本の女子高生、佐々木千穂（ちほ）の声だ。

「な、なんでもねえんだ。い、いやなんでもなくねーけど大したことじゃねーから、ちーちゃん、今開け……」

「チホと一緒に、誰（だれ）がいるネ」

「ああ？」

真奥は玄關の鍵（かぎ）を開けようとして、騒動（さわどう）の原因である頭（かぶ）の中の声が真剣な表情を帯びたのに気づくが、先ほどのまでのやり取りのせいでつい邪険（じゃけん）に反応（はんおう）してしまふ。

「あ、あの真奥さん、もし今都合悪いようだったら出直しますけど……」

「え？ あ、いや、悪いちーちゃん、なんでもないんだ、ちーちゃんのせいじゃないんだ、と、とにかく上がってくれー」

真奥の険悪な声が聞こえたのか、心なしか怯（おそ）えたような千穂をなだめながら扉（かど）を開けると、

「は、本当に大丈夫なんですか？」

部屋の中を恐る恐る覗（のぞ）き込んでくる千穂と、

「こ………こんにもは………」

千穂の隣で、同じように胡亂げな顔でこちらを見る鈴木梨香の姿があった。

「ああ、あんたか。その、体調は平気なのか」

「ま、まあね。千穂ちゃんには随分迷惑かけたけど」

真奥が梨香にそう尋ねると、梨香ははつきりと真奥や千穂の目を見て答え、千穂は照れて顔を赤くする。

真奥は内心意外だった。

三日前、梨香が魔王城を訪ねてきたときに起こった出来事は、まさしく惨事としか言いようがない。

千穂ほど荒事や超常現象に免疫の無い（当たり前だが）梨香は、初めてエンテ・イストラにまつわる事情に巻き込まれて完全に参ってしまい、この三日間、自宅で寝込んでいると聞いていたからだ。

その三日の間は、千穂が電話やメールをしたり、梨香のマンションを訪ねたりして精神面のケアをしたというが……。

「人気すぎて生産中止とか、何？ 取っておいたバリバリくんを誰かに食べられたかなんかしたの？」

「お……っ」

思い切り聞かれていたらしく、真奥は思わず言葉に詰まる。

「え？ バリバリくんがどうかしたんですか？」

「千穂ちゃん知らない？ バリバリくんの、なんかアイスっぽくない味あるじゃん、ポテトがどうのってやつ、あれすごく人気で生産追いついてないらしいよ？」

「そうだったんですか！」

世の流行に敏感なOらしい梨香の情報を、千穂は知らなかったらしい。

真奥はアイスを食べられてしまった悲しみと、絶叫を聞かれていた既すかしさと、目の前で繰り広げられるバリバリくんトークにいたたまれないものを感じる。

「と、とにかく、何か用があつて来たんだろ？ 出せるもんもねえが上げれよ」

真奥が促すと、千穂が率先して魔王城に上がる。

「お邪魔します。あ、真奥さん、これよかったら」

千穂は背後の梨香を気にしながら、殊更明るい声を上げて魔王城に上がると、手に掲げている買った物袋を真奥に差し出す。

「途中で買ってきたんです。よかったら……」

「お、サンキュ……？ ば、バリバリくん！ し、しかもマッシュポテト味じゃねえか！」

「え？ 本当に？」

真奥は、失われし伝説のアイスの存在を袋の中に認めて驚愕の声を上げ、梨香も驚いて真奥の手にあるアイスの包みを見た。

「品薄だつて知らずに買ったんですけど」

千穂はビニール袋にプリントされた店名を指差す。

「うちの近くの酒屋さんにたまたまあったんで買つてきたんです」

「マジか！　なんか最近人氣らしくて本当、どこにも無いんだよ」　サンキユーちゃん！

「そうだったんですか。でも喜んでもらえて良かったですー」
笑顔で浮かべる千穂と、早速アイスの袋を破いて幸せそうに頬張る真奥の姿を、梨香はなんとも言えない表情で眺めていた。

「あ、あの、真奥さん」

と、アイスに氣を取られていた真奥に、梨香は声をかける。

「お、お悪い、とりあえず上がってくれ」

客人を放置していたことに気づいた真奥は梨香を促すが、梨香は真剣な目で真奥を見返して言つた。

「惠美と芹屋さんは……やっぱりいないんだよね？」

「……ああ、そうだ」

真奥は右手にアイスを大事に持ちながらも、真面目な面持ちで頷いた。

そう、普段なら、真奥のアイスが勝手に消滅するような事態など絶対に発生させない冷蔵庫とキツチンの主である男がいなかった。

宮屋四郎、すなわち悪魔大元帥アルシエルの存在が自らの傍らにない、という状況は、真奥が魔界統一事業を始めて以来初めての出来事だった。

宮屋は、真奥と恵美の共通の敵であるエンテ・イスラの大天使ガブリエルに連れ去られた。エンテ・イスラ征服に失敗し、異世界日本に流れ着いたときですら常に傍らにあった忠臣がいなかったという事態は、真奥にとってまさしく片腕を失うに等しい感覚であった。

そして、真奥のエンテ・イスラ征服を阻止し、真奥を追って日本に渡ってきた宿敵、勇者エミリア・ユステイーナこと遠佐恵美もまた、ガブリエルの言によれば、エンテ・イスラのどこかに囚われていると言う。

「宮屋さんや、恵美のお父さんからは結局全然話を聞けなかったし、その後はそれぞれどころじやなかったし……だから、今日は千穂ちゃんに頼んで、本当のことを聞くために一緒に来てもらった」

「本当のこと？」

「鈴乃ちゃんのこと、漆原さんのこと、宮屋さんのこと、真奥さんのこと、何よりも、恵美のこと。千穂ちゃんに、明後日から真奥さんが、なんとかっていうところに恵美を探しに行くって聞いたんだ」

「あ、ああ……でも、鈴乃や漆原のことって……？」

千穂は何をどこまで話したのだろう。

真奥は横目でちらりと千穂を見ると、千穂はそれに気づいて首を横に振った。

「私は自分の目で漆原さんと鈴乃ちゃんが人間離れしたジャンプ力で雨の中飛び出したのと、真奥さんが空飛んで消えるのを見た。それから声屋さんに聞いたんだ。恵美が地球人じゃないって。それでその後、声屋さんは変な連中に捕まって、消えた」

このことから分かる通り、真奥も、魔王城の隣室であるヴィラ・ローザ管塚二〇二号室に住むエンテ・イスラの聖職者、クレスティア・ベルこと鎌月鈴乃も、梨香に対して未だどんな類いの記憶操作もかけていなかった。

そして今日、梨香は千穂に連れられてやってきた。

東京の片隅の、不可思議すぎる住人の集まるこのアパートに。

「何か知ってるなら教えて。恵美のこと、私の友達のこと」

梨香の大切な友人である、道佐恵美の真実を求めて。

梨香の言葉に真奥は二〇二号室側の壁を見て、小さく息を吐いた。

「まあ、そうカタくなんな。聞きてえつつーんならちやんと話す。だが少し待ってくれ。鈴乃とあと天擇さん……あんたを助けた女の人が増ってきてからの方が話はスムーズだから」

「……分かった。待たせてもらうね」

そう決然と返す梨香は、既にショックは乗り越えているようだ。

真奥の言うことに素直に頷くと、部屋に上がり、カジュアルコタツの傍にゆっくり腰を下ろ

した。

「あんたも大概、肝が太いな」

「十分トラウマもんだっだし、これでも九二日間熱出して寝込んだ後だよ」

梨香は苦笑して見せる。

その笑顔に多少の強がりを見出した真奥だが、それを追及するのは野暮だろう。

「鈴乃さん、出かけてるんですか？」

ところが梨香が落ち着いている代わりに落ち着かないのが千穂だ。

「ん？ ああ、今朝早く天祢さんと一緒にどっか行っただぞ？」

「び、病院とかですか？」

「ん？ ああ」

千穂が心配そうな顔の理由を察して、真奥は首を横に振る。

「いや、怪我はもう大したことねえみたいで、今朝はびんびんしてやがったぞ？」

「ええええ？」

千穂は信じられないといった様子で大声を上げる。

それも仕方のないことで、魔王城の隣に住む鎌月鈴乃は、梨香も関係した二日前のトラブルで、激しい戦闘の中で千穂を庇い、肩から胸までを悪魔の爪で切り裂かれるという重傷を負ったのだ。

いかな鈴乃が異世界エンテ・イスラの聖職者で法術に精通しているとはいえ、千穂の意識ではたった三日で治るような傷ではなかったはずだが。

「まあ、それについてちや天祢さんの方がおかしいおかしいって言ってたけど、でもほら、あの
人、大事なことも何も話さないからさ」

「……ああ」

千穂は頷く。

天祢とは、かつて真奥と千穂達が仕事をした、千葉縣銚子市の海の家「大黒屋」の店主であり、魔王城が入居するこのアパート、グイラ・ローザ墓塚の大家、志波美輝の姪である大黒天祢のことだ。

大家の志波も、姪の天祢も、日本、引いては地球の人間でありながら、不思議と真奥達の正体について最初から知っていたような節があり、特に天祢に関しては、魔王である真奥にも想像のつかない強大な力の発現を何度も見せている。

「天祢さん……ちゃんとアパートに帰ってくるんですよね？」

「ああ、荷物は鈴乃の部屋に置きっぱなしだからな」

この三日間、天祢は鈴乃の部屋に寝泊まりしていた。

千穂が心配しているのは、天祢が鏡子のときのように謎の力を見せた末に忽然と消えたりしないかどうかということだ。

天祿は今日に至るも、蜷坂家訪の理由を明らかにしておらず、その正体も今もって不明瞭なため、真奥も千穂も全面的には信を置いていないのだ。

「まあ昼過ぎには帰ってくる予定だとか言ってたから、とりあえず待ってみようぜ」

「わ、分かりました……あ、そう言えば鈴乃さんに驚いて忘れるところでした。真奥さん」

「ん？」

「あの子はどこに？」

その声色に若干の険しさが垣間見えるのは、真奥の気のせいではないだろう。

「……アシエスのことか。いるよ、ここに」

真奥が瞬易したように、自分のこめかみを指差して見せた。

先はどから頭の中に響いている、真奥が響るバリバリくんマツシュボテト味を一口寄越せと大騒ぎしている声の主だ。

「ここ……って、真奥さん！」

「し、仕方ないだろ、そういうシステムらしいんだから！ 正直今もうるさいんだけど、外に出しとくと本当に好き放題するから面倒なんだよ」

千穂の顔が目に見えて険しくなり、真奥は言い訳がましいことを言うが、

「鈴木さんに、お話するには、アシエスちゃんの、話も、必要ですー 外に、出して、あげてくださいー」

千穂は憤然と真奥の胸倉を掴むと、言葉に合わせて真奥を揺さぶりはじめる。

「あががーちやん揺らすなアイスが落ちる！ 分かった、分かったから揺らすなって！ まだ慣れてないから集中できない！」

何も起こっていないうちからやたらとお姫状態の千穂を引きはがすと、真奥は若干ふらふらする頭を支えて、誰もいない空間に向かって手をかざす。

「んー……出てこい、アシエス！」

真奥が発したその言葉と同時に、真奥の体が一瞬淡い紫色に光る。

それを間近で見た梨香はびくりと身を震ませるが、残念ながら千穂はその瞬間だけは梨香のことを気遣うことができなかった。

「マオウ、そのアイス一口チョコーダイ」

真奥の体から発せられた淡い紫色の光は、真奥が手をかざした先ではなく、なんと真奥の背後に凝結して実体を取った。

年のころは千穂より少し年下。

日本人にはあり得ない美しい銀髪の中に一房の紫色の前髪の少女が、何も無い所から突然姿を現したのだ。

問題は、現れた瞬間から真奥の背に四肢を絡ませ抱きついているという点である。

それだけではなく、そのまま背後から真奥の口元にあるアイスにかぶりつこうとするのだから

ら、その光景だけで真奥に想いを寄せる千穂にしてみれば看過し難い事象だ。

「あ、あ、あ、アシエスちゃん、真奥さんに何してるの?」

「シー、パートナーとしてのスキンシップ?」

「あ、アシエス何すんだ! 離れろって!」

驚いたのはアシエスを召喚した真奥も同様である。

今まで一度として真奥がイメージした状態で出てきてくれた試しがなかったが、何もこんな格好で出てこなくてもいいではないか。

「んー、マオウはテレやさんだナ!」

「そういう問題じゃねえ! お前になんか一口だってやらねえぞ! お前はもう俺のやつ勝手に食ったんだろ!」

「それとこれとは別腹だヨ!」

「都合よく日本語混ぜてんじやねえぞ! ぜってえやらねえからな!」

一本のアイスを選んて、悪魔の王と、神秘の少女がくんずほぐれつしながら醜い争いを繰り広げるその間に、

「そ、こ、ま、で、ですっ!」

「うおっ!」

「わああッ!」

千穂が強引に割って入ると、真奥からアシエスを無理やり引きはがす。

「チホ！ 何すんだヨー！」

「アシエスちゃんの分のアイスも別にあるから、真奥さんからアイスを取ろうとしちゃダメ！」

「えー、でも人の食べてるのツテそれだけでおいしソ……」

「だとしてもダメ!!」

「うう……でも分かった」

千穂の必死の形相に恐れをなしたのか、アシエスは引き下がると大人しく千穂が買ってきてくれた買いい物袋の中から真奥の食べているのと同じものを見つけ出す。

「おお、アシエスが言うこと聞いた……ちーちゃんすげえ……」

真奥は千穂の背中を見ながら感心したように呟くが、

「……真奥さん」

「は、はいっ？」

その声を聞かされたわけでもないだろうが、振り返る千穂の表情に殺気めいた何かを感じ、真奥は思わず姿勢を正した。

「アシエスちゃんを甘やかしすぎでると、アラス・ラムスちゃんが戻ってきたときにヤキモチ妬かれて嫌われちゃいますよ」

「お、おう？」



「そ、それに、よ、よくないですあんなこと！ 色々事情はあるかもしれませんが、女の子なんですよアシエスちゃんは！」

「い、いやでも多少言葉遣いは汚かったかもしれないねえけどアシエス本当俺の言うこと聞かな」

「そっちじゃありません！」

「うおう!?」

真実^{マコト}は必死に抗弁するが、顔を真っ赤にしながらこちらを睨む千穂^{チホ}と何かが噛み合っていない感じがひしひしとしてくる。

「ひ、昼間から、お、女の子とあんな激しくす、す、スキンシップとか、よ、よくないです！」

「ち、ちーちゃん？ おい何か勘違いしてねえか、俺はそんな……」

「仕方ナイ仕方ナイ。だって私とマオウは身も心も一つなのダ！」

「っ……!!」

「ち、ちーちゃん！ お、落ち着け分かってんだろ言葉のアヤだ！ アシエスもお前日本語カタコトのくせしてなんでそういうことばっか連発なんだよ!!」

完全に千穂を挑発していると思えないアシエスの言葉だが、心はともかくとして、身が一つであることは真実だった。

アシエスの髪は、銀色の中に一房の紫が混ざっている。

これはエンテ・イストラの世界組成の宝珠^{ホウシュ}「セフィラ」から生まれた子供たちの特徴であり、

真奥や千穂の周りには、これと同じ特徴を持った人物がもう一人いる。

勇者エミリアの持つ「進化聖剣・片翼」と融合し、魔王である真奥と勇者である恵美を両親と慕う赤ん坊、アラス・ラムスだ。

双方の成長度合いを見ると信じがたいことだが、アシエスはアラス・ラムスの妹に当たると言うのだ。

アシエスは姉妹だけあつてか、そんなアラス・ラムスと等質の存在であるらしく、恵美とアラス・ラムスの関係と同じように真奥と融合を果たし、三日前の事件の解決に役買っているのだ。

だが結果的にアシエスはその後もずっと真奥と融合状態であり、やはりこれも恵美とアラス・ラムスがそうであるように、表に顕現していると宿主である真奥から一定距離以上離れられなくなってしまったのだ。

だが元から人懐こい性格らしいアシエスは、融合前と後で真奥に接する態度が急変。

日頃は真奥に近づく女性にも、そう露骨にはヤキモチを妬いたりしない千穂をして冷静でいられなくなるほどに、真奥にべったりくっついて離れないのだ。

かと思えば。

「リカだっけ？ リカもアイス食べる？」

困る真奥や戦慄く千穂にあっさり興味を失い、所在なさげに三人のやりとりを見ていた紫香

にアイスを出し出し、

「わ、私はいいよ、ありがと」

断られてちよっとシュンとしていたりする。

「真奥さん」

「は、はいっ」

千穂の冷たい視線に晒されて、真奥は思わず正座する。

「早く、蓮佐さんと声屋さん、戻ってきてくれるといいですねー」

「そうですねっ！」

思わず敬語で返事してしまう真奥。

そんな三人の不思議な力関係を横で見ていた梨香が、

「……まるで分かん」

しきりに首をひねりながらそう呟いたとき、

「お、鈴乃からメールだ。もう少しで帰ってくるのか」

真奥の、いささか時代遅れな感のある携帯電話に着信があった。

出かけたという鎌月鈴乃があと三十分ほどでアパートに戻るとメールを入れてきたのだ。

「お、やっタ。アマネにアイス買ってきてって、今朝頼んでおいたんだー」

「お前はどれだけアイス食う気だよ。腹壊しても知らねえぞ」

答えなど返ってこないと分かっているでも、真奥も突っ込みを入れざるを得ない。

「まあそれじゃ鈴乃と天杯さんが帰ってきたら、恵美とアラス・ラムスと芦屋と恵美の親父叔出作戦について、話し合いを始めるか。シフトはまた後で考えよう」

真奥がコタツの上のシフト表を片付けながらそう言っただけで場を鎮めようとしたときだった。

「あのさあ……」

「ひゃっ！」

その場の誰のものでもない弱々しい声が部屋に響き、梨香が驚いて思わず腰を浮かす。アシエス以外の全員の視線が、押し入れに集中すると、

「別に僕のこと、誰も思い出してくれなくていいから……ちよつと静かにしてくんないかな。ベルと違って僕まだ治りきっていないんだ。大声出されると傷に響くんだよね、結構」

押し入れをほんのちよつとだけ開けて、悪魔大元帥ルシフェルこと魔王城の不良債権、自称一流ニートの漆原半蔵が恨みがましい顔を覗かせたのだった。

寒

恵美と芦屋が、エンテ・イスラに囚われた。

本来ならこの言葉は適当ではない。

何せ恵美はエンテ・イスラから魔王である真奥を追ってやってきて、青屋はそのエンテ・イスラで征服活動を行う悪魔だったのだ。

言うなれば、エンテ・イスラは本来二人がいるべき地である。

だが、二人は間違はなく、帰るべき地に囚われている。

事の起こりは、恵美が自分の両親がエンテ・イスラでどのような立ち位置にあるのか、どのような過去を持っているのかを確かめるために、里帰りをしたことから始まった。

そのときは、世界最強の人間と言っても過言ではない恵美の身に危険が及ぶなど、宿敵である真奥ですら考えたことがなかった。

だが恵美は帰還予定の日を過ぎても戻らず、恵美の持つ「進化聖剣・片翼」と融合しているアラス・ラムスも当然戻らない。

勤め先の業態導入に伴い原動機付自転車運転免許を取得しようとしていた真奥は、主にアラス・ラムスを心配するあまり、学科試験に失敗してしまう。

その後、恵美が戻らないまま二度目の試験を受けるべく府中運転免許試験場に向かう道程で、真奥は不思議な親子連れと出会った。

三鷹の天文台前バス停から真奥の乗るバスに乗車してきたサトウヒロシ、サトウツバサと名乗った父と娘はあからさまに日本に慣れていないようだった。

うっかり袖をすり合わせてしまったせいで、真奥は心労の多い二度目の学科試験で延々二人

に付きまとわれる。

だがその不本意な交わりの中で、サトウヒロシは魔王軍の侵略で死亡したと思われていた恵美の父、ノルド・ユステイナであり、サトウツバサはセフィラ・イエソドから生まれたアラス・ラムスの妹、アシエス・アーラであることが判明する。

真奥がサトウ親子にまつわる急展開の事態に汲々としていたのとはほぼ同時刻、千穂の通う佐幡北高校では、最近何かと真奥の周囲に出没する魔界の高等悪魔、マレブランケ一族の頭領格が現れ、千穂が対峙するハメに陥っていた。

鈴乃と漆原が千穂の救助に向かうが、その現場をエンテ・イスラの事情を知らない恵美の友人、鈴木梨香に見られてしまい、芦屋は梨香から真実を話すよう糾弾される。

観念した芦屋が真実を話そうとすると、千穂の危機を救うべくアシエスの力で免許センターから文字通り飛んできた真奥が、ノルドを魔王城に預けて飛び去った。

結果、梨香と芦屋とノルドという不可解なメンバーが魔王城に残される。

それでも三人が、かかる事態の真実を語り合いはじめたそのとき、ヴィラ・ローザ家は、ガブリエル車いるエフサハーン鎌倉市騎士団の襲撃を受ける。

鉄子の海の家「大黒屋」の店主、大黒天祐の介入で梨香だけは無事だったが、ノルドと芦屋をガブリエルに拉致され、千穂の学校ではマレブランケ頭領グリヴィタオッコに味方する大天使カマエルの力により、鈴乃と漆原も重傷を負う。

鈴乃と漆原に連れて千穂の学校に到着した真奥は、恵美がアラス・ラムスと融合し強大な力を得たように、アシエスとの融合を果たすことでカマエルとリヴィタオッコを撃退した。

だが、それだけだった。

千穂と鈴乃と漆原を傷つけられ、芦屋とノルドを連れ去られ、さらには恵美とアラス・ラムスがエンテ・イスラで虜囚の身となっていることを知った真奥にとって、この状況は完全な敗北であった。

真奥は、魔王である。

グイラ・ローザ砦二〇一号室は魔王城であり、砦は魔王城の城下町だ。

芦屋四郎、漆原半蔵、佐々木千穂、鐘月鈴乃、そして宿敵であり勇者である遊佐恵美は、魔王サタン自身が認め任じた、悪魔大元帥だ。

新たな世界征服を目指すために真奥自身が必要だと信じる「部下」であり「仲間」だ。

部下を守るのは、上司にして主である真奥の責任。

真の魔王軍に仇為す愚か者達には、報いを受けさせねばなるまい。

魔王サタンは日本の「仲間」達の力を借りて、日本発、新生魔王軍の聖十字大陸エンテ・イスラ親征を決意した。

※

「嘘だ……」

真奥の視線は、呆然と宙を彷徨っていた。

「こんなことが、あつていいのかよっ」

「真奥さん……」

それでいて隠し切れない悔しさをにじませた声に、千穂は思わず真奥を労わるように肩に手を置く。

「だが、これが現実だ。貴様にとっては残酷な現実かもしれないがな」

白失している真奥に冷徹な言葉を浴びせたのは、クレスティア・ベルこと鎌月鈴乃だ。

「今の貴様の力など、所詮その程度だったということだ」

「鈴乃さん！ 言いすぎです！」

「千穂殿、魔王を庇ったところで現実には変わらんぞ」

「ち……っくしょう……」

真奥は悔しさのあまり拳で畳を殴り、その音がシンとした室内に響いた。

「なんで……なんで……っ」

真奥は歯を食いしばり、悲壮な目で鈴乃を睨み、力の限り叫んだ。

「なんでお前の方が先に原付免許取ってんだよっ!!」

「真奥、うるさい」

押し入れの中から割と本気で辛そうな漆原の声が聞こえるが、真奥はそんなことは気にしていられない。

真奥が睨みつける先にはすまし顔の鈴乃がおり、その手に燦然と輝くカードこそ、鎌月鈴乃の名前と顔写真が入った運転免許証だったのだから。

「必要だと思ったから取得したまでだ。貴様の様子では、もう出立までに再試験を受けるのは不可能だと思ったからな」

「だからって……だからってお前っ!」

真奥は一転、猛然と窓辺に駆け寄ると、眼下の庭を見下ろし舌をさして喚く。

「なんで免許取ったその足でスクーターで帰ってくるんだよ!! 嫌がらせか! 俺に対するあてつけか!!」

ヴィラ・ローザ笹塚の敷地内、真奥の愛騎、シティサイタル「デュラハン式号」の隣につややかなボディを陽光に燦めかせて鎮座しているのはスクーター、しかも業務用として名高いホソダ・ジャイロルーフであった。

屋根を標準装備し、安定感も抜群の三輪式。宅配ピザ屋など、天候を選ばず軽量荷物の配達

業務を行う業者に重宝されている。

「ねえ千穂ちゃん、なんで真奥さん、あんなに荒れてるの？」

折角千穂が買ってきたアイスのおかげでモチベーションを取り戻したと思つたのに、鈴乃が外出先から帰ってきてからの真奥の再びの荒れように驚いた。榮香は千穂に尋ねる。

千穂は困つたように笑いながら、榮香にそつと耳打ちした。

「真奥さん、もう二回、免許取り損ねてるんです。一回目は学科で落ちて、二回目はあの日に講習前に私を助けに来ちゃつて……」

「……ふうん」

「嫌がらせか？ マグロナルドのデリバリーで使うのアレなんだぞー 俺に対するあてつけ以外なんだってんだ!!」

「仕方あるまい。運転免許証が無くてはバイクを購入しても乗って帰れない。ならば免許を取つてくるしかないだろう」

鈴乃は真奥の苛立ちなどどこ吹く風で、千穂の隣に座ると厳しい顔で真奥を見上げる。

「それとも何か、貴様はエンテ・イスラを、遠距離移動用の足も無しに動き回るつもりか」

「う……いや、それは」

「私や貴様ほどの力を持った者が空など飛べばすぐさま探知されてしまうぞ、少なくとも相手にはガブリエルやカマエル、それにマレブランケの頭領格がいるんだ」

「で、でも場所はある程度絞られてるから……」

「ゲートの開閉を感知されてもすぐに身を隠せる程度に離れた場所に出なければどうしようもあるまい」

「で、でもだからってバイクは……エンテ・イスラには内燃機関が無いんだぞ？ 聖法氣や魔力を感知されないだけなら現地で馬とか買うとか……」

「貴様は馬に乗れるのかっ!!」

ぐちぐちと文句を垂れる真奥だったが、しびれを切らした鈴乃の一喝で口を閉じる。

「何日エンテ・イスラを彷徨うか分からん！ 相応の荷物も必要だ！ ゲートもうまく制御できるかどうかは分からんし、行動には迅速さが求められる！ ならば可能な限りの準備は、日本で整えて当然だろう!! それとも何か!? 貴様は東大陸を自転車で横断するつもりか!? 今から馬を調達する金を稼いでくるか!?」

「……」

返す言葉が見つからず、不貞腐れて窓辺に座り込む真奥。

「そりや馬は扱ったことねえけど、ワイバーンなら誰にも負けねえし……」

地球から見たエンテ・イスラが如何に不可思議な世界だからと言って、人間はワイバーンを飼育したりしない。

「はあ……いいか魔王」

「なんだよ」

「よく見ろ、あのバイクは一人乗りだ」

「ああ」

「いくら日本の法律の及ばぬ地で乗るとはいえ、貴様と二人乗りなどまっぴらごめんだ」

「あ、ああ？」

「に、二万円の罰金ですよっ」

二人乗りに過剰に反応した千穂が妙なことを口走り、

「千穂ちゃん、それは自転車。原付は減点とか反現金とか色々違うから」

梨香が軽く突っ込む。

「だから」

「お、おう」

そして鈴乃の形の良い唇から、

「もう一台、貴様が乗る分を購入してある。エンテ・イスラで乗る分には、免許証は必要ないからな」

とんでもない一言が放たれた。

「……………もう、一台？」

「ああ」

「バイクを？」

「ああ」

「……お前が買ったの？」

「他に誰が買うんだ」

あつさり言つてのけた鈴乃。しばし、部屋の空気が凍り、そして、

「嘘だろおおおおおおおおおおお!?!?」

「真奥……うるさい、マジで」

「ま、ま、前から不思議だったんだけどよ！ お前一体どれだけ金持ってたんだよ！」

真奥の絶叫にまた押し入れの漆原から文句が飛ぶが、これはさすがに真奥だけでなく、千穂も驚いた。

「わ、私よく分からないんですけど、バイクってそんなに安いものじゃなかった気が！」

「確かに高額だったけど、新車でもなかったからな。そのもう一台も、もうすぐ天検殿が乗って帰ってくる予定だ。諸経費合わせて二台で五十万ほどしたか。整備のいい業者だったようで、納車も早くて助かった」

さりとて放たれた、五十万円という数字。

「こっ……こじゅっ……こっ、こ……こじゅうま……」

真奥の脳裏に見たことのない数の「0」の桁が並び、真奥はその瞬間卒倒した。

「ま、真奥さん！ 真奥さん!? し、すっかりしてください!!」

「だ、大丈夫!? 何か顔色ヤバそうだけど」

卒倒の見本のような倒れ方をした真奥に千穂と梨香が駆け寄る。

白くなった顔に冷汗が浮く真奥の顔を心配そうに覗き込む千穂だが、その視界をにゅつとアシエスの後頭部が塞ぎ、

「よーシ人口呼吸だがぶば」

「息してるから!! 知らないから!! アシエスちゃんは大人数でアイス食べてて!」

千穂はアシエスを必死の形相で真奥から引き離そうとする。

「……なんだかなあ、何か覚悟してた展開と違うなあ」

千穂とアシエスの謎の戦いを見ながら、梨香はとりあえず目についた団扇で真奥の顔を仰ぎはじめた。

とそこに、遠くから軽妙なエンジン音が近づいてきて、アパートの下で止まる音がする。

階段を上がる音の後すぐに魔王城の玄関のドアが開き、

「やーゴメン、寄り道したら迷った。でも安いところでガソリン入れられたよー……って、なんなのこの状況は」

ヘルメットを抱える陽に焼けた颯と、漆黒のボニーテールが眩しい大黒天袴は、部屋の中で倒れる真奥と、格闘する千穂とアシエスを見て目を丸くしたのだった。

千穂、鈴乃、梨香、天祐、そしてアシエスと、いつになく女性の人口密度が高い魔王城の中で、意識を取り戻してなお若干顔色の悪い真奥は、横になったままうめく。

「二台で五十万かあ……しかし準備がいいというか、良すぎるというか、金かけすぎじゃねえか？　そこまでしつかり準備する必要あんなのかなあ」

真奥の言葉に、鈴乃は呆れて、部屋の間でアイスを食べながら事の推移を見守っているアシエスに目をやった。

「確かに今の貴様の力は圧倒的だ。エミリアがアラス・ラムスと融合したときのことを考えれば、魔王一人でガブリエルやカマエルを圧倒することすら可能かもしれん。だが、今回に限ってはアルシエルとエミリア、そしてアラス・ラムスを、事実上人質に取られていることを忘れるな。最終的に戦いは避けられんだろうが、それでも最後の瞬間までは可能な限り、迅速かつ隠密行動を心がけ、不必要な接触を避ける必要がある」

「ネーサマを人質に取るなんてフザけた奴らだヨー　死刑ダー」

「これからアシエスちゃん、アイスが落ちこちるぞー」

天祐の警告も虚しく、アシエスの本日二本目となるアイスは手からすっぽ抜けて、畳に着地してしまふ。

「あああ！ 私のアイスが……。天使、許すまじ！」

「あ、私拭いておきます」

千穂がさつと流し台に立って、布巾を絞って戻ってくると、

「チホ、捨てないデ！ もったいないカラ！」

「あ、う、うん……」

千穂は拾い上げたアイスのアシエスに返ししながら、盤のべたつきを拭き取る。

アシエスは落としたことなど全く気にすることなく、そのままアイスを食べ続けた。

「あのさ、その、一つだけいいかな」

そのとき梨香が、手を上げた。

「ああ、すまない梨香殿。まだ……。魔王が騒がしいせいで。梨香殿にはきちんと話をするということだったな」

鈴乃がはっとなって梨香に向き合う。

面子は普段と違うものの、目の前で繰り広げられる劇といつも通りの魔王城の光景。

一つ違うのは、鈴乃が、梨香の前で真実を「魔王」と呼んでいることだろう。

「う、うん。何か色々忙しそうなくとも悪いんだけど、結局その、皆は、なんなの？」

千穂は、かつて自分がしたのとまったく同じ質問を梨香がしていることに、不思議な感慨を抱く。

「ねえ、折角だからさ、千穂ちゃんが話したらいいんじゃない？」

「へ？」

すると突然、天祥が千穂を指名した。

当の千穂は布巾を手にしたまま目を瞬く。

「真奥君や鈴乃ちゃんが話しても、多分梨香ちゃんは何を信じたらいいか分からなくなると思うんだ。でもその点千穂ちゃんなら、梨香ちゃんと同じ立場なんだから客観的で信用できるんじゃない？」

「ああ、それはいいかもしれないな」

鈴乃もその意見に頷き、混乱から回復しつつある真奥もどうやら千穂に真面目な視線を送るあたり、それがいいと考えているようだ。

「み、皆さんがいいならいいんですけど……鈴木さんもそれでいいんですか？」

「えっと……その前に聞きたいんだけど、千穂ちゃんはその、真奥さんや鈴乃ちゃん達の不思議なことに随分と馴染んでるよね。実は漫画みたいに超能力とか使って悪人と戦っちゃうような女子高生だったりするの？」

「ぶっ」

千穂の問いに対する梨香の答えは、ある意味想像の斜め上を行っていた。

「えと、あの、どう……なんでしょう？」

少し前なら違う、と言えたが、たった一つだけでもエンテ・イスラの法術（魔法）を会得（あて）している身としては、否定しかねるものがある。

答えあぐねる千穂のかわりに答えたのは真奥だった。

「ちーちゃんは違う。最初は俺達にはなんの関係もない、俺のバイト先のただの後輩だった。どこにでもいる女子高生だ」

「なんの関係もない、ただの後輩」という響きに微妙に傷つく千穂だったが、真奥がそういう意味で言っているのではないことは分かっているので口は挟まない。

「だけど、今回のあんたみたいに、俺や東美達（あづみたち）の事情に巻き込まれて本当のことを知った。あんた以上に怖い思いをしたはずだけど、ちーちゃんはそのことを忘れたくないって言った。だから今もこうして、俺や東美達と一緒にいてくれてる」

「千穂ちゃん、そうなの？」

千穂のその覚悟の程が実感できない梨香が尋ねると、千穂は少し考え込む。

「そう言われれば、まあ……」

梨香も今回、異装の騎士団に襲われるという有り得ない体験をしたわけだが……。

「私の場合は、そうですね、自分で真奥さん達の物凄い力を意識したのは、崩れた高速道路に押し潰（つぶ）されそうになったのが最初かな……」

「え」

千穂がなんでもないのでのように言った内容に、梨香の顔が引きつった。

その後も、都庁屋上に誘拐されたり、武装した大天使の天兵連隊に取り囲まれたり、悪魔の群れの戦いをすぐ近くで見たり、魔力に当てられて入院したり、東京タワーで飛び回りながら戦ったり、巨大な悪魔と二度に渡り自分の意志で対峙したりと、千穂は指折り自分の体験を語り、

「今更ですけど、私よく自分が無事に生きてるなって思います」

そう結論づけた。

「……」

梨香の顔色が若干悪くなったのは気のせいではあるまい。それに気づいた千穂は、

「あ、あああーでも、その都度真興さんや遊佐さんや鈴乃さんが守ってくれましたから、実際に怪我したこととかは一度も無いですよ!」

慌てて自分の元気をアピールしはじめた。

「で、でも危ない目には遭ってるんでしょ? 実際に入院とか……」

「そ、それは、あの、不可抗力というか結構自己責任によるところが多くて、入院も結局異常は無かったから二日で退院しましたし」

明らかに梨香の中の恐怖心を刺激してしまった千穂は焦るが、そこに助け舟を出したのは真興だった。

「まああれだ、俺達のこととは全部忘れることもできる。俺達もまともな話だとは思ってねえから信じないのもあんたの自由だ。あんたがどんな結論を出そうとも、俺達はあんたの意志を尊重するし、あんたが俺達のことを忘れる忘れない如何に関わらず、今後あんたに危害が及ばないよう全力で守る」

「うう……」

「あんたが俺達に二度と関わりたくないと思うならそれでいいし、だからってあんたを守らないなんてことは絶対にない。今日はもうしんどいって言うなら後日改めてでも構わない。まあ、俺達は出かけちまうから、帰ってきてからってことになるが……」

「こ、ここまで聞いて帰ったら、ますます気になるし怖くなるよ……で、でも、その、なんとかいうところに行くって、要するに結構危ないことなんですよ？」

「まあ……そうなるかな」

「日本国内を旅行する程安全な旅路にはならんだろうな」

真奥と鈴乃は正直にそう言う。

そんな二人の顔を交互に見た梨香は、恐る恐る尋ねた。

「あのさ、恵美が本当にその、日本じゃなくてその、違う世界とやらに行っちゃったなら、もう結構時間経ってるってことだよわ？ ……恵美、大丈夫なの？ 恵美にとっても安全な所じゃないんでしょう？」

「……ああ……」

その間に、真奥、千穂、鈴乃、そして押し入れの漆原までが、今更何かに気づいたように声を上げた。

「な、なんなの？」

「その、こう言うとおんたには冷たく聞こえるかもしれないが……東美が怪我してないかとか、身の危険があるんじゃないかとかいう意味の話なら、そういう心配をしたことは、その、ない」
「へ？」

真奥は慎重に言葉を運びながら続ける。

「……東美の強きつてのは、あんたの想像してる人間の基準には当てはまらないんだ」

「わ、私を助けたときに足の骨折ってたって言っていましたけど、後から思い出すとすぐに治っちゃってましたしね……」

千穂も言いくそうに言う。

「その、どう例えれば梨香殿に理解していたか分かるか分からないが」

「エンテ・イスラに帰った遊佐なら、銃やナイフどころか後ろから戦車に撃たれたってかすり傷一つ負わないと思うよ」

「漫画か!!」

鈴乃と漆原の言葉に梨香はそう突っ込まざるを得ない。

だが真奥は梨香の突っ込みを冷静に受け止める。

「まあその反応が普通だわな。だが逆に言えば、それくらい強い恵美が帰ってこれられない状況つてのが問題なんだ。恵美が肉体的な問題じゃなく、精神的なことで帰ってこれなくなってるんだとしたら、俺が心配なのは、むしろそっちのほうでな」

「え？」

「お？」

「ん？」

「あ？」

突っ込みを受け止めた真奥の言葉を、なぜか千穂と鈴乃と漆原はうまく受け止められなかったように、驚いたように真奥を見、その反応に驚いた真奥本人が三人を見返す。

「な、なんだよお前ら。俺、何か変なこと言ったか？」

「……自覚無いの？」

「……無さそうだな」

「真奥さん……私、嬉しいですよ、やっぱり真奥さん優しい」

「な、なんなんだよ!?」

「なんなの……？」

真奥は訳が分からないが、もちろん梨香も分からない。

「いや、別に……」

「えへへ……」

漆原と鈴乃は異口同音にそう言い、千穂だけが嬉しそうに真実を見る。

その生ぬるい不可解な反応に居心地の悪さを感じながらも、真実は見据えて続けた。

「と、とにかくだ、戦車に撃たれても平気な恵美だって、それでも人間だ。力で負けなくても、色々なしがらみとか人情とか、人間はそういうもんでも縛られたりするだろ？ 恵美に面倒が起こつてるとしたら、むしろそっちの方だろうと俺は思つてゐる。それにあんたも知つてゐるかもしれないが、アラス・ラムスって赤ん坊も理由があつて恵美と一緒にいる。その子の安全も考えなきゃなんねえ。あんたにしてみれば今の俺達は悠長に構えてゐるかもしれないが、これくらい時間かけて状況を検証して準備するくらいが丁度いいんだ」

「はあ……なんかスケールがいまいち実感できないなあ……」

情報を整理しきれなくなつたか、梨香は額に手を当てて目を覆うが、

「で、どうする、もう色々話しちゃつた気もするが、俺達と縁切るかどうか……」

「だからそれは、ちゃんと全部聞いてから判断するわ」

その返事だけははっきりとしていた。

「……そうか？」

「千穂ちゃんもそうしたんでしょ？ なら私だってそうしたい。きちんと恵美のことを受け止

めてから考えたい」

「いじらしいわねー」

「アマネ、イジらしイって何？」

「こう、ぎゅーってしたいくらい可愛いつてことよ、ほら、ぎゅーー」

「むぎゅぎゅぎゅギュ」

外野で盛り上がっている天祐とアシエスは放置して、千穂は梨香に向き直った。

「話す前にこんなこと言うのはズルいかもしれませんが……」

「千穂ちゃん？」

「私……遊佐さんに、本当の友達がもう一人、増えてほしいと思ってます」

「……」

千穂のその言葉に虚を衝かれた梨香は一瞬言葉を失うが、はっとして周りを見回した。

そして、真奥と鈴乃と、押し入れから顔だけ出してこちらを見ている漆原の顔を一遍してから、ため息と共に千穂に顔を戻す。

「嘘をつかなきゃいいってんでもないけど、でも、簡単に話せないようなことがあるのは、

私だって一緒だしね」

「鈴木さん？」

「千穂ちゃんにはだされたりはしない。はだされない代わりに、きちんと受け止める。だから

話して。恵美のこと、真奥さん達のこと、全部包み隠さず」

梨香はいつもの調子で、強い意志を宿した瞳を千穂に向けた。

千穂は柔らかに微笑むと、

「それじゃあ、私が真奥さん達のことを知ったときの話から……」

真奥と恵美、そしてエンテ・イスラの真実を、ゆっくりと話しはじめた。

「はあ~~~~~」

千穂から全てを聞き終えた梨香は、大きく息を吐いて、そして、

「そりゃ恵美が真奥さんのこと嫌がるはずだわ」

顔を曇めて真奥を睨む。

「信じてくれるんですか？」

「目の前で、芦屋さんが消えたり鈴乃ちゃんと漆原さんがとんでもないジャンプしたり真奥

さんとアシエスちゃんが空飛んだりするとこ見てるしね」

それ以外にも、千穂の話に合わせて鈴乃が響を大橋に変化させてみたり、真奥がアシエスとの融合と分離を見せたりしたことで、梨香は否応なしに納得せざるを得なかった。

千穂の問いに、梨香は疲れたように頷き、そして唐突に、

「うわあああ、私、いたたまれない、超恥ずかしい！」
頭を抱えて仰け反り、畳に倒れてしまうではないか。

「す、鈴木さんっ!」

「恥ずかしい、もう私穴に入って死にたい」

「な、なんだどうした」

梨香の反応に真奥も驚くが、涙目で起き上がった梨香は鈴乃を真正面に捉えてその手を掴みにかかると。

「り、梨香殿っ?」

「鈴乃ちゃん、ごめん本当ゴメン! あの日のことは忘れて! 私一人何も知らなかったからってあんなこと、本当ごめんうわもう恥ずかしくて死ねる!」

「あ、あの日のこととは?」

梨香の突然の懺悔に鈴乃は目を丸くする。

「私と鈴乃ちゃんが初めて会った日のことだよおー うわあ私何を一人で勝手に暴走していらんこと言っただけで盛り上がったんだろ。私本当でっけりもう……うわあああ」

「ああ、あのときのことか」

鈴乃もそこまで言われてようやく思い当たった。

梨香は初めて鈴乃に会った日に、鈴乃のことを、真奥を奪い合う惠美のライバルなどと勝手

に勘違いして、いらぬおせっかいを焼いたことがあったのだ。

「しかしあれは私がその誤解を誘導したようなものだし、誤解もあの場で解けていただろう。そもそも梨香殿は我々のことなど知る由もなかったのだから気に病むことは……」

「そういう問題じゃないんだよお！ そりゃ知らなかったかもしれないけど、私それをよりにもよって声屋さんの前で……うわああああああ」

「う、うん？」

何かおかしい気もしたが、とりあえず鈴乃は涙目の梨香を抱きしめるとその背を叩く。

「大丈夫だ、悪いのはずっと秘密を抱えていた我々で、梨香殿は何も悪くない」

「うわああああん、恥かしいよおおおお!!」

顔を真っ赤にして泣き出してしまふ梨香を、鈴乃は必死になだめる。

「す、鈴木さん、大丈夫ですか？」

「何か、微妙に受け止めきれなかったことがあるらしいな」

千穂と真央は顔を見合わせるが、梨香が、真央や恵美の真実よりも何か具体的な出来事の方にショックを受けているところを見ると、どうやら嫌悪感を抱いてはいないということだけは理解できた。

「今の若い人は、思考が柔軟だねえ」

天祥もこのときばかりは、梨香の反応が驚きだったようだ。

「ま、まあとにかくだ、鈴木梨香も納得したことだし」

「してないよおー 恵美と音屋さんが帰ってきたらどんな顔して会えばいいんだよおー」

「……………そろそろ、エンテ・イスラでの行動計画を話し合おう」

真奥の与り知るところではないが、どうやら梨香が鈴乃と恵美と音屋と自分の間に知らずに組めた地雷は、相当な威力を持っていたらしい。

だがそれをなだめている時間は惜しいので、真奥は梨香を無視してコタツの上に何枚かの紙を出す。

「これは、音屋が書き残した東大陸の情報地図だ。あいつは十分早い段階から、恵美がトラブってるなら東大陸、つまりエフサハーンだと思っていたらしい」

「そ、それは何故だ？」

梨香に抱きつかれっぱなしの鈴乃が顔だけ真奥に向けて尋ねる。

「それは分かんが、まあやはりオルバに唆されたマレブランケ共が本拠地にしてるってのはデカかったんだろうな。オルバはちーちゃんとは違う意味で、恵美の力や素性を全部把握してるただ一人の人間だし、しかもエフサハーンは全方位に向けて戦争ぶっかけてるんだろ？ きなくさいにもほどがあるしな。それでだ、漆原」

「……………」

真奥の指示で、漆原は押し入れの中から手を伸ばす。

その手にあるのは、ヨレヨレになった一枚の名刺。

「なんですか、これ」

千穂がその手から名刺を受け取ると、そこには携帯電話の電話番号が記載されていた。

「ガブリエルの携帯の番号だ」

「ええっ!? なんでもんなものが!」

「な、なんで天使が携帯電話なんか持ってるのよおー 魔王と天使が携帯で電話ってどんなホトラインよおお!!」

異世界の大天使が携帯電話を持っているという事実疑問を掻くか否かに、千穂と馨香の経験の差が如実に現れている。

「ああ、まあその、とにかくあのテクノボウが漆原んここにそれを置いてってくれたおかげで、実際に芦屋も恵美も、アラス・ラムスもそれから恵美の親父も、エフサハーンにいることだけは確定した」

「確定って、どういうことですか?」

千穂は微妙に繋がらない真奥の言葉に首を傾げる。

真奥の答えは至極単純だった。

「電話したら素直に吐いた」

「……それ、信じて大丈夫なんですか?」

ガブリエルの性格をよく知っている千穂が、そう言いたくなるのも仕方がない。

何せ捉えどころのない性格なので、真奥達の見える範囲での行いは終始一貫しないし、敵に回ったかと思えば時折こちらに有益な行動を取ってみたりと、まるで本心が見えない。

「言わんとすることは分かるがな」

真奥は苦笑する。

「今回のことに聞いただけは、あいつがわざわざ俺達に接触してまで嘘つく理由が無い。裏美のことだって、黙ってりやこっちは動きようがなかったんだからな」

「こっちがそう考えることを見越して、裏を掻いてるって言う線はあるかもよ……」

ガブリエルから連絡先を渡された漆原が苦しげに言うのと、真奥はそれにも真面目に頷く。

「だから、お前は万が一のことを考えて日本に残れて言ったんだ」

「分かるけど、働くのは傷が治ったらね……」

元からそれほど筋気もやる気も無い漆原の声はいつにもまして弱々しい。

「漆原さん、真奥さんと一緒に行かないんですか？」

意外そうな声を上げたのは千穂だ。

真奥のエンターテインメント親征に随伴するのは、増幅器があればダート術を行使できる鈴乃と最

初から決まっていた。

さすがの千穂も、概念送受の法術を会得しているとはいえず、日本とは持ち受ける危難の水車

が殺違いのエンテ・イスラに着いて行きたいと思うほど子供ではない。

肉体の強靱さにおいて鈴乃の足元にも及ばない自分が戦場にいると、どれほど真奥達の足を引っ張るか、三日前の笹幡北高校での鈴乃と天兵連隊の戦いでよく理解している。

だが漆原は、腐っても悪魔大元帥。今はこんなだが、千穂の危機を救ったときにはそれなりに力を振るったし、エンテ・イスラに帰れば重要な戦力になるはずなのだが。

「というより、連れていけない」

千穂の言葉に答えたのは、ようやく榮香から解放された鈴乃だった。

「色々計算したが、往復することを考えると私と魔王でもざりざりだ。何せ」

と、鈴乃は窓辺のアシエスを見る。

「彼女が予想以上に重くてな」

「私そんなに太ってないヨー！ シツレイな！」

アシエスは抗議するが、鈴乃はそういうことを言っているのではない。

「それに、行きはともかく帰りはアルシエルとエミリアの父上と一緒に連れてこなければならん。ダートを作る聖法気はエミリアの協力があれば調達できるだろうが、通過する人数が多ければ多いほど、ダートは制御が難しくなる。余裕を持つに越したことはない」

「それに俺達のいない隙を狙ってこっちで何かされても困るしな。それこそまたちーちゃんや鈴木梨香が狙われたら目も当てられない。だから方が一を考え、漆原はこっちに残す」

「なんにもなけりや、こつちに残った方がラクだしねー……ふー、いてて」

真奥や漆原を今更疑いはしないが、それでも本領が發揮できない（らしい）日本で、漆原一人がどれほど防衛装置として機能するかは不安が残る。

そんな千穂の内心を察したか、真奥は一つ頷く。

「大丈夫、いざとなりや天祢さんがいる」

「そう来ると思つてたよ」

アイスの棒を遠投してゴミ箱にシュートした天祢が、諦めたように頷いた。

「私別に、そういうつもりで来たわけじゃないんだけどね」

「じゃあどういうつもりで来たのか、いい加減教えてもらえませんか？」

天祢は今に至るも、何故笹塚にやってきたのか、理由を明かしてはいない。

だが、天祢を部屋に泊めている鈴乃の見立てでは、天祢の荷物はトランク一杯の衣類や財布、化粧道具に携帯電話の充電器などごくありふれたものばかりで、笹塚にやってきたのはあまり神秘的な理由ではなさそうだと言う。

それを裏付けるように本人も、

「だってから言つたじゃん！ 君達のせいで海の家がボシヤりかけて、帰ってきた親父に減茶苦茶怒られて、いい加減親のすねかじりやめろって追い出されただけだつて」

と、この三日間の天祢はずっとこの供述を繰り返している。

もし声屋がいたら、その理由に便乗して漆原を叩き出しそうな話だ。

「鈴木ちゃんには泊めてもらってあげたいと思ってるけどさ、ミキティ伯母さんにだって連絡済みだし、とつくにここのアパートのどっかの部屋の鍵開いてると思ってたんだよ」

子供の様に頬を膨らませながら、天祿は語めたようにため息をつく。

「でもまあ、宿と食事のお礼に何かあったら千穂ちゃんと梨香ちゃんを守ってやるよ。そこまでは、ある意味私の義務だしね」

「義務」が何を意味するのかは分からないが、とにかく天祿の言質を取って真央は安堵する。

梨香からは、三日前の天祿がガブリエルにさらわれた芦屋とノルドを放置し、梨香一人を守ったと聞いていたが、それは恐らく二人に直接的な命の危険が迫っていなかったからだろうと真央は想像している。

「それで……鈴木梨香、どうする？ 記憶消すか？ ぶっちゃけその方が絶対安全だが」

「記憶よりもあの目の出来事を無かったことにしたいよ……はあ」

鈴乃は解放したものの、まだ「あの日」のことを気にしている梨香。

頭を何度も横に振りながら、それでもはつきりと言った。

「今の話を聞いているだけでも、正直まだ怖い気持ちはあるし、わけ分かんないことの方が多いけど……まずは、本当の恵美ともう一度会って、色々お話してからにしたい」

「鈴木さん！」

千鶴は嬉しそうに微笑み、

「そっか」

真奥も軽く微笑むと、あっさりとした調子で頷いた。

鈴乃と天柊も梨香の判断に文句は無いようで、全員改めてコタツの上の紙に目を落とす。

「でだ、話を戻すとガブリエルは、芦屋がエフサハーンのどこかにいるってとこまでしか教えてくれなかった。だが、俺は大体見当がついてる」

「ふむ、根拠を聞こうか」

鈴乃は頷いて先を促し、真奥はエフサハーンの主な都市が記載された地図を指差す。

「天界やオルバ、それにマレブランケ共が恵美の聖剣を狙ったのはいいな？ ガブリエルとラグエルが恵美のお袋や親父を探していたことから考えても、恵美の親父がさらわれたのも理解できる。だが、何故芦屋を……アルシエルを連れていく必要があった？」

「ふむ？」

「俺達がマレブランケ共を快く思っていないのはパーバリクタイアだって分かってるだろうし、オルバにしてみればアルシエルがエンテ・イスラに帰れば悪魔型を取り戻して厄介な相手になることは分かっているはずだ。ガブリエルにしたって、東京タワーでの戦いで唯一あいつの攻撃を防いでみせたのはアルシエルだ。だが、誰にとっても邪魔にしかならないはずのアルシエルを、ガブリエルが連れていった。つまり、エフサハーンでこそこそしてる連中は、アルシエル

にそういうデメリットを吹っ飛ばすメリットを見出してゐるんだ」

「だからそれはなんだというんだ」

「ガブリエルは「エミリアも、もうすぐ僕らの所に来る」と言った。ガブリエルと、アルシエルがいる所に恵美が「来る」んだ」

真美は真剣な顔で、地図の一点を見下ろし、

「勇者エミリアと、悪魔大元帥アルシエルに揃ってエフサハーンで何かをさせるなら、それがどんな下らないことでも、考えられる場所は一つしかない」

ある一点を指差した。

「俺とアルシエルが……初めて勇者エミリアと顔を合わせた場所。勇者エミリアが、悪魔大元帥を討伐できなかった唯一の場所」

そのことを初めて知った千穂、鈴乃、そして漆原が、軽く目を見開いた。

「エフサハーンの皇都。統一蒼帝の居城『蒼天蒼城』だ」

勇者、故に勝つ



「一体どういうつもり」

惠美は、あてがわれた部屋に届けられた物を見て、厳しい声を上げる。

「見て分かんか」

男は、余剰の表情で卓に広げられたそれらを指し示す。

「自殺願望でもあるの、オルバ。私に武装させるなんて」

かつて魔王サタンを討伐せんと共に戦い、今、明確に惠美に敵対する大法神教会六人の大神官の一人、オルバ・メイヤーが持ち込んだものは、一目で高級品と分かる両刃の剣とフルフェイスの甲冑一式だった。

しかも、甲冑の指えは今惠美が囚われているエフサハーンではなく、西大陸のセント・アイレのものだ。

「もちろん、理由あつてのことだ。お前には明日から皇都・蒼天蓋に移動してもらう」

惠美は肩鞆を寄せた。

「統一書巻に謁見でもしようって言うの？ エフサハーンの世界中への宣戦の目的は聖剣たつて聞いたけど、まさか私を。進化聖剣・片翼。こと差し出して、戦争を収めるつもりじゃないでしょうね」

惠美がエフサハーンの統治者である統一書巻に目通りしたのはたった一度だけ。

今日明日に命の灯火が消えてもおかしくない老齢の皇帝であつたと記憶している。

恵美の問いにオルバは軽く顎に手を当てて、にやりと笑った。

「ま、当たらずとも遠からず、と言ったところだな」

「はあ？」

「とにかくだ、エミリア。覚えているだろうが、このファイガンから蒼天まで、それなりに距離がある。デートなどの特殊な術で一足飛びに現地に行くわけにいかんのだな。聖剣の赤子に必要そうなものがあれば、今日のうちに侍女に申しつけておけ。出立は明朝だ」

それだけ言い置くと、オルバは無防備な背中を見せて部屋を後にする。

恵美は、想像の中だけでその背に剣を突き立てる様を思い描きながら、実際には大人しく部屋のドアの鍵がかかるのを待った。

「なんなの……一体」

恵美は気持ちを落ち着けると、オルバが置いていった甲冑と剣に歩み寄る。

「普通の鎧と剣ね」

どんな仕掛けがされているかも分からないので迂闊に触れはしない。

だが注意深く觸めつ砂めつしても、特別妙なところも無い、セント・アイレの司令官クラスが纏っているような指先の、高級品の中でもさらに上等な部類の鎧と剣だ。

恵美自身、進化聖剣・片翼、や破軍の衣の扱いを覚えるまでは、教会騎士の一員として似たようなデザインの鎧を纏っていた時期がある。

「剣も、刃が立ってる。模造品ってわけじゃなさそうね。一体どういうつもりかしら」

ここに連れてこられた事情を考えれば、こんな武器を与えられた恵美がファイガン軍港を一人で壊滅する勢いで暴れてもおかしくないことが分らないオルバではあるまい。

実際にそうできない自分の心の弱さは心底嫌になるが、こんなものを恵美に与えて、しかも陸路を皇都・蒼天臺まで移動するという。

かつての魔王サタン討伐の旅を思い出す。

あのときも、恵美とオルバ、そしてエメラダとアルバートがエフサハーンで拠点としたのは、最初の上陸地であるこのファイガン軍港だった。

そのころは戸屋、つまりアルシエルの支配下にあった東大陸を慎重を期して移動したときには、皇都・蒼天臺に辿り着くのに一週間ほど要した記憶がある。

最初に皇都・蒼天臺を訪れたときには、蒼天臺からさらに大陸を東進する必要がある、すぐにアルシエルとの決戦には至らなかったが……。

「そんなに時間をかけて、なんのために武装した私を蒼天臺に移動させる必要があるの？」

恵美はしばし甲冑の兜とにらめっこをしながら、やがて、大きく息を吐いてベッドに倒れ伏した。

「こんなことになるんだったら、旅の間の交渉事とか頭脳労働をエメやオルバに任せっきりにしないで、少しは自分で頭使って旅するべきだったわ……」

情けない独り言で、ギブアップを宣言する。

恵美も決して頭脳戦や情報戦が苦手なわけではないのだが、政治力や交渉センスは、どうしても本職であるエメラダやオルバに一歩譲る。

そうすると必然的に恵美とアルバートがパワー方面を担当してしまうことが多かった。

そのツケは、既に日本で弊害として表れていた。

今でははっきり自覚できるが、何かにつけて自分の物事の読みは、真奥に比べて浅かった。

「魔王は社長で、勇者は派遣だもんね」

ふと、いつかの思い出が頭をよぎる。

まだ鈴乃がはっきりと恵美の味方ではなかったころ。戸屋が、梨香相手に真奥と恵美の関係を、ライバル会社の社員と説明したことがあった。

「なんだか、すごく前のことのような気がするな……あのころは、まだアラス・ラムスもいなかったんだっけ」

恵美はベッドに仰向けに寝転がりながら、天井をぼんやり見上げる。

「日本に、帰りたい……」

「まよ……?」

脳内で、融合状態のアラス・ラムスが心配そうに声をかけてくる。

恵美は小さく笑って、

「大丈夫。もう、大丈夫よ」

小さな「娘」を安心させるように言う。

「そ？」

「うん。アラス・ラムスと一緒だから」

恵美は答えになっていない答えを返すと、起き上がって部屋の入り口にある水差しに目をやる。

水差しはなぜか二本。

片方の水差しには底の方に黒い粒が沢山貯まっている。

ここ数日の恵美は、その黒い粒の水差しを取って残すことで、弱気に萎えつつある心の中の憎悪をなんとか保っていた。

「でも、たったあれだけのことで……私は戦うことができなくなった。オルバ連が何か企んでいるとして……私、戦えるのかな」

水差しの底の黒い淀みが、恵美の記憶をエンテ・イストラに帰還したあの日に送り返す。

※

虹色のゲートの彼方に光が見えはじめ、恵美の手を引く力が一気に強まるのを感じた。

引かれている。

先を行く友にはではない。

グート先の先にある、世界に引かれているのだ。

次の瞬間、デジタルノイズのスクリーンのようなグート内部特有の音が掻き消え、唐突に耳の裏で鼓膜が裏返る。

体の周囲で風が逆巻き、恵美の体は重力の巷に再び身を落としたのだ。

「つて……ええええええ!?」

視界が開けたとき、恵美は思わず叫んだ。

そこは、あまりに予想外の場所だったからだ。

体が重力に引かれて落下するのを感じる。

一秒、二秒、五秒、十秒、二十秒……いつまで経っても、重力に引かれたまま、恵美の体は落下する。

「な、な、なんで空な……げほっ!?」

叫ぶ恵美は、吸った空気の薄さに思わず嘔てしまう。

空気が薄い。湿気がやまぬまま眼下を見やると、そこにあるのは雲の平原だった。

「どこで誰に見られてるか分かりませんからー!」

すぐ傍らで、グート内を先導してくれた友がのんびりと叫ぶ。

「これくらい高い所なら、誰にも感知されないかなって思つてゝ!!」

「にしたつて! 高すぎじゃない?」

ゲートの出口が開かれたのは、相当の高空らしい。

落下に身を任せはじめた恵美からは、雲の平原の上を覆う、満天の星空が見えた。

「あ……」

恵美は星々の中で、一際強く輝く星が二つ、自分達を見下ろしているのに気づく。

蒼い月と、紅い月。

地球の空には存在しない、二つの神秘の月。

それは、恵美がこれまでの人生で、最も長い時間見上げていた空だった。

「エミリアー!! 雲に入りますうー! 目と耳に注意してくださいさうい!!」

一瞬の感覚に我を忘れかけたが、すぐに警告が飛んで恵美ははっとして顔を眼下の雲に向ける。

「ふっ!」

空中で姿勢を整えると、目を閉じて頭から雲の平原へと突入した。

耳元で簾々と風と雲が唸り、だがそれはゲートから抜け出たときに比べるとほんの一瞬だった。

恵美の体はすぐに雲を突き抜けたようで、また体の周囲の音が変化する。

恵美は目を開けて、そして見た。

「……エンテ・イスラ……」

目尻を伝うのは、豪風に乾く目を潤すために流れる涙だ。

そう思っても、止められないものは止められない。

自分を取り巻く状況は、勇者として諦めたあの目から微塵も変わらないどころか、もっと複雑な問題で混乱している。

今この場所は決して、恵美の安住の地ではない。

それでも、今日の前に広がる大地は、

「帰って……きた……」

夢にまで見て、夢の中ですら求めて泣いた、遙か異世界の故郷。

「エミリアー」

思わず広げていた手を、友の体温が包む。

恵美を故郷へと導いた旅の仲間で、無二の友、エメラダ・エトゥーヴァの笑顔が、恵美を見ていた。

「お帰りのさい」

「……うんっ」

恵美は、もはやごまかしようのない涙を空いた手で拭う。



「あはは、まづはどこかで服を調達しないといけませんわ……」

エメラダの乾いた笑いを以てしても、恵美とエメラダの服は乾かせない。

ただ濡れているだけではない。

二人揃って泥だらけなのだ。

「……ま、荷物は無事だからいいんだけど……」

「ご、ごめんなさい！ まさか着地点にあんな大きな沼があるとは……」

エメラダは平謝り状態だ。

エメラダがゲートの出口を超高高度に設定したのは、ゲートほどの巨大なエネルギー反応を探知されにくくする意味があった。

ゲートの開閉自体は、エメラダの術式というよりも、エメラダが恵美の母ライラに託された天使の羽ペンに拠るところが大きい。それでも大きな魔法気反応を見せることに変わりはない。

ゲートを閉じて自由落下が始まっても、エメラダは地表すれすれまで、恵美に飛翔の法術を使わせなかった。

到着時間が夜になったのも、落下を遠くから目撃される可能性を低くするためなので、法術

で光りながら飛ぼうものなら近隣の町の警吏や駐在する騎士団に怪しまれる。

今のエンテ・イスラの政情を考えれば勇者エミリアたる恵美の帰還はもちろん、神聖セント・アイン帝国の重鎮であるエメラダが単独で行動している痕跡は、絶対に残してはならないのだ。地表ギリギリまで自由落下して、地表すれすれで法術を展開したまでは良かった。

だが、これも自由に飛行すると聖法気消費量が多いので、あくまで滑空による空中機進のみで着地しようとしたのだが、困ったことに、その着地点の森の中に沼があり、恵美もエメラダもその沼の縁に着地してしまったのである。

沼だと気づいたときに慌てて飛翔を開始しようとしても時既に遅く、滑空の風圧で巻き上げられた泥をもろにかぶってしまい、結果恵美とエメラダは、真っ暗な森の中で生々しい泥の臭いをぶんぶんさせながら悄然と立ち尽くすしかなかった。

「……でも、いいわ。考えようによつては、森の臭いに馴染んで獣とかにも襲われにくくなるかもしれないし、それに靴も平気だから……ほら、日本の懐中電灯は、この程度じゃ動かなくなったりしないのよ」

恵美は、今回の帰郷のために纏めた大ぶりなりエタクサツクの中から、ヘッドライトを取り出して点灯してみせる。

「ごめんなさい……」

LEDライトの白い光の中で、泥だらけになったエメラダがなおも頭を下げていた。

「もういいわよ。むしろ私よりエメの方が問題じゃない？ それ官服でしょ？」

ヘッドライトを額に巻きながら、恵美が尋ねる。

「うう……農地の視察中に転んじやったことにしますう……」

大分苦しい言い訳な気はするが、それを突いても仕方がない。

「それで、ここはどの辺りなの？」

「はい、えーっとですわ……あう……どろどろ……」

エメラダは法衣のマントの裏側から地図を取り出すが、あちこちに泥が染みているのを見て悲しげな声を出す。

それは西大陸で最も強大な国力を誇り、恵美とエメラダの故国でもある、神聖セント・アイレ帝国の東側の地域を拡大して示した詳細な地図であった。

「エミリアの故郷のスローン村がここで、今私達はこの森にいるはずですよ」

エメラダは地図上の一点を指差してから、すっと指を紙面上の南西方向に移動させる。

「街道沿いに行くと、いくつか大きな村や町に突き当たるわね」

その指を追いながら言うと、

「幸か不幸かその中で戦前の規模を維持しているところはありません……」

エメラダは少しトーンを落とした。

戦前、とは、要するに魔王軍侵攻前、ということだ。

「じゃあ……」

「はい。この一番大きなカシアス城（カシアス城）は、大法神教会の司教座直轄聖堂があるのでハイペースでの復興が進んでますけど、周辺の村や町は、今もほとんど手つかずです」

「ほとんど手つかずって」

惠美は驚いて目を瞬く。

「そんなことあり得るの？　だって確か、この村なんかは駅馬車のギルドと軍馬の牧場があつて結構栄えてなかった？」

惠美は、故郷のスローン村の近隣にある村を指差す。

するとエメラダは首を横に振った。

「これは、最近の調査で分かったことなんですけど」

「うん」

「エミリアには言にくいことなんですけど、この辺りの村はルシフェル率いる西方攻略軍の侵攻で、かなりの数の村民が犠牲になつていゝんですわ」

「そのことはもう整理がついてるから大丈夫よ。それで？」

「はい。それで、私とアルが日本でエミリアと再会したところ、どうもこの辺りの土地の所有権や開発権を、このカシアス城（カシアス城）軍市の聖堂が次々買い上げていたみたいなんです」

「聖堂が買い上げて、教会が復興を取り仕切るってこと？　って言うか、そんなこと可能な

の？ 復興は土地の持ち主である国の……セント・アイレの事業でしょ？」

西大陸最西端に総本山を持つ大法神教会は、西大陸のみならず世界のあちこちに影響力を及ぼす、エンテ・イスラ最大の宗教であり、その力は何億という民衆の信仰心で示される。

結果、高位聖職者は下手な小国の王や貴族よりも遙かに強大な権力を持つことも珍しくないが、セント・アイレは教会と真正面から事を構えることが可能な国力を持ったため、教会も一方的な干渉ができない。

ましてカシアス城塞市ほどの都市や周辺の村の復興を、国を介さず教会だけで取り仕切るなど、セント・アイレ国内に限ってはあるはずがないのだが……。

「やり方が巧妙だったんです」

エメラダが言うには、ルシフェル軍の侵攻で土地の権利者である村民の大半が死亡した上に、土地の境界すらあいまいになってしまったという状況があった。

中央大陸の最終決戦で魔王サタンと魔王軍が駆逐されて後、セント・アイレは当然そういった場所の復興を推進するために、新たな入植者を国内から募った。

それと同時に復興に必要な資材などを運び入れる業者や陣頭指揮を行う騎士団を現地に投入したという。

「教会は手始めに、司教座直属の聖堂のあるカシアス城塞市の復興事業の入札に参加して、カシアス城塞市周辺の復興事業を丸々取り仕切る権利を手に入れたんです」

教会はカシアス城塞市の復興を急ピッチで進め、破損した城壁の修復と称して市街地の面積を広げてしまったらしい。

そして、周辺の村々に入植してきた者達に、その新たに拡充したカシアス城塞市の新市街地に入植する権利を格安で売ったというのだ。

新たな入植者も、田舎の村より司教座直屬聖堂の膝元の大都市に入る方がずっと今後の展望が開ける。

では村々への復興入植の権利はどうなったか。

教会関係者が次々に現地に入植したことに『なっていた』。

現実には、全く復興が進んでいない現状が如実に物語っている。

「ちょ、ちょっと待って。セント・アイレの騎士団は何やってたの!? カシアス市にもそれぞれの村にもいたんでしょ? それにいくら教会が事業を丸々取り仕切る権利を手に入れたって言ってもやれることには限度があるんじゃないの!? いくら権利を持ってるって言ったってセント・アイレの国土なのに……」

「……お恥かしい話なんですけど」

エメラダは低い声で聴る。

「あのゴミクス・ビビンの一派だったんですよ! この辺りを管轄したのが!」

「ごみく……え?」

エメラダの可愛らしい唇から唐突に放たれた呪詛に、惠美は驚く。

「えっと、ビビンって、セント・アイレの近衛騎士団のビビン將軍のこと？」

「ビビン將軍なんて言わずに、ビビン・生ゴミでいいですよ」

「……何、エメ、あの人のこと、嫌いなのか？」

ビビン・マダナス近衛將軍は、神聖セント・アイレ帝国の近衛騎士を取り仕切る男で、事実上、セント・アイレ全騎士団のトップに当たる男だ。

惠美もセント・アイレ皇帝救出の際に顔を合わせたことがあるが、その程度の面識なので、顔もおぼろげにしか思い出せない。

だが日頃あまり感情を表に出さないエメラダが蛇蝎の如く嫌っているらしいことは、その口ぶりから読み取れた。

「なんであのドブネズミ將軍をシルシフェルは殺しておいてくれなかったんでしょね」

「え、エメ？」

「復興事業のために、派遣された騎士団の各団長の人選で、教会の勢力が近いところは大体このドブビビンネズミの子飼いが配置されてるんですよ、忌々しいことに」

「そ、そうなんだ」

「どうやら、カシアス市のセント・アイレ騎士団の監督は完全にザルだったようで、箱の下の方に応じて教会に言われるがまま計画を認可した上にも、周辺の村の人権状況も改善された跡が

あるんですよ。あの肥前めビピンは、そうやって大法神教会の連中に便宜を図って、ネズミらしくコソコソと甘い汁を吸ってるんですよ。」

「ふ、ふうん……」

「この辺りの復興が当初計画していた通りに進んでいないのは、あの加齢奥將軍の手回しであることは間違いないんですけど。」

「どこまで嫌いなのか、ビピン將軍を。」

エメラダがここまで断定的に言うならば決して清廉潔白な人物ではないのだろうが、それでも言われたい放題の顔も思い出せない近衛將軍に若干同情してしまふ惠美。

「如何せんコソ泥將軍だけあってなかなか尻尾を掴ませないし、敗れて復興を遅らせる理由もよく分からないんですよ。今回私が皇都を出てこられたのも、こういった復興計画の遅れを『視察』する名目があったからなんです。」

「……なるほどね。」

「で、この話で一番問題なのは、その腐れビピンの一派が、エミリアのスローン村にも手を伸ばしてたかもしれないってことなんです。」

惠美は軽く息を呑んだ。

「スローンは、やはりエミリアの故郷だということでも、かなり慎重な復興計画が練られていて、確かに最初から着手は遅くすることは決まっていたんですよ。だからスローン村に限

つては復興が遅いのは不自然とは言ひ切れないんですけれど」

「ビビン將軍、ひいては教会関係者の目が光ってる可能性がある、つてことね？」

「はい。だから十分気をつけてください」

エメラダは地図を畳みながら、

「それでこれはエミリア用の身分証明書なんですけれど」

こちらにも泥だらけになっていたが、どうやら焼印が押された木の札のようだ。

「私の権限で出せる身分証だとうやっぱり法術監理院発行になっちゃうんで、黒カビ將軍」

派への覚えは悪いかもです」

「誤分ごぶんからなくなっちゃうから嫌でもビビンって呼んでよ」

惠美は苦笑する。

「よくそんなすらすらとビビン將軍の悪口が出てくるわね。うっかり人前で口に出したりしちゃわない？」

「あっちが！私のことを！陰でデビブロッコリーとか言ってるんで！おあいこです！」

これはもう絶対に相容れない間柄の星の下したに生まれたに違いない。

それとも、近衛騎士団と法術監理院ほうじつかりんがそもそも大猿オウゴンの仲だったりするのだろうか。

「でも、よくそんな人が輻利ふりかせてるわね。ルーマツタ將軍はどうしたの？」

惠美の問いに、エメラダはよくぞ聞いてくれた、と言った表情で食いついてきた。

「ですよねーそう思いますよねー。ルーマツタさんが国内にいてくれたらーこんなことにはな
ってなかったと思うんですけどー」

エメラダは悲嘆に暮れる。

「ルーマツタさんは、中央大陸復興に携わる五大陸連合騎士団の西大陸代表に志願されたんで
す。それで、例のエフサハーンの世界中への宣戦布告以来、そのまま中央大陸とセント・
アイレを行ったり来たりで国内でゆっくりする暇が無いんです」

ビビン・マダナスが内地の将だとしたら、ヘイゼル・ルーマツタは最前線の将。

惠美も、旅立った当初のルシフェル軍攻略を始め、北大陸奪還作戦や中央大陸での魔王城進
撃の際など、何度も顔を合わせている。

惠美の関柄にこそなかったものの、いくつかの戦線を共にした惠美の目から見ても、大
きな将器を持つ公明正大な人物だという印象が残っていた。

「でも逆は逆で、鈍くなくて息も臭いビビン如きにはルーマツタさんみたいな最前線での丁々
発止のハイセンスな外交交渉ができるはずありませんし、痛し痒しですわー」

エメラダも、やはりルーマツタのことは高く評価しているらしい。

何にせよ、ここでエメラダと別れば、自分の周囲は基本的に全員敵ばかりだと思ってい
た方が楽なことが分かった。

「まあ、状況は分かったわ。この身分証はいざというときには使わせてもらおうわね。……で」

「はい？」

「この『エミリー・ユースー』って、もしかしくなくても私の偽名よね？」

「分かりやすいかなうって思ってる」

確かに本名とかけ離れた偽名というのは自分を装うのがなかなかに難しいが、かといってこれはまた話が違ふ気がする。

忘れがちだが、別に『遊佐恵美』は本名でもなんでもないのだ。

「それは……うん、まあ、いいわ。ありがとうね」

とはいえ「エミリア」だから「恵美」と名乗った自分の過去を思い出すと、特に文句を言う権利は自分には無いと思ひ直し、法術監獄院長官・宮廷法術士エメラダ・エトリヴァ発行印の押された通行手形を、恵美は大切にリュックに押し込む。

「まあ、一週間まるまる野宿できるくらいの準備はしてきたから、カシアス城塞市にはそんなに近づかず、城壁の外で古着商でも揃まえて、あとは自力でなんとかするわ。身分証は本当に万が一のためのものだと思うておく」

「それがいいと思います。それと、服代というわけではありませんけども用意できた路銀です……こっちはほとんどアイレニア銀貨ばかりですから、水で洗えば……」

一つ顔顔をいてから、申し訳なきように泥だらけの革袋を差し出してくるエメラダ。受け取ると、手にずっしりと重い。

「……ありがとうね、きちんと何かの形で返すから」

「えー？ 別にいいですよそれくらいならなんとでもなりますし」

「気持ちの問題よ」

やむを得ないこととはいえ、お金をもらいっぱなしというわけにはいかないという考え方が、既に恵美の中には染みついてしまっている。

まして今の恵美が稼ぐとなればこれだけの重さのアイレニア銀貨、日本円に換算してもエンテ・イスラの貨幣価値で考えても、生半可なことでは手に入れることはできない。

お金の重要さと重さを改めて噛みしめながら、恵美は革袋の泥を拭う。

「でも、城壁外での商売が許されるのはお昼の間だけよね……こんなとき、デニムメイト24かドッキ・リ・ホーテでもあればいいのについて思っちゃうのは、日本に毒されすぎてる証拠よね」

「なんですかるそれ」

「日本にある二十四時間営業の服屋さんと雑貨屋さんよ」

「ええ？ 凄いですねー？ 日本では夜中に服を買う用事が頻繁にあるんですかる？」

「私は無いけど……でも、買う人がいるんだから店を開けてるんじゃないかしら」

「働き者ですねー日本の人は」。丸一日開いているお店なんてどうやって経営してるのか想像つきません。そもそもそんな時間に働いている人がいるのが凄いです」

恵美も苦笑せざるを得ない。

「マネしようっていつでもできることじゃないわ。日本だから可能なのよ」

エンテ・イスラの意識で言えば、深夜に出来る人間は見回りの騎士かそれに捕えられる酔っ払いが犯罪者くらいしか有り得ず、どんなに治安が良いと言われる地域であっても、恵美のようには余程腕に覚えがなければ女の一人旅など自殺行為以外の何物でもない。

日本の大抵のシステムは、九割九分九厘の人間が罪を犯すことを良しとせぬ矜持きんぢを持ち、和を亂さず天に恥はづじぬ生活を送ろうと生まれ持っていて心がけているような国だからこそ成立するものばかりなのだ。

「むしろそっちの方が、奇跡なのよね。こっちを一人で歩く以上は、緊張感を持たないと」恵美はそう声に出して自戒する。

「勇者の一行は、どんなときでも楽はできませんね」

「そうね、まったくだわ」

いつか聞いたようなことをエメラダから言われて、恵美は大きく息を吸う。

「感慨に耽ひたるのはこれくらいにしておくわ。連れてきてくれてありがとうエメ。煙りに合流するポイントは？」

「それなんですけど……エミリアが持っていたほうが良くないですか？」

エメラダが差し出す物を見て、恵美は少し複雑そうな顔をする。

天使の羽ペン。誰でもゲートを開くことができる、天界の至宝しほうだ。

そしてその素材に使われている羽は、恵美の母ライラの翼のものである。

「いないわ」

恵美はあまり悩まず、ありとあらゆるものが泥だらけになった中で純白の輝きを放っているそれをエメラダに押し返す。

「私にそのつもりが無くても、何かおかしな妨害に遭うかもしれない。万が一が無くても、億が一があるかもしれない。それはエメとアルが持つてて、その億が一のためにも、切り札は分散しておきたいの」

「……分かりました」

エメラダは一瞬の躊躇の後に、一応納得して羽ペンを懐にしまった。

「合流地点は、エミリアは考えなくていいですよ。私がスローン村に出向きます」

「大丈夫なの？」

そこまで便宜を図ってくれるとは思わず聞き返す恵美。

「エミリアが調べものに最大限時間をかけられるようにするのと、私の視察の目的は、この辺り一帯の監査することです。その方が自然で好都合なんです」

「……絶対に、有益な情報を見つけてみせるわ！」

エメラダの行き届いた采配に、恵美は頭が上がらない。

「（気負いすぎはダメですよ。いつも言っているでしょう？） 冷静に、冷淡に、冷酷に、

戦いを進めてくたさいねー」

エメラダは、かつての旅で熟くなったエミリアを諭したときのように、敢えてエンテ・イスラの言葉を使い、唇の前に指を立てて、世界を背負って旅した年下の少女勇者に艶やかに微笑みかける。

その表情の裏に隠れた底知れぬ迫力に、恵美は息を呑んだ。

恵美とエメラダが正面から力でぶつかり合えば、恵美の力はエメラダを圧倒する。

だが、エメラダは人界最強の法術士であり、百戦錬磨の政治家であり、強大な力を底知れぬ策謀で倒す知の戦士だ。

自分と対等の戦場に立ち得る先達の言葉を、恵美は改めて胸に落とし込む。

「そうね。そうだったわ」

「そうですよ。特に今はエミリア一人の体じゃないんですからねー」

水の刃のような底知れぬ迫力を和らげたエメラダは、にんまり笑って恵美の胸を指差した。

「……その言い方はどうなのよ」

「本当のことじゃないですか。ねーアラス・ラムスちゃん」

「はあ……アラス・ラムス」

恵美はため息をつくとき、正面に手をかざしてアラス・ラムスを実体化する。

「えめねーちゃ、なあに？」

「本つつ当にかわいいいいですねええええ！」

「ひううっ!?」

エメラダの叫びに、空中に具現化したアラス・ラムスが驚いて身を凍ませる。

「ちよっとエメ、また泣かさないですよ？」

日本に恵美を迎えにきたエメラダは、初対面のアラス・ラムスのあまりの愛くるしさに黄色い叫び声を上げて、アラス・ラムスを驚かせ泣かせてしまったのだ。

「ああん、ごめんなさい、ねーアラス・ラムスちゃん、お嬢ちゃん怖くないからこっち向いて〜？」

「うう……」

あやすように言うエメラダを、それでも警戒するアラス・ラムスだったが、

「アラス・ラムスちゃん、ママが無茶しないようにうしっかり見張っててくださいね〜？」

「まむちゃ？」

「それともママの言うこときいていい子にしてるんですよ？」

「いいこ、アラス・ラムスいいこだよ！」

両の小さなソミジの手を精いっぱい握りしめて頷くアラス・ラムスに、エメラダの自刺心はあっさり融れる。

「きやうううー！　かわいいいいいい!!」

「ひうううええああええ！」

「エメっ！」

折角アラス・ラムスが真面目に聞いていたのに、エメラダの方が耐えられなくなって奇声を上げてしまい、結局アラス・ラムスは涙目になってしまった。

「ごめんなさい！」

エメラダはあまり反省していなさそうな顔で舌を出すと、恵美に向かって、小さな拳を握った腕を突き出す。

それを見た恵美は厳しい顔で微笑むと、同じように腕を出しエメラダの腕とクロスさせる。

「（希望を抱くな）」

「（前へと進め）」

「（切り拓く者だけが生き残る！）」

それは、かつての魔王軍侵攻で、初めて人間が勝利したルシフェル戦後の、人間勢力の相言葉であった。

ルシフェル軍を撃破してもなお、中央、北、東、南の大陸を未だ支配する魔王軍の恐怖は全ての人間の脳裏に焼きついている。

勇者の出現と西大陸解放は人々に希望を与えたが、それでもなお、最前線で戦う者達は決して未来を楽観しなかった。

一度人間世界は魔王軍の猛威の前に膝を折り廻しかけた。

勇者の出現による反転攻勢は奇跡以外の何物でもない。ならばその奇跡が続く間に、世界を救わねばならない。

希望を抱いている暇があつたら、戦い、進み、世界を変える。

それが魔王サタンとの戦いで西大陸の戦士たちが最初に放った反撃の合言葉だったのだ。

その心を思い出すことで、恵美も、エメラダも、心身共に戦いの場に身を置いたことをより強く意識する。

「それじゃーエミリアー、一週間後までご無事でー」

「うん、エメも」

「エメねーちゃ、いっちゃったね」

「そうね……ここからは私一人……ううん、アラス・ラムスと二人旅よ」

「アラス・ラムス、いいこにしているよー」

「お手柔らかに頼むわね。それじゃ、一度戻ってちょうだい」

恵美は、手に着いた泥を拭ってからアラス・ラムスの顔を軽く撫でて、具現化を解除する。

「……さて、まずはそのカシアス城、薬市を目指しましょうか。服をなんとかしないとね」

泥だらけであることもそうだが、そもそも今の服装は日本で調達したものばかりだ。

エンテ・イスラから日本に流れ着いたときの服は当然ながら鎧の下に着ていた一着のみ。

エメラダに用意してもらおうという手もあったが、エメラダには極力不自然な活動を避けてもらわなければ、それこそビビン將軍のようなエメラダの敵対勢力がどんな動きをするかも分からない。

「本当に、皆何が楽しくて、人を傷つけようとするのかしらね」

今日何度目か分からないため息をつきながら、恵美は暗い森の中、泥にまみれた故郷への第一歩を踏み出したのだった。

※

「コンビニ……コンビニが欲しい……」

エンテ・イスラ帰還二日目。

恵美は軟弱なことに、早くも音を上げはじめていた。

カシアス城塞市から東へ一日歩いた場所にある宿場町。

セント・アイレの東部へと向かう駅馬車や行商人のキャラバンが集う町で、規模の割には活気のある場所だった。

「うんぬ……ひうつ」

ベッドの上では、アラス・ラムスが苦悶の表情で眠っている。

別に風暴を引いたとかそういうことでは全くないのだが、とにかく食事がお気に召さなかったようなのだ。

子連れであることを隠すために食事は基本的に宿の部屋でとることにしたのだが、とにかく持ち帰れる食品のほとんどが、子供が食べるようなものではないのだ。

恵美は故郷セント・アイレや西大陸の食料事情が、ここまで洗練されていなかったのかと愕然としてしまう。

基本、肉、肉、酒、また肉で時々野菜。調理済みのものを手に入れようとすると恵美でもすぐに腹に溜まってしまいそうな塩辛い肉料理ばかりで、皆それを肴に昼間から酒を飲む。市場を見回すと野菜や果物が無いわけではないのだが、どれも日本の洗練された味わいのもと同じ形状をしているだけの全く別の物体だった。

初日はカシアス城塞市からほど近い小さな宿場町の安宿に逗留し、宿泊者用の厨房を使つて日本とできるだけ同じ素材を使って料理をしたものを食べさせた。

だがしかし、日本で全く好き嫌いをしたことのなかったアラス・ラムスが、ニンジンを一口食べるなり顔を顰めて吐き出したのを見たとき、恵美はどれほど自分が日本の食事と水に馴染んでしまったかを思い知った。

自分の故郷の土地の食事は、これほどまでに不味^{まず}かっただろうか。恵美は食材の一つ一つを手取る度に、憂鬱^{ゆううつ}な気持ちになった。

日本の野菜は、日本の子供が何故あそこまで好き嫌いをするか恵美には全く理解できないほど、どれも味わい深く、甘く、柔らかい。

それは消費者に美味しく食べてもらいたいと願う農業関係者のためまぬ品種改良と努力の歴史の末のことなのだが、残念なことに西大陸のセント・アイレ周辺の野菜は全くその域に達していない。

歯に繊維の残る苦く土くさいニンジン。舌を刺激するきつい酸味のトマト。生のゴーヤだっ てここまで苦くはないだろうと思われるキヌウリ。冷凍食品よりも乾いたトウモロコシなど、日本に来るまでずっとそれらの食品を食べ続けていたはずの恵美が、思わず咀嚼^{そくよく}を躊躇^{ためら}うほどのものだった。

では果物を買えば良いかというと、これが異常に高額なのだ。

エメラダからもらった路銀にはかなり余裕があるのだが、日本のスーパーに売っている缶詰レベルのものを食べようと思ったら、まず銀貨一枚では済まない。

セント・アイレは歴史的に果実酒作りが全土で盛んであるため、上等な果物は概ねそれらの業者や地方領主などが買い占めてしまうのだ。

庶民^{しよみん}の口に入るのはリングやオレンジなどが精々だが、それらも大して美味しくない（あく

まで日本を基準にすればのことだが）上に、野菜の何倍もの値段がついている。

それならせめてサンドイッチでも作ってこまかそうと思つたが、日本で百円出せば買えるような小麦の白いパンなど、そもそもパン屋の店先に存在しないのだからどうしようもない。

日本では逆に高級品の黒パンや燕麦パンやライ麦パンばかりが並び、牛乳や砂糖を使っているわけでも、イースト菌で発酵させているわけでもないそれらのパンは例外なく堅く、酸味が強く、今までアラス・ラムスが食べてきたパンとは似ても似つかぬものだった。

結局、アラス・ラムスに食事をさせるために、本当なら最終手段用にと持ってきた日本のレトルト食品を初日から使うハメに陥り、恵美は当初想定していた食事計画の全面的な修正を迫られた。

最初あれほど警戒していた服の調達はアラス・ラムスの分も含めてあっさり済んだのに、まさか食事にこんな大きな落とし穴があるとは思ひもしなかった。

それでも初日はなんとか切り抜けた後の二日目。

初日は緊張していたこともあって意識しなかった新たな問題が、この宿場町にやってきた恵美とアラス・ラムスの前に立ちはだかった。

「なんなの……あの、トイレの異常な汚さは……」

苦悶の表情で眼るアラス・ラムスを見ながら、恵美は顔を顰める。

トイレがとにかく汚いのだ。水洗トイレなどという上等な衛生施設が無いことは分かっている。

だが、遭遇するあらゆるトイレが、とにかく異様な汚さなのだ。

それも、ただ汚いだけではない。

金を取る癖に汚いのである。

あらゆるトイレを使う場合に、旅人は金を払わねばならない。

全てのトイレには料金回収人と呼ぶべき老人が張りついている。銅貨五枚が相場であるが、その金を払って使うトイレは、恐ろしいことに扉がついていけば御の字というレベル。

当然紙など整備されてはおらず、掃除も全く行き届いていないため、異臭が物凄く。

自分とはともかく、アラス・ラムスをあんな場所に連れて行って用を足させる気にはならず、多少不愉快な思いをさせてでも、持参したおむつだけでことを済ませようと決意したものだ。

食事とトイレという、文明生活に無くてはならない二大要素で恵美の旅は最初から盛大に厭いたわけだが、この日は食事に工夫を凝らすことでなんとかアラス・ラムスは晩ご飯を全て食べてくれた。

ジャガイモを蒸かしてマッシュし、持参した味塩胡椒で味を調えて、それをさらに湯に溶く。キノコと玉ねぎと鶏肉を細かく刻んでそこにに入れて熱し、即席のスープを作ったところ、なんと「おいしい」という言葉を引き出すことができた。

大人だけで旅をしていれば、そんな本代や燃料となる薪代、調理場使用代がかかるようなものを作ろうとは思わないが、こればかりは仕方がない。

「コンビニ……電子レンジ……レトルト食品……自動販売機……カレー屋さん……」

恵美は半泣きになりながら、いつの日か自分の人生の目標を達成してエンテ・イスラの故郷に帰るときには、電子レンジと冷蔵庫だけは絶対に持ち帰ろうと固く心に誓った。

きつと今の自分は軟弱に憔悴した顔をしていることだろう。

この安宿に、顔の映る鏡などという高級品が置いてあるはずがないので、その顔を見て落胆することがないのが今は救いだ。

と、

「エミーさん、エミーさん」

突然、部屋のドアをノックする音がして、恵美ははっとする。

宿の主の声だ。

「は、はいっ」

恵美は立ち上がると、慌てて髪を縛り締め上げると、ドアに駆け寄り警戒しつつドアを細く開いた。自分がバリケードになって、部屋の中を見せないためだ。

「おおっ？」

果たして廊下に立っていたのはやはり宿の主の老人だったが、ドアが開くと思っていなかったのが本気で驚いたような顔をしていた。

「何か？」

「あ、い、いや、ドアが開くとは思っていなかったの……」

「あ……」

恵美はハッとして自分のミスを呪う。

ここは日本ではない。宿の主が善人である保障はどこにも無いし、そもそも今訪ねてきたのが宿の主を装った狼藉者なら、普通ならあつという間に部屋に押し込まれてしまう。

部屋に誰かが訪ねてきても、安全が確認できるまではドアに鍵をかけたまま応対するのが基本なのに、こんなところにまで日本に馴染み切った弊害が出てしまうとは。

「ええと、頼まれていた話ですが、エミーさんが言っていた、ヴァルクローシ村を通るキヤラバンがいるようです。話を持ちかけたら見返りを私えば乗せていつでも良いと」

「あ、そうでしたか」

恵美は頷く。

ヴァルクローシ村とは、恵美の故郷のスローンから徒歩で半日ほどの隣の村だ。

恵美は宿を取る際、スローン村ではなく、その周囲の村を通る人種者がキヤラバンがいないかどうかを尋ねた。

場所をずらしたのは、もちろん本当の目的地を悟られないためである。

スローンもヴァルクローシも、ここから歩いて旅するにはかなり遠いが、荷馬車のキヤラバン隊に同乗できればずっと時間を節約できる。

「ありがとうございます。とりあえず、手付金を」

惠美は、これもあらかじめ懐に用意しておいた銀貨を二枚、主に手渡す。

セキユリチイなどあって無きに等しい安宿では、例え主の前であろうと財布を見せるようなことがあつてはならないからだ。

そこまでは思い至っていただけに、ドアを迂回に開けたのは極度の極みだった。

そして銀貨二枚とは手付金としてもかなり高額だが、一枚は宿の主へのチップである。必要なときに出す金はケチるなどは、アルバートの教えだった。

「ふむ、了解しました。それでは」

宿の主人は満足そうに領き銀貨を握ると、軽く会釈して去った。

惠美は扉に錠をかけてから、緊張を解く。

「難しいわね。昔は当たり前前にやつてたことなのに」

結んだ髪をまた解いて、惠美はゆっくりベッドに腰掛けると、引き続き悪夢を見ているらしいアラス・ラムスの髪を優しく撫でる。

「ううん、違うわね。私が一人でいたのなんて……それこそ日本で魔土に会うまでの一年程度、それまではずっと……」

勇者の資質に目覚め、ルシフェルから神聖セント・アイレ帝国を解放するまでは、今は敵対しているオルバも、教会騎士団も、良き保護者であり仲間であった。

セント・アインを解放する際、エメラダと出会い、終生の友となった。

ルシフェルを倒し、西大陸を完全に解放して最初に北大陸に向かう船で出会ったアルバートの知恵と力で、過酷な気候の北と南の大陸を恵美達はつつがなく旅することができた。

東大陸のアルシエル軍が恵美達と本格的に戦うことなく撤退して、世界中を味方にした恵美達四人は中央大陸の魔王城へと進攻し、そして、恵美は一人、滅多なことでは命の危機に陥りようのない世界へと流れ着いた。

「勇者なんて偉そうにしてたって、結局は一人じゃなんにもできない。こんな色々なことにびくびくしながら旅しなきゃならないなんて、笑い話にもならないわ」

「あら……むゆう」

「アラス・ラムス、明日はもうちょっと、美味しいご飯作ってあげるからね」

恵美は小さく微笑むと、着替えることなく、ブーツも履いたまま、アラス・ラムスを起こさぬようにベッドに入る。

「靴のまんまベッドに上がるなんて、お行儀悪いったらないわね」

ほんの少し前のこと、真実とアラス・ラムスと、三人で聖蹟塔ヶ丘にアラス・ラムスの布団を買いに行ったことを思い出す。

電車のシートに上がって窓の外を見たいと言ったアラス・ラムスを窘めて、靴を脱がせたときのことか思い浮かび、

「こら、アラス・ラムス、ままの言うこと聞かなきゃめっだぞ」

「まったく……ばばの言うことだと素直に聞くんだから……」

不意に願裏のぞみをよぎった声に、恵美はうめく。

もしこちらの食事や気候が合わず、アラス・ラムスの体調を損ねるようなことがあったら、きつと父親気取りのあの男は怒って、散々恵美に嫌味いやみを言うことだろう。

そうならないように気をつけなくては、という思いと、そもそもそんなことを考えてしまう自分の心が信じられずに、恵美は苦しげにため息をついた。

「お父さん……か」

はつきり認めるのは苦しいが、今の自分は間違ひなく、以前よりも魔王を憎む気持ちが、魔王を討とうとする気持ちを見失いつつある。

それは父の生存を知らされたということもさることながら、魔王サタンという存在そのものが、時々分からなくなりつつあるからだ。

日本で数ヶ月の時間を共にしたからこそ抱く疑問。

『真奥貞夫』の人物は、性格は、思想は、一体どのような醸成じょうせいされたのか。

恵美は今更になつて、本当に真奥が魔王サタンだったのか疑いたくなることすらある。

彼を敵と付け狙さっていた自分が、今の真奥が日本で悪事を働くはずがない、と思ひ込んでエント・イスラに戻つてきてしまうほどに、恵美の中の真奥貞夫と魔王サタンのイメージが一致

しないのだ。

「故郷に帰れば、少しは、あいつを憎む心が戻ってくるのかしらね……」

恵美はアラス・ラムスの寝顔を見ながら、自問自答した。

今の真奥がどのような「人間」であろうと、恵美の故郷を破壊したルシフェル軍の裏に真奥がいたのは動かしがたい事実である。

それに、父ノルドが生きている、という話も、信用の置けない大天使の口から語られただけで、証拠一つあるわけではない。

今なお、真奥貞夫は恵美にとって明確に父を殺し、故郷と幼かった自分の生活の全てを破壊した敵なのだ。

そう、何度も何度も自分に言い聞かせているのに。

父が生きているという、眉唾まゆつばものの話に、大いに心を動かされている自分が、情けなくなってくる。

「私は……なんのために、誰と戦ってるんだろう……」

誰も答えられない問いを部屋の間まに溶かし、恵美の意識は眠りの底に落ちた。

「本当にここでもいいのかい？ たっぷり払ってもらったんだから、もう二つくらい先の城塞市までだって連れてってやれるぞ？」

キヤラバンの隊長は、包み隠さぬ商魂と、ほんの少しの心配を込めてその声をかけてきた。

「ヴァルタローシも見ての通り、旅人が泊まる宿なんかありませんし、近隣のミリディやゴーグ、スローンに至っちゃ魔村のまま復興する兆しもない。送札の旅も結構だが、そもそもあんたが薪りを捧げるような村人は残っちゃいないぜ？」

ヴァルタローシ村に至る街道沿いの隘道で、惠美はキヤラバン隊の馬車を降りた。

「いいんです、ここまでお世話になりました」

キヤラバンの荷馬車に同乗したおかげで一日以上、移動時間を短縮できた。

ヴァルタローシからなら、大人の足で歩けばスローンまでは半日もあれば到着する。

「それに、送札というのもある意味方便なんです。魔土軍の侵攻でいなくなってしまった、私の大切な人の足跡を追う旅でもあるので」

「……こいつは野暮なことを聞いた。女だてちに一人旅だ、それくらいのことばあちあな」

御者台の上の隊長は、鍔広の帽子を脱いで胸に当てる。

「あんたの大切な人の思い出が見つかるように、商売の神に祈っておこう。なに、余分に金をもらってるんだ。こいつは織り込み済みのサービスだと思ってくれ」

「ありがたく頂戴します」

洒落をきかせたらしい隊長に恵美は微笑む。

「縁があつたらまた会おう、では」

隊長は帽子をかぶり直すと、手綱を引いてキヤラバンを再発進させる。

六台の荷馬車が連なるキヤラバン隊の男連は、それぞれ恵美に向かって手を振ったり、別れの言葉をかけたりしながら、やがて道の彼方へと去っていった。

恵美はその姿が見えなくなるまでその場で見送つてから、自分の胸に手を当てる。

「あれくらいで心が動かされるなんて、本当、ヤワになつたわね」

隊長の真摯な祈りは、それでも恵美の心をわずかに暖かくした。

「……平和だから忘れてた。ここは、エンテ・イスラなのよね」

温まった心を忘れないように、恵美は大きく深呼吸する。

力が満ちてくるような感覚が、錯覚でなく全身を駆け巡る。

「暖かい心は、力になる。今なら、私は誰にも負けないわ」

全身に聖法氣が満ちるのを感じながら、恵美は重気揚々とヴァルクローン村への道に背を向け、スローン村への道に、一歩踏み出した。

かつての旅で、夜の道行は月明かりと星明りだけが頼りだった。

だが今、恵美の顔にはヘッドライトが。右手には地球科学文明の利器、LED懐中電灯が強烈な光で夜の道を照らし出している。

スコーン材での光源は、基本的にこの二つに頼るつもりでいた。

何せLED懐中電灯の方は、太陽電池内蔵で電池切れの心配は無いし、万が一使いすぎで夜間に電池が切れても、手回し充電ができる優れたものである。

付属の端子とコードで接続すれば携帯電話だって充電でき、前方にフラッシュライトを飛ばすLED部分と、本体側面に置きスタンドとして利用できる小型ランプが併用できるのもありがたい。消費電力を節約するために、明るさが二段階で切り替わるのも魅力だ。

調査とした森を迂回するような場所では、木々の間に隠れた狼や熊などの凶暴な野生動物を、非常サイレン機能で戦わずに撃退する一幕もあった。

「あとはお尻部分にライターか万能ナイフでもついてれば、これを量産して売りに出すだけでエンテ・イスラの旅が劇的に変わるわね」

まるでテレビの通販番組のようなことを言いながら、恵美はやがて森の彼方に、ともすれば見逃してしまいそうなほど、小さな「座爐」の影を発見する。

恵美はそれを視認するとライトを消灯した。

万が一、野盗の類いが根城にしていた場合、接近を感知されるのは好ましくない。それに、他の「座爐」とはそもそも事情が違う。

もしかしたら、エメラダが懸念していたような、もっと厄介な連中に見張られているかもしれないのだ。

恵美は慎重に気配を探りながら、それまでの倍の時間をかけて歩を進める。

やがて遠目に建物の形が月明かりでうつすら見えるあたりまで近づくと、恵美は足を止めて気配を探る。

「……誰かがいるはずないわよね」

恵美は囁息する。

用心は怠らないが、それでも考えてみれば、恵美がエンテ・イスラから消えて一年以上、天使や悪魔、一部の教会関係者が恵美の生存を確認してから半年が経とうとしている。

そんな長い間、来るかも分からない恵美を待つてこんな所に兵力を配置するような暇は、どの勢力にもあるまい。

何せこの村は、魔王軍侵攻前からなんの特徴も無い、どこにでもある農村に過ぎなかったのだから。

近づくにつれて街道沿いに、人の手が入った痕跡のある荒れた平地が現れる。

かつて、耕作地だった場所だ。

恵美は周囲に広がる耕作地の中の道を抜け、夜に横たわる黒い魔物の影に一步一步近づいてゆく。

そしてついに、荷馬車が交互通行するのが精いっぱいだった村の「大通り」に恵美は立った。

「……ただいま」

まるでこの村だけ時間が止まっているかのように、虫の声一つせず、野鼠ネズミ一匹の姿も無い。恵美の震える声に答えるのは、夜の清かな風だけだった。

スローン村は、己の軀カラダを墓標としたまま、静かに朽ちようとしていた。

「まあ、かつてにはいいっていいの？」

比較的原型をとどめている、街道に最も近い家に勝手に入り込んだ恵美は、家の中で持参したテントを張った。

アラス・ラムス具現代の光や、食事の煙や火を遠くから見られないようにするためだ。

「大丈夫よ。ここは……ままの知り合いのおうちだから」

恵美は寂しげに微笑ほほえみひと、手早く夕食の支度を整える。

今日の夕食は、昨夜作ったジャガイモスープを煮詰めてペースト状にしたものと、日本から持ち込んだ、レトルト白米、お馴染み「ゴトウのごはん」である。

レンジでチンするものと思われがちだが、熱湯で湯煎ゆでして食べることもできるのだ。万能鍋ばんぼくに水を入れ、煙の出にくいキャンブ用簡易ストーブで火にかけて沸騰させる。

ジャガイモペーストに少しお湯を足してスープ状に戻してから、残った湯で白米を湯煎。あとは保存食である燗製肉を少し出して、最低限の夕食が整った。

「故郷凱旋の晩餐としては上等よね」

「ま、おいも！」

懐中電灯のランプに照らされたアラス・ラムスは、慣れぬ場所での闇を憚がることもなく、どうやら気に入ってくれたらしいジャガイモスープをねだる。

「アラス・ラムス、その前に」

「う……あ、あいー いたたきますす！」

「はい、よくできました。ちょっとふーふーしてから食べるのよ」

アラス・ラムスに食べさせるものだから温めの加減には十分気を付けているが、惠美はいつもの調子でアラス・ラムスにスープを差し出す。

「ふー、ふー……あむ」

「どう？」

「ん、おいし」

朽ちた故郷での晩餐は、至極穏やかに進む。

ジャガイモスープとご飯でアラス・ラムスがお腹一杯になったら、今度は惠美が自分の夕食に取り掛かる。

恵美は大人だから、選り好みせずにごく簡単に燕麦パンと燻製肉。それにアラス・ラムスのスープを少しだけ。

「ねえママ」

「ん？ なあに？」

「ままのともだち、どうしていないの？」

「……えっとね」

ともだち、という言葉の意味が先ほど自分が言った「知り合い」を指していることを理解して、恵美は咳払いをする。

「このおうちには、コーファアさんっておじさんがいたんだけど……」

この家に住んでいたのは父のノルドより十ほど年上の夫婦で、何かとお喋りな夫婦だったことを覚えている。

「あつちは？」

アラス・ラムスは恵美の言葉を待たず、窓の外に見える向かいの魔屋を指差す。

「えっと……リリーナお婆ちゃんのおうちだったかしら。編み物が上手いお婆ちゃんね」

「なんでいまはいないの？」

「……」

アラス・ラムスの問いは、果たしてどのような意思に基づき発せられたのだろうか。

幼子敵の純粋な疑問か。それとも、時折見える深い知性が眞実を求める故だろうか。

「こわい悪魔達が村に襲ってきてね、皆を追いつちやっただの」

恵美が大法神教会に保護されて間もなく、スローン村はルシアエル軍の餌食となった。

スローンから西大陸最西端の聖地サント・イグノレッドまでの移動距離を考えると、もしかしたら恵美が村を出てからひと月近くの間はあつたのかもしれない。

だが、サント・イグノレッドに到達するより前に村は滅んでいたのかもしれない。

その頃の記憶は、憎悪と、悲嘆と、幼さと、何より時の嵐に紛れて今も正確なところは思い出せず、今となつては村が滅んだ正確な日時など確かめようのないことだった。

暗い記憶を、醫つたパンと共に飲み下そうとしたとき、アラス・ラムスが新たな問いを發する。

「まあ、あくまで、がうりえう？」

「え？」

「こわいの、みんなをなかせてめつてしたの、がういえる？」

「ち、違ふわよ？」

何故そこでガブリエルの名が出てくるのだろうか。

いや、今のようないかたになる前から、アラス・ラムスが大天使であるガブリエルに対して異常な敵愾心を持っていることは知っていたが、それにしても唐突な問いだ。

「じゃああくまって、てんし？」

「え、えっと、ごめんね、アラス・ラムスが言ってることがよく分からないんだけど……」
 そういえば、アラス・ラムスは最初から『天使』達のことは理解していたようだが、『悪魔』という存在に関しては理解しているのだろうか。

恵美の聖剣、進化聖剣・片翼^{（ペーパー）}という形で、アラス・ラムスは何度も真奥や高屋の悪魔型を目撃しているはずだが、それでもアラス・ラムスの彼らへの態度は変わらなかった。

「あくまって、なあに？」

「……それは……」

恵美は、答えられなかった。

半年前ならば、世にもおぞましい闇の魔物について、滔々^{（たうたう）}と述べることもできただろう。だが、他でもないガブリエルの言葉が記憶の底から蘇る^{（よみがえす）}。

『天使は生き物として、人間だった』

鈴乃の疑問が、恵美の記憶を揺さぶる。

『「悪魔」とは……一体なんだと思う？』

日本で、人間と変わらぬ姿で生きている悪魔の王サタン。

彼は生き物として、なんなのだ。

その答えを、今の恵美は持ち合わせていない。だからアラス・ラムスの問いに、答えられな

い。

「……まま？」

答えられない理由は、もう一つある。

「昔を村から追い出したこわい悪魔」とは、他ならぬ、アラス・ラムスの慕う「ばば」だ。

勇者として、人間として、今、アラス・ラムスに「ばば」を憎むべき敵だと教えることなど、恵美にはできなかった。

それがアラス・ラムスの人生のためにならないと心のどこかで思いながら、いつかアラス・ラムスの刃でアラス・ラムスの愛する「ばば」を斬らねばならないことを教える決断を、こんな一瞬でするはずがなかった。

父が生きている可能性が浮上した今となっては、それが自分にとって必要なことかどうかすらあやふやになってしまっているのだ。

いずれにしろ、娘の愛を裏切る形で己の憎悪を晴らしてしまったら、それはもはや、恵美が忌避する「悪魔」となんら変わりないではないか。

「……何かイライラしてきた」

こんな所でまで、自分を悩ませる真奥の胸抜け面を思い出して、恵美は唐突に腹の底に憎悪や怨嗟とは全く違う、乾燥した軽い苛立ちが湧き上がるのを感じた。

「こつちが甘い顔してれば、こうやってあっちこつちで私を悩ませて、自分はへらへら野望を

語って能天気な幕らしてて、本当にフザけてるわよね」

「う？」

「いいアラス・ラムス、悪魔って言うのはね、とっても卑怯で、狡猾で、自分勝手なの」
「ひきよ、こかかって……？」

「本当に、千穂ちゃんもあんなのの何がいいのかしらね、さっぱり分からないわ」

「うし、わかんない」

心の至極浅いところで育立っていた恵美だが、ふと、あることを思いついてランプに照らされる中、にっこりと笑った。

「そうだアラス・ラムス、燃ったら……ばばに教えてもらいなさい」

「ばばに？」

「そ、ばばに『悪魔ってなー』って聞いてごらんない、ばばはなーんでも知ってるから、きつと教えてくれるわよ」

「わかったー」

鬼である。

だが、恵美にとって、常にアラス・ラムスと真実との関係に悩むのが自分だけなのは納得がいかない。

真実にも、少しは先のことを考えさせなければ不公平だ。

「帰ったら、色々言つてやらなきゃ」

アラス・ラムスの問いに慌てふためく真奥のことを想像すると自然と笑みが零れた。

「つぎ、ばばにいつあえるの？」

「もう少ししたらね。千穂お姉ちゃんのお誕生日パーティーするから、そのとききつとばばも来るわよ」

恵美は、何も含むところなく、ごく自然に日本に帰つてからの予定を告げた。

「じゃあ、お片付けしたら、ちよつと早いけどもう寝ましようか。明日は早起きしなきゃいけないから」

恵美はテントと寝袋とランプ以外の荷物をリュックに纏め直すと、アラス・ラムスを抱いてテントに入り寝袋を聞く。

「つるふかー！」

ダウン仕様の寝袋に潜つて遊ぶアラス・ラムス。

「こーら、遊ばないの」

結局一緒に潜つてしまい、ひとしきりふざけ合つてからアラス・ラムスを引っ張り出す。

アラス・ラムスは不満そうな顔をするも、恵美が明かりを消すと、恵美の腕の中で大人しく眠る準備をする。

「まま、おはなしして！」

「おはなし。そうねえ……」

アラス・ラムスが寝物語を講うのは、今まで無かったわけではないが、珍しい。

地球の民話や昔話などがいくつか頭に浮かんだが、恵美は小さく首を振ると、ランプの明かりを一番小さく灯して、

「それじゃあ……エンテ・イスラの古いお話をしましょうか。怖い『悪魔』に捕まったお姫様を助ける若い王様のお話よ……」

寝袋の中でアラス・ラムスのお腹に手を置き、拍子を取るように上下させる。

月明かりも届かない死んだ村の一角で、『母』と『子』の夜は静かにふける。

翌朝、恵美は目の昇らぬうちから目を開いた。

アラス・ラムスはまだ目を覚まさなかったが、具現化を解除して融合すると、恵美は太陽に照らされた廃墟の村を散歩しはじめた。

相交わず静まり返っており、小動物の気配すらしない村だが、かつて旅の途中で立ち寄って、村に棲みつく野生動物や魔獣の類いを駆除したときから、それほど大きく風化は進行していないようだった。

不思議なことに、家々が崩れ、記憶にある風景とまるで違う光景のはずなのに、体が行く道

を覚えてゐるらしい。

ユステイナ家は、目の昇る方角にある。

遠くに見える山のさらに向こうから陽光が漏れ出し、恵美はそれに引き寄せられるように「大通り」を抜け、やがて村はずれに通り着く。

そして、そこに、思いがけぬものを見つけ、立ち竦んだ。

道の彼方にかすかに見えるあの木は、野良仕事をする父と共に、一緒に昼食を食べたあの場所だ。

ということば、既に自分の周りに広がっている薙れ果てた耕作地こそは……。

「お父さんの……麦……」

その瞬間、恵美の言葉に招かれたように、曙光が山間から光の腕を覗かせ、大地を明々と照らし出す。

恵美の瞳から、ずっと自然に涙が落ちた。

大地が、濃い緑に染まっていた。

朝の風が、大地を染める緑を揺らした。

「生きて……生きてる……」

広大な土地を埋める緑色の穂。

それは、間違いなく麦であった。

荒れ放題であることは間違いない。

深い緑に混じって色の薄く青の高い雜草が無数にあり、風に揺れる穂先の実りはどこまでも貧弱だ。

恵美の目から見ても、秋を迎える前に倒れるであろう穂がいくつも見受けられる。

だが、それでも恵美は、太陽の上った朝の空に向けて、叫ばずにはいられなかった。

「生きてるよ！ お父さんが育てた妻が、まだ生きてるよ!!」

悪魔に蹂躪され、管理する者がいなくなり、年月が経って、それでも生き残った強い妻が、世代を重ねようとしているのだ。

「本当に、どこかで生きているの？ また、一緒に、暮らせるの……?」

父の生きた証が、目の前にある。かつて恐怖と絶望の末に失ったはずのものが、目の前にある。

もう二度と、あの絶望を味わいたくはない。何があっても、自分はこれを、命賭けで守らなければならぬ。

「……うむ……まま？ どうしわぶっ!!」

恵美の叫びは、己の心すら揺らす。

心の芯を震わす叫びに驚いたアラス・ラムスを一瞬で具現化させて、涙を拭くことも忘れ抱きしめる。



「アラス・ラムス、私、まだ頑張れる……頑張らなきゃー」

「ままだ？ ……あふあ……」

唐突に叩き起こされてまだまだおねむのアラス・ラムスをまた抱きしめると、恵美は慌てて元来た道を駆け出す。

コーファアー家に置いてきた荷物を纏めて、一刻も早く父と暮らした家へと帰るのだ。そしてそこを拠点に、エンテ・イスラに帰還した目的を果たす。

きつと、父と過ごしたあの家には、何かがある。

今の恵美を取り巻く状況を変える何かが。

エンテ・イスラと地球を取り巻く謎を解く真実の一端が。

思わぬ奇跡に出会った恵美は、確信に近い予感を抱いていた。

※

「はああああ……なーんにも無いわね……」

集中力の途切れた恵美は、脱力して、かつてキツチンだった場所に座り込んだ。

実家探索、三日目の昼である。

最初の日、父の妻が生き残っているという思わぬ事態に感動のあまり涙まで流し、それを古

亮にきつと今の世界を取り巻く状況を打開するヒントが見つかると思ひ込んで、かつての懐かしい実家に探索拠点を移して三日。

ものの見事に、今日まで成果は上がらなかった。

ユステイナ家はごくごく一般的な農家であり、特別広大な屋敷や土地を持っているわけではない。

家は他の家屋の例にもれず破壊に晒された痕があったが、それでもなんとか恵美の記憶に近い形を保っていた。

かつて父の食事を作ったキッチン。

かつて父と食事をしたダイニング。

暖炉の火を眺めながら読んだりビング。

幼少の自分が寝ていたベッドを見たときにはまたしばらく涙ぐんだが、懐かしむだけではない。

この家は、恵美と、父ノルドの家であると共に、エンテ・イスラと地球を取り巻く人々の裏に姿が見え隠れする母、ライラの家でもあったのだ。

幼いころには分からなかったものの、触れさせてもらえなかったものの、立ち入らなかった場所に何かがあるかもしれない。

だが、救世の勇者渾身の家探しで分かったことは、父がどこまでも實業剛健な農夫であった

ということだけだった。

そもそも、何かをしまっておけるようなタンスや書棚といった家具の数が少ない。

廃材になってから野盗などに荒らされた可能性も考えたが、小さい金品ならともかく、タンスのような大きな家具だけを単品で盗んでいくような野盗もないだろう。

ならば、屋根裏や地下室などに何かを隠してないかと探索を開始したが、屋根裏には季節の家具や空の樽や壺、釘やネジなどの雑貨が数点転がっているだけだった。

地下室に至っては、そもそも無かった。

「こういうときは、都合よく秘密の地下室くらいあつてよね……」

文句を言っても、始まらない。

農具小屋、暖炉の裏、竈の裏や中と言った、子供のころには触れられなかった場所まで掘だらけの地だらけになりながら探索したのに、何も見つからない上に、夕食時にアラス・ラムスに、

「ままばっちい」

と容赦ないダメ出しを食らって落ち込む結果しか得られなかった。

「そもそも暖炉の裏とか竈にいちいち大事なものを隠してたら、本人が取り出せないか」
そうになると、後は水を隠すなら森の中の法則。

二日目、恵美は書棚に残っていた数少ない書籍や書類などを検める決意をする。

エンテ・イスラでは紙の本は高級品であり、重要な書類も木版や羊皮紙、パピルスのような荒い紙とも言えない紙が用いられることが珍しくない。

残っている本や書類の量は決して多くはなく、読破するのにさして時間はかからないと思われていたが……。

「……………細かい……………」

午前中に読みはじめたのに、夕陽が傾くころになっても一向に読み終わらない。

最初こそ、見覚えのある父の筆跡にまたぎろ涙がにじんだが、凡帳面な性格の父は、貴重な紙の裏面を消費して克明な日誌を残していたのだ。

その大半が麦の生育や仕事に関することであり、さりとてここまで緻密に文章にされると、一体どんな暗号が隠されているものかと疑わしくなり読み飛ばすこともできない。

農業日誌に目が疲れてきて木版や羊皮紙の書類に目を通そうと思えば、その大半は、納税証明書や、小麦以外に種々とやっていた畜産関係の証明書や申請書などが過去二十年分は保存されているようだ。

「……………あ、検査官の印が変わった」

二時間かけて最初に起こった大きな変化が、木版に押された焼印の変化だったところで、恵美は読むのを中断して食事の準備に取り掛かる。

「ねえアラス・ラムス」

「なあに？」

お湯で溶かすレトルトのコーンスープを美味しそうに飲むアラス・ラムスに、蕨にもすがる思いで聞いてみる。

「この辺りで、イエソドの欠片の気配とか、感じたりしない？」

「ないー」

なんの溜めもなく即答され、恵美はがっくりとうなだれる。

半分冗談ではあったものの、改めて容赦ない現実を突きつけられた気分だ。

それはそうだが、そんな反応が近場にあつたら、村に入った時点でアラス・ラムスが気づかないわけがない。

結局そんなに沢山の資料が残っていたわけでもないのに、その日一日では読破しきれず、三日目の今日は片付けと資料読みを時間を区切って行っている。

「うーん……こっちの収獲は無いのかなあ……」

農産品の取引関係の書類から、土地の権利関係の書類に移った恵美は、残っていたガタつく椅子に腰かけて足を組む。

「それとも……オルバとか、ガブリエルとかが同じように考えて、もう先に持っていかれちゃったのかなあ」

恵美は土地の境目を示す書類を既読の山に移し、代わりに一冊の紙の本を手取る。

「普通の日記がこれだけって、おかしいものね」

唯一の収穫と言つていいその本は、ノルドの日記であつた。

こちらは農業日誌と比較して密度は決して濃くはない。

毎日欠かさずつけられていた農業日誌に比べ、こちらはどんなにペースが早くても一週間に一度といったペースだ。日記というより、週間報告のようである。

その分、日常のことや、幼いころの恵美のことなどが書かれていたが、母ライラの名は一つ所も出ず、最終ページの目付も魔王軍侵攻の何年か前の時点で終わっていた。

「すごい、半端な時期の日記」

家族とはいえ、人の日記を断りもなく読んでおいて散々な感想だ。

もちろん父の思い出は尊いが、今の恵美に必要な情報が書き込まれた時期のものでないことは明白だった。

「エメが迎えに来るまであと二日かあ……」

探索の見込みに暗雲が立ち込め始め、恵美は気弱なため息をついた。

「土地区画整備証明、これは畑の境界線の証明書、こっちは納税控除用の休耕地申請書……」

恵美は書類整理に戻つて、一枚一枚の木版をざっと読んで仕分けしてゆく。

「街道整備供託金の納付証明に、なにこれ、村長さんからの新年の挨拶（挨拶）がこんなところに紛れてる。羊皮紙はこっち、それから……ここからは許可書とか権利書かあ」

恵美はもはや慣れた手つきで、OLの如く書類を整理してゆく。

「共同林の定期伐採権に、斧の所有許可証？　こんなのあるんだ。それから……」

聞いたこともない許可や権利の数々を処理しながら先に進むが、

「家を立てるときの領主の許可書、改築許可書、増築許可書、ここは家関係ね。農具小屋建設許可書……これは新規耕作地開拓許可書……あれ？」

恵美の手がある羊皮紙の上でびたりと止まる。

「土地関係のって、こっちにまとまってたわよね。間違いかしら」

父が整理するときに間違えたのだろうか。

見ると今いる家を立てたときと同時期に作成されたもののようにだ。

そのころはまだきちんと分類作業が進んでおらず、月日が経つと共に忘れられてしまったのだろう。

そう思った恵美はその新規耕作地開拓許可書を土地関係の分類に入れ直そうとして、

「……………何これ」

息を呑んで、その羊皮紙の文字を凝視する。

「どうも、こゝ」

新規耕作地開拓許可書は、その名の通り、新しい畑を開きたいときに申請する書類であり、納税実績や収穫高などに応じて、申請者が住む村の村長と地域を治める領主が発行する。

開拓を自分の手で行う分、安く土地を手に入れられるという利点があるが、広げた土地の実際の良し悪しに関係なく、土地面積に応じて課税され税負担が重くなる可能性もある。

そのためよほど余裕のある農家でなければこの申請をすることはない。

まして、

「こんな離れた場所に、どうして？」

記載されていた土地の場所は、ユスタイーナ家の管理するどの土地からも離れた、村の東方に位置する山の中だった。

エメラダからもらった地図と見比べると、少なくとも大人の足で村から半日はかかるような場所にある。

「んんんん？」

恵美は慌てて今までの書類をもう一度ひっくり返す。

すると、灌漑施設の利用権利書の束の中に隠れるように、もう一枚、農具小屋設置の許可証を発見した。

その場所を見ると、先ほどの開拓許可書の場所と一致した。

「こんな場所があるなんて……聞いたことない」

少なくとも恵美の記憶にあるユスタイーナ家の畑は、この家から子供の足でも歩いて十数分の距離にあるものばかりだった。

父は小麦以外には家の敷地内の小屋で細々と鶏を育てて卵を売る以外のことをしていなかったはずだ。

では、村から完全に独立した場所にある、この農地はなんだ？ この小屋は、なんのために建てられた？

恵美は跳ねるように立ち上がると、読破した農業日誌に飛びついてページを繰り、二枚の謎の許可書の目付をもとに、その周辺の農作業に関する記述をビクアップする。

それを二度繰り返し、恵美は興奮の面持ちで呟いた。

「何も、収穫してないし、何も植えてない。でも……」

農具小屋建設の許可証が発行されてから三日後の目付のページの端に、最初読んだときは見逃した、小さな小さな文字が入っていた。

「9……数字の、9……」

最初は書き損じか、メモ書きだろうと気に留めなかったその数字の意味が、今は重大な情報となって恵美にのしかかる。

偶然とは思えない。「進化聖剣・片翼」やアラス・ラムスの核となっているセフィラ・イエソドは、生命の樹に成る「9」番目のセフィラだ。

恵美は高鳴る鼓動を抑えきれず、胸に手を当てた。

「アラス・ラムス……」

「……むゅ」

どうやらアラス・ラムスは恵美の中でお昼寝中のようだ。

だが、この情報の意味は今すぐにでも確かめねばならない。

恵美は思わず、夕刻の色に染まりそうな空を振り仰ぐ。

エメラダが迎えに来るのは二日後。だが、この場所は大人の足で歩いて半日はかかる場所にある。もしまた向こうで広範囲を探索しなければならなくなった場合、歩いて向かつてはエメラダとの待ち合わせに間に合わなくなる恐れがある。

かといってエメラダを待って彼女を引き留めれば、情報統制をしながら動いている彼女の足を引っ張ることになってしまう。

「……飛んでいくしかないか」

飛翔するだけなら、よほどスピードを出さなければ恵美の「敵」には察知されないだろう。

「大体ここは日本じゃないんだし、聖法気は世界中のあちこちで使われまくってるもんね」

大都市などでは夜間に灯りの法術を用いるし、法具の製造や、それこそかつて鈴乃が禁魔の魔王城に持ち込んだ聖別農作物の生産などにも、聖法気は多くの分野で使われている。

こと西大陸は法術の文化が他大陸より発達しているので、年間の聖法気消費量は他大陸に比べ三割ほど多い。

残された時間やエメラダの立場を考えれば、聖法気を使う使わないで悩むよりも、調査期限

の延長の方がはるかに問題だ。

「それに……千穂ちゃんとの約束もあるし」

恵美はそう言うと、左手の腕時計を見る。

お気に入りのリラックス熊の腕時計は、取えて今まで外さずにいた。

地球とエンテ・イスラの太陽の進行度合いを比較するためだ。

奇跡としか言いようのないことだが、時差こそあれ、地球とエンテ・イスラの一日はほぼ同じらしい。

地球の九月十二日には、千穂と恵美の、誕生パーティーが企画されているのだ。

「約束は、守らないとね」

恵美は二つの資料を纏めると、懐かしの我が家を引き払うために野営道具をリュックに詰め込み背負う。

「帰りに、またちょつとだけ寄れるかな」

玄關をくぐり、平和な時代の姿を今に留める我が家を見上げ、恵美は唇を引き結んだ。エメラダとの待ち合わせはこの村だから、帰りは家の上空にゲートを開いてもらおう。

そんなことを考えながら、

「行ってきます」

恵美の体はゆっくりと空中に浮き上がり、やがて村を遠く彼方に見ながら、新たな目的地へ

と向かい東の空へと飛び去ったのだった。

地図と照らし合わせたところ、問題の場所は、広葉樹の生い茂る広大な山地だった。

未開拓の土地かと思いきや、どうやら季節限定の狩猟区として機能していた場所らしい。

山の麓に獲物を溜くための小さな宿場のような集落跡があった。

復興の手が入っている様子もなく、完全に無人と化しているが、ある庵屋で登山道を記したと思しき地図を発見する。

秘密の土地かと思いきや、残された登山帳簿を見ただけでも季節によってかなり大勢の猟師が入る山であることが分かり、これはもしかしたら父が農閑期にでも狩猟業に手を出そうとしていただけかと不安になってくる。

狩猟区域には共同管理の狩猟小屋が点在するのが普通だし、そのオーナーとなれば、狩猟ギルドからそこそこの小金も落ちるだろう。

「意外と、商魂たくましかったのかしらね……」

成長したからこそ分かる、父の大人の部分を垣間見て、惠美は複雑な思いを抱いた。

「でも、農具小屋と畑の開墾許可書だから、狩猟とは関係ないかもしれないし……」

初めて出てきた手がかりらしい手がかりなのだ。とにかく一度山を登って直接現地を見なく

ては。

そう思つて山に分け入つた恵美を待っていたのは、登山道とは名ばかりの獣道だった。

日本の観光地の山のような整備された登山道を期待していたわけではなかったが、それこそ陽が落ちてしまえば、素人には山を登っているのか下っているのかも分からなくなつてしまひ、そんな藪の中を延々進まねばならないのだ。

陽がある今ですら広葉樹の原生林が広がる山は暗く、多くの生命の気配に満ちている。

魔王軍侵攻以降猟師が出入りしていないせいか、獣道が植物の成長で塞がれていたり、日本ではまず見ないような大型の生き物の影だけが前方に見えたりと、登攀は遅々として進まない。野生動物など恵美の敵ではないが、ここでは自分の方が闯入者なのである。無辜の動物と戦うようなことは極力避けたい。

「空から見た方がいいかなあ……ないか」

恵美は汗を拭いながら頭上を見るが、すぐに自分の考えを否定する。

広葉樹の命に満ちる枝が空を塞いでいるからこそ、真昼のこの暗さだ。

空を飛んでも木々に遮られて地上の様子が見えるとはとても思えない。

「これ、今日中に見つかるかしら」

恵美は不安にかられて、エメラダからもらった広域地図と登山道を記した地図を見比べる。まず、山が広い。

そして権利書には土地の位置が文字で書かれているだけで、困ったことに今ある地図ではその場所が特定できない。

陽が落ちれば、探索は続行不可能だろう。

そうするとこの野生動物だらけの山の中でキャンプをするわけにもいかず、麓の集落まで戻るしかない。

「南斜面の五合目……南って言っても広いし、登山道が整備されてるわけでもないから五合目がどの辺かも分からないし……もう結構登ったと思うんだけどなあ」

恵美は西側からこの山に入ったが、山の中に恵美の分かるような東西南北の明確な線引きがあるわけでもない。

と、

「ん？ なあに？ どうしたの突然。え？ お外に出たいの？」

頭の中のアラス・ラムスが、突然何かを訴え出した。

「わ、分かったわ、ちょっと待って……えいっ」

恵美は戸惑いつつも素直にアラス・ラムスを具現化させる。

そのまま抱っこをしようとしたが、

「まあ、こっち」

アラス・ラムスは恵美の手をすり抜けると、地面に立って小さな足で駆けはじめたではないか。

「ちよ、ちよつとアラス・ラムスだ」

「まま、はやく！ こつち！」

アラス・ラムスはもどかしそうに恵美を振り返りながら、それでも細い獣道を進むのをやめない。

何が起こつても迷子の心配だけはないアラス・ラムスだが、それでも恵美は慌てる。

「待ちなさいアラス・ラムス！ どこに行くの！ せ、せめて虫よけスプレーを……」

恵美は、幼児用虫よけスプレーを手にながら必死にアラス・ラムスの後を追いはじめた。

アラス・ラムスにも一応長袖長ズボンを着用させてはいるものの、やぶ蚊に刺されたりしないか、あんなに激しく走つておむつがズレないかなど、益体もないことが心配になる。

アラス・ラムスの走り目には、まるで迷いが無かった。

恵美の目にはなんの標も無い道をひたすらに駆け、かれこれ十五分は駆け続けただろうか。走るアラス・ラムスが、獣道脇の大本の根本で立ち止まった。

「な、なんだつたの……？」

なんとか引き離されずに済んだ恵美は、アラス・ラムスが立ち止まった大木を見上げる。

大木、と言えはそうかもしれないが、獣道以外はほとんど原生林と変わらない山である。

それは特別目立つ外見をしていたわけでも、巨大なわけでも、希少な種であるわけでもなかった。ただ周囲の木と明確に違ふのは。

「枯れてしまつてゐるのね」

上を見上げれば、広げた枝に一枚も葉が無く、その幹を覆う苔や蔦の葉は、生きている水にはまず付着しないものばかりだ。

「この木が、どうかしたの？ アラス・ラムス」

惠美の傍らで枯れた巨木を見上げるアラス・ラムスは惠美の問いに一つ頷くと、

「こつちー！」

と、一言言つて、枯れ木の幹の中へと入つていった。

「……は？」

惠美は、目の前の現象を理解するのに数瞬を要した。

アラス・ラムスの小さな体が、まるですり抜けマジックでも見ているように、淡い光と共に枯れ木の幹に吸収されてしまったのだ。

「あ、アラス・ラムス？ ちょ、ちょっと、戻ってきなさい！」

慌てた惠美は、アラス・ラムスの具現化を解除しようとするが、

「……アラス・ラムス？ ねえ……」

戻つてこない。

自分の内に、聖剣を形作る進化の天鎖が戻る気配がしない。

呼びかけても、アラス・ラムスの声も返つてこない。

「う、嘘でしょ？ どうなってるの？ アラス……」

予想だにしない事態に恵美が軽くパニックになりかけたときだった。

「まま、まだ？」

なんでもないような顔をしたアラス・ラムスが、枯れ木の幹から顔だけ出したのだ。

アラス・ラムスの体と幹の境目には白い光が滲むようにかかっており、アラス・ラムス自身の額が、わずかに紫色の光を放っている。

「アラス・ラムス！」

「まま、こっち。ままはいれるよ。はやく」

だがすぐにまた、枯れ木の幹の中に顔を引っ込めてしまう。

「は、入れるよって……」

アラス・ラムスの無事を確認した恵美は、狼狽えながらもとりあえず枯れ木の幹に触ってみた。

「た、ただの木よね」

手触りも、まさしく枯れ木そのもので、軽く力を入れてみてもアラス・ラムスのようにすり抜ける気配すらない。

「あ、アラス・ラムス、戻ってきて！ 入れないわ！」

呼びかけるも、今度はアラス・ラムスが戻ってくる気配がない。

「い、一体どういう、何がどうなって……」

惠美はしやがみ込むと、枯れ木の根本、アラス・ラムスが消えた辺りに触れる。

そこもやはり単なる枯れ木の手触りだったが、ふと惠美はあることに気づいた。

先程顔を出したとき、アラス・ラムスの額には紫色に光っていた。

それはとりもなおさず、アラス・ラムスの核となるイエソドの欠片が光っていたということだ。

「そ、そういうことなのかしら……」

進化聖剣・片翼とアラス・ラムスは、既に枯れ木の中に入ってしまったている。

となると、今惠美が運用できる欠片は二つ。

破邪の衣と、悪魔大尚書カミーオの宝剣の鞘に依められていた欠片だ。

惠美は、かつて東急ハンドの素材で作った、欠片を取めた小瓶をリュックの中に取り出す

と、平信平蔵で聖法氣を込めてみる。

と、

「わっ！」

欠片の力を天界勢力に察知されることを懸念してわずかしか力を込めなかったにも関わらず、

ガラスの小瓶に収まった欠片から一筋、紫色の光が枯れ木の幹の中心目がけて放たれたではないか。

「こ、これでいいの？」

恵美は緊張に喉を鳴らしながら、紫光が照射されている場所に手を重ねると、

「わわわっ！」

枯れ木に触れるはずの手が、全く抵抗なく幹に飲み込まれ、同時に恵美も強い力に引かれてそのまま枯れ木の幹に飲み込まれるように姿を消してしまった。

「あいたたたた……」

荷物を担いでいたこと、予想外の抵抗の無さなどに驚いた恵美は、世界最強の勇者にあるまじき転び方をしてしまう。

鼻先に転んだ地面の土の臭いをかきながら、恵美は顔を壁めてゆっくりと立ち上がる。

そして目の前に広がる光景を見て、息を呑んだ。

枯れ木の光の先には、道があった。

獣道であることは間違いない。

だが、獣道脇の樹木が、まるで東京の道路の街路樹のように整然と道に沿って立っている。これは、明らかに自然なことではない。

「まよきた！ はやくー！」

少し先の方で、アラス・ラムスが精いっぱい恵美に向かって手を振っている。

とりあえずアラス・ラムスの安全を確認してホッとする恵美だったが、すぐに表情を引き締めてアラス・ラムスの後を追いはじめた。

アラス・ラムスも恵美が歩いてくるのを確認すると、先に立って真っ直ぐな獣道を進む。

この道は、間違ひなく父と母に繋がる手がかりだ。

アラス・ラムスとイエソドの欠片が示した道であるというだけで、その確証を得るには十分すぎた。

枯れ木の光の向こうと変わらぬ時間が流れるらしいこの道を、恵美はイエソドの欠片を暗闇でかざすランブのように顔の前に掲げながら進む。

鳥の声も、虫の声も、獣の気配もしない静かな道をただ真っ直ぐ進むこと五分ほど。

急激に拓けた視界の先にあったのは、一軒の小屋だった。

小屋の脇の土の上には煙の跡らしい耕作された土地。周囲の森には存在しなかった、食べられる種類の果実を実らせる木が数本植わっている。

人の気配はせず、放置されてからかなり時間が経っているように見えるが、恵美の動作はエント・イスラに帰還して以来最も激しくなっていた。

既に太陽は、地平界いっばいに広がる地平線の彼方に消えようとしていた。

代わりに二つの月と明るい星が見えはじめた夕暮れの空は、外の空間とまるで変わらない色

を湛^{たた}えていて、それらの位置関係からこの場所が、父が権利を取得した南斜面側にあることを確認する。

「まま」

小屋の前で、アラス・ラムスは恵美^{めぐみ}を待っていた。

恵美はイエソドの欠片^{かけら}をポケットに仕舞い込むと、アラス・ラムスの元へ参み寄る。

「アラス・ラムス……ここは、なんなの？」

気がつくとも恵美は、自然とそう問いかけていた。

アラス・ラムスは、はっきりとこの場所を目指して枯れ木の外の山を走っていたはずだが、アラス・ラムスの答えは意外なものだった。

「ままのおうちじゃないの？」

そう、問い返してきたのだ。

「……どうして、そう思うの」

疑問符をつけることのできない己の心の弱さに、恵美は自分が嫌^{いや}になる。

ずっと、思っていたことだった。

アラス・ラムスが、自分を「まま」と呼ぶ理由。

真^{まこと}実^みが建設した中央大陸の魔王城で生まれたと思われるアラス・ラムスは、イエソドの欠片の所持者である以上の接点^{てきでん}が無かったはずの恵美を「まま」と呼んだ。

その答えが、こんな唐突に突きつけられるとは、思ってもみなかった。

「ままのにおいがするよ」

アラス・ラムスの答えは、今の恵美にとっては残酷なものだった。

「ままの、匂い……」

空はどこまでも高く、斜面から見渡す景色はどこまでも広い。

なのに。

恵美の心は、最愛の父と別れたあの日の時のように、小さく、しばんでしまった。

「……ねえ、アラス・ラムス」

「なあに？」

「アラス・ラムスの……『まま』の、お名前は？」

「ままの、なまえ？」

アラス・ラムスは少し首を傾げてから、口を開いた。

「らいら」

ヴィラ・ローザ笹塚に突如として表れたアラス・ラムスは、その場で「ばば」を「サタン」と呼んだ。

だが、「ばば」は誰かと尋ねられたアラス・ラムスはただ、恵美を指差しただけだった。

アラス・ラムスと通じた、わずかに数ヶ月の生活を思い出す。

アラス・ラムスは恵美のことを「ばば」と呼んでいたが、ただの一度も恵美の名を呼んだことはなかったのだ。

もちろん、今のアラス・ラムスが愛する「ばば」が恵美自身であることに疑う余地は無い。だが日本に来た当初から、アラス・ラムスはずっと、恵美の後ろに「ライラ」を見ていた。そしてアラス・ラムスにとっての「父」が魔王サタンたる真奥であり、「母」が恵美の母ライラだとするならば。

「幼かったころのあいつを助けたのは……お母さん……」

東京ビッグエッグタウンの観覧車の中で聞いた、真奥貞夫の過去。

そのとき既に予感があったが、こうして事実を突きつけられると、立っているのがやっとな程に膝が震えてくる。

「あの……バカ魔王……何が、『私の知らない奴』よ……」

恵美は震える声で、この場にいない真奥に向かって悪魔をつく。

幼い真奥を救った天使のことを尋ねた恵美に、真奥は答えた。「お前の知らない奴さ」と。

確かに恵美は「自分の母」を知らない。「ライラという天使」も知らない。

だがそれでも「ライラという天使が自分の母である」ということだけは知っているのだ。

「こんなに……動揺すること、見逃がされて氣遣われたみたいじゃない……」

だがどれだけ悪態をついても、今この瞬間に至るまで恵美の見てきた全てのことが、一つの事実を告げていた。

母が幼き日の魔王サタンの命を拾い、そのサタンが成長してエンテ・イスラに侵攻し、父と自分の生活の全てを、大勢の人間の幸せと命を、破壊させたという事実を。

「私は……」

自分の与り知らぬ親の行動まで全て責任を負おうと思うほど、恵美も愚かではない。

今の恵美にも、そして今地球にいる真奥にも、ライラの行動の意図は今もって不明だが、それでもなんの考えもなしに行動しているとも思えない。

そうすると、母が幼いサタンを助けた意味とは、なんなのだろう。

「……」

「まま、なあに？」

恵美は、アラス・ラムスに視線を落とす。

アラス・ラムスは、ライラが真奥に預けたイエソドの欠片から生まれた。

これだけ見ると、アラス・ラムスをこの世に生み出すために真奥を助けたようにも思えるが、

真奥本人はアラス・ラムスの存在をつい最近まで知らないばかりが、欠片について思い出すことすらなかったはずだ。

「でも……」

恵美は、エメラダとアルバート、そしてオルバと共に中央大陸の魔王城に攻め入った日のことを思い出す。

恵美の聖剣から放たれた紫色の光は、魔王の下へと一直線に走る導きの光だと恵美は信じて疑わなかった。

魔王へと至る導きの光の伝説は、聖剣や破邪の衣の元となった進化の天銀と共に代々大魔神教会に伝えられていものだが、今となっては単純に恵美の聖剣と、アラス・ラムスになる前のイエソドの欠片が引き合っていたものに過ぎないと分かる。

「……あれ？」

ここまで考えて、恵美はふと、あることに気づいた。

教会の伝承にある導きの光は、単にイエソドの欠片同士が引き寄せ合う作用によるものだった。

ならばもし、あの日恵美が真奥を、魔王サタンを倒していたら、どうなっていた？

「私が、あなたと出会っていた？」

「う？」

惠美はアラス・ラムスの額を凝視する。

魔王サタンが倒されて、それでも導きの光が消えなかったら、当時の惠美も不審に思ったことだろう。導きの光を辿ってもし、今の姿になる前のアラス・ラムスのイエソドの欠片と出会ったとしたら……。

「今みたい……融合したのかしら」

「進化聖剣・片翼」とアラス・ラムスの融合は、地球でガブリエルと対峙した際起こった偶発的な出来事だと思っていた。

だがあのとき、アラス・ラムスは自分の意志で、聖剣を丸めて食べたではないか。

欠片同士は引き合う。

つまり、元の形に戻ろうとしている。

惠美の聖剣、破邪の衣、そしてアラス・ラムスがそうであるように。

「お母さん……ライラは、砕けたイエソドをあっちこっちに散らしてるのに……時間をかけて、元に戻そうとしているの？」

一体なんのために？

考えてみると、惠美はイエソドのセフィラがもともとどんな形をしているのか、どの程度の大きさなのか知らないし、欠片がいくつあるのかも当然知らない。

その上、欠片になった経緯も不明なら、誰がどのようにして砕いたかも分からない。

仮にも世界組成の宝珠などと呼ばれる代物が、ガラスのコップのように簡単に砕けるはずがない。

誰かが恵美の想像もつかないような超常的な力でもって砕いたのだろうか。

だが一連の作業を最初からライラ一人でやるのは、あまりにも無茶な気がする。

欠片一つを、守護天使のガブリエルや大天使のサリエルが直々に、血眼になって探しに来るほどののだ。誰か、協力者がいたのだろうか。

いるとすれば、それはライラに近い人物、少なくとも天界の住人であるはずだ。

だが、それは一体誰だ？

ラグエルが東京タワーを中心に起こした事件から言っても、ライラも今や天界から追われる身だが、似たような境遇にある存在は、困ったことに漆原半蔵こと墮天使ルシフェル以外には思い浮かばない。が、しかし。

「それは……無いわよね」

恵美はあっさりとその考えを否定する。

それは何も漆原の日頃の生活態度が悪いとか天使っぽくないとかそういうことではない。

もし漆原がイエソドの欠片を返るライラの協力者であったとしたら、恵美の聖剣やアラス・

ラムスに対して態度が変わっているはずだからだ。

恵美は西大陸と彼方で漆原と敵として対峙し、進化聖剣・片翼を用いて戦っているが、い

ずれのと看も、漆原が惠美の聖剣について「人間が持ち出した強力な武器」以上の認識を持つている節は無かった。

彼塚の魔王城にアラス・ラムスが現れたときも、真奥や吉屋と同様本気で育児に振り回されているように見えた。

「となると私の知らない誰かってことになるわね」

思考の材料が不足して行き止まりに差し掛かり、惠美は嘆息する。

だが、いくつか分かったこともある。

幼いサタンⅡ真奥を救ったのがライラだとしたら、ライラの活動範囲は魔界に及んでいたという事で、他の欠片が魔界にある可能性があること。

理由は分からないが、欠片を再結合させるのが目的なのだとしたら、大法輪教会に残る聖剣と破邪の衣にまつわる伝承は、長命な天使であるライラが人間好みに事実を言い換えた嘘の物語であるということ。

そして何よりも。

「お父さんは、全部知っていた」

千穂に託された、父ともう一振りの聖剣の記憶。

魔王軍侵攻に先立ち訪れた大法輪教会からの理えに、惠美を引き渡した際の言葉。

「お前のお母さんは、まだどこかで生きている」

そして何よりも、イエソドの欠片かけらが無ければ入ることのできない、この場所。

父ノルドが、ライラの全てを知った上で生きていた証拠であった。

取かえて権利書や許可証を申請したのは、単純にこの場所を整備するのに必要な道具や資材を山に持ち込むための理由づけだったのだらう。

あとは申請した小屋や畑をノルドが使おうが使うまいが、村や領主にしてみれば既定の税金取められれば文句は言わないし、こんな狭小な土地を毎年検地するような手間もかけない。そして実際に検地に来たところで、普通の人間には枯れ木が一本あるだけの未開拓の森が見えるだけ。開墾かいてんに失敗したと思われるのが精々だらう。

「それと……あと一つ分かったことがあるわ」

惠美めぐみは、枯れ木の入り口から歩いてきたここまでの一本道を振り返る。

「この場所を本当の意味で作ったのは、お母さんってことね」

父は高位の法術士ほうじゅしではなかった。これだけは間違いない。

たとえそうだったとしても、イエソドの欠片がキーとなって出入りできる空間を作るなど、エメラダですら困難くわんなんだらう。

つまり。

「ここをくまなく調べれば、お父さんとお母さんの秘密が、何か見つかる」

決して、答えを見つけたわけでも、複雑すぎる事実の迷路から抜け出たわけでもない。

だが、ここで膝を折ることはできない。

これだけのヒントが、目の前にあるのである。

「私の知らない奴」……か」

恵美は、動揺から来る体の震えが、思考の迷路をさまよう罫に止まっていたことに気づく。

「まだ私は、何かを知ったわけでも……真実を知ったわけでもない」

絶望するのは、答えを手にしてからでも遅くはない。

「まずはこの小屋を徹底して家探しね！ 行くわよアラス……あれ、アラス・ラムス？」

半分は意地で気持ちを前向きに戻した恵美は、己を鼓舞するように篠更（ノコシロ）大声を張り上げるが、肝心のアラス・ラムスがいつの間にか境界から消えていて、慌てて名を呼んだ。

「アラス・ラムス！? どこ!?」

呼んでも返事はない。

「ま、まさかっ!」

ここは山の急斜面に張りついた棚状の平地だ。

土地の端の斜面が落ち込む場所には転落防止用の柵のような気の利いたものもなく、もしかしたら目を離した隙に転落でもしていたら、と恵美は青くなる。

迷子の心配もなければ空を飛ぶことだってできるアラス・ラムスだが、アラス・ラムス自身が状況に応じて適切な判断で力を発揮できるかどうかはまた別の問題だ。

斜面を滑り落ちて怪我でもしたら、と心配になった惠美はアラス・ラムスを探すべく小屋の裏に回ると、

「なんだ、そんなところにいたの」

小屋の裏に立ちつくす小さな背中を見つけ、ほっと胸を撫で下ろす。

「アラス・ラムス、おうちに入るからいらっしやい」

惠美はその背に呼びかける。だが。

「……」

「アラス・ラムス？ どうしたの？」

アラス・ラムスの反応が無い。

惠美は歩み寄ると、アラス・ラムスが凝視する先を見る。

「何か植わっていたのかしら」

経過した年月のせいで雑草が生い茂っているが、アラス・ラムスが見つめる地面には、何か大きなものが埋まっていたらしい窪みがあった。

「……あしえす」

「ん？ どうしたの？」

「……………あしえす……………あしえす！」

「……」

「ままだ……あしえす、どこ？」

「あ、あしえす？」

「あしえす、あしえす、どこ！」

アラス・ラムスは真つ直ぐ窪みを見据えたまま叫ぶ。

「ままだ、ここ、あしえす！ あしえすいた！ でもない！ なんで？」

「お、落ち着きなさいアラス・ラムス、あしえすって……」

アラス・ラムスの様子が約変し、惠美は焦りを隠せないがしかし、何か重要なことが起ころうとしているのは分かる。

アラス・ラムスが饒舌になるとき。アラス・ラムスが惠美の分からない単語を何度も繰り返すとき。アラス・ラムスの様子が約変するとき。

全て、セフィラに関わる事態ばかりだった。

そしてアラス・ラムスが舌つたらずに叫んだ言葉を、惠美は必死で記憶の底から導き出した。「アラス・ラムス。もしかして『あしえす』って……『アシエス・アーラ』のこと？」

ライラから千穂、千穂から惠美に託された、麦畑の父の記憶。

その父が口にしたという言葉が「アシエス・アーラ」。

中央交易言語で「刃の翼」を意味するその言葉は、進化聖剣・片翼の他にもう一振りあるという聖剣のことだとばかり、惠美は思っていた。

だが。

アラス・ラムスは言った。

あしえす、いた、と。

既に恵美は、アラス・ラムスと等質の存在をその目で見たことがある。

セフィラ・ゲブラーから生まれたらしき子供、イルオーン。

ならばアラス・ラムスと同じくその名に「異」を冠する『アシエス・アーラ』とは。

「セフィラ・イエソドから生まれた、子供の名前？」

「あしえす！ わたしきた！ あしえす！ あしえすどこに！」

アラス・ラムスは、影も形も無い何者かの姿を求めて叫ぶ。

真実の言葉を信じれば、アラス・ラムスもまた、土に植えられたイエソドの欠片から生まれたはずだ。ということは、アラス・ラムスが何かを感じた窪みには『アシエス・アーラ』の元となるイエソドの欠片が埋まっていただろうことは想像がつく。

そして父と母が創造したこの場所に人が来なくなつて、かなりの時間が経っていることを考えれば、

「アラス・ラムス……気の毒だけど、アシエスはここにはもう……」

「やー ままもあしえすさがして！ あしえすのにおいー ここにー」

「落ち着いてアラス・ラムス、きつとアシエスも、イルオーンみたいにどこかに行つたのよ」

恵美はなんとかアラス・ラムスを落ち着けようとするが、アラス・ラムスは取まらない。

イルオーンと邂逅した際には、恵美の意志に反して「進化聖剣・片翼」の具現化を解除したほどの意志の強さを見せたが、そのとき以上に「アシエス・アーラ」を求めるアラス・ラムスの表情は険しい。

「まま、おねがい、あしえす……」

「アラス・ラムス……」

アラス・ラムスを普通の赤ん坊と同列に語ることはできないが、それでもここまで恵美の言うことを聞き入れないことは滅多に無い。

困り果てた恵美は、とにかくアラス・ラムスを抱き上げて、一度あやして落ち着かせようと手を伸ばしたが、

「ままー」

アラス・ラムスは何を思ったか、差し出された恵美の両手の指を、小さな手でがっしりと掴む。

「いっしょにさがして！」

「え？ いっしょについて……え!? ちょ、ちよつとアラス……!?」

とても、恵美が制止できるようなタイミングではなかった。

アラス・ラムスの顔がみるみるうちに光りを放ち、紫色の月が浮かび上がる。

「あしスローす!!!」

アラス・ラムスの叫びと共に、惠美の視界が紫と白に染まった。

「な、なんでこんなことにっ！」

惠美は叫びながら、必死で山を駆け下りていた。

とにかく一刻も早く、この場を離れなければならない。

背負った荷物を捨てるか否かで悩みながらも、とにかく惠美は周囲の空を警戒しながら、がむしやらに山を下りる。

アラス・ラムスの、あれは暴挙であつた。

アシエス・アアラを求めるあまりアラス・ラムスは、エンテ・イスラ帰還により最終段階にまで進化を遂げた、進化聖剣・片翼を、勝手に発動させたのだ。

今までに感じたことのないほどの聖法気が聖剣から放たれ、空に突き立ったイエゾドの光の柱は、数十キロ先からも容易に見えたことだろう。

もはや、荷物がどう、エメラダとの待ち合わせがどうと言っていられる場合ではなかった。

進化聖剣・片翼とアラス・ラムスの額のイエゾドの欠片が、あそこまで全力で起動して、誰にも察知されていないと思うほど惠美は楽観的ではない。

あの空間も、農具小屋も、狭く平たい土地の一面ですら調べることもできず、恵美は全力で逃げ出した。

イエソドの欠片を逃げて過去に敵として対立した面々は、皆、恵美の正体と放蕩を知っている。もうスローン村にも戻れない。

「……いない、あします、いない、なんで……?」

アラス・ラムスは、恵美の中で泣きじやくっている。

あれほどの力を放出していれば、それこそエンテ・イスラのどの大陸にいても、イエソドの欠片が反応しただろうに、アシエス・アーラの反応は返ってこなかったらしい。

「まま、ごめんなさい……ごめんなさい」

そして、アラス・ラムスは自分の暴挙の意味を理解しているのか、アシエスが見つからないことを泣きながらも、恵美に何度も詫づぶるのだ。

「いいから、まま、怒ってない! アラス・ラムスは、何も悪くないわ!」

恵美は多少の崖は全力で飛び降り、木の枝が顔や体を叩いても、逆に木の方が折れるほどの勢いと力で山を駆け下りる。

「アシエス・アールは、アラス・ラムスにとってイルオーンやマルタくらい大事な存在なんですよ!」

「……うん」

「ずっと、ずっと会いたかったんでしょ!! ずっと、一人ぼっちだったから! セフィロトの樹から離れて、ずっと一人だったから!」

「……うん」

「……なら、一緒よ! ままも一緒!」

「まま……も?」

「そうー……あもう、邪魔っ!」

恵美は速に、走るのに邪魔になった背の荷物を一式全て投げ捨てた。

現代日本でそろえたキャンプ道具も食料も、アラス・ラムスのベビー用品も全て捨てて身軽になった恵美は、必死で山を下りる。

もはや荷物らしい荷物は、遠く遠く日本にいる鈴乃や千穂と緊急送受で連絡を取るためのスリムフォンがパンツのポケットにあるのみだ。

「私も、ずっと一人だったから……ずっと探してたから、だから、例え敵でも……殺したいほど憎い敵でも……会いたかったから!!」

恵美は叫びながら、人間ではありえない速度で下山する。

獣道が徐々に広くなり、勾配もなだらかになる。

間もなく、狩人たちの宿場だ。

そこで様子を見て天光駭靴を発動させ、空でも地上でもいい。自分の過去と関係ない場所

に向かって全力で逃げる。

もう、エメラダとは合流できない。

千穂との約束も守れない。

日本に戻ることはすらできなくなる。

それでも、恵美はアラス・ラムスを責めることはできないし、そんな気も無かった。

本当の自分を隠さずに済む相手に、本当の自分を知る相手に、ずっと会いたかったから。

アラス・ラムスの精神は、セフィロトの樹にまつわることを除けば赤子のそれと変わらない。

そんなアラス・ラムスが、それこそ魔王サタンが幼いころからずっとイエソドの欠片の核の中

で孤独であったことを思えば、責められるはずがあるうか。

とにかく今は「敵」に見つかる前に逃げることにした。

どんな「敵」が来たところで、戦って勝つことは可能だろう。

だがエンテ・イスラが戦場になれば、恵美がそうであるように「敵」も日本とは桁違いの力

を持つている事は想像に難くない。

陣容次第ではとても手加減はできないし、そうすればおのずと、恵美は勇者エミリアの生存

が公式にエンテ・イスラ中に認められる。

恵美や、進化聖剣・片翼の存在を遂って対立するあらゆる勢力の思惑が膨らみ、激化し、

激突することは避けられないだろう。

エメラダやアルバートも当然巻き込まれることになるうし、大法神教会だって黙ってはいま

ない。大法神教会の総本山にエミリア帰還が知れば、日本にいる鈴乃の身も危うくなるかもしれない。

鈴乃に累が及べば、必然的に日本や千穂、聖香にまで危険が波及する可能性は飛躍的に高まるだろう。

今接触したら最後、日本どころかエンテ・イスラにすら、恵美とアラス・ラムスの安住の地は無くなってしまう。

そうなつてはもう約束だの世界の真実だの言つてはいられない。

今はとにかく、身を隠すこと。

恵美がエンテ・イスラにいることを、「敵」には察知されても公にされないために、恵美はひたすりに走った。

「……………っ」

だが。

「こ、これは…………」

恵美は、宿場の中央広場を突っ切ろうとして、懐で立ち止まる。

「ままだ…………」

アラス・ラムスの不安げな声に答えることは、恵美にはできなかった。

宿場全体を包む空間が、次々に歪む。

まるで空に穴が開くように、地が裂けるように、街が砕けるように、目の前に見える光景と空間が恵美を取り囲むようにして裂けはじめるではないか。

「グート……」

恵美は固瞞みする。

間に合わなかった。

敵の方が、一枚上手だった。

まさか、こんな大兵力を率い、グートまで使ってイエソドの欠片を追ってくるとは。

大地の裂け目から最初に現れたのは、東大陸を支配する大帝國エフサハーンの騎士団の兵装をした一団だった。

全員が腕に白く縁取られた翠緑の手巾を巻いていることから、（翠緑の手巾を巻いていることから、）護翠巾騎士団と呼ばれる一

団だろう。

まるで猛獣を包囲するかのように、現れる護翠巾騎士団は恵美に槍を向けながら遠巻きに包囲する。

「くっ……」

恵美は手をかざし、融合状態のまま泣きじゃくるアラス・ラムスに構わず、進化聖剣・片翼。

を具現化させようとし、

「大人しくしていた方が身のためだぞ、エミリア」

鎧冑^{よろよろ}騎士団の間から聞こえてきた声に、息が止まる。

「確かに今の君にはここにいて全ての兵を、私含め滅する力があるだろう。だが」

「そうすると、きつとあんた後悔すると思うんだわなあ」

統率された兵装の中から現れたのは、きわめて対照的な外見をした二人の男。

一人は鍛錬^{くわえん}な法衣^{ほふえ}に身を包み、剃髪^{ていはつ}した老人。

一人はエンテ・イスタではありえない、アルファベットの入ったバンキーなレザージャケットを纏い、アフロと呼んで差し支えない髪をした若い男。

「オルバ……ラダエルっ……！」

恵美は憎しみを込めて、二人の男の名を呼ぶ。

「そう怖い顔しなさんなっぺの」

ラダエルは肩を凍める。

「あんな物凄^{ものすご}いもん感知しちや惣長^{そうちやう}にお散々気分^{きぶん}で出撃してらんないっしょ。そりやデートも聞くわ」

「万が一にも、誰かに先んじられては困るからな」

オルバは、かつて恵美と旅をしていたときと同じように、そして笹城^{ささぎ}で恵美を裏切り敵とし

て立ったときと同じように、底知れぬ笑顔（えんご）を浮かべて言った。

「……背教の大神官（おほいみ）と、審判の天使（てんし）が、そろそろとエフサハーンの兵隊連れてなんの用？　まるで意味分らないわよ、この取り合わせ」

恵美は禿頭（かぶかぶ）とアフロを睨（にら）みながら言う。

「なんの用だと思ふのさ？」

恵美の視線（しせん）が全く堪（た）えていないらしいラグエルが、小馬鹿（こばか）にするように質問を質問で返す。

「そうね。大法神教会（おほいみ）と天界（てんがい）が、バーバリッティアに支配されたエフサハーンを解放するため私に助勢（すけさ）を頼みに来た、って言うなら、話を聞いてあげないこともないわ」

恵美は軽口（かろくち）を叩（たた）いて、相手の様子を見る。

するとなぜか、オルバとラグエルは驚いたように顔を見合わせてから、

「当たらずとも、違（ちが）からずと言ったところかな」

「……どういふこと？」

オルバの含みのある物言いに首（くび）を傾（かたむ）ける恵美だが、

「まあともかくだ、君の出方にもよるが、今のオレらは日本でそうだったみたいに、君からイエソドの欠片（かけ）を奪（うば）おうと思（おも）って来たわけじゃない。事情（じきやう）がちよつと変わったんよ」

ラグエルがその流れを遮（さ）った。

「勇者エミリア・ユステイーナ。オレらとエフサハーンへと同行してもらおう」

「お断りよ」

惠美は即答する。

そうなることはオルバもラグエルも分かつていたようで、眉一つ動かさない。

「一応聞くけど、なんでさね？」

「胸に手を当てて思い出してみなさい。あなた達が日本でやったこと。自分の目的のためならつまらない悪事も平気で働いて、何も知らない人を傷つけてきたような連中が、どの面下げて自分の正当性を証明するの？」

「なるほど、道理だな」

「まあ、言い訳はでさなかねえ。でもね、それでも君には来てもらおう。拒否は認めない」

「勝手に言っただけさ。私の予定は今月いっぱい埋まつてるのよ。下世話な頼頼ごっこなんか、魔王でも請って勝手にやっただけいいわ」

惠美は鉄の意志でそう宣言すると、オルバとラグエルに向かって、進化聖剣・片翼を具現化する。

「オルバ、あなたの言った通り、今の私なら本気を出せば余裕であなた達を消すこともできる。私にそれをためらう理由は無い。退きなさい。そうすれば……」

惠美が戦いの刃を翻さんとしたそのときだった。

「今のは……？」

周囲の空気がわずかに振動する。

どこか遠くで、爆発が起こったのだろうか。

いや、目に見える範囲で何か大きな破壊が起こった気配は見当たらない。だが、恵美は感じた。

ここからずっと西、恵美の故郷、スローン村の方角から。

「魔力……これは、魔力？」

天使でも、人間の力でもない、魔界の悪魔だけが持つエネルギー。

それが爆発した気配が、スローン村の方角から伝わってくる。

ラダエルは、恵美が魔力に気づいたことを察したのか、天使とはとても思えぬ厭らしい笑いを浮かべた。

「ドラギニなんとか言う舌噛みそうな名前のマレブランケがいてねえ」

ラダエルは、スローン村のある方向をわざとらしく見る。

「悪魔大元帥マラコーダの仇の故郷がこの辺にあるよって言ったら、どうしてもついでくるって言って聞かなくて」

「……ま、まさか……」

恵美の顔が蒼白になる。

「ここは西大陸だし、事情を知らないセント・アイレの騎士団とかに討伐されちゃいけないか

ら暴れるなどは言つてあるよ。でもねえ、君がオレらの言うこと聞いてくれないと、多分その限りじゃないねえ」

全力の勇者エミリアという強大な力を止めるには、あまりに雄辯な脅迫の文言と言わざるを得ない。

「マレブランケも悪魔。復興が進むここ西大陸ではそれほど強大な魔力を得ることはできぬ。だが、人っ子一人いなくなつた村一つを消滅させるくらいは容易いそうだ」

その瞬間のオルバの、無表情の奥に隠れた人とも思えぬ悪鬼の心を、惠美は生涯、忘れることはできないだろう。

「エミリア、君の夢は確か、お父上の畑を復興させることだったな」

「お……オル、バ、あなた……あなたは、どこまで……?」

「本当について先ほど立ち寄つたが、お父上の麦畑は、強く生き残っていたな」
聖剣の切つ先が、力を失つたように徐々に下がる。

「どうする?」

ラゲルの問いに、答えられない。

必死で頭を回転させるが、それでもどうにもならない。

今ここでラゲルとオルバを振り切つて全力でスローン村に飛んでも、悪魔にとっては畑と惠美の実家を破壊するなど造作もないことだろう。

かつて、魔王サタンを倒す旅の道中にスローン村に立ち寄ったとき、オルバには恵美の実家を知られてしまっている。

あのときもわずかに生き残っていた麦のことは把握していたが、父もいない今、二度と畑が蘇よみがえることはないだろうと諦あきらめていた。

日本に漂着してからも夢に見ては涙を流した、麦の香りと黄金色の穂ほに彩られた、故郷の村での父との平和で安らかな暮らしの情景。

恵美の瞳ひとみから、一筋の涙が流れる。

「わ、私は……」

勇者の名は、人々の希望の象徴。正義の証あかし。

そう言い聞かせ、血にまみれ戦ってきた過去。

だが、かつての仲間ともだちは、エメラダ、アルバート、そしてオルバは、恵美が魔王軍を相手に戦う動機はただ、父の敵討ちのためだと気づいていた。

そんな恵美が朝の光の中に見た、魔王軍によって幼いあの日に止められた時間が動き出し、父が生きているかもしれない希望が。父と自分が育てた麦が生き残っていた希望が。涙の別れの日に途切れた時間を再び動かす希望が今、目の前で碎くだかれようとしている。

復讐ふしゅうなら、容易だ。

煙や家を消滅させられようが、怒りのままにオルバやラダエル、鎧冑よろよろ巾騎士団とスローン

で待機しているであろうマレブランクを、怒りと憎しみの赴くまま、容赦なく血祭りに上げる
ことなど造作もない。

だが、それで終わりだ。

たかが煙、たかが麦。

だが恵美にとってそれは、幼いあの日からずっと、己の人生全てを賭けて、取り戻したいと
願ってやまなかつた希望なのだ。

「どうすれば……いいの」

恵美の心は、簡単に折れた。

これが、世界を絶望から救った勇者の心か。

まるで心の脆さがそのまま具現化したかのように、恵美の手の中の「進化聖剣・片翼」は日
本で顕現したときよりもずっと矮小な姿に縮み、そして消えた。

「言ったじゃないの。素直にオレらについてくりやいいのさ」

「……ついていけば、村には手を出さないでいてくれるの」

「もちろんだ。それに最初に言った通り、オレらあ君に危害を加えるつもりもない。けども、
君が抵抗したり日本に逃げたりとか変な真似をすりやその限りじゃ……」

「……そんなつもりはないわ」

「あそ、んじや結構」

ラグエルとオルバは満足そうに頷くと、手を上げて騎士団に警戒を解除させる。

「はいじゃ行こうか」

ラグエルは静かに言々と、恵美を促す。

恵美はラグエルたちが出てきたゲートに向かって素直に歩きはじめ。

ゲートの縁に立った恵美は、一瞬だけ、駆け下りてきた山を振り返る。

「……ごめんなさい」

そして一言、空に向かって呟くと、ラグエルに促されるままゲートの光の中に消えた。

星王、彼奴は、科擧、さうだわな



「だから何日かかるか分からんと言っただろうが！」

「期限は一週間だ！ たった一週間しか使わないもんにこんな大金払えるか！」

「それは貴様の都合だろう！ 一週間で済まなかったらどうするつもりだ！ 長期的な展開も視野に設備投資をするべきだ！」

「お前はすぐそうやって物事を悪い方にしか考えねえ！ 済まなければじゃない！ 済ますんだよ！ 社会人なら期限切られた仕事は期限内でやれ！」

「どうあがいても守れない期限を設定するのがまともな社会人か？ ご立派な建前と精神論だけで仕事が決済できれば誰も苦勞はしない！」

「理想を追えばキリがねえだろうが！ どうしたって用意できる環境には限界があるんだよ！ 絞れるところを絞らないのは役人と政治家だけで十分だ！」

「貴様のように無駄を指摘してゐるつもりになつてゐる者ほど、必要なものを残す能が無いんだ！ 効率化効率化とお題目を唱えるだけなら九官鳥でもできる!!」

「何をっ！」

「なんだっ！」

「あああああの、二人とも、声大きいです！ そんなに喧嘩しないで！」

千穂は必死で、大ゲンカをする真奥と鈴乃をなだめる。

傍から聞いていると、まるで昨今の労働事情について平行線の議論を展開する使用者と労働

者のようだが、三人がいるのは笹塚から歩いて三十分程の場所にあるドッキ・リ・ホーテ方面の町店。そのキャンプ道具売り場である。

テンカの原因はごくシンプルだった。

エフサハーンを旅するのに、敵の息がかかっていると思われるエフサハーン八中騎士団に捕縛されることを極力回避するため、真奥達は大きな町に滞在することができない。

野宿が基本の道程になることが予想されるので、その準備をするということになったのだが、ここで真奥と鈴乃の野宿対策に、齟齬が生じたのだ。

「どうせ俺達三人なんだ！ テント一つ買えば簡単だろうが！ いざ襲われたとき、捨てるものは少ない方がいいだろう！」

真奥は、鈴乃のスクーターに積める荷物の総量や、一週間という道のりを考えると野宿にはテントが一つあれば十分だと考えている。

「バカを言うな！ テントは二つ、それに一人一つシニラフにするべきだ！ 体調管理は万全にせねばならんし、大体私とアシエスは女だ！ 貴様なんぞと一緒に狭苦しいテントの中に入れられるか！」

「そ、そうですね！ 真奥さん、やっぱり女の子と同じ場所で寝るのはよくないです！」

鈴乃は体への負担を極力軽くすることが最優先で、さらに言えば真奥と一つ屋根の下の状況をなんとかして回避したいらしい。

千穂としても本音では真奥と誰か女性が一つ屋根の下で寝起きという状況は、非常時だということを差っ引いても承服し難いから鈴乃を応援するが、

「お前俺がこの期に及んでダスな真似すると思ってるのか見損なうな！」

「そ、そうです、真奥さんは紳士ですよ！」

つい真奥にも援護射撃を出してしまい、

「千穂殿はどっちの味方なんだ！」

「す、すいません……」

いらぬ反撃を食らってしまう。

「そもそも見損なうとか損なわないとかいう問題ではない！ あれだけ毎日働いているくせにテント一つ買う金もないのか！」

「優雅な独身高等遊民のお前と一緒にすんな！ こちとら毎日部下に飯食わせてんだ!!」

「人をルシフェルみたいに言うな！ 失礼な！」

「とにかくテントは一つありや十分だ！ 恵美達と合流した時点で逃げられなければこちらの負けだ！ 合流したらその場でダートを聞いてエンテ・イスラを離脱だ！」

「無茶を言うな！ ダート術は複雑な術だ！ タクシーを呼ぶような気軽さで考えるな！ 大

体エミリア達がすぐに移動できない状態だったらどうする！ 合流してすぐにダートで逃げられる保証が無い以上、どこかに身を隠すにはテントは複数必要だ!!」

「ぐ……だ、だったらせめてこっちの夏用シュラフでいいだろ！ 安いしコンパクトだ！」
 「季節的に向こうも秋が本格化する時期だ！ 予想外に寒くなるかもしれない！ 我々が風邪でも引いたら救出作戦どころではなくなるぞ！」

「ああああ、あの、あの、じゃああの、テントは一旦保留して、それ以外のもの揃えるのはどうでしょう？ ほら、他の荷物の量によって決めればいいじゃないですか！」

完全に平行線を辿る真奥と鈴乃をなだめるように、千穂は新たな道筋を提案した。

したのだが……。

「魔王！ 積める重量は限られていると言っただろう！ 予備のガソリンも相当量積まねばならんのにそんなにミネラルウォーターを買ってどうするつもりだ！」

「昔ならいざ知らず、俺今人間なんだぞ！ 水が変わって腹下したらどうすんだ！」

「この軟弱悪魔が！ エフサハーンは水が豊富で食糧事情も良好だ！ 河川や水源も無数にあるし、この濾過器と貯水タンクがあればそれで事足りる！ 水は現地調達だ！」

「お前さつき体調管理が第一だみてえなこと言っただろうが！」

水で揉めては折り合いがつかず、

「やっぱ米だろ」

「いや、うどんだ」

「お前な、さすがに野外でうどんはねえだろ」

「素人が飯盒で米を炊いたところで失敗は目に見えている。インスタントの乾燥うどんなら調理に時間ばかりかかんし失敗もない、重量も軽いでいいことづくめだ」

「それなら普通に乾パンとか保存食系の方がいいだろう短期間なんだし」

「食は基本だ。必要ないうちから完全にサバイバルをする必要もあるまい」

「だからってうどんはなあ……」

持ってゆく食糧でまた結論が出ず、

「虫よけスプレーは必須だ」

「そうだな。野外は虫めちやくちや多いだろうしな」

虫よけスプレーだけはなぜか一瞬で合意が取れ、

「燃料型ランタンだー」

「いや、LED型ランプだー」

「燃料型はエンテ・イスラにもあるから最悪持ち物を捨てても追跡される確率が低くなるー」

「その分荷物が多くなるし、電池型ならスイッチ一つで切り替えできるだろー！ ほらこれー！

手回しハンドルで携帯電話も充電できるんだぞー」

「燃料ランタンだー！ ランタン用の燃油はエンテ・イスラでも補給できるから荷物が少なく済

むー！ 携帯の充電など電池式充電器でも持っていけばよからうー 大体エンテ・イスラでは、

携帯電話は概念送受の増幅器の意味を為せば電源が入ろうが入るまいが関係ないー 電池残量



など気にしてどうする！」

「いやー！LEDランタンの方が絶対便利だ！お前もしかしてこんな簡単な電気製品も使う自信ないのか！」

「何をっ？科学文明に毒されおって！それでも魔王か!!」
夜間の光源で、裸に裸め、

「……………二人共、ちよつとストップ!!」

「うおっ!」

「おおっ!」

結局誰よりも最初にキレたのは、他でもない千穂だった。

「要するに分かりました！二人共、キャンプ経験とかないんですよね!」

「お、俺はまあ…………」

真奥は決まり懸そうに頬を掻き、

「きや、キャンプというか…………宣教の旅の野外宿営は修行僧が大体やってくれたから…………」

と鈴乃もぼそぼそと言いつつ、

「素人が無計画にあれこれ想像しても無駄が出るだけです!!店員さん捕まえるか、キャンプ道具の専門店に行つて専門の人にプラン作ってもらったほうがずっといいです!」

「…………はい」

千穂に諭されて、真奥も鈴乃もしゅんとしてしまう。と、

「おお、チホ、強イ！」

突如、何も無い所で真奥の全身が紫色に強く光って、次の瞬間には真奥の傍らに銀と紫の髪を持つ少女が出現していた。

「なんとなく気づいてたケド、マオウは基本的に、女の子に頭が上がらないんだナ？」

「うわわわっ！」

真奥と鈴乃は、アシエスの突然の出現に慌てて周囲を見回す。

二人は周囲に人目が無かったことではっと胸を撫で下ろしたが、千穂は一人、店の天井を見上げて顔を強張らせた。

「ああああのー 真奥さん鈴乃さん！ お店出ましよう！！」

頭にクエスチョンを浮かべる三人をどうか店の外まで連れ出した千穂は、荒く息を吐く。

「思いつきり監視カメラに見られてましたよ……もうちょつと気をつけてください」

恵美がアラス・ラムスの出現と融合について細心の注意を払っていたことを考えると、真奥は油断しすぎである。

「う、す、すまん。おいアシエス、だから自分の意志で出たり入ったりはやめろって……」

「監視カメラには思いが至らなかった。さすがは千穂殿。現代に生きてるな」

「チホ、すげー！」

「鈴木さんに見られてたら疑われちゃいますよ……真奥さんが本当に魔王なのかって……」
千穂は感心した顔で自分を見る三人にため息を禁じ得ない。

「そうだ。鈴木さん、遊佐さんがどんな準備をしたのか、聞いてませんか？ それを参考に、次はきちんと専門店に行きましょうよ」

「ううむ……エミリアにはエメラダ殿という連えがあったからな。だが、向こうに着いてからは一人旅の予定だったはずだ。まあ、アラス・ラムスをどう勘定するかによるが」
つまり何も分らないということだ。

「……とりあえず場所を変えましょう。東急バンドとか、都心のキャンプ用品専門店とか探して色々お話聞かせてもらいましょう。もう時間無いんですし」

千穂はそう言くと、先頭を切って歩き出す。

その後をぞろぞろとついてくる三人を肩越しにちらりと振り返った千穂は、ふと、何事もなく恵美が返ってきたときのことを想像する。

梨香は表面上落ち着いていたが、ずっと自分に嘘をつき続けていた恵美を許してくれるだろうか。

魔王城での話し合いの後、梨香は今日も仕事があるとのことそのまま出勤した。去り際の複雑そうな表情を見て、千穂は一抹の不安が拭えない。

「異文化交流って、難しいなあ……」

千穂は背後で未だにドツキ・リ・ホーテでの言い争いを継続している真奥と鈴乃を振り返りながら、改めて自分の身の回りの特異な状況を実感する。

「でも……もし遊佐さんと声屋さんが帰ってきてくれる……」

千穂の心を表すように、雲が陽光を遮るのを見上げた千穂。

「私は……いつまで一緒にいられるんだろう……」

その眩きに答えられる者は、世界のどこにもいないのだった。

後

「お電話ありがとうございます！」

「お電話ありがとうございます！」

「真心込めてお届けします！」

「真心込めてお届けします！」

「マダロナルド・デリバリーです！」

「マダロナルド・デリバリーです！」

「……とまあ、これが基本のワードとなる」

本崎は冷めた目で、手元の書類に目を落とす。

スタッフルームで木崎の声に合わせて復唱していた真奥と千穂を含めたマダロナルド幡ヶ谷駅前店のクルーたちは、緊張の面持ちでボスの次の言葉待つ。

「まあ、実際の運用はしばらく先だが、主戦力の君達には早めにマニュアルを渡しておく。各自自然談するように」

木崎の手から渡されたA4コピー紙の束を、真奥は真剣な面持ちで見た。

「もちろん、ヘルプ手当ての出る先行店舗研修に行ってもらうこともできる。希望者は後で私のところに来なさい。ただ、申請できる期間は短い。行くなら早めに頼む」

「二はいっ—」

「ああ、あとそれから、君達に今更言うまでもないことだが」

木崎は思い出したように、マニュアルの紙を叩いて肩を練める。

「商品に真心が込もっているのは当たり前のことだ。私のクルーたる諸君は、こんなマニュアルを毎回復唱しないと真心も込められないような未熟者ではないと信じている。では各自、今日の奮戦を期待する。仕事に戻れ！」

スタッフルームでのミーティングが終わり、それぞれが仕事にかかるべく部屋を出ていく中、真奥はマニュアルの束を改めて見下ろす。

木崎の言う、先行店舗研修に行きたいのはやまやまだが、残念ながら真奥は、今日に至るも原付免許を取得できていない。

これでは研修に行っても外回りのバイクに乗れないし、そもそも研修の受け付け期間中、真奥は店に出動しない。

必死のシフト調整の結果、なんとかエンテ・イスラ親征の日程を確保することができた。

後で轄々谷駅前店のはぼ全てのクルーになんらかのお礼をしなければならぬが、それでも日本で真剣に仕事に取り組み、職場のクルーとの連携を密にしていたからこそ、こんなギリギリに大勢の人間がシフトの代役を引き受けてくれた。

一人で好き勝手にやっていたのは、とてもできなかったことだ。

「真奥さん……大丈夫ですか？」

難しい顔で資料を見ている真奥を心配してか、千穂が声をかけてくる。

「ああ、大丈夫。ただ、やっぱり研修に行けぬものはツライなと思ってよ。さすがにもう免許試験に落ちるつもりはないけど、デリバリーが始まったらぶっつけ本番するしかないからな」

「へ？ ……ああ」

だが千穂は真奥の返事に意外そうに目を瞬かせ、そして、何か納得したのか急に微笑んだ。

「よかった、いつもの真奥さんだ」

「あ？」

「今夜のこと、緊張してるのかと思っちゃいました」

「……ああ、なるほどな」

千穂は何を言われているのか得心した真央は、つられて笑ってしまふ。

真央は、今夜の勤務が終わる次第、上野に向かうことになっている。

すなわちそれは、エンテ・イスラに旅立つということと同義だ。

遂に言うと、このシフトだけではどうしても代わりが見つからず、また木崎がデリバリー業務のマニユアルを配ると言うので出勤することにしたのだ。

「だってそっちはやることはシンプルだからな。向こう行って、恵美達ピックアップして帰ってくるだけだ。どんな邪魔が入ろうと、力でぶっ散らばせばいいだけだろ」

でも、と真央は情けない顔をする。

「こっちはそういうわけにいかねえ。地図の読み方は不安だし、商品が冷める前に届けたいのに赤信号とか速度制限とか二段階右折とか、破っちゃいけない規則がいくつもある」

「真央さんには窮屈かもですね」

空を自由に飛べる魔王が、二段階右折違反の心配をしなければならないのが日本であり、千穂は今更そのことに思い至りつい微笑んでしまふ。

「電話対応の仕事だって、あの恵美がしんどいって言うくらいだろ？ 妙なお客さんに当たったら正直面倒だなんて思うし、それにほら、デリバリー用のスクーターって本社に提出するイカダかタコだかいというメーターついてるらしいじゃん。迷ったりして評価落ちたらと思うと、こっちのほうはずっと不安で不安で仕方ねえよ。あーもう俺も研修行きたかった！」

「あはは」

おかしくて、一緒に行くわけでもないのに緊張していた自分がなんだかバカらしくて、つい千穂は笑ってしまう。

「笑いごとじゃねえって、相手に何してもいい状況の方が本当にずっと簡単なんだよ。人間の社会ってのは、本当に困難ばかり立ちはだかつてる」

「じゃあもし真奥さんが魔王として日本を支配したら、そういうの全部やめちゃいますか？」

「……ちーちゃん、分かって聞いてるよな？」

「はい」

しやあしやあと言つてのける千穂。真奥はため息をつく。

「後の不安を解決できないまま行くんだから、そこは勞わってくれよ」
だが千穂も負けない。

「私は今度こそ、本当に待ってるだけなんです」

「ん？」

「いつも通りの真奥さんだつていうことだけでも、私は嬉しいんですけど」

「ええっと……」

「ちよっとくらい、残る私を安心させてください」

千穂は少し不満そうに、口を尖らせる。

「絶対に無事に帰ってくるとか、遊佐さんや声屋さんを連れ帰ってくるとか、少しはそういう頼もしいこと言ってますはしいです」

千穂の言いたいことも分かるが、真奥はなぜか渋い顔だ。

「前に漆原に聞いたことあるんだけど、そういうのって『死亡フラグ』って言うんだろ」

「しば……もう！ 真奥さん！」

不謹慎な冗談としか思えない答えに千穂はむっすりするが、真奥も譲らない。

「大体映画とかでも、ヒロインに向かってそういう格好いいこと言う奴は死ぬか、死なないにしても予定通りに計画動められないのがお約束じゃん。実際に近しい相手に下手に決意表明とかすると気負いが生まれて余裕が無くなるから、大事なときこそ……ちーちゃん？」

真奥としては真剣に話しているつもりが、数秒前までむっすりしていた千穂が、なぜか今はにこにこ笑顔を浮かべている。

「分かりました！ そういうことなら納得します！」

コロコロと機嫌と表情が変わる千穂に真奥は首を傾げる。

もちろん千穂が「ヒロイン」という単語に機嫌を良くしたのは言うまでもない。

この場合間違はなく、冒険の主人公は真奥なのだから。

「そうだ！ 真奥さん、もうちゃんと用意しました？」

「ん？ んん？ 何をだ？ エンテ・イストラに行く準備なら概ね整ってるが」

「違いますよープレゼントです、遊佐さんの！」

「プレゼント？ 恵美の？ ……ん？ あ、ああー」

真奥は本気で記憶を探りながらやがて大きく手を打った。

「完っ全に忘れてた」

「もー……」

元はと言え、恵美がきちんと予定通りに日本に帰ってきさえすれば、恵美と千穂の合同誕生日パーティーが催されていたはずなのだ。

そしてそのことを思い出してから、真奥は今の返事が失言であったことに気づく。

「あ、で、でもちーちゃんのはちゃんとその……考えてはいたぞー」

恵美と千穂、二人の誕生日を祝うのだから、恵美のを忘れていたということは、千穂へのプレゼントだって忘れていたことになる。慌てた真奥は失言に失言を重ねてしまうが、千穂はあまり気にしていないらしく、それどころか、

「私はもう真奥さんからもらってるんで、私のことはいいんです」

と、よく分らないことを言い出す。

前にも同じことを言われた本がして首を傾げる真奥だが、とりあえず幸運なことに千穂の機嫌を損ねることはなかったようだ。

「でも言っちゃアレだが、何を用意したところで、恵美が俺からプレゼントを受け取るとは思

えねえんだが」

「大丈夫ですよ！ 受け取ってもらえないかもしれませんが、真奥さんが遊佐さんのために用意してたつてことが重要なんです。遊佐さんだって、悪い気はしないはずですよ」

受け取ってもらえないプレゼントを用意することになんの意味があるか真奥には全く理解ができなかったし、千穂は何故そこまで恵美の真奥への覚えを良くしようとするのだらうか。

「それにきつと……今の遊佐さん、きつととても辛い思いをしてると思うんです。日本に戻ってきただけで何もかもが解決するとは限りませんが、でも、帰ってきたときに、ほんのちよつとでも遊佐さんに元氣を出してもらうには、やっぱり真奥さんもプレゼントを用意するべきですよ！」

千穂は真剣な眼差しでそう言うが、真奥としてはその裏をどうしても穿つてしまう。

「それってさ、俺のそういうおせっかいに対してあいつが「魔王からのプレゼントなんて受け取るもんですか！」みたいに怒り出すところまで想定してる？」

「真奥さん！ 遊佐さんそんな……まあ、絶対ないとは、言えませんが……でもお」

千穂は真奥の冷淡な言葉にムキになって反論しようとして、その可能性がゼロでないばかりか恵美の性格を考えるとそっちの方がずっとありそうなことに思い至り口ごもる。

「はあ……まあ、要するに恵美が帰ってきたら、どんな方向性でもいいからあいつがいつも通りに口やかましく元氣になるようにしようってことだろ？」

「そ、そうですね！　そういうことです！」

千穂は少々前のめり気味にガッツポーズを作る。

「それで？　ちーちゃんは恵美の誕生日プレゼントに何を用意したんだ？　参考までに聞いておきたいんだが」

「私ですか？　私は……」

千穂が得意満面で自分のアイデアを披露しようとしたそのときだった。

「おいこら、二人共何してる。いい加減仕事にかかれ」

なかなか表に出てこない二人に業を煮やした上司が、バツクルームに戻ってきて鬼一步手前の表情を見せた。

「す、すいません木崎さん！」

「は、はいっ！」

さすがに長話をしすぎたか、真奥も千穂も、慌ててバツクルームから飛び出す。

最近では、真奥と千穂のシフトが重なる場合、二階のマッドカフェの担当になることが多い。

それもこれもマグロナルド・パリスタ資格研修の賜物なのだが、木崎に尻を叩かれて二階に上がると、

「ぶっ！」

真奥も千穂も、奥の席に陣取っている面々を見て噴き出してしまふ。

「どうした、二人共」

「あ、い、いえ、別に……」

「なんでもないです……」

なんでもないことはない。

何せ一番奥のテーブルに、鈴乃、天祐、アシエス、梨香、そして怪我の治りきっていないはずの漆原までいるのだ。

「アパートで待つてろつつたのにあいづら」

真奥は本崎に聞こえない声でぼやきながらカウンターに入り、千穂は殺菌されたダスターを手にも、空席のテーブルを拭きにかかる。

この勤務が上がったら、真奥と鈴乃は上野の西洋美術館からエンテ・イストラへと旅立つことになる。

梨香も見送りに来たいと言っていたことは知っていたが、だからと言ってまだ夕食時である。出立は深夜なのに、何時間居座る気なのだろう。

惠美とアラス・ラムスがそうであるように、やはり真奥とアシエスも、一定距離以上は離れられないという制約があった。

だが、ヴィラ・ローザ館とマドロナルド轄ヶ谷駅商店くらいの距離であれば問題ないことが判明し、仕事に集中するためにも置いてきたというのに、これでは気になって集中できない

ではないか。

「ところで、あちらのテーブルにいらつしやるのは、君の友人達か」

しかも、真奥がなんとか鈴乃達のことを意識から追い出そうとした矢先に、開口一番本崎がそんなことを言い出した。

「あ、あの」

「鎌月さんと君の同居人……漆原さんだったか。あの綺麗な髪の少女は君の親戚だな？」

「え、なんで……」

何故そうなる、と聞こうとして、はたと真奥は思い直す。

「以前ちーちゃんと鎌月さんが連れてきた、君の親戚の子と瓜二つじゃないか」

そう、かつてアラス・ラムスが魔王城にいたころ、千穂と鈴乃が、真奥の顔を見せようとアラス・ラムスを連れてきたことがあった。

同じイエソドの欠片から生まれ、姉妹であるアラス・ラムスとアシエスを何も知らない本崎が見れば、それは真奥の親戚という結論に辿り着くだろう。

赤子のアラス・ラムスが姉であり、千穂より少し若い程度のアシエスが妹であるらしいことだけは不可思議な点だが。

「ま、まあそういう感じですよ」

「なんだ、素え切らないな。あとの二人は見えない顔だが……」

天祿は初来店だし、梨香が以前店に訪れたとき、本崎は店に不在だった。

「ところでまーくん」

「はい？」

「しばらく、遠くに行ったりするの？」

「え？」

「驚くほどのことじゃないだろう。君が急に休むだけでも珍しいのに、あれだけ大きくシフトを削るんだ。ちーちゃんも何か落ち着かない様子だしな」

「……ちーちゃん関係あるんすか」

「無いと言うなら、君は心の底から愚か者だな」

ごまかすつもりはないのだが、かと言ってここまで正面切られると、真実もそれなりに決まり悪くはなる。

「ま、土産を喜ばせとは言わんから、怪我や病気に気をつけて行つてこい。君にもしものことがあつたら」

本崎はテーパーを拭き上げている千穂の背を見る。

「重要な戦力がもう一つ、使い物にならなくなりそうだからな。私の店にとって、それは重大な損失だ」

「……心しますよ」

「ねえ鈴乃ちゃん」

「何か」

「女ぶりでは私が勝ってるよね、ね！」

「……さあ」

「あの店長は、そういうところで勝負してる意識がそもそも無いと思うけど」
鈴乃を揺さぶる天柵に、漆原の容赦ない一言。

「ね、ねえ、実はあの店長さんも、凄（すご）い人だったりするの？」
そんな漆原に、梨香が尋ねる。

「は？ なんで？」

「だって魔王の真奥さんが自主的に従ってる人でしょ？ こう、なんというか、大魔王とか、神様とか、そういう人だったりするの？」

「本崎さんは私や鈴木さんと同じ、普通の日本人ですよ」

「おー。チホー！」

丁度そこに、ダスターを持った千穂が寄ってきて、小声で言う。

「え、そうなの。でもさ、魔王だって聞いちゃったり、アシエスちゃんが現れたり消えたりす

るの見てると、なんで真奥さんが普通に大人しくバイトしてるのかなって不思議でさ」

「まあ、そこは今もって私もよく分からないことではあるんだが……」

梨香の疑問に乗っかる形で鈴乃がコーヒーを啜りながら言う。

それこそ、真奥は魔力が無い魔力が無いと言いながら、常に最低限の魔力を隠している。

その力を以てすれば、不正な手段で大金を得ることも、あるいは木崎を操り時給を上げさせるのも容易なはずだ。

時給を上げさせることが、魔力を消費する対価として適正なのかどうかはともかく。

「それはもちろん、真奥さんが真面目で優しい人だから……だと思ってたんですけど……」

千穂はふと、カウンターを振り返る。

丁度真奥は、木崎の指導でコーヒーの淹れ方をレタチャーされているところだった。

真奥も千穂も、会社の定める所定の研修をクリアこそしたのだが、木崎のコーヒー作りの技量は一朝一夕の研修などではとても身に着かない次元にあった。

こうしてマッドカフェに入るようになってから、真奥は折につけて木崎に指導を仰ぎ、よりよいコーヒーを作る技術を仕事の傍ら学んでいる。

「魔士だから、とても強くて凄い力を持った王様だったからこそ、多分、自分一人で出来ることが多くないことを、人間になって気づいたんだと思います」

「ふむ？」

「こんなことを言うと、鈴乃さんや蓮佐さんには怒られちゃうかもしれないですけど、真奥さん、もしかしたらエンテ・イスラを支配したら、最終的には人間と悪魔を平等に扱うつもりだったんじゃないかなって思うんです」

以前の鈴乃なら、即座に反論して千穂を言い負かそうとしただろう。

だが鈴乃は微動だにせず、千穂の言葉を待っていた。

「なんでそう思うのさ」

代わりに尋ねたのは漆原だ。

「カミーオさんに会ったからです」

「カミーオ？」

予想外の名が出てきて、漆原は驚く。

真奥達が天祿の経営する銚子の海の家で働いていたとき、銚子の浜に現れた黒き魔鳥戦士、

悪魔大司書カミーオ。

彼は今、魔界で魔王名代としてサタンが留守中の魔界の統治に当たっており、千穂にも礼

を以て接する懐の深い悪魔であった。

「真奥さんも声屋さんも漆原さんも、悪魔のときの姿が全然違うのに、カミーオさんってそれ以上に違う姿形だったじゃないですか。それで、そのあと会ったフアーファレルロさん、リヴィタオツコさんも、また全然違う外見で……悪魔の人違って、ものすごく沢山の人の種……って

言っているのかどうか分かりませんが……種族に分かれてるんだなって、そのとき思ったんです」

千穂は、ダスターを握っていた自分の手を、じつと見る。

「真奥さんは、魔界でそういう色々な種族を平定して、王様になったんですよね。だったら人間だって、平定した後絶対に自分の支配に引き入れるつもりだったと思うんです」

「どうかなー。少なくとも僕が聞いた限り、そういう命令は無かったと思うけど」

漆原は小馬鹿にするように千穂を見上げるが、千穂の返答はさらにその上を行つた。

「ありましたよ？ あつたはずですよ」

「はあ？ なんでお前が見てきたようなこと言うんだよ」

むっとした様子の漆原が食って掛かるが、千穂は涼しい顔だ。

「じゃあきつと、漆原さんがそうと知らずに実行してたんですよ」

「そんなはずないだろ！ 声聞^{きこ}だってそうだと思ふぞ。僕らはエンテ・イスラの人間世界を支

配するために……」

「ほら、やっぱりそうじゃないですか」

「あ？」

「支配」って、つまりそこにある社会を自分の下に組み入れるってことですよわ？」

「……」

津原と鈴乃^{すずの}は、侵略した側とされた側でありながら、千穂の言わんとするところが分からず顔を見合わせてしまう。

「もちろん、エンテ・イスラが魔王軍に支配された方が良かったってわけじゃないですよ？」

でも真奥さんは、初めから人間を滅亡させる……というか、皆殺しにするつもりはなかったんだと思います。そうじゃなきゃ、いきなり人間世界の庶民^{しゆみん}に落とされた悪魔の王様が、人間をあんなに尊敬したり、人間に優しくするはずがないんじゃないかなって」

「千穂ちゃん、なかなか面白い着眼点だね」

感心したように言うのは天祿^{てんろく}だ。

「人の悲しみや怒りや恐怖の感情を魔力に変えられる悪魔が、本当に人間を取るに足らない生き物だと思っていたなら、もっと残酷に人間の世界を踏み潰すことだってできたはずですよ。でも、魔王サタンは四人の大元帥^{だいげんすい}に大陸を「支配」させようとした。だからかなって、思いました。真奥さんはきつと『王様』なんですよ。王様は、国民一人一人の力の重要性を誰よりもよく理解してないと務まらないじゃないですか」

「王様か」

鈴乃はカップの中のコーヒーの水面に映る自分の顔を見る。

「良い方見て生きてた方が楽しいだろ。特に俺は王だからな。後についてくる奴を良い方に引っ張るためにも、そうやって生きる義務がある」

テレビを買いに行つた新宿の電器屋で、真奥は鈴乃にそう言つてのけた。

そのときは鈴乃は本気にしなかつたししたくもなかつたが、千穂の分析は、悔しいが当たつていゝと思わざるを得ない。

「でも全部推測ですし、私が真奥さんのことを測ろうなんて、失礼かもしれないですけどね」

「私はチホが何言つてンダカ、さっぱり分からなイヨ―」

一人チーズケーキを食つていたアシエスは、千穂を見上げて得意げにサムズアップ。

そんな、どこまでもマイペースなアシエスに苦笑してから千穂は言う。

「人の心つて一度に色々なこと考えたり、平気で矛盾したりするじゃないですか。だからもしかしたら、あんまり深く考えることなく目先の興味があるものに飛びついてるだけかもしれないまし」

「マオウは、何も考えてないってコト？」

「……」

話についていけなかつたことはともかく、何故そんな形でピクアップするのだろう。

「ま、生まれる時代や場所を間違えた奴なんてのは枚挙にいとまがないさ。ただ今考えるのはそういう小難しいことじゃないだろ？ 準備はもうできてんの？」

混乱し出したアシエスと、不満そうな顔の諒原を放つて、天祿が総括して鈴乃に尋ねる。

「梨香殿の案内で都内のキャンブ道具専門店に向き、あらかた必要なものは揃えてもらった。

金は全て私が払うと言ったときの魔王と言ったらもう……」

「ああ、うん、あれ見て思った。真奥さんて本当に魔王なのって」

梨香もうんうんと頷く。

ドッキ・リ・ホーテで道具を揃え損ねた真奥と鈴乃は千穂の提案で都心に出たものの、千穂とてキャンブ道具などがどういう所に売っているのかよく分かっていたわけではなかった。

そこでダメ元で仕事終わりの梨香に連絡を取ってみたところ、梨香は意外なほど多くの店を知っていたのだ。

特設キャンブが好きそうでもないのにそこまで店を知っている理由を尋ねると、

「一時期雑誌とかで、目に付かない目が無い程『山ガール』特集をやっていた」とのこと、その手のキャンブ道具を売る店のことを覚えていたということだった。

そして梨香の案内で専門店に辿り着いたはいいものの、真奥が何かと必要なものの購入資金を渋ろうとするので、痺れを切らした鈴乃は万全の装備で旅に臨むべくテントや寝袋、食糧燃料、あらゆるものをポタットマネーから出すと言い出したのだ。

それを聞いた真奥はなぜか逆に焦り出し、

「お、俺はヒモになるつもりねーし！」

と、鈴乃の買おうとしたシュラフやテントの、一ランタ下の機能や値段のものを買い揃えたのだった。

キャンプ道具を買うだけで必死に強がる魔王という存在が面白いやら情けないやらで、鈴乃も髪香もついつい苦笑してしまう。

「千穂殿、今日の魔王の勤務は何時までだ？」

「私と一緒に十時までです。木崎さんが、融通利かせてくれたみたいで。あ、すいません私そろそろ」

長話をしすぎたと思つた千穂は、軽く余積をしてカウンターに戻つた。

鈴乃は空になったカップをテーブルに置くと、千穂の後ろ姿を見やる。

木崎と真奥と三人でちらりとこちらを見ながら雑談をしている。表情が明るいので、どうやら長話を叱られてゐるわけではなさそうだ。

「どしたの、ベル」

ぼんやりと真奥達の様子を眺める鈴乃に漆原が尋ねる。

「いや、まるでエンテ・イスラの趨勢が、木崎店長の胸三寸で動いているような気がするな。」

「ついおかしくなった」

「あー、そうだねえ」

漆原も何を納得したものか、大きく頷いた。

「知らぬは本人ばかりなりか。真奥やエミリアにとつても人間として目上ってことは、実質彼女こそ、世界最強と言つても過言じゃないね」

「やっぱりカ！ マオウがべこべこしてるから、キサキは強いんだと思っテタ！」

「アシエスちゃん、私も！ 私も真奥君の元雇い主なの！ 一応！」

「アマネはいいよベツニ」

「ひどっ」

木崎に妙な対抗心を抱いている天柙をすげなくして、アシエスは行儀悪く椅子の上に膝をつくと、真奥達の勤務の様子を眺めた、そのときだった。

「シ？」

マッダカフェの階段を上がってくる小柄な影に、アシエスが気づく。

「どうしたの、アシエスちゃ……」

アシエスの視線を追った馨香が尋ねる声を圧倒し、

「今宵もやって参りましたあーっ！っ！」

その声は全員の耳をつんざいた。

「ぶっ」

「うわ」

「んん？」

「あれって……」

その人物を全員が視認するよりも前にマッダカフェ中に轟く声で、鈴乃が吹き出し漆原が顔

を聳め、天祿が首を傾げ、梨香がその人物の顔を記憶から探る。

「あれハ……？」

漆原と同じくらいの小柄な男。

小柄ながら端正な顔立ち。しかし仕事中に抜け出してきたのが丸わりの制服姿。

「我が女神……おおっと、間違えました！ き・き・き店長！ 木崎店長！！ やって参りましたよ今宵もこの猿江が！！」

そう、マダロナルド幡ヶ谷駅前店のはず向かいにあるセンタツキーフライドチキン幡ヶ谷店の店長にして、かつては真奥や恵美達と敵対した大天使サリエルこと猿江三月。

その実、美人にめっぽう弱く、地球の人間である木崎真弓に入れ上げた挙句、天界も己の地位も何もかもかなぐり棄てて幡ヶ谷に定住してしまっている女たらしである。

かつては素行のおかげで木崎に出入り禁止を言い渡されていたが、紆余曲折を経て許され、現在は以前ほどのハイペースではないものの、二日に一度はやってきて売り上げに多いに貢献して帰ってゆくのだ。

カウンターにいる千穂は顔をひきつらせ、真奥はもはや諦め気味。

意外にも木崎のみが比較的好意的な営業用の笑顔を浮かべてカウンターに立つ姿が鈴乃達から見えた。

「んん？ あいつ……どこかデ……？」

一人アシエスだけが、最初の驚きから解放されずにサリエルの横顔を遠くから無遠慮にジロ眺めていた。

「……」

注文が終わり、木崎がコーヒーを作るために客席に背を向け、わずかな待ち時間の間、サリエルが何げなく鈴乃達の方に顔を向けた瞬間だった。

「かあああアアっ!!」

鈴乃も、天祥も漆原も、もちろん梨香も、誰も止めることができなかった。

サリエルの顔を正面に捉えたアシエスが、目にも留まらぬ速さで椅子から一直線にサリエルに向けて跳躍し、大天使カマエルの鎧すら砕いた腕を振りかざすではないか。

「!?」

その姿を見たサリエルが驚愕の表情を浮かべる。

アシエスの動きは、木崎や、わずかながらいた他の客がその動きにまるで気づかないほど、

一瞬で、そして、黒い殺気に満ちていた。

「アシエスっ!!」

誰も反応できない中、唯一真奥だけがほとんど音響反射の勢いで、サリエル目がけ細腕を振り下ろそうとしているアシエスに右手を向けた。

「まオ……っ!!!」

アシエスの抗議の絶叫は、聖剣の具現化解除という形で紫色の光となって消滅した。

「ん？ どうした？」

マッドカフェに走った一瞬の緊張などどこ吹く風で、用意ができたコーヒーをカウンターに出すべく振り返った木崎は、

「どうした、猿江、まーくん、ちーちゃんも」

木崎には、客とクルーがひきつった顔で店の天井部分を見上げているようにしか見えなかった。た。た。ら。う。

荒事に慣れた千鶴。それに真奥やサリエルですら一瞬では場を取りなすことができないほどに、アシエスの動きと殺気は圧倒的だったのだ。

「い、いえ……その」

最初に口を開いたのはサリエルだった。

真奥と千鶴と、それから鈴乃達のテーブルを順に見てから、

「木崎店長。申し訳ありません。先ほどの注文を全てテイクアウトにしてくださいませんか」

「構わないが……どうした、珍しいな」

普段なら席に着いてから二度は追加注文をしてくる猿江の申し出に、木崎は意外そうな顔をするが、それでも一応客の要望なので、素直に商品をテイクアウト用に切り替えた。

「いえ、片付けねばならない仕事を残していたのを思い出しまして……」

サリエルは静かにそう言ってから、一瞬だけ、鈴乃と漆原に視線を飛ばし、

「それでは、お邪魔致しました」

「……どうした、何か悪いものでも食べたか……？」

かえって本崎が不気味がるほどあっさりとして店を後にする。

もちろん真奥と千穂に何か答えられるはずもなく、本崎と同じようにサリエルを見送ることしかできない。

代わりに、

「では、そろそろ我々も帰ろうか」

殊更わざとらしい鈴乃の声が、客席から聞こえてきた。

思い思いに立ち上がった鈴乃、漆原、梨香、天梅の四人は、トレーを返却すると、

「長居をして申し訳ない」

「ごちそうさまー」

「ど、どうも」

「負けない」

と、それぞれ本崎に一言ずつ挨拶をしてから階段を降りていった。

「あ、ありがとうございま………んん？」

本崎らしくもなく、退店する客への挨拶が途中で滞る。

その理由は相手が一応顔見知りだったり、挨拶だかなんだか分からない一言が混じっていたからでもなく、

「何か……一人足りなかったような……」

「あ、さ、さっき下のお手洗いに行っただけですよっ！」

「ふむ、そうか？ 見逃していたな」

千穂のフォローに納得したのかしないのか、客のイレギュラーな動きに木崎はしばし顔を捻っていた。そして何を思い立ったか、

「あー、まーくん、ちーちゃん、ちょっと下に行ってくる」

「あ？ は、はい」

「どうしたんですか？」

「猿江が素直に帰ったのが不気味だ、ちょっと一階の防犯カメラをチェックしてくる」

「あ……はい」

この辺り、出入り禁止が解除されても基本的にサリエルは木崎から信用されていないことが丸分かりである。

木崎が、一階フロアでサリエルがナンパなど他の客に迷惑になる行為をしていないかどうかをチェックに降り、真奥と千穂はようやく緊張を解いた。

「ど、どうしたんですかアシエスちゃんいきなり……」

「はつきりは分らんけど、多分サリエルの顔を見たからだろうなあ……あーうるせっ！」

真奥の頭の中では、アシエスから猛抗議が起きているのだろう。

だが、あのまま真奥が止めていなければ、アシエスはカマエルの甲冑を粉々に砕いた力を生身のサリエルに叩きつけていただろう。

サリエル自身の安否より、それほど衝撃が店内で発せられた場合、どのような被害を周囲に及ぼしていたかを思い二人は身を震わせた。

「アシエスもアラス・ラムスも、天使に対しての敵愾心が異常だからな。ただアシエスはアラス・ラムスに比べると無駄に行動力があるから……」

「イルオーン君は結構冷静だったのに」

「まあそこらへんは、鈴乃達がサリエルから何か聞き出すことを祈ろう……だー、もううるせえっ！」

耳を塞いでもまるで静まることのない抗議の絶叫に、真奥は心底破れてしまう。

頭の中で夜泣きをされて、アラス・ラムスの魔王城への出入りを決々許可した惠美の苦悩が、今なら十二分に理解できる真奥であった。

鈴乃達が表に出ると、サリエルは手にテイクアウトの袋を下げたまま、神秘的な面持ちで待つ

ていた。

「……………」

「意外と落ちて着いてるね。もっと取り乱してるかと思っただけ」

「ふん、驚いたことは驚いたが取り乱しはしないさ」

サリエルは鼻を鳴らすと漆原を睨む。

「あれは、例の赤子か？ エミリアと融合したという……」

サリエルはアラス・ラムスのことを言っているのだろう。

「似てるからそう思うのも無理はないけど、違みたいだよ。等質の存在であることは間違いないみたいけどね」

「ふむ？ あれか、欠片だからか？」

「だからか、って言われてもね」

漆原はサリエルの言葉に首を横に振る。

「知ってるだろ。僕は、セフィロトの扱いについては何も知らない。お前達がそういうことを始めるずっと前に、僕は天界を出た」

「ああ、そうだったか……」

「ね、ねと鈴乃ちゃん、あの人、確か向かいのセンタッキーの……」

梨香は、漆原と真剣な顔で話すサリエルを見て、鈴乃を突く。

「ああ、そういえば梨香殿は顔を合わせたことがあるのだったな。その通りだ。日本ではセンタツキーフライドチキンの店長騎江三月で通っているが、エンテ・イスラの天界から来た大天使サリエル様だ」

「一体どうなってるんのよこの街は。神話の世界じゃバイトが流行ってるわけ？」

梨香も段々状況に慣れてきたのが、非常識な事実を目の前にもはや諦め顔だ。

「だが、そうか。ようやくこの前の大嵐の目に、ガブリエルが来た理由が分かった」

「(一?三)」

これには鈴乃、漆原、そして梨香も驚いた。

「ダイテンシってことは、その人もガブリエルって奴の仲間なの？」

「ん？　そういうあなたは……ああ、前にエミリアと一緒にうちの店に来た……」

「やめてー その目のことは言わないで！」

梨香とサリエルが顔を合わせたのは、数か月前のたった一度。

エンテ・イスラの事実を知ることと梨香の心に重篤なトラウマを負わせることになった日のことだ。

のことだ。

「よく分からないけど、君もあの佐々木千穂のように、こっちの事情に踏み込んできたと？」

「ふ、踏み込みたくて踏み込んだんじゃないわよ！　あ、あなたのお仲間が勝手に私を……」

「ガブリエルのことか。一体あいつは何をしたんだ？」

「御存知ないのですか？」

鈴乃の問いに、サリエルは首を横に振る。

「知らないよ。なんだか大勢引き連れて僕を連れ帰ろうとするから、ちよつとばかり抵抗したがね。おかげであの日は一日営業が成り立たなかった」

サリエルはうんざりしたように、自分の店を振り返る。

「窓を割るわテーブルを倒すわで客に迷惑をかけるから、久しぶりに僕も本気で反撃した。ガブリエルと言えども僕の次元移送結界と墮天の邪眼光の前にはタダじやすまない。ちよつと脅かしたらあつさり帰ったよ。その後お客やスタッフの記憶を一人一人操作するのにえらく手間取った」

「は、はあ……」

「サリエル……なんでそんな真実みたいなこと言うわけ？」

鈴乃と津原は、一度は真実や裏表美に敵対したサリエルが、真実のようにセンタッキーの仕事を大事にしている様子に違和感を覚えざるを得ない。

少なくとも日本に來た当初のサリエルは、センタッキーのことを世を欺く隠れ裏程度にしか思っていなかったはずだ。

「逆にルシフェル、僕から聞いてもいいか」

「何」

「お前は何故、天界を出た」

「……前にも誰かに聞かれた気がするけど、退屈だったからだよ。それだけさ」

「今なら、その気持ち少し分かる気がするんだ」

「どうということなの？」

そのとき、これまで一言も発しなかった天梅が、珍しく真剣な顔でサリエルに尋ねる。

サリエルは初対面の天梅に怪訝な顔をしたが、これまた素直に言葉が続けた。

「天界にいたころの僕はそんなことを思ってたんだけど、この町で働きはじめて、我が女神木崎真弓と出会って……初めて、自分以外の誰かのために労力を費やした。それが、思ったほど嫌なことではなかった」

「あ、これ僕とちよつと違いそぶむ……」

漆原が何か言いたそうにしているのを横から鈴乃が止める。

「誰かのために労力を費やし、感謝が返ってくる。初めての経験だったよ。ベル、お前にはシロクナなことかもしれないがな」

「いえ、そんな段階を、私はとうに越えています」

サリエルの言葉の意味することは、大法神教会の敬虔な信徒にしか分らない。

つまり、天使と名乗る者達はなんら人間の世界に寄与などせず、他方聖典と教会に捧げられた折りは、天界に微塵も届いてなどいなかった、ということだからだ。

「僕はもう『天界の安寧』が全てに優先する保身至上主義のあの世界に戻りたくはない。争いに巻き込まれるのも真つ平御免だ。今の僕の興味は、如何に木崎真弓に認められるか、彼女の人生に沿って生きられるかにしかない。最近では、ようやく以前のような笑顔を見せてくれるまでになったんだ。ここでガブリエルについていって全て御破算だ」

その木崎はサリエルの行動を訝しんで店舗一階の防犯カメラをチェックしているのだが、それは知らぬが輩というものである。

「だから僕はお前達が何をしていても、手助けするつもりも邪魔するつもりも一切ない。僕はただ、僕と木崎真弓の未来だけに突き進む」

「普通に気持ち悪いね」

天祿の程解ない一言も、自己陶醉気味のサリエルの耳には届かないようだ。

「だから僕は普段一緒にいないルシフェルとベルと一緒にいても気にしないし、エンテ・イスラのことを理解しているらしい麗しい女性二人のことも、気になるけど気にしない」

「気にはなるのかよ」

これはさすがに漆原も突っ込まざるを得なかったが、

「麗しいレディを無視するのは、それこそ有り得ないからな」

そう切り返してくるあたり、サリエルも相当だ。

「あとはさっきのイエソドの欠片の少女だが……まあ、僕らがやってきたことを考えれば、彼

女が僕を見るなりあいつた行動に出たのも理解できなくはない」

「そこ、そこだよ」

「ん？ 何がだルシフェル」

「僕はそこが分からないんだ。一体お前ら、何をしたんだ？ アラス・ラムスもあの子も、物凄くガブリエルのことを嫌ってる。もっと言えば天使全体を。僕がいなくなった後、お前らはセフィロトの樹に何をしたんだ」

漆原の問いは、アラス・ラムスやアシエス・アーラ、そしてイルオーンらの存在の根底に関わる問いだった。

人や悪魔、そして墮天使の漆原に対しなんら警戒心を抱かない彼らが、天使相手には並々ならぬ敵愾心を示している。

「僕はセフィロトの守護天使じゃないし、直接的に生命の樹に何かする立場にあつたわけでもないが……天界が樹に対してどういう目的で手を出したのかくらいなら答えられる」

サリエルは、喋り疲れたように歩道の街路樹にもたれかかると、穏やかな表情で頭上を仰いだ。

「エンテ・イストラに本物の神が生まれるのを邪魔しようとした。究極的には、それだけだ」

漆原も、鈴乃も、もちろん麁香も、サリエルの言うことをその一言では理解できない。

ただ一人天祢だけが、

「……バカなことを考えたもんだねえ」

呆れたように、だがどこか悲しむように笑った。

「あんた達がどこから来たのか知らないけど、人間が自然の猛威に立ち向かえと思ったのかい？」

「……………」

その言葉に、サリエルは不思議そうに天祢を見る。

鈴乃と漆原も、天祢の言葉に首を傾げる。

サリエルがエンテ・イスラ、引いては天界から来たことはこれまでの話からも明らかはずだが……。

「いや、思ったんだろうね。思ったからそんなことをしようとしたんだ。君のところのセフィロトは、案の深い生き物を作ったもんだね」

「あなたは……？」

「私が誰かなんで……でもいいよ。ただ、エンテ・イスラとかゆーところは苦勞するぞーこれから。今しつべ返しが始まってんだよ。何がどうなるかさすがの私も予想できねえや」

「何が始まったところで、僕はもう戻る気はない」

サリエルは重い口調でそう言う、街路樹から体を離し、身を隠す。

「サリエル様！」

去ろうとするその背に鈴乃が呼びかけるが、サリエルは面倒くさそうに手を上げるだけだ。「言っただろう。僕はお前達に雇入れする立場じゃないし、今は積極的に敵対もしない。何かを教えるつもりも助けるつもりもない。この前のあれは例外中の例外だ」

この前のあれ、とは千穂の法術修行に協力したときのことを言っているのだろうか。

本崎との仲直りに釣られた上に夏の到来を喜ぶペンギンの雛のような圓抜けな顔を晒したくせにエラそうなことを言う大天使だが、続く言葉は意外なものだった。

「……が、本崎真弓に危難が迫ったときには僕は命を投げ打つ覚悟だ。だから何をするつもりか知らんが、後で魔王に伝えておけ。何があっても我が女神本崎真弓と、本崎真弓が愛するマドロナルド・帽タ谷駅前店とそのクルー、そしてこの商店街だけは僕が守ってやるとな」

「どう、梨香ちゃん、ああいうの」

「判断に悩みますね。前に一度話したんですけど、残念な感じがぶんぶんしててもう」
自分の店に入っていたサリエルを見送りながら、天祿は梨香に軽口を叩き、梨香も手厳しく応じる。

「うん、鈴木梨香、正解」

漆原もその判断に太鼓判を押した。

「でもまあ木崎店長に本気なことは間違いないから、そこだけは信じてもいいんじゃない？」

サリエルは天使や人間相手ならほとんど無敵だし、今こっちに攻めてくる悪魔なんてマレブランケ程度だろ？ サリエルが苦戦するような相手じゃないよ」

「サリエル様の聖法気がどれほど残っているのかという不安はあるが……まあ、あれはあれで思いがけない収獲ではあったな」

サリエルはマグロナルド轄谷駅前店のクルーも守ると明言した。

ならば本晴と、そして子穂の勤務中の安全は、天祿の存在もあいまってかなり安泰になったと言つて良い。

そのことには誰よりも漆原が、万一のときも動かずに待みそう喜んでいたりする。

「で、さ。何か勢いでお店出てきちゃったけど、どうするの？」

梨香の問いに、鈴乃はマグロナルドを振り返り、

「魔王達の勤務が終わるまで待とうかとも思ったが、一度帰ってから良い時間に先に上野に向かつて準備を整えておくか……天祿殿、すまないがまた、魔王の分のスクーターを、上野まで運転してほしい」

「別にかまわないけど、なんで？」

「決まっている」

鈴乃は奇立たしげに、マグロナルドの二階を振り仰いだ。

「あのボンクラ魔王が、免許を取り損ねているからだ。もし魔王に運転させて万が一途中で検問にでも遭ったら、無免許運転のカドで検挙されてしまう。魔王のことだ、自分で運転して行けと言っても絶対に聞かないだろう。見つかったらアルバイトをクビになるだの、罰金を取られたらアルシエルに怒られるだの言っただけだ」

「ねえ、今更だけど本当に……本つつっ当に真実さんって、魔王なの？ 悪魔の王様なの？」
魔王が無免許運転で検挙されるのを恐れるのもおかしいし、それを心配しているのが聖戦者を名乗る鈴乃であるのもおかしいと思う梨香だったが。

「本当だ」

鈴乃は心底呆れたように言う。

「法を守り、人間を敬い、仕事を愛し、敵であるはずのエミリアの身を案じているあの男こそがエンテ・イストラを侵略した悪魔の王なんだ。だから私もエミリアも困っているんだ」
その一言には、梨香には計り知れない複雑な感情が渦巻いているのだった。

※

深夜一時、台東区、上野恩賜公園。

国立西洋美術館も、本来ならば敷地内に入場できない時間帯。

だが、タイルの敷き詰められた前庭に、巡回の警備員や監視カメラにビクビクしながら、キヤンブ道具を満載した屋根付きスクーターを二台、運び込む人間達の姿があった。

「だ、大丈夫か？ 誰にも見られてねえか？」

「……だからあんたは本当に魔王かつての」

もう何度目になるかもわからない梨香の突っ込みも、真奥の緊張を和らげることはできなかった。

「だって思い切り不法侵入じゃん。こんな時間なのに普通に公園の中に人いるしよ……」

「そりゃ飲み屋の多い街だし、この辺も明け方までやってる店多いしねえ」

「おい鈴乃、ちやちやつとやって、ちやちやつと行っちまおうちやちやつと！ ほら、ちーちやん達が見とがめられてもやばいし」

「真奥君、あのね」

どこまでも人目を気にする真奥に、苦言を呈したのは以外にも天幕だった。

「仮にも魔王の隠れ家だよ？ もうちょつとビシッと決めようとかそいう意地はないのか」

「意地張って捕まったら元も子もないでしょうが！ くっそー、いくらエンテ・イスラに行くつつつても、できたら免許きちんと取ってから行きたかったあ……」

「ったく、どこまでもケツの穴の小さい。いざとなりや私がどうとでもしてやつから、シヤキつとしろシヤキつと！ そんなんじや千穂ちゃんに見放されるよ？」

「え、あ、私はそれくらいじゃ……その……」

「あのさ、僕眠いんだ。怪我してから夜更かしキツくって。べル、さっさとやってー」

「……全く、どいつもこいつも」

これから一番力を使わなければいけないはずの鈴乃が誰よりも脱力しても仕方のないくらい、緊張感の無い旅立ちだった。

「すまないが皆、静かにしてほしい。ゲート術は集中を要する」

皆を静まらせると、鈴乃は前に出て「これより上、免震台。上がらないでください」と注意書きのある、門が設えられている台に躊躇なく上がる。

鈴乃には、一つの不安があった。

確かに地獄の門は、長い間地球で人々が心を寄せた偉大な物語をモチーフに作られた、大いなる歴史を内包した彫刻だ。

だがそのことがゲート術の増幅器として作用するかどうかは全く別問題であり、言ってしまうと地獄の門がゲートとなり得るというのは真実と西屋の推測に過ぎないのだ。

「……」

そそり立つ巨大な門扉は、オーギュスト・ロダンの制作したブロンズ像「地獄の門」。

同じくロダンの作である、「アダム」と「エヴァ」の像に守護されたその門は、叙事詩「神曲」第三編地獄篇に登場する地獄への入り口だ。

『神曲』における地獄の門の銘文には「この門をくぐる者、一切の希望を捨てよ」とある。

「希望を捨てよ、か」

「どうしたんですか？ 鈴乃さん」

「少し、昔を思い出した。まさかこの言葉を、魔王と共に噛みしめることになるとはな」
千穂の問いに、鈴乃は思わず笑顔を浮かべる。

「なんだかできそうな気がしてきた」

鈴乃は着物の袖口からホーリービタンβを取り出すと、一息に飲み干す。

「私達は、最初から希望なんか持つちゃいないんだ」

鈴乃はゆっくりと門に歩み寄り、頭上を見上げる。

そこには地獄の門を通る者を見下ろす男の生像があり、真っ直ぐ鈴乃の視線を受け止める。
ロダンの代表作、『考える人』は門を構成するこの生像そのものであり、彼こそが『神曲』の作者であり主人公でもあるダンテ・アリギエーリその人を表していた。

鈴乃は生像に向かい真摯に一礼すると、大きく息を吸い、門に向けて両手をかざした。

「（命と時を繋ぐ 聖なる魂 星辰の彼岸に 現世を見出せ）」

鈴乃の口から、日本語とはまるで異なる言語が漏れる。

その一音一音が紡がれると同時に、鈴乃の指先から少しずつ地獄門に向かって光の粒子が放たれはじめた。

「す、すごい……」

鈴乃の姿に、千穂は思わず声を上げた。

法術を扱う身になったからこそ分かる、鈴乃の聖法^{せいぽう}気の総量^{そうりやう}の大きさと、この術に必要な技術と聖法気量の気の遠くなるような膨大^{ぼうだい}さ。

千穂が百人いたところで、鈴乃の聖法気量の足元にも及ぶまい。

「な、なんか、本当に魔法っぽい……し、CGじゃないよね？」

武身^{ぶしん}鉄光^{てつこう}やアシエスの顯現^{げんげん}や消失を見たはずの梨香が、鈴乃の手と門を見比べながら何度も目をこするの、無理のないことだ。

光の粒子はその密度を増し、鈴乃の手だけでなく体の周りで二筋の光の帯となって廻りはじめる。

「ふうん、変なの」

鈴乃の着物をはためかせ、周囲の木々を騒めかせる音に紛れて、天祢^{あまね}の独り言は誰の耳にも届かない。

全員が鈴乃に視線を集中させていたため、天祢の足元からうつつすらと霧が浮かび、地獄門の周囲を取り囲んでいることも、勿論誰も気づかない。

そうこうしている間に、鈴乃の周囲を走る光の帯に、文字のようなものが浮かびはじめる。

「(く……うぐつ……もう、少し……)」

光の帯に文字が浮かんだ瞬間、明確に鈴乃の顔色が苦しげな色になる。

千穂は手を貸したい衝動に駆られるが、今自分が鈴乃の集中を乱したらあつという間に術式は消散してしまうだろう。

概念透受などとは比べ物にならない、巨大な術なのだ。

「ひ、開きそうだし！」

そのとき、真央が門を見て歓声を上げる。

「地獄の門」自体はあくまで彫刻なので、本当に門のように開閉するわけではない。

だが今まさに、門の境目に光が走り、そこから空間が歪みはじめるではないか。

「だ、大丈夫なの？」

しかし漆原は、その光の筋を見て不安そうな声を上げる。

歪みが、開きそうで開かない。

空間が何かにつつかえているように、開きそうになつてはまた閉じかけるのだ。

「（開けば……開けば安定する……ぐっ……）」

鈴乃は苦悶の表情のまま、ふと、顔を上げた。

門の上の男はただ静かに異界の聖職者を見下ろしている。

聖職者に、地獄の門は開けないのか？

否、クレスティア・ベルには、死神ダスサイズの名で呼ばれた女には、地獄の門こそがふき

わしい。

鈴乃はさらに大きく息を吸って、門へ向かって一歩前が出る。

「希望を、奪くな……前へと、進め！」

それは、強大な敵に反旗を翻した人間たちの叫びの声。

「切り拓く者のみが生き残るっ!!」

その声と共に、鈴乃の体を渦巻く光の帯が一気に収束し、彼女の小さな手から放たれ空間の歪みへと激突する。

「ひ、聞いた、聞いたぞー！ ゲートが、開いた!!」

鈴乃の汗だくの顔が、どれほど壮絶な術式であったかを物語っていた。

日本語を話す余裕もないほどの鈴乃は、それでもゲート術式の成功に拳を握って離たけびを上げる。

「(い、行くぞ魔王！ 今は安定しているが長くは持たん！ アシエスはきちんと融合しているな!!)」

「お、おう！」

鈴乃は慌ただしくバイクに飛び乗り、真奥もそれに倣う。

すっかりヘルメットをしてから、ブレーキを握ってエンジンをかける。

「真奥さん！ 鈴乃さん！ それからアシエスちゃん！」

ジャイロルーフに降り、今まさに異世界へと旅立とうとする大切な仲間、千穂が呼びかける。

「後のことは任せて、気をつけて行ってきたください！」

「ああ！」

「行ってくる！」

鈴乃も、真奥も、姿は見えないがアシエスも、多くの言葉は必要としていない。

どこに行こうと今の彼らの帰る場所は、日本の、笹塚の、あの六畳一間の木造アパートなのだから。

二台のエンジンが高い唸りを上げ、真奥と鈴乃の駆るバイクは、光の渦巻く空間の裂け目へと一直線に向かい、そして、

「……………き、消えた……………」

梨香の、呆然とした声。

まさしく奇術でも見ているかのように、地獄門の前に出現した空間の裂け目に触れた瞬間、真奥と鈴乃はバイクごと、音もなく忽然と姿を消したのだ。

後に残っているのは、不可思議な光の漏れ出す空間の裂け目だけ。

「……………気をつけて」

千穂はもう一度だけ呟く。

その手の中では、イエソドの矢片の撒つた指輪が淡い光を放っていた。

「これからどうするの……？」

梨香は、やはり改めて目の当たりにする異世界の神秘に当惑しているのか、おろおろとゲートと千穂の間で何度も視線を往復させる。

「私達は、ただ待ってれば大丈夫です。真奥さんと鈴乃さんは、絶対に遠佐さんとアラス・ラムスちやんと芦屋さんを助け出して帰ってきますから」

梨香とは裏腹に、千穂の言葉は確信に満ちていた。

そんな千穂の、あまりに一本芯の通った言葉に、梨香も言葉を失う。

「で、でも……」

「あ、もちろんただ待ってるだけじゃないですよ。私はとりあえず、次のバイトのシフトで、本嶋さんにお願ひしてデリバリーの先行店舗研修を申し込んできます」

「はあ？」

梨香は、たった今日の前で繰り広げられた光景と、千穂の発言の落差に間抜けな声を上げた。何故ここで、バイトの研修の話が？

「真奥さん、研修受けたかったって言っていましたから」

千穂はなんでもなしに答えた。

「私が研修を受けて、真奥さんが帰ってきたら私が学んだことを伝えるんです。そうすれば、

真奥さんが新しい仕事に入るときに負担が少なくて済みますから」

「私は今、本物の『内助の功』を見た気がしたよ」

そんな千穂の決意表明に、天祢が感心して笑った。

「いいじゃないか。それぞれ仲間のために、今の自分ができることをやる。それがチームプレイってものだ」

「わ、私は……」

ずっと年下の千穂のあまりの豪胆ぶりに慌てふためく梨香だったが、

「梨香ちゃんも千穂ちゃんと違って初心者なんだから、今は逆佐ちゃんが無事に帰ってきたときのシミュレーションをして、しっかり受け止める準備をしろ」

天祢はそんな梨香に、珍しく年長者らしくアドバイスをした。

「受け止める、準備」

「……さて、僕は帰って寝ようかな」

そしてこんなときでも、漆原は漆原である。

「あ、ね、ねえあの歪みが」

そのとき、梨香の指差す先で、鈴乃が開いたゲートの穴が徐々に縮小しはじめ、やがて完全に消滅した。

後にはただ「地獄の門」の威容が残るのみ。

門そのものにはなんの變化もなく、真奥と鈴乃の痕跡あとを示すものは、スタートダッシュ時に
 タイルについてしまったタイヤ痕あとくらいだ。

「それじゃ、帰ろうか。幸いにして誰にも見られてないみたいだしね」

殊更ことさらにに明るく言う天祢の足元から発生していた霧も文字通り霧散きりさんしており、上野恩賜公園は
 深夜にふさわしい静寂を取り戻している。

「ところでさー、佐々木千穂大丈夫なの？ こんな時間まで出歩いてて」

ふと漆原が公園の時計を見ると、時間はもう一時三十分を過ぎていた。

大人だって一人でぼっつき歩いていれば、警官に職質されかねない時間だ。

「家は大丈夫です。今日は鈴乃さんのおうちに泊まることになってますから」

「え？ 何お前帰らないの？ ベルの部屋は天祢さんが泊まってるんだろ？」

漆原は意外そうに目を見開くが、千穂は何を思ったか天祢を真っ直ぐ見ている。

「あ、漆原さんはお部屋にいてもらって大丈夫ですよ。こつちのことは気にしないでください」

「……僕がこのあと忘わすれかけっぱなしみたいに決め打ちされると、それはそれで気分悪いぞ」

明らかに気分を害した様子の漆原だが、千穂は動じない。

「そういうつもりはないんですけど、でもこればかりは真奥さんでもダメなんです。真奥さ
 んも遊佐さんも鈴乃さんもない今じゃないとダメですし、できれば漆原さんにはいつも通り、
 出かけたりせずに真奥さんの部屋で引きこ……過ごしていてほしいんです」

「なんなんだよ……あと今、引きこもつてろとか言おうとしたろ」

津原は千穂が言わんとするところが掴めず首を傾げるが、千穂はそれには構わず今度は天祢に向き直った。

「天祢さん」

「何？ 千穂ちゃん、真面目な顔で」

「アパートの大家さんが話してないことは、真奥さん達に話せないんですよね？」

頭一つ高い所から千穂の目を見下ろす天祢の顔は、少しでも面白そうな、不敵な笑みを浮かべていた。

「じゃあ、私一人になら、どうですか？」

「……何を聞きたいのか知らないけど、なんで千穂ちゃんならいいと思うの？」

それは、天祢から千穂に出された、唯一の『試験』だった。

そして千穂は、一瞬も迷うことなく正しい答えに辿り着く。

「私が、地球の人間だからです」

「……参ったね」

天祢は頭をがりがりと掻くと、眉根を寄せたが、

「内助の功どころの騒ぎじゃないね。ちよつと肝が据わってるだけの普通の人間だと思つてれ

ばこの娘は……」

その表情は、心底愉快そうだった。

「真奥君や遊佐ちゃんなんか及びもつかないくらい、本物の化け物だ」

そんな彼岸と此岸の人間達のやりとりを眺めているのは、門の上のダンテと、『地獄の門』の丁度反対側に坐している、もう一人の静かなダンテのみであった。

魔王の日常物語



恵美は、夢を見ていた。

夢の中で、恵美は慌てて目を覚ました。時計を見ると、朝の八時。完全に寝坊だ。

恵美は出勤の支度を整えるべく慌ててベッドを飛び下りるが、床に置いていた目覚まし時計を蹴飛ばしてしまい、つま先に鈍い痛みを覚えずくまってしまう。

「恵美、どうしたの？」

ふと顔を上げると、そこには恵美のデスクを覗き込む隣の席の梨香の姿。

デスクの下から出た制服姿の恵美は、照れくさそうに笑った。

「ボールペンがパーテーションと床の間に挟まっちゃって、なかなか取れなくてね」

「そっか。そういえばさ、昨日ちょっと美味しいラーメン屋さん見つけたんだ、お昼に行かない？」

「いいわよ。久しぶりだし……って、あ、ごめんね梨香。着信が……はい、もしもし」

「こんにちは遊佐さん！」

電話の着信の相手は、千穂だった。恵美は自宅のソファにラフな格好で腰掛けながら、千穂の話に聞き入る。

週に何度かこうして千穂から、仕事中の真央の様子を世間話がてら話してもらう。

彼女には恋する乙女のファイルターがかかっているが、それでも千穂のおかげで延々真央に張りつく時間は少なくなった。

千穂は千穂でそんな恵美のことを理解したうえで、友達づきあいをしてくれている。

「それで遊佐さんすみません、明日、どうしても外せない部活の用事で、真奥さんちのお夕食行けなくなっちゃって」

「そうなんだ。残念だけど、学校の用事じゃ仕方ないわね。でもお母様が許してくださるなら、遅くても後から来たら？ うん、来られそうならまた連絡しようだい。はい、はい……べル、千穂ちゃん今日来られないかもって」

電話を終えた恵美は、いつの間にかヴィタ・ローザ笹塚の二〇二号室にいて、キッチンで忙しげに立ち働く鈴乃に声をかけていた。

「そうか。残念だな。今日は千穂殿に教わったオムライスに挑戦するから、食べてみてほしかったのだが……」

鈴乃は残念そうにそう言って冷蔵庫を開けると、

「……おや」

「どうしたの？」

「注目だった……私としたことが、けちゃつぶを買い忘れていた」

「それくらいだったら、私買ってくるわよ？ ええっと確かケチャップは」

顔を上げた恵美は振り返ると、笹塚駅前のスーパーマーケット・サイフで鈴乃に頼まれたものを探して歩く。と、

「……アルシエル、ルシフェル、そんなにいっぱい抱えて何してるの」

よりにもよってスーパーで、芦屋と津原に出くわしてしまった。

「以前佐々木さんに教わった、キツシユとやらを作ってみようと思ったのだ」

「特売だからって僕まで……あーあ、めんどくさ。お前はこんなとこで何してんだよ」

「ベルに頼まれて買い出しよ。ところで今日、千穂ちゃん来られないかもしれないって」

「それは本当か？　く……これでは誰に出来上がり判定してもらえばいいのだ……！」

「佐々木千穂来ないのかー、じゃあ今日は唐揚げ無しかあ。ちゅー」

こんなところに来て千穂の影響が色濃く出ているとは思わなかったが、今日はどうやら聊尽くしの夕食会になってしまいそうだ。

千穂が来ないということにショックを受けている悪魔二人と肩を並べてスーパーを歩き回りながら恵美は、

「でもいいわ。アラス・ラムスも卵好きだし。ね、アラス・ラムス」

足元で元氣よく足を動かすアラス・ラムスに声をかける。

「ま、はやくばばにあいたいー」

「はいはい、もうすぐよ」

気づけば、ヴィラ・ローザ管轄の共用階段が目の前にあり、アラス・ラムスを抱き上げた恵美は、改装された後もなく上り降りが怖い共用階段を上がって、共用廊下のドアを開く

と、もうそこは魔王城の玄関だ。

「MAOU」とマジックで書かれた表札代わりのかまぼこ板も大分汚れてきており、いい加減新しいかまぼこ板に替えればいいのに、と心の中でおもう。

「魔王、いるんでしょ、入るわよ」

いつものように。

いつもの通りに呼び鈴を押して玄関のドアを開けようとすると、

「あれ？」

経路の中には、誰もいなかった。

それどころか家電も家具も一切が消えていて、その部屋に誰かがいた痕跡すらない。

「アルシエル、ルシフェル、魔王はどこに……アルシエル、ルシフェル？」

今の今まで傍にいたはずの、二人がいない。帰り道ではぐれたのだろうか。

恵美は慌てて隣の部屋のドアを叩く。

「ベル？　ねえベル？　魔王がいないの、どこに行ったか知ら……」

しかし鈴乃がさっきまで料理をしていたはずの二〇二号室も同じようにもぬけの空。

「な、え、どういう。ちよ、ちよっと……」

恵美は慌てて携帯電話を取り出して、千穂に電話をかける。

この時間なら学校も終わっているはずだ。なのに。

「おかけになった電話番号は、現在使われておりません、もう一度おかけ直し……」
電話がかからない。それどころか、千穂にかけているはずなのに、電話番号そのものが消えている。

梨香にかけても、鈴乃にかけても、漆原のパソコンにかけても、どこにも繋がらない。
恵美は急激に不安に駆られて、魔王城に戻って再び扉を開けようとする。
だが、開かない。

先ほどはすんなり開いたのに、押しても引いても二〇一号室のドアが開かない。

「魔王！ いるんでしょ！ ここを開けなさい！」

恵美は叫びながら、二〇一号室のドアを必死で叩く。だが、中から反応は無い。

「どういうつもり！ 観念してここを開けなさい！ ちよつと、何かあったの？ 大丈夫なの？」

恵美の不安は、否定にも増してくる。

一体何が起こったのだろう。千穂も、梨香も、鈴乃も、声風も、漆原も消えてしまった。
真央にも、何かあったのではなからうか。

「みんながいないの、何かあったか知らない？ お願いだから開けて。一体どうしたのよ！
帰ってるんでしょ？ 大変なの、話を聞いて！ 魔王！」

そのときだった。今まで手応えの無かったドアノブが急に回転し、ドアが内側に開いて恵美

は室内に転がり込む。

悦よろこんで顔を上げた恵美は、息を呑のんだ。

「っ!?」

そこは、魔王城まおうじょうだった。

エンテ・イスラ中央大陸の、悪魔の居城。

恵美の聖剣せいけんが、あと一歩のところまで魔王の心臓を逃した、あの決戦の大広間。

そこに、姿形の判然はんぜんとしない巨大な黒い影が蹲くものすっていた。

巨大な黒い影は恵美の持つ聖剣と全く同じ形の剣を携もえていて、ゆらりとこちらに向かつてくる。

恵美は、思わず聖剣を構えようとした。だが、どうしたことが、今の今まで抱きかかえていたはずのアラス・ラムスがいらない。

進化聖剣・片翼かよくも、顕現けんげんしない。

恵美は焦こる。

間違いない。この黒い影は、魔王だ。

私が殺さなければならぬ、魔王だ。

それなのに、何故なぜだろう、心の底から、安堵あんこしてしまった。

「良かった……ここにいたのね。いるなら……返事こたへしなさいよ」

黒い影の、底知れぬ殺氣に怯えながら、恵美はそれでも声を発する。

「千穂ちゃん、電話が通じないの……ベルも、私に買ひ物行かせたくせにどっかに行っちゃうし、それに、アルシエルとルシフェルも、帰り道は一緒なのにいつの間にかいないのよ……失礼だと思わない？」

黒い影は聖剣を構えたまま何も答えず、ゆつくりと恵美に近づいてくる。

「アラス・ラムスも、ちよつと目を離すとすぐいなくなっちゃって……この上あなたがいないかつたら……私本当にどうしたらいいか分からなくて、一体どこで何してたのよ」
揺らめく黒い影は恵美の正面で、恵美の顔を見下ろしている。

こんなにすぐ近くにいないが、その顔がまるで見えない。

「ねえ、今日千穂ちゃん来られないって言ってたけど……ベルも、アルシエルもなんだからものすごく気合入ってるみたいだから、皆で千穂ちゃん待たない？　わ、私は別にどっちでもいいんだけど、その方がアラス・ラムスも喜ぶと思うから……」

影が、聖剣を振りかざす。

紫色の光の軌跡を引いた聖剣の刃に、窓から差し込む赤い光が反射して、影の顔を闇に浮かび上がらせた。

「だから……」

そこに浮かび上がった真奥貞夫の顔はなぜか、優しい笑顔顔を浮かべていた。

「また……皆で、一緒にご飯を……」

「っ!!」

恵美は、自分の声で覚醒し、ベッドの上で飛び起きた。

全身汗びっしょりになりながら、何よりも先に思わず自分の胸の中央に触れる。

「……なん……なのよ」

動悸が収まらず、息が荒い。

恵美は、夢の中で真奥の顔をした影が、紫色に光る聖剣で自分の胸を刺し貫いた瞬間に目を覚ました。

恐怖も、夢特有の痛みもある、生々しい夢だった。

それなのに、それに勝るほど、安らかな夢だった。

自分と、梨香と、千穂と、鈴乃と、高屋と、漆原と、アラス・ラムスと、そして……。

騒がしくて、暑苦しくて、面倒で、それでいてまるで心を癒う必要のない、ほんの数週間前まで恵美の「日常」として確かにあった夢の時。

「……どこまでも……私は、バカで、調子よくできてるらしいわね」

恵美は自嘲気味にそう呟く。

日本にいたころは、平和なエンテ・イスラや父の夢をしょっちゅう見ていたのに、思い起こせばここ数日、見るのはいつも日本の夢だ。

「いつだって、無いものねだりばかり」

ファイガンの港に押し寄せる波の音と、裏切り者が置いていった部屋の片隅に佇む甲冑と剣心を縛られ動けない自分が、今の恵美の現実だ。

「うぶむぶ……ぶふっ」

恵美は自分の傍らで幼い寝言を発するアラス・ラムスの髪を一撫ですると、再び体を横たえる。

明日からもまた不愉快な虜囚の日々が続く。つまらない夢に惑わされて睡眠時間を削るわけにはいかない。

だがなぜか、恵美は、目覚める直前に流した涙の跡を、拭う気になれなかった。

夢の中で、魔王の影を見つけた瞬間に流れた、安堵の涙の跡を。

翌朝。

「……本当に、一体どういうつもりなの？」

恵美も今回ばかりは、憎悪よりも疑問が先に立った。

オルバに引き連れられて現れたのは、エフサハーン帝國に於いて「八巾騎士団」と呼ばれる騎士団の幹部クラスの高級将校達だった。

八巾騎士団は、皇都防備や統一番近衛を司る正者巾騎士団を筆頭に、鎮奮巾、正翠巾、鎮翠巾、正澄巾、鎮澄巾、正紅巾、鎮紅巾の八つの騎士団に分類されており、それぞれ担当する政務や地域、兵装などが違う。

騎士団所属の全ての人間が戦闘要員ではなく、中には警吏や文官などもいるのだが、その中でも今オルバと共に恵美の部屋を訪れた者達は、副團長や地方司令など、外国からの貴賓をもてなす資格を持つ者達ばかりだった。

「館は、お気に召さなかったかね？」

オルバは恵美の質問には答えず、持ち込まれたままの状態の甲冑と剣を見る。

「私には、破邪の衣があるわ。高そうな鎧を見繕ってくれたところ悪いけど、何が仕掛けられているか分からないものを身に着けるほどバカじゃない」

「ほ、そうだったか」

オルバは全く面白くもなさそうに笑い、また涙の分らないことを言い出した。

「だが、すまないがエミリア、今は君にあまり消耗してもらっては困る。君自身のためにも、この鎧を着てはもらえんかな」

「っ……」

惠美は顔が歪みそうになるほど、悔しさで歯噛みする。

つまり、拒否権は認めない、ということだ。

オルバの意図が分からない惠美だが、当然オルバは説明をする気はまるでないようだ。

惠美が要請を受諾したと判断したオルバは満足げに頷く。

「さて、では侍女達を集めて、武装をしてくれ。そのあとに私とエミリア、そして選ばれし八巾騎士団の精鋭は、ファイガンから蒼天薙に向けて東進を開始する。行くぞエミリア。聖剣は……」

オルバはふと、惠美から視線を外し、部屋の中を見回してから満足げに頷く。

「きちんと保護しているな。よしよし」

「くっ……」

アラス・ラムスの姿が見えないということとは、すなわち惠美と融合しているということだ。

逆らうことはできない。

背を向けるオルバを睨みながらも、八巾騎士達に促されて、着替えるのために部屋を移動する

惠美。

「ま……」

アラス・ラムスの不安げな声が、頭に響く。

「……大丈夫、大丈夫だから」

恵美はまるで説得力の伴わない声で、小さく呟いた。

それから十分後、煌びやかな金色の鎧と腰の剣、そして小島に抱えた兎の物騒な重みを感じながら、恵美は憔悴たる思いでファイガン軍港の基地の廊下を、オルバと、八巾騎士に囲まれて歩を進めていた。

この程度の荷重などなんら堪えないはずなのに、心の跡が同じ量だけ増えた気分だった、

「ん？」

恵美は不可思議な違和感に気づいた。

「これは……」

かすかだが、体に力が満ちるのを感じる。

もちろんエンテ・イスラに戻って数週間。もはや満タンと言って差し支えないほどに聖法気は回復しているのだが、そこにさらに上乘せられる暖かい何かが流れ込んでくるのを感じた。

「な、なんなの？」

「気がついたか？」

前を歩くオルバが、振り向かずと言う。

「聞こえないか、希望に満ちた、あの声が」

「……？」

道の先、基地の前庭から街へと出る門がある。オルバはそこに向かっていているようだ。

「この先は、市街よね」

「そうだ」

「声が、聞こえる……」

大勢の人間が騒めく声が聞こえる。

恵美は、おどましい予感がして顔を皺めた。

前庭に出ると、武装した多くの八巾の騎兵と、物資を積んだ馬車が待ち構えていた。

その中に、顔立ちも造形も一際美しい白い馬が鞍上の主を待ち構えているのを発見する。

「エミリア、あれが君の馬だ。乗り方は忘れておらんか？」

よく飼いなされた上等な駿馬であることは一目で分かった。

少なくとも凡百の兵ではなく將軍クラスが乗る馬だし、そもそもかつての魔王討伐の旅の間

でも、これほど上等な馬に乗ったことはない。

「エミリア、兜は抱えたまま、顔を表に出しておくんだ」

そう言うとき、オルバも恵美のものほどではないにしろ上等な栗毛の尾の馬に跨りながら、八

巾騎士達と二、三言言葉を交わし、そして、

「では行くか」

そう言うときにやりと顔を歪める。

「勇者エミリアの、二度目の蒼天蓋奪還作戦だ」

「だ、奪還って……えっ!?」

オルバの言葉の意味を聞いたですより早く、基地の正門が開かれた。

開門合図と共に、外から聞き間違いないような歓声が湧き上がる。

「な、なんなの、これは!?」

門の外の街を貫く大通りは、希望に満ちた瞳でこちらを見る民衆で埋め尽くされていた。

先頭の騎兵の合図で進軍が開始されると、歡呼の声は否が応にも盛り上がる。

「おお、あれが聖剣の勇者か!」

「生きていたという話は本当だったのだな!」

「間違いない! 以前ファイガンを訪れた彼女を見たことがある!」

恵美は動悸を抑えきれなかった。

ファイガンの民達は、自分が勇者エミリアであることを知っている。

知っていて、何かの希望を、自分に託そうとしている。

「天はやはり我々を見捨ててはいなかった!」

「勇者が再び東大陸を、エフサハーンを救うために立ち上がったぞ!」

このとき、恵美はおかしなことに気づいた。

以前エメラダから聞いた話では、エフサハーンは自覚的に手を組んだか意に反し征服されたかは分からないが、とにかくバーバーリッティアの一党に支配され、進化聖剣・片翼を

々に他の四大陸に宣戦布告をしたのではなかったか。

バーバリッティア一党の規模がどれほどのものかは分からないが、銃子^{銃子}に來たチリアットが率いていた兵数を見れば、最低でもあれに十数倍するほどの規模を持っていなければ軍として成立しないだろう。

ファイガンはエフサハーンの中でも大きな軍港であり、他国の公使館や商館なども多くある重要な街だ。

それなのに、この街に來てからというものの、惠美^{ユミ}は一匹のマレブランケの姿も目にしていなければ、魔力も感知してはいない。

「オルバ……聞いていいかしら」

「なんだね」

「エフサハーンは、経過はどうあれ、バーバリッティア……マレブランケと手を組んだんじゃないの？ それで、世界中に宣戦布告したんでしょ？」

「……」

「あなたが手引きしてそうさせたんでしょ？ なら、この行動はマレブランケ達も……バーバリッティアも承知しているの？ 一体なんの意味があるの？」

惠美の問いに、大法神教会最高位の聖職者、元六人の大神官^{大神官}オルバ・メイヤーは、慈父^{慈父}の如き表情で振り返った。

「エミリア」

その声色は、

「歴史は、繰り返すのだよ」

この希望と聖法氣に満ちたファイガンの港街の中で、一際黒い響きを纏っていた。

「あれは良い言葉だったな。『希望を捨てるな、前へと進め、切り拓く者だけが生き残る』。見る、この希望に頼るしか能の無い、ファイガンの民達を、まるで」

オルバは空を見上げる。

薄い水色の空には、昼の赤い月がうつすらと浮かんでいた。

「あの日のマレブランケ達……魔王サタンや悪魔大元帥達の仇を討てると、信じて疑わなかったあの愚かなマレブランケ頭領格達のようにだ」

「……っ！」

「聞こえるだろうエミリア。彼らの歎呼の声が。自分達の希望を君に託し、自分達で動くことなく救われようとする哀れな民達だ」

「オルバ……あなたは……っ」

恵美は、心胆から湧き上がる怒りと悲しみと憎しみが、内なるアラス・ラムスを侵食するのではないかと思うほど、声に呪いを込める。

「こうして民の前に顔を晒しその希望を一身に背負った今、君に取るべき道は一つ。勇者エミ

リア、お前は「魔王軍に再び支配され、操られているエフサハーンを救うための旗印」だ。安心したまえ、人道に背くようなことは一切ない。君と私はこれから」

その言葉が意味することの絶望感と空虚さは、あの日、故郷の村で聞いた声と同じ、闇の言葉だった。

「エフサハーンを救ひ導く悪い悪魔を、狩りに行くのだよ」

※

「おい鈴乃」

真奥は信じられないものを見る目で、鈴乃に言う。

「なんだ」

「お前、今の自分の姿に疑問は無いのか」

「だから何がだ」

「……いや、いい。だが頼むからその格好で俺の視界を動き回らないでくれ」

「失礼な奴め。何が気に入らん」

「気に入るとかいらないとか……いや、もういい」

真奥は草地に座り込んで深くため息をついた。

エンテ・イスラ東大陸、エフサハーンにおける最初の野営である。

鈴乃と真奥、そしてアシエスは、無事にダートを通過してエンテ・イスラ東大陸、エフサハーンへとやってきていた。

到着した場所は、二つの月と太陽、そして地形から考えると皇都・蒼天蓋ソウテンガイから見て北にある森林地帯。大陸中央部から皇都・蒼天蓋を通過して北の海へと流れ込む大河沿いであった。

河沿いに出られたことは至極幸運だった。まず飲料水の心配がいらなくなるのと、道に迷う可能性が低くなる。また河沿いには人里が多いので、いざ情報を集める必要に迫られても不自由しないだろう。

鈴乃曰く、やはりもともと法術マジックの増幅器として作られたわけではない「地獄の門」を増幅器として開いたダートの到達地点は精密には指定できなかったようで、人がいない場所に出たのは「完全に運」だったそうだ。

地球との時差が、はたまたエンテ・イスラ内での時差が、地球を深夜に出立したところ、東大陸は夕刻だった。

鈴乃は星が出るのを待ち、天の極星と二つの月の位置から自分達の位置を計測。

ダートを開いた場所から十キロほど南下した場所に、最初のキャンプを張ることになった。なったのだが……。

「なあ、やっぱその格好するのはまだ早いだろう」

一度は引き下がった真奥だったが、ドーム型のツリーリングテントをベグで地面に固定している鈴乃を見て、苦言を呈する。

「別に私の勝手だろう」

だが鈴乃は取り合わない。

「安全なうちに、この格好での行動に慣れておく必要がある。今はその練習だ」

「……にしたってよお」

「ねー、見て見てマオウ！」

「んー？　なんだアシエぶふっ！」

群衆する真奥は、ふと傍らのアシエスに声をかけられ、顔を向けた途端に盛大に吹き出してしまった。

「スズノとおそろい！」

「だから、だからさあ」

真奥は頭を抱える。

鈴乃とアシエスは、なんと寝袋に入っただけで行動しているのだ。

「マミー型」と呼ばれる寝袋で、全身を頭の上ですっぽり覆って保温できる優れた寝袋なのだが、この寝袋のもう一つの特徴は、体側部と底部にあるファスナーを開くと、寝袋にくるまれないながら、手と足だけを外に出すことができるのだ。



手の部分が開くのは例えば、夜のテントで本を読んだりランプを操作したりするためのもので、足が出るのは例えば大型の野生動物などの接近を感知した場合にすぐ逃げるために便利な機構らしい。

元々日本で売られているキャンプ用品だから、それらの用途一つ一つは理解できるのだが、何も別にテントを設営する段階からそれを積極的に使う必要はないではないか。

傍目には手足が生えた板彫色の巨大ミノムシが二体、うごめいているようにしか見えず、甚だ不気味である。

鈴乃もアシエスも、それなりに美しい顔立ちをしているだけに、その容姿にそぐわないにも程がある格好だ。

とくに自分の分のテントを設営し終わった真典マキノにしてみれば、鈴乃とアシエスがテントの設営に手間取っているのも、どう考えても巨大ミノムシのまま動いているからだとは思えなかった。

「お前ら……要は使ってみただけだろ」

「ウン！」

「な、何を言う！ け、決してそんなことは！」

真典の冷静な突っ込みに、素直なアシエスと、思い切り動揺どうぶくしている鈴乃。

「お前な……」

「ち、違う！　そ、そうだ、その、私はこの後、着替えるつもりなんだ！　だ、だがまたそろ貴様に覗かれてはたまらんからこの寝袋の中で……あつ！」

言い訳にしても無茶苦茶な鈴乃は寝袋から短く出ている腕をばたばたさせて言い募るが、興奮のあまり地面に甘く刺さっていたベグを監視はして外してしまい、

「あー、崩れタ」

「し、しまった……ま、魔王！　貴様のせいだぞ!!」

他のベグも刺し込みが甘かったか、一本外れた反動でテント全体が傾いてしまう。

「もういい、俺がやつといてやるから、着替えてくるなら今のうちにどっか見えないところで着替えてこい」

「……っ!!」

鈴乃の手からベグを奪い取った真奥は、しっしと手を払って巨大ミノムシを一匹追い払う。

鈴乃は肩辱に顔を歪ませていたが、やがて衣類が入っているらしい風呂敷を抱えて、すこすこと河野の木立の方へと歩いていく。

「あ、おい、虫よけ忘れんなよ！」

「うるさいっ！　分かっている！」

完全に癡癡としか言いようがないが、とにかく鈴乃は肩辱を怒らせながら（寝袋の背が丸いのでよくは分からないが）、真奥から見えない場所に隠れる。

「おいアシエス、そっちのベダ、刺し直してくれ」

「はいホーイ」

もう一体の極彩色ミノムシはちょこちょこと不気味な動きをしながら真奥の右側に移動した。

「そういえばアシエス」

「ン？」

アシエスはベダを危なっかしい手つきで新たに土に刺しながら答えた。

「お前とノルドって、いつから地球……日本にいたんだ？」

「いつから……うーん、ケツコウ前だと思うヨ」

「結構？ 半年前くらいか？」

日本で恵美や漆原と再会し、真奥の身の回りが騒がしくなりはじめたのが丁度そのくらいの時期だ。

「ハントシって、イチネンの半分だっけ？」

だがアシエスの答えは、真奥にとって意外なものだった。

「私、まだ生まれてイチネン経たないから、それより前のことは分からないんだよネ」

「マジか？」

驚く真奥をよそに、ミノムシのままアシエスはベダにテントのラインを結びつける。

「うん。生まれたときにはもう、オートーサンと一緒に日本で暮らしてたカラ、それより前のこ

とはよくワカラン」

これは、真実にとって予想外の事実だった。

アシエスは、本人の弁を信じるならアラス・ラムスの妹だ。

にも関わらずこれはど身体的な成長度合いに違いがあるからには、アシエスはアラス・ラムスよりもずっと早い時期から人間型を獲得したものだとはかり思っていた。

アシエスと言う「生まれた」とは、やはりアラス・ラムスのように果実なりイエソドの欠片（かけら）なりの姿から今の姿を獲得した、ということだろう。

アラス・ラムスが「生まれ」てからまだ三ヶ月も経たないが、それでもアラス・ラムスとアシエスは、人間型を獲得した時期が一年も違わないのに、これはど成長度合いが違うことになる。

「そもそも、なんで先に人間型になってるアシエスが『妹』なんだ。どういう規格だ」

「シ？」

「いや……これはアラス・ラムスを取り戻してからだな。……てことはつまり、ノルドは思ったより早いうちに日本に来てたことになるな」

「多分ネー」

アシエスが日本語しか話せないのも、恐らくはそういうことなのだろう。

「はあ、面倒くせよなあ」

「何がサ」

「ん」

真奥は話している間に、うまい具合に固定できたテントを見ながら頷く。

「この騒動が終わったなら、盛大な家族会議を開かなきゃならなそうだからだ」

「カゾクカイギ？」

「ま、そのときになったらな。てか鈴乃の叔達いな。重とかに襲われてんじや……」

「熊如きにやられるか！」

「うおっ！」

唐突に背後から声がして、真奥は驚いて飛び上る。

「な、なんだよー 戻ってるなら戻ってるって……」

抗議しながら振り返ったが、

「背後がガラ空きな貴様が悪い。時々思うが貴様は私の力を妙に過小評価して……なんだ」

不機嫌そうな顔の鈴乃を見て、真奥は言葉を失う。

それに気づいた鈴乃の声にまたぞろ険しいものがこもった。

「なんだ、まだ何か私の格好に文句があるのか」

「い、いや、そういうわけじゃねえか……」

真奥は慌てて首を横に振る。

「お前、そういう格好するんだ」

「何？」

真典が驚くのも、ある意味無理はなかった。

さっきまで極彩色ミノムシだった鈴乃が「着替える」と言っただけ戻ってきた姿は、いつもの和服姿ではなかった。

革の靴に、くるぶしまである大法神教会聖職者特有の法衣、そして使い込まれた麁藍色のフード付きの外装。

外套を肩に固定する金具に、法術の増幅器らしい宝石の嵌った飾りがあしらわれている。

法衣を纏った鈴乃は、六畳一間のアバートの口やかましいお隣さんではなく、大法神教会司教書議公華園審問官クレスティア・ベルの名に相応しい威厳と神秘を備えていた。

「外交・宣教部の法衣だ。大法神教会の修道士や宣教師はエフサハーンにも大勢派遣されているし、私の過去の職階がら、そう多くの者と顔を合わせてもいない。道中人里に立ち寄る際にはこの法衣があれば怪しまれることも……だからなんだその目は」

言うことは至極最もらしいが、それで手に抱えているのが聖典か何かなら良いものを、先ほどまでかぶっていたマミー寝袋を抱えていては全く格好がつかない。

「ああ、あれか、脱皮か」

「マオウ、ダッピって何？」

「魔王……貴様人を蛇か海老蟹のように……」

「ち、違う違う！　なんでそう物々しい生き物をイメージすんだよ！　女なんだからこう、蝶とか色々あんだろが！」

険悪な表情で首を傾げた鈴乃だが、

「……蝶？」

例えの意味を咀嚼しはじめて、表情が驚きに染まった。

「ち、蝶だとう？　ま、魔王貴様何を言いだ……」

「ねーマオウ、ダッピって何？」

慌てはじめる鈴乃だったが、鈴乃が真奥の真意を聞いたですよりも早く、相も変わらずミノムシ姿のアシエスが鈴乃を遮って真奥に質問をする。

「ああアシエス、脱皮って言うのは、まあ蛇や海老や蟹なら今まで着ていた皮を脱ぎ捨てて、体を大きくすることだ。あとは蝶とか蟬とかは、幼虫から蛹になって、蛹から大人になるために皮を脱いで全く違う形に成長するんだ。そういうのも脱皮って言うな」

「……もう脱皮でもなんでもいい」

真奥のこととん生物学的な解説に、なぜか鈴乃はちよっただけ傷ついたような顔になって、抱えた寝袋を丸めはじめたが、

「ほー、チョウチョかあ。ならスズノはキレイな脱皮だねー」

「ん？ んし、まあそうなるか？」

「スズノー！ マオウがキレイだってヨー！」

「そうかそうか。全くフザけた魔王だ」

アシエスは上機嫌で鈴乃に駆け寄るが、鈴乃は遠視したように無表情である。

「待て待て、フザけてるとは何事だ。俺はいつだって真面目だぞ」

一方の真裏は心外そうな顔だ。

「最初のころから恵美やちーちゃんも言ってたろ。和服が悪いとは言わねえけど、洋服も着てみろよ。その法衣も結構似合ってたぞ？」

「な……何を」

唐突に真剣に語り出す真裏に、鈴乃は虚を衝かれて目を見開く。

「ん？ いや、普段和服姿しか見えねえから、ちよつと新鮮で驚いただけだよ。でも実際、絶対に洋服の方がラクだし安いし、似合ってると思うがなあ」

「そ、そぞ、そう、なのか……？」

「シ？ どしたのスズノ」

一瞬鈴乃の表情が怪しくなり、訝しむアシエス・ミノムシ。

「しよ、正直なところ、私はその……ずつと空戦にあつて、この重く丈の長い法衣に馴染んでいたから、エミリアや千穂殿の着るような身丈や裾の短い衣類は、じ、若干抵抗が……わ、

和服が一般的ではないと分かってからも愛用しているのは、法衣と似た重さと丈と裾で落ち着くということもあって、その」

「ああ？」

折角畳んだ寝袋をまた広げたり畳んだりを繰り返しはじめた鈴乃に真央は首を傾げる。

「に」

「に？」

「スズノ、何か顔赤ぶこっ」

鈴乃は横から覗き込むアシエスの口を無意識に顎を片手で掴んで塞ぐと、法衣の裾を心許なげにつまみながら、細い声を絞り出す。

「に……あう……と、思うのか」

「そ、そんなに思いつめてたのか？」

真央にしてみれば、鈴乃がこんな態度を見せるほどに洋服に抵抗があつたとは思ひもせず、汗涔々なことを言つたかと冷や汗を流してしまふ。

「そうじゃない！ たた、そ、そんなことを誰かに、言われたのがはじ……初めて、で……」

鈴乃の目が、普段毅然とした彼女らしくもなく泳ぐ。

「割と皆、最初から洋服を着せようとしてたと思うんだが……まあ、似合うと思うぞ」

「ま……魔王貴様、一体どうした、突然何を言い出す、そ、そんな……わ、私をおだてても何

も出ないぞ……？」

「すぶばかおぼつかだぼぼぼいだいだい!!」

顔を撫なまれっぱなしのアシエスは、顎あごを締めつける鈴乃の腕力がどんどん強くなって苦しい声を上げるが、当の鈴乃は完全に無意識である。

「いやでも、本当に本当だ。それに声風こえふうが言ってたけど、洗濯んときも普段着なら、洗濯機にそのまま突っ込んで回しても大丈夫とか言ってたし」

「……ん？」

「それに、俺はユニシロよく買うけど、商店街にも安売りの衣料品店とかあるし、気に入ったら同じ柄やサイズのもの沢山たくさん買えるしな」

「……んん？」

「ぶぶばばばびぶもぶも」

「俺は和服は着たことないけど、俺達みたいな暮らししてたらコストパフォーマンスは絶対に洋服の方が上だぜ、本当に」

「……」

「あと前に聞いたんだけど、着物ってなんか季節とかシチュエーションで着ていい柄と良くない柄とかあるんだろ？ その点洋服は生地さえ選べばそんな面倒もない。本当ラタだから一度着てみるって」

「……ああ、そうだな、そうだったな」

「ん？ どうした？」

「……いや、なんでもない。愚かにも一瞬、心に妙な魔が差したただけだ。私はちよつとこれから瞑想でもして、心の邪念を取り払おうと思う」

「ふはっ」

どこか灰色な表情をした鈴乃はアシエスをようやく解放する。

「お、おう？ な、何か俺悪いこと言ったか？」

「言ったな。人心を惑わし、墮落させようとするまきしく、悪魔の囁きだった」と、力なく言つて、テントに入つていこうとする。

「あ、そ、その、一応、似合うかもつてのも、本当だかな？」

理由は分からないが、明らかに鈴乃の機嫌を損ねたことを察した真奥は、力の無いその背に取つてつけたように言葉を投げかける。

が、

「……」

まるでその言葉が楔くさびだったかののように、鈴乃の動きが止まった。そして、

「も、もう惑わされん!!」

一瞬だけ紅潮した顔を振り返らせてそう真奥をののしると、物凄い勢いで真奥が張つた自分

のテントの中に隠れてしまった。

ちなみに今回の道程に於いて、テントは男女別にすることが決められている。

「うーん、何かマズいこと言っちゃったかあ？」

何やらテントの中で鈴乃がごそごそ動き回って荒れ狂っているらしい気配を感じ、真奥は頭を抱える。

「あう……いだがっダ……」

一方、涙目のアシエスは真ッ赤になった自分の両頬を手でさすりながら、

「スズノー！ 何すんだヨー！」

恐れを知らぬとはこのことか、烈風渦巻くテントの中に、極彩色ミノムシのままもぐもぐと入ってゆくではないか。

「……お、俺も寝る準備だけしておくか」

最初は夕食後に、どういう順番で夜の見張り番に立つかを話し合う予定だったのだが、これではとても冷静な話し合いは不可能だろう。

「なんか……前途多難だなあ」

真奥はため息をつきながら、エンテ・イスラの夜空を彩る星々を見上げたのだった。

源

「思ったよりガソリン食ったな……査天臺まで待つか？」

エフサハーン彷彿三日目の昼、食事のために立ち寄った村の食堂で、真央は向かいに座る鈴乃に言う。

「今朝の迂回が効いたな。まさか正組巾の移動巡察に出くわすとは思わなかった。スピードも出したし、悪路も通った」

二人のスクーターの燃料メーターは、「E」マークまであと一メモリのところを指していた。予備のガソリンは持参しているが、アスファルトで舗装されている訳ではないエフサハーンの道路事情を考えれば、決して余裕のある量とは言えない。

食糧や水の補給についてはこの村で補充すればあとはどうとでもなる日程だが、当然エンテ・イスラにはガソリンスタンドなど無いわけで、燃料だけは如何ともし難い。

「ここからは道を選ばねばな」

鈴乃は、声屋が残していたエフサハーンの手書き地図をテーブルに広げる。

「だが、当初の予想よりもずっと早いスケジュールで査天臺に近づいている。今日のうちに……この村回りまで通り着きたい。査天臺も近くなれば八巾騎士団とかち合う可能性も高くな

るだろうが、極力近場までスターターで移動したい」

「そうだな」

意見が纏まり、予備も含め、ガソリンが完全に無くなるまでは走り続けることに決まる。

「しかし、俺が言うのもあれだが、随分平和で復興も進んでるよな。もうちょっと荒れてるのかと思っただが」

「確かに貴様が言うことではないが、実は私も気になっていた。魔王、一つ聞くが、マレブランケとは魔界ではどの程度の勢力なのだ」

「マレブランケの勢力？ 数って意味なら、結構多いとしか言えねえな。俺の魔王軍が四つの大陸を攻めたときも、北も東も西も色々な種族の混成軍だったが、南のマラコダの軍だけは八割マレブランケで構成されてたはずだ。まあ、そのなんだ、ほとんど東夷と人間に滅ぼされたんだろうが……」

「ふむ、つまり、カミィオの下に残った者の数はそう多くはないと？」

「日本ほど厳密に戸籍管理してたわけじゃねえから正確な数は分からないが」

真奥の言葉に鈴乃は何を納得したものか、しきりに頷いている。

「実は私も、貴様と同じ感想を抱いた。平和で、復興が進んでるとな。だがそれは、貴様が率いた魔王軍の爪痕が残っていないという意味ではない。エフサハーンの中核にマレブランケが入り込み、世界中に宣戦布告をしている例には、戦時下の空気を悪魔の気配が感じられな

い。地図上だけ見れば我々はもう、エフサハーンの皇都國に入っているにも関わらずだ」

「……そういやそうだな。チリアットやファーフレルロやリヴィクオッコが偉そうなこと言ってたこと考えりや、もうちょつとあちこちで悪魔が幅利かせててもいい気はするな」

鈴乃の感じた違和感を真奥も理解する。

「気に食わん。天使達……特にガブリエルの姿が見えた今となつては、全てが気に食わん」

「……そうだな」

そもそも、声屋とノルドがガブリエルに誘拐などされていなければ、真美の行方不明もエント・イスラの政情不安の一環の域を出なかつただろう。

その政情不安も、オルバに唆されたバーバリッティア達第二次魔王軍が東大陸のエフサハーンを傀儡に世界中に宣戦を布告したということであり、魔王サタンに代わる人間世界の侵略者が現れた、という以上の意味は持たなかつたはずだ。

だが、この事態に複数の天使達の影がちらつき、天使と悪魔がエフサハーンの兵を用いて声屋とノルドをさらった、となると、今回の一連の事態には、今日に見えている状態とはまるで別の側面があると勘繰らざるを得ない。

「何が真実なのかを見極めるためにも、この地の民の様子をもう少し探らねば」

「人通りや活気は無い気もするが、やっぱ侵略に晒されてるようには見えねえな」

真奥と鈴乃は、窓から見える村の大通りを眺める。

村外れの藪にスターターを隠して立ち寄った村は、戸屋の地区によれば、ホンファという農村だった。

そう大きな村とも見えないが、人口はそこそこ多いようで、村の警備を銀紅巾騎士団が請け負っているらしく、白く縁取られた紅色の手巾をした兵もちらはらと見かける。

「マオウ、おかわりしてイイ？ これおいシイ」

「……お前は平和だなあ」

真奥と鈴乃が真剣な話し合いをしている間、ずっと無言で食事を進めていたアシエスは、気がつけばバスタットに盛られていた結構な量のパンを全て食べ尽くし、野菜と鶏肉をふんだんに使ったシチューや、郷土料理だという川魚のダラタンバイの皿をもう店員に向かって差し出している。

東大陸は水が豊富で、その質も日本のものに似ているせいか、日本の食べ物に馴染んだ真奥達も舌鼓を打つほどの食文化が形成されていた。

「鈴乃、いいか？」

だが、真奥の独断でおかわりの許可は出せない。

今の真奥とアシエスはエンテ・イスラにおける経済活動全般に於いて鈴乃に頼りきりだからだ。

魔王を恐怖に陥れる「借金」や「利子」などのワードは出てきたことはないが、あまり鈴乃

の金ばかりを使わせていると後が恐ろしい。

何より今まで自分の稼ぎで配下二人の生活を支えてきた真奥にとつては、まるでヒモにでもなったかのような惨めさがある。

「構わんぞ。なんならそのバイをもう一つどうだ？ 私も先ほどのうどんに似た麵料理をもう少し食べたいと思つていたところだ。（店主殿！）」

だが鈴乃は思ひのほかあつさりとアシエスにおかわりの許可を出すと、自分から店の主を呼び寄せた。

「（先ほどの川魚のグラタンバイをもう一つと、この娘にシチューのおかわりをいただけるかな。あとはこの米粉團子のスープと、店自慢の名酒などあれば、見せていただきたい）」

鈴乃は、他大膽からはイアホアン語と呼ばれるエフサハーンの公用語で注文をする。

「（羽振りがいいのはありがたいが、大法神教会の司祭さんに出せるほど上等な酒は無いよ）」店の主は恰幅の良い女将で、笑顔を浮かべながら注文を受ける。

「お、おい鈴乃、お前もしかして今、酒頼まなかったか？ 飲酒運転は犯罪だぞ!!」

かつての征服者であるが故にイアホアン語をある程度解する真奥は、鈴乃の注文内容を含めるが、

「いいから黙っている。別に酒を飲みたいわけではない」

鈴乃も、真奥のこの突っ込みは想定していたようで、相手にせず軽くあしらう。

「パイが焼き上がるまで少し時間があるから、その間に飲むかい？　うちにはこんなのしかないけどね」

そう言いながら女将が持ってきてくれたのは、果実酒のボトル二本。

鈴乃はそのラベルを見ながら、何を思ったものか軽く頷く。

「流通も、特に滞ってはいないのだな」

「(え?)」

「(私が西大陸の者だと分かってこの酒を出してくれたのだろうか？　どちらも、西大陸で作られている果実酒だ)」

鈴乃は戸惑う女将を見上げると、本題を切り出す。

「(一つ伺いたい。皇都の蒼天蓋が、また悪魔に支配されたという噂は本当なのか?)」

女将の顔に、複雑な表情がよぎる。

「(嘘か本当かと聞かれれば、まあ、本当だね)」

そしてあっさりと、鈴乃の質問を肯定した。

だが不思議なことに、その声には恐怖というよりも疑念の方が色濃く反映されている。

「(でも……それで何か変わったかかって言われれば、特別変わったことは無いんだよね。悪魔大元帥アルシエルの再来とか一時は確かに大騒ぎになったけど)」

女将はそこまで言ってから、店内に他の客がいないことを確認して鈴乃に顔を寄せる。

「（西の人にだから話せるけどさ、私ら平民にとっちゃ、悪魔大元帥アルシエルだろうが統一蒼帝だろうが、大して変わりやしないしね）」

「（ほう）」

「なんかムズカシイ話？ 私はやくバイ食ベタイ」

「もうすぐ来るから、お前はちよつと黙（もく）ってろ」

おかわりが待ちきれないらしいアシエスを、真奥（まおく）は押さえる。

「（アルシエルの支配は確かに恐ろしかったし大勢の騎士団が死んだけど、そうなるずっと前からエフサハーンは東部の内乱が絶えない国だし、何年かおきに必ず統一蒼帝や蒼天蓋（ソル・タング）の威信を高めるための大公共工事とか言（い）って、あちこちで民（たみ）が徴発（ていぱつ）されてはしょっちゅう事故とかで大勢死んでたからねえ）」

「（……そのようなことが）」

「（もちろん話（わ）が通（と）じる分、支配者は人間の方がずっとマシだし、恐ろしい悪魔達には早くいなくなつてほしいけど……勇者エミリアがアルシエルを追（お）い払（は）った後、気づいたんだ。支配者が悪魔だろうと統一蒼帝だろうと、結局私達（わたし）は搾取（さくしゆ）される存在なんだなって……やだね、こめんね、暗い話（わ）になつちやつて）」

「（いや、こちらこそすまない。辛い話を……）」

「（うん、でもそうだねえ。折角（せつかく）司祭（しやせ）様が相手（あいて）なんだから、正直な話をさせてもらうわよ。新

しい悪魔の軍隊が蒼天蓋に入った後、変わったことって言ったなら一つつきやない。エフサハーン全土で八巾騎士団が増強されて、いきなり他の大陸に戦争吹っつけたことだね」

「ねーマオウーシチューとバイ……」

「……後で俺の分もやるから黙ってる」

「（八巾騎士団が増強された？）」

「（ああ。変な話だろ？ アルシエルはまず最初に八巾騎士団の力を削いだのにね。これは本当に嘘だけど、もしかしたら統一蒼帝は征服欲にかられて、戦争のために悪魔と自主的に手を結んだんじゃないかとまで言われてるんだ。アルシエルは人間を弱らせるために色々やったけど、今度の悪魔達が来てからは、前にもまして流通や生産や武力増強が盛んなんだ。誰だって疑いたくなるよ）」

女将の話聞きながら、鈴乃は難しい顔で戸屋の庭園に目を落す。

「（なるほどな……いや、貴重な話をありがとう。最後に、一つだけいいだろうか）」

「（なんだい？）」

鈴乃は真剣な目で、女将に問う。

「（蒼天蓋に、天使が現れたという話は聞いたことはないか？）」

すると女将は、目を丸くして首を傾げた。

「（天使？ 天使って、大法輪教会の聖典に書いてあるっていう天使かい？）」

そして困ったように笑う。

「（そりゃあ悪魔がいるんだから、もしかしたらこの世のどこかに天使もいるのかもしれないけど、そんな話は聞いたことないねえ）」

「（……そ、そうか）」

鈴乃と真奥は、困ったように目を見合わせた。

悪魔の存在は認知していても、天使の暗躍はやはり民には知れ渡っていないのか。

「（さて、そろそろお嬢さんも我慢できなくなってきたみたいだし、パイが焼き上がる頃合いだから私は行くけど、他に何か聞きたいことはあるかい？）」

「（ああ、いや、ありがとう。参考になった）」

「（それは良かった。……ああ、あと……）」

女将は急に決まり懸そうに口ごもるが、鈴乃は真剣な顔で頷いた。

「（大丈夫だ。私の名譽に賭けて、店主殿から聞いた話は決して誰かに漏らしたりはしない）」

「（そうしてくれると助かるよ）」

はっとした表情を浮かべながらも、女将は不安そうに真奥の方に目をやる。その視線の意味を察したか、鈴乃が付け足した。

「（大丈夫だ。この者は私の従者だが、大法輪教會の敬虔な信徒で、告解の秘密の重さはよく理解している）」

「……おい」

真奥も女将の手前突っ込むことはしないが、それでも話を理解していることだけは、しっかり三白眼で主張してやったのだった。

「誰が従者だ誰が、ええ？」

ホンファア村から更に十数キロ程走った森の中の沢の近くで、真奥は昼のことを抗議する。

「なんだ、まだ根に持っているのか」

だが鈴乃は涼しい顔だ。

「そう言っておいた方が話が簡単なことくらい分からない貴様でもあるまい。大体今回の遠征費用はほぼ私が出しているんだ。それくらい言わせろ」

「ぐ」

それを言われてしまうと真奥としても言葉が無い。

悔しそうに黙る真奥を見て、鈴乃は微笑む。

「だが冗談ではなく、アルシエルの地図が正しければ、これから蒼天臺を目指すならもう人里を避けて通ることは不可能だろうな。もし検問が厳しくなった場合、貴様とアシエスは金で雇われた宣教師祭の従者、という形にするのが一番簡単だ」

「……コイツがそういう芝居を打てるかどうかが問題だな。いざとなりや俺ん中に格納しとくか。アシエスを物扱いするようで良い気はしないが」

真奥は、あれからさらに川魚のグラタンパイを大量にテイクアウトして夕食にし、お腹一杯で幸せそうにミノムシになって篝火の傍らで眠っているアシエスを見て苦笑する。

「まあ実際のところは、明日半日ほど走ったら考えよう」

鈴乃は芦屋の地図を眺めながら言う。

「できるだけ蒼天蓋に近い所までスクーターで移動したいが、最悪どこかでスクーターを乗り捨ててる必要が出るかもな」

「ええ!? 俺嫌だぞ!」

鈴乃の言葉に、真奥は抗議の声を上げて立ち上がった。

「そうは言っても仕方あるまい。皇都に近づけば我々の存在が露見する確率は高くなる。目立つ行動は避けねば……」

「ようやく『機動デュラハン参戦』の乗り心地が分かってきたんだ! ここで捨てるなんて俺にはできねえ!」

「……なんだそのキドウなんたらとは」

もちろん今までの真奥の性格から言って、スクーターにいつの間にかつけていた名前であることは間違いない。

「愛着が湧いたのは結構だが、事はエミリア達の命に関わるかもしれないのだ。持ち主権限で、スターターの処置は私が決める！」

「ううう……」

鈴乃は毅然としてそう言うのと、ふと気づいて真奥に尋ねた。

「ところで、前から気になっていたのだが、何故貴様は乗り物に『デュラハン』と名付けるんだ？」

「あ？」

「『デュラハン』とは、地球の神話が何かに出てくる悪魔だろうか？ 確か首無し馬が引く首無しの騎士が乗ったチャリオットの悪魔だとか」

「おお、よく知ってるな」

「エンテ・イスラ各地に侵攻した悪魔の中に、そういう存在がいたという話を聞いたことがなかったのだな。私が知らないだけかもしれないが……」

「ああ、確かに魔界には、地球で言うところの『デュラハン』みたいな悪魔はいねえよ。大体自分の首抱えて走り回ってるとか、生き物としておかしいだろそんなの」

「それこそ貴様が言うことでは……まあいい、それで、何故デュラハンなのだ」

「いや、深い意味はねえんだけどさ」

真奥は肩を嫌める。

「マドロナルドに通り着くまで、俺も片屋も結構な数のバイト、クビになつてんだ」

「ほう？」

鈴乃は意外そうに目を見開く。

鈴乃が日本に来た時点では真奥も片屋も、そして恵美や漆原も完全にネイティブの日本人と遜色のない生活を送っていたから、初めから生活は順調なものとはかき思っていた。

「まあ、バイト先がツブレたりとかもあつたから全面的に俺らが悪いんじゃないこともあつたが、俺と片屋が仕事と家事・調査で役割分担する前は、バツと思ひ出せるだけで二回、クビになつたことがある」

苦しい思ひ出を吐露するように語る真奥だが、魔王サタンの苦しい思ひ出が職場を解雇されたことだということ自体、エンテ・イスラの人間として聞くに堪えない事実ではある。

「そんなことがあつた後にマドロナルドに勤めはじめて、新人として入ってきたちーちゃんに自転車を買く売つてる場所教わつて、そんなとき自転車含めて色々大きな買い物して貯金がヤバくなつてさ。いや、あんときは片屋がめっちゃくちゃ怒つてな」

そのころのことは鈴乃は知る由もないのに、なぜか容易に光景が想像できた。

「それで、調子に乗って買い物して、貯金無いのにまたぞろクビになつたら最悪だろ？」

「まあそれは確かに……って、まさか！」

鈴乃は最低最悪な推測が頭をよぎって息を呑む。

「だからもう二度とクビにならないように、運動自転車に懸掛けをしたんだよ。ほら、デュラハンで、『首無し』の悪魔」だろ。だから『首』と『クビ』で『クビが無い悪魔』ってことで」照れくさそうに薄ら笑いを浮かべる真奥の顔を見ていられなくなってしまう、鈴乃は額に手を当てる。

「……最悪だ」

「なんだよ！ お前が聞いたんだろ！！ おい、何笑ってたよ」

鈴乃は頭を抱えつつも、なんだかおかしくなってきたてしまい、喉の奥で小さく笑い出す。

「くつくく……それならまだ、魔王気分が抜けきらなくて、気分だけでもデュラハンと名付けているとか言われた方がまだマシだった、ははは」

「そんなの単なる痛い奴じやねえか！」

「ああおかしい。このことは後でしつかりエミリアと千穂殿にも教えてやらねば」

「おいやめろバカー！ ちーちゃんとはともかく恵美には一生バカにされそうだからやめろ！」

「是非見てみたいな、その光景。日用品で縁起を担ぐ魔王を一生バカにする勇者か」

「言ってるこんちくしょー!!」

真奥は顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまう。

だから、鈴乃が小さく付け加えた言葉を聞き逃した。

「できれば……ずっと傍で見たいな。その光景を」

「ああ!? なんだよ!?」

「いや、なんでもない。気を悪くするな。ただ、あまりにも人間くさくて、おかしくなつてしまつてな」

「うっせようっせえ! バカにしやがつてよ!」

完全に膝を曲げてしまつた真奥は体ごと焚火に背を向けて、腹立ちまぎれに焚火をいじつていた枝を遠くの竈に放り投げる。

鈴乃はその背を、なぜか慈しむように見ながら、ふと、竈屋が残していった手書きの地図の束を手にとつた。

「なあ、魔王」

「あんだよ!」

「……お前達は、何故、エンテ・イスラに来たんだ?」

「んあ?」

焚火の影になつて見えない真奥の顔が、少し歪んだのが、鈴乃にははっきり分かつた。

「今回のことではないぞ。日本に流れ着く前。お前とアルシエルとルシフェルが、五つの大陸を支配しようとしたときのことだ」

「今更なんだよ。それは前から言つてゐるだろ。エンテ・イスラを支配しに……」

「だから聞いているだろう。何故、支配したかつた。お前達は人間世界を滅ぼしに来たのでは

なかったのか？」

鈴乃は、出立前に千穂が話していたことを思い出しながら続ける。

「支配と滅ぼすことは全く違う。実際にアルシエルなど、こうしてわざわざ人間の社会を丸暗記するほどに、見事にエフサハーンを支配していた。これは、どういうことだ？」

「……」

「お前は私に言ったことがあったな。千穂殿の身の安全を考えるなら、何故記憶を消さないのかと。そっくり返してやろう。何故、お前は千穂殿を傍に置いておく？」

「その言い方だと、なんだか俺がちーちゃんを困ってる悪い男みてえじゃねえか」

「千穂殿の勇氣にいつまでも応えず、千穂殿が寛容なのを良いことに返事を保留して生殺しにしているお前は、十分悪い男だな」

「ぐ……な、生殺しって……そりゃ、でも」

かつて千穂が真奥に自分の胸の内を告白したとき、その現場を鈴乃に見られていたことを思い出して、真奥は苦悶のうめきを漏らした。

「私は、最近お前のことが分からないんだ。真奥貞夫ではなく、魔王サタンのことがな」

鈴乃は焚火の炎を眺めながら、小さく呟く。

「最初のころは、日本に生きる『真奥貞夫』の生き様が、魔王サタンが世を忍ぶ仮の姿と信じて疑わなかった。お前は内心では人間を見下し、隙あらば出し抜き裏切り、傷つけようとして

いるのだと、ずっと疑っていた」

「ひでと言われようだな。まあ、悪魔にとっては腹黒いってのは褒め言葉だが」

「だが、実際はどうだ。順法精神旺盛、公明正大、上司や同僚、地域住民とも良好な関係を築き、かつて支配しようとしていた人間に、敬慕すら抱いている。しかもそれは、何もお前に限ったことではない。アルシエルや、ルシフェルですらそうだった」

「漆原が地域住民と触れ合うことなんかあったか？」

「佐助急便の宅配員達と、かなり懇意になっているようだが」

「漆原の叔……」

真奥や芦屋が外出している間に勝手にネット通販で買い物をしたときのことだろう。真奥は思わず肩から力が抜けてしまう。

「だが一方でお前達は、いつか人間を、エンテ、イストラを支配すると公言して憚らないところもあった。それでいて、お前達にしてみれば障害にしかならないはずのエミリアを極端に敵視することもなく、私の正体が露見してからも大して警戒するでもない。それこそ」

鈴乃は大儀そうに立ち上がると、未だ背を見せたままの真奥を見下ろし言った。

「千穂殿や、エミリアや、私がお前達の傍にいて、何かいいことがあるか？」

「家計が助かる。あと、食卓がいろんな意味で豪華になる。いいことづくめだ」

「何故も強大な魔王の姿を取り戻しておきながら、何故帰還もせず、エミリアや私を排除しよ

うともせず、日本で不正を働きもせず『真奥貞夫』であり続ける？」

「……」

「今回の帰還はお前にとってまたとないチャンスではないのか？ 今のお前は大天使を上回る強大な力を手に入れ、アルシエルも、悪魔の手勢も手の届く所にいる。日本や地球のことなど忘れ、グートを開いた私を救して魔界に帰ることだってできるはずだ。人間世界の情勢も、かつてのような一枚岩ではないし、エミリアも弱地にあつて、まさしく世界征服の好機に見えるが」

「……そうしてほしいのかよ」

「エンテ・イスラの人間が思い描く魔王サタンなら、そうした方が自然だ」

鈴乃はあつきり言い切った。

「だがお前は、こうして私と共にいる。エミリアの身と心案じ、梨香殿の心を鎮め、千穂殿に日本への帰還を約束し、天祢殿に、日本の守護を頼んでな」

「恵美の身をもって……別にそんな大層なことは」

真奥は、出立前にアパートの部屋で口走った一言を、未だに自覚できていないらしい。

「こうしてみると、エンテ・イスラを支配したがっているはずのお前の行動には、まるで一貫性が無いように思える。だが私は今回のことである仮説に思い至った。その仮説に従えば、お前の一貫性の無いように見える行動も、すつきり筋が通る」

「……やめとけよ。流行りのドラマじゃ、仮説の段階で何か言うのは得策じゃないんだぞ」
真奥は茶化して「まかそうとするが、鈴乃はそんなことで引き下がらなかった。」

「魔王サタン」

「やめろよ」

静かな声が、真奥の耳を打つ。

「お前は、何も変わってなどいないのだろうか？」

「やめろって……」

「千穂殿の慧眼が時折恐ろしい。いや、何も知らなかった千穂殿だからこそ、迫り着けた結論なのかもしれないな。魔王、お前は」

「あー聞きたくないー きーきーたーくーないー あーあーあー」

真奥は耳を塞ぎながら声を上げるが、鈴乃の涼とした声は、そんな障害を軽く突き破った。

「悪魔に生まれついたのがおかしいほどに、真面目で優しい男だったんだ」

焚火がはぜる音が、まるで合いの手のように夜の森に響いた。

「……お前、言ってて恥ずかしくならぬの？」

「千穂殿の受け売りだからな。千穂殿は、お前が異世界の魔王だと分かってからも、ずっとそのことを疑っていないようだったぞ。恋は盲目とはよく言ったものだが、千穂殿の場合はますます慧眼が冴えわたっていたということかな」

鈴乃はなんでもない顔で言つてのけ、真奥はまたぞろ言葉に詰まる。

「そして同じように千穂殿だけが見抜き、エミリアや私を含めエンテ・イスラの誰も見抜けなかったことこそ」

鈴乃の脳裏に、新宿の電器屋での言い争いが蘇る。

真奥はそのとき、はつきりと言つた。

「お前が、魔界の『民』を率いる『王』であつたということだ」

「……ああそりや俺は『魔王』さ、それがどうしたつてんだよ」

真奥は相変わらず不貞腐れたように鈴乃に背を向けている。

「大体今何か関係あるのかよ昔のこととか。今は俺もお前と一緒に恵美や宮屋を助けて全員で日本に帰ろうとしてる、それじゃダメなのかよ」

「ダメだな」

「なんでだよ！」

「シンブルに、私が不安だ。いつ裏首を振られるかもしれんし、蒼天蓋に着いた途端にアルシ

エルと共に私を裏切つて、新しく魔王軍の活動を始める可能性も無いとは言えない」

「お、お前なあ、さっきからお前の方こそ、言つてることに一貫性無いじゃないか」

「長い事、人を疑うことを仕事にしてきたからな」

「聖戦者が人疑つてどうすんだよ」

背を向けたまま扇帳あふだを寄せる真奥に、鈴乃すずのは柔らかに微笑ほほえみんだ。そして、

「確かに。元異端審問官とはいえ、腐っても聖職者だからな、私は。……よっと」

「うわっ！」

背中を襲った小さな衝撃に、真奥は驚いて振り向いた。

そこには頭一つ低い場所に、焚火たきびに照らされた鈴乃の頭があつて、真奥と背中含わせに座っているのが見て取れた。

「な、な、なんだよいきなり！」

唐突に最接近エリアに踏み込んできた鈴乃に戸惑いを隠せない真奥だが、

「聖職者は、告解で得た秘密を決して漏らしたりはしない」

鈴乃の方は落ち着いたもので、接する背中越しに静かに語りかけてくる。

「こうすれば、私の顔を見なくても済むだろう。良ければ教えてくれ、悪魔の王よ。お前は何故、民を率いてエンテ・イスラに攻め込んだのだ」

「なんなんだよ、もう……」

真奥は両手で顔を覆うと、深くため息をつき、

「言つとくが今まで特に誰にも言わなかったのは、大層な秘密があるわけでもなんでもねえんだからな。取り立てて誰にも聞かれなかったから、話さなかっただけなんだから」

小声で断りを入れた。



「お前（人）らにしてみりや本気でつまらない、どこにでも転がってるような話だし、全部聞いて納得できねえとか言われたって、知ったこっちゃねえからな。告解（きうかい）だなんて大仰（たいやう）なことしてるつもりもねえんだからな」

「分かった、心しよう」

鈴乃（すずの）の体温を背中に感じながら、

「はあ………ったく、なんなんだよこの状況は………」

真奥（まおく）はまた小さくため息を夜の森に逃がした。

「何から話したもんかな」

そして、まるで昨日の出来事を振り返るような自然な口調で、真奥は口を開いた。

「お前にこの話をしたかどうか覚えてねえが、俺が生まれたころの魔界は、とにかくクソみてえな暴力だけが全ての世界だった。力の強い悪魔が弱い悪魔を好き放題襲（おそ）り殺して、自分の生を満足させる、そんな世界だった。俺はそんな世界を愛えなくて、軍を上げた。で、カミーオやアルシエルのおかげでとんとん拍子に征服は進んで、かつてない文明的な国家が俺主導で誕生した。そこまではいいか」

「ああ」

「おかげで、弱い悪魔が理不尽な暴力で死ぬことはほとんど無くなった。魔術も体系化されて、どんどん効率的に、強力になっていった。それでも、そうなるまで俺も、カミーオも、アルシ

エルも気がつかなかったことがあったんだ」

鈴乃の背に伝わる真奥の呼吸が、少し早くなる。

「お前も知つての通り、悪魔は恐怖や絶望の感情があれば、魔力を得られる。自分が生きていくのに必要なエネルギーが得られる。だが、俺の統一事業で魔界に『治安』と『平和』が生まれ、代わりに『恐怖』や『絶望』が少しずつ消えていった。その結果、魔界の魔力総量が物凄く勢いで減りはじめた。だが統一事業のおかげで人口はどんどん増えていく。分かるだろ、これまでどういう理由で魔界に魔力が満ちていたか。その原因を取っ払っちゃったんだ。それまで蓄積されていた魔力がとんでもない勢いで減りはじめた。このままじゃ向こう五百年も持たないんじゃないかって試算が出たときには本気で頭掻きえた」

「……それで、エンテ・イスラに侵攻したのか。本当に、驚くほど普通の理由だな」

真奥から鈴乃の表情は見えない。だが、真面目に聞いているのは声で分かるので、真奥はそのまま続ける。

「資源の枯渇を取巻く植民地化で解決するべく他国に侵攻。戦争の動機としては笑っちゃうほど普通だろ？　だが俺に笑う余裕はなかった。俺を信じてついてきた民を、折角同族からの暴力で死ぬ危険が減ったはずの魔界の民を、俺の計算ミスで飢えさせるわけにはいかなかった。だから、俺達はここに来た」

「エンテ・イスラを『支配』するために、か」

鈴乃は敢えて、支配、という言葉を強調する。

「私達は、お前達が異形の存在であることと、圧倒的な力を持っているということだけで、お前達が人間全てを滅ぼそうとしているのだとばかり思っていたが、そんなつもりは無かったと言うのだな」

「そういえば、人間達は俺を許せるのか？」

「さあな。だが、今の私は告解を聞く聖職者だ。お前の言葉に疑いを挟むことはしない」
少しだけ、鈴乃が微笑む気配が伝わってきた。

「滅ぼせば、また同じことが起こる。人間の寿命は俺達に比べてずっと短いつて聞いてたしな。滅亡なんかさせちまった日には、また何も無い所に益々人口の増えた悪魔達が放り出されるだけだ。だから俺は、人間達をそれなりの恐怖でもって支配すればいいと思った。だから四天王には、逆らう者には容赦しない代わりに、人間達の降伏を受け入れろと厳命した。まあ、対略に個人差は出たみたいだがな」

「なるほどな。それで、各国の王侯が今も無事に生きているのか」

東西南北の大陸で、悪魔大元帥達が振るった暴威に大きな差があることは、日本に来る前から鈴乃もある程度は把握していたことだった。

人間世界の犠牲者は魔王城が出現した中央大陸を除けば、南大陸と西大陸の被害が大きく、北大陸と東大陸が少ないという明確な統計が既に出ている。

「後は、お前も知っての通りだ。惠美の叔が順繰りに各大陸を解放してって、最終的に敵軍の将の俺は逃げて、日本に流れ着いた。な、びっくりするほどつまらない話だろ？」

何かとつまらないつまらないと予防線を張る真奥がおかしくて、鈴乃は気づかれないように小さく微笑んだ。

「別に、つまらなくもないさ。お前が人間達の『王』とさして変わらんということが分かっただけでも私にとっては収穫だし、それに、まだ分からないこともある」

「あ？」

真奥は振り向くと、鈴乃も真奥を振り向いていたように、微かに目が合う。

「エンテ・イスラに降り立ってからのお前自身は、一体何をしていたのだ？」

「……俺自身？」

真奥はきょとんとして尋ね返す。

まるで、予想だにしなかった間이었다からだ。

予想もしなかった、つまり、今まで真奥の周りの誰一人として、それについて疑念を抱くことがなかったということだ。

「ああ、そうだ。中央大陸の事実上の首都、イスラ・ケントゥルムを滅ぼしてから、次に『魔王サタン』の名を聞くのはエミリアとの最終決戦までお預けだ。東西南北の大陸を攻めたのは亜魔大元帥達の侵略軍だろう？ 侵略を『魔王軍』に任せて、『魔王』本人は例をしていたの

かと思つてな」

鈴乃の瞳の中で、焚火の光が揺れて反射する。

真奥は、つい長いこと目を合わせていたことに気づき、慌てて視線を外した。

「ちよつとでも笑つたら、もう話さねえからな」

「意外と小心者だな。そんなに自分のしてきたことに自信が無いのか」

「そりゃ思いつきり大失敗した話をしてるのに、自信があるわけないだろ」

真奥はぶつきらぼうにそう言い捨ててから、

「人間」を、研究してた」

蚊の鳴くような声で、そう言った。

「悪魔はどじやないにしろ、人種も、言葉も、外見も、何もかも違う者同士が、争いの果てに社会を作つて、お互いを助けて生きようとしている生き物が、不思議だったんだ」

「……」

「傷ついて道に倒れている者を踏みにじるのが俺達魔界の悪魔だ。それを癒したり助けようとする奴が現れるのが、人間だ。この差は、どっから出てくるんだと思つてな」

「人間もそのような聖人君子ばかりではないぞ」

「だからって、皆が皆、悪魔みてえなクズじゃねえだろ」

真奥は小さく息を吐いて、空を見上げる。

「色々いじましいことやったもんさ。魔王城の俺の部屋を、人間の支配者風に改造してみたりとか。人間世界を支配する絶対的な王の部屋だ。いづれ世界中の王侯を招いて恭順を誓わせようとか、下らないこともぼんやり考えたもんさ」

「ほう、少し、見てみたい気もするな」

「知り合いに自室公開とか勧弁しろ。他にも人間の言葉、人間の社会、そんなのを、ぶっ潰した街から色々資料吸い上げて、研究したりもした。もちろんうまい具合にお前らを支配するにはどうしたらいいか調べたっていう理由もあった」

「その研究は、実を結んだのか？」

「結ばなかったから日本でバイトするハメに陥ってんだろ」

真奥は肩を絞める。

「でも、本当に、案ずるより産むが易しだな。エンテ・イスラ征服を決意してから忠実に負けて日本に流れ着くまで、どんだけ考えても分からなかった俺達と人間の違いを、日本に流れ着いて、たった三日で理解したんだ」

「それは？」

「本当に、ごくごく簡単なことだ。今じや当たり前すぎて笑っちゃうくらいな」

真奥はそう言うのと、傍らで幸せそうな顔をして眠るアシエスを見る。

「飯を食うか否か、ただそれだけだ」

その答えに、鈴乃は顔を上げて真奥を振り向く。

「食事ということか？」

「ああ」

真奥は心の底から頷いた。

日本に流れ着いて、三日三晩の眠りの後に『脱水症状』と『栄養失調』のために救急車で運ばれた病院の天井を、真奥はきつと一生忘れられない。

「魔達悪魔は、何もしくなくても、一人で生きるのに必要な魔力が手に入った。殺した相手を道楽で食う奴もいたが、それは本当に道楽であって何か食わなきゃ生きられないって理由じゃ全くなかった。でも、人間はそうじゃない。どんな金持ちだろうと、人間は絶対に一人では生きられない」

真奥は力強くそう言うのと、今度は意識して鈴乃を振り返る。

「精神論的な話じゃねえからな。金持ちらは金を食って生きてるわけじゃないってことだ。金を食う物に換えて、その食う物を食ってるんだ。金があれば見知らぬ誰かが作った美味いもんが、体にいいもんが、自分の好きなもんが食えるから、食いたいから働いて金を稼ぐんだ。そうやって、人間の社会は形成されてた。悪魔の魔達とは社会の成り立ちからして既に違ってたんだ……俺は、そんな簡単なことすら、分からなかった」

「……魔王？」

「分からなかったから……俺は、俺を信じてついてきた大勢の民を……死なせてしまった。浅はかに、人間を力と魔力だけで支配しようとして」

鈴乃の背に沿う真奥の背が震えている。

「おい、まさか」

鈴乃は思わず振り返ろうとするが、真奥はそれを体でやんわりと押し返す。

「泣いちゃいねえよ。泣きたいのはこんなバカな奴についてきちゃまった魔王軍の連中や、こんなバカに殺されたり、ひでえ目に遭わされた恵美みてえな人間達だ。俺は、間違えた。王なのに、間違えたんだ」

丸まった真奥の背中はとても小さかった。

あのとき、笠幡北高校の戦いで、鈴乃と、千穂と漆原を助けるために颯爽と現れ、天使も悪魔も圧倒的な力でねじ伏せてみせた王の威厳は、そこには微塵もなかった。

「……それでもお前は、動かなければならなかったのだろうか？ お前は、王だったから」
その背に鈴乃が小さく呟くと、真奥の背が震える。

「人間の世界と、己の国民の命を天秤にかけざるを得なかったのだろうか？ ……魔王」

鈴乃は顔を上げて、顔の見えない背後の魔王サタンに問う。

「お前の心を苦しめる、お前の罪は、なんだ」

「俺の罪は……」

「人間を殺し、エンチ・イスラを侵略したことか？」

「違う」

真奥は、明確にそのことを否定する。

それでも鈴乃は言葉を荒げることなく、静かに尋ね続けた。

「では、なんだ？」

「民の信頼を裏切り、死に追いやったこと……王として、道を誤ったこと……」

「それを悔いるなら、お前の為すべきことは、なんだ？」

「……」

真奥は、鈴乃の言葉の一つ一つを胸の底に落とし込みながら、言った。

「それでも、何があっても、王でなくなる瞬間まで、王として生き続けること」

「その通りだ」

鈴乃は微笑むと、真奥の背から離れてゆっくりと立ち上がり、罪を告白した男の顔を見ないまま、満天の星空を見上げた。

「お前自身が言ったことだ。王は、後に続く者を良い方向に導くために常に良いと思う方向を見極めて生きると。新たな王が己を退けるまでは後に続く者達を牽引し続けると。お前は悪魔も人間も支配する、王になるのだろうか？」

「……そういえばこれ、告解なんだっけか」

真奥は笑っているような、泣いているような、崩れそうな顔で答える。

「お前んとこの神様は、悪魔なんぞの罪を、救すくしてくれるのか？」

「まあ、普通に考えれば救すくされんだろうな、悪魔の王の罪なんぞ」

「つておい、ここまで言つておいてそれはねえだろう」

あつさり言つてのける鈴乃に真奥は思い切り突つ込むが、鈴乃は穏やかな笑顔で首を横に振る。

「だが、私は赦すよ」

「鈴乃？」

真奥は思わず振り向いた。

そこには法衣の聖職者の背があり、ゆっくりと振り返るその顔は、今まで見たことのない優しい笑顔だった。

「悪魔の王サタン。お前の『王の孤独』と『王の罪』を、確かに聞いた。汝の言葉を全て真実と定め、我が名、クレスティア・ペルの名に於いて汝の罪を赦す。例え神や、この世の誰が赦さなかったとしても。……よく、話してくれた」

真奥は呆然と鈴乃の顔を見るが、やがてハッと我に返つて顔を曇くもめる。

「なんだなんだどうした？ 昼のバイに悪いもんでも入つてたのか？」

「そうかもしれんな、私も自分が血迷っているのは自覚している」

焚火の明かりに照らされた鈴乃の顔は、かすかに紅潮しているようにも見えた。

「単純なことだよ。私はお前に、既に何度も教われている。お前にそのつもりがなかったとしてもな。それに報いるべきだと思つたのと、あと、私は恐らく……」

「な、なんだよ」

「……いや、やめておこう」

鈴乃は小さく首を振ると、緊張を解いたように真奥の前から離れてまた焚火の反対側に腰掛
け、苦笑する。

「これ以上言えばそれこそ世迷い事以外の何物でもない。告解をした者を感わせては本末転倒
だし、明るみに出れば千穂殿の逆鱗に触れる」

「な、なんでちーちゃんが出てくるんだよ？」

「……千穂殿の気苦労が思いやられるな」

焚火に照らされた鈴乃の顔は、呆れた声を出しながらも、微笑んだままだ。

「最近の私は千穂殿の信奉者でな。まあ、そういうことにしておいてくれ。私には……千穂殿
ほどの確信も、勇気も無い」

「はあ……」

真奥は完全に煙に巻かれたが、それ以上突っ込むこともできずに押し黙る。

「……魔王」

「……今度はなんだよ？」

なぜかそのときの鈴乃の顔が、少しだけ悲し気だったのは真奥の気のせいだろうか。

「お前がどう思っているように、私は今、お前の話を聖職者の矜持に賭けて受け止めた。だから誰にも話すつもりはない。が……いつか、気が向いたらいい。エミリアに、今の話を」

「断る」

「してやって……え？」

「恵美にだけは、絶対に話すつもりはない」

真奥のあまりに果断な口調に、鈴乃は目を瞬かせる。

「だってそんなの、フェアじゃねえだろ」

口調と同じく厳しい顔で、真奥は首を横に振った。

「フェアじゃ、ない？」

「ここ何ヶ月かの付き合いで分かったけど、あいつ勇者勇者騒いでるくせに実はメンタルの強さ豆腐並みだろ。折角最近持ち直してきてたのに、またうじごみ出されたら鬱陶しくて仕方ねえ」

早口にそう言くと、真奥は吐き捨てるように下を向く。

「恵美にとって俺は、人生を滅茶苦茶にした侵略者達の王だ。それでいいんだよ」

「だが、それは」

「例えあいつの親父が生きてたって、俺のしたことがあいつの人生の一部を奪ったことには変わりない。だが俺はあいつを含めた大勢の人間の人生と自分の国と民の命を天秤にかけ、自分の国と民を取った」

真奥は囁んで含めるように、言葉をゆっくりと紡ぐ。

「俺はあいつにした仕打ちをなんとも思っちゃいないし、許されたいとも思わないし、許してもらう筋合もない。あいつだって俺がそんなこと言い出したら立場ねえだろ。ただでさえ今回、俺達に面倒かけてんのに」

「……魔王、お前は」

「今回は青屋やアラス・ラムスやアシエス、それにノルドのこともあるし、東美を大元帥指名したのは俺だからな。その責任は負う義務があるから助けてやるだけだ。勇者だ魔王だってのは、それ以前の全く違う話なんだよ。だから」

と、真奥は鈴乃を軽く睨む。

「首尾よく東美を助け出しても、余計なこととは言うなよ。聖戦者のお前が告解だって言うから話したんだ。東美の奴はただでさえ今頃責任感じてへによへによしてんだろうから、その上俺の身の上話で悩まれてみる。うざったくて仕方ねえ。あいつは……」

真奥はやおら立ち上がると、鈴乃に背を向けて自分のテントへ向かう。

「俺の顔見るなり嫌味のひとつも残はしてくるくらいで丁度いい。そうじゃねえと調子狂う」

「魔王……」

「……あ、おい、今のも告解の一部に含めるからな。絶対に誰にも言うなよ!!」

中腰のまま振り返って鈴乃に指を突きつけそう言った真奥は、返事も聞かずにそそくさとテントの中に入っていった。しまった。

「……」

鈴乃は、先ほどまで真奥の体温を感じていた己の身を思わず抱きしめた。

「どこまでも優しく……そして残酷な男だな、お前は」

自嘲気味の笑みを浮かべると、鈴乃は夜の空に浮かぶ蒼と紅の二つの月を見上げ、小さく呟いた。

「エミリア……お前は『この先』を、どう生きてゆく？」

「うぶう……生ハムメロン……ぶむっ」

世界を一変させた大きな戦いの真実の一端に触れたただ一人の人間、タレスティア・ベルは、その真実が示す先に何があるのか、まるで見えずに惑っている。

「エビチリまんじ、目玉焼きトースト……」

「食べていないものまで混じっているではないか」

だから巨大ミノムシと化して眠る無垢な少女の欲望に忠実な寝言も、今の鈴乃にとっては複雑な胸中を整理する良い清涼剤だった。

「私の『この先』は……どうなつてゆくのだろうか」

鈴乃は抱きしめた我が身の、内なる鼓動の速さを思い、またため息をつくのだった。

※

商都グエンヴァン市の陥落は目前であつた。

勇者エミリア再臨の旗印の下、ファイガンを発った八巾騎士団は「ファイガン義勇軍」と称し、皇都・蒼天蓋以西の、マレブランケ頭領格の軍勢に制圧された各都市を開放するための戦いを開始した。

新生魔王軍の幹部、マレブランケ頭領格の制する都市を次々に攻略した義勇軍は、蒼天蓋に繼いで大きな都市であるグエンヴァンに到達。

攻略戦は、義勇軍の圧倒的優位で展開した。

商都であるが故に強固な城壁や防衛機構を持たず、幅の広い道路は大軍の侵入を容易に許し、義勇軍はあつという間に立ちはだかるマレブランケを駆逐。

グエンヴァンを制圧していたマレブランケ頭領格、スカルアミリヨニを追い詰めていた。

「報告！ 前線の鎮紅巾隊が、敵頭領格と接触！ 戦闘が始まりました！」

義勇軍の幕営の作戦参謀室にその報せを送った兵が飛び込んできたとき、更紗はやおら立ち

上がった。

「私が出る。頭領格は、並みのマレブランケとは桁違いの強さよ。生半可なことじゃ勝てないわ」

恵美は聖剣ではなく、オルバに与えられた剣を手に幕営を出ようとするが、それを止める声があった。

「いや、その必要は無い」

義勇軍の参謀役として幕営に待機していたオルバを振り返り、恵美はその顔を睨む。

「オルバ、八巾の騎兵を無駄死にさせるつもり？ 私が出れば、一瞬で終わるわ」

「それはそうだろうが、だからと言って大將はそうやすやすと戦場に出るものではない。苦戦しているならともかく、優位の戦場に大將が現れたら逆に兵の士気に関わる」

「……でもっ」

恵美は剣の柄を廻って戦慄く。

「エミリア、君はこの義勇軍の総大将であり象徴なのだ。あまり軽はずみな行動を取ってくれるな。君のその勇氣は、十分ここにいる者達を勇氣づけている」

「……」

恵美は幕営に待機するファイガンから出た八巾の将校達を一瞥する。

返ってくる彼らの表情は、恵美の心など露とも知らず、希望と勇氣に満ちていた。

「なら、提案くらいはいいわよね。私達の勝利はもう揺るがない。これ以上無駄に犠牲を出す必要は無いわ。マレブランケ軍に降伏勧告を出しましょう。私達の目的はデュングァンの解放で、一方的な殺戮ではな……」

恵美はほとんど囁くような思いで言葉を紡ぐが、オルバは心底意外そうに言った。

「エミリア、君はまさか、悪魔を生かしておけというのか？」

「そ………それは」

幕営にいる者達の視線が、恵美に集中する。

恵美はオルバの問いに即答できない。

そして何故答えられないのか自分の心が整理できないうちに、別の伝令兵が幕営に転がり込んできた。

「前線部隊からの概念送受！ 急報！ 急報ですー」

先ほどの伝令から五分も経っていないのに、その兵の喜色満面の笑顔を見て、恵美は絶望の息を呑む。

「前線部隊から急報！ 敵マレブランケ頭領格と接敵し、激闘の末これを撃破！ 敵頭領格の絶命を確認！！ デュングァン市解放、成りました！！」

「つつっ！！」

恵美の顔は、隠しようのないほどに引きつっていたが、喜びに沸き立つ幕営の将校達は誰一

人そのことに気づかない。

喜び溢れる伝令兵の言葉は、恵美が最も恐れていたものだった。

「悪魔が……人間の敵が、消えただけのことじゃない……」

ダエンヴァン市解放の勝利に酔いしれる義勇軍の中で、恵美は一人、膝を抱えて誰もいない参謀本部にうずくまっていた。

「そうよ。因果応報よ。元々魔王軍の後を継いでエンテ・イスラを支配しようとしてた、魔界の残党……人類の倒すべき恐ろしい悪魔が……また一人、消えただけ」

一人ごちるその声にはなんの感情もなく、ただ事実のみを紙に箇条書きにするように、なんの色もなかった。

「悪魔は、敵。私の、エンテ・イスラの敵、根絶やしにすれば、世界は平和に………」

「悪魔」とは……「体なんだと思う？」

「っ」

心の奥底から聞こえる声に怯えて、恵美は何かに押し潰されるように、より小さく自分の体を抱きしめ、縮こまる。

「敵、敵よ。悪魔は、人類の敵。人類を脅かす、恐ろしい敵……」

「あの日のマレブランケ達……魔王サタンや悪魔大元帥達の仇を討てると、信じて疑わなかったあの熱かなマレブランケ頭領格達のようにだ」

「つつり」

恵美は頭を抱えて、うめいた。

自分は、知っていたはずだ。

この一年と少しの間に、この世界の、人間の、悪魔の、全く違う側面を見たはずだ。

「どうして……どうして悪魔が死んだっていうのに、こんなに……」

敵にも事情があるなどと言う気はない。

迷いがあるのは事実だが、今も面と向かって真実や悪魔達を敵だと言い切る自信もある。

それなのに、見も知らぬマレブランケの頭領格が一人死んだというだけで、どうしてこれほどまでに罪悪感にさいなまれるのだろうか。

ここでマレブランケを倒さなければ、ダエンヴァンはいつまでも悪魔の支配下に置かれる。ダエンヴァンの人々を解放するために戦うのは正しいことのはずだ。

「……まま」

内なるアラス・ラムスの声も届かないほどに、恵美の心は憔悴（しな）きつていた。

恵美は力なく立ち上がると、己の心を掻き乱す感情の嵐になんら整理をつけられないまま、与えられた自分専用の天蓋（てんがい）に戻り、武装も解かず寝台に倒れ込む。

力なく横たわる恵美は、まるで死んだように眠りについた。

「……っ」

苦悶の表情で眠る恵美の隣に顕現したアラス・ラムスは、疲れ切った「まま」の頬を小さな手で優しく撫でる。

と、そのときだった。

「う？」

アラス・ラムスは何かを感じて、天井を見上げた。

「だれ？」

何か懐かしい気配を一瞬感じたような気がしたのだが、それは砂漠の中の石ころのように、すぐに世界の空気に紛れて消えてしまった。

それでもアラス・ラムスは自分の額に手を当て、しばらく暗い夜の中を、きょろきょろと見回していたのだった。

※

「あーあ、めっちゃくちや」

「……」

「聞いてたでしょ。僕、止めたんだからね」

「……」

「ねー、ちょっとはコミニケーション取ってよ、知らない仲じゃないんだし」

「……一体なんのつもりだ」

「お、ようやく喋ってくれたね」

蒼天蓋城の天守閣、玉座。本来ならば大エフサハーン帝国を収める統一蒼帝のおわす玉座の間は、死屍累々の様相を呈していた。

床に倒れ伏しているのは、八巾騎士団の強者ばかり。

彼らに玉座の間の床を奪めさせたのは、

「どうだい、青屋君、いや、悪魔大元帥アルシエル。久しぶりの蒼天蓋城の玉座は」

「………虫唾が走る」

節くれだった二又の尾を直立たしげに揺らしながら、アルシエルは玉座の上から、入り口近くの柱に寄りかかって楽しげにこちらを見上げるガブリエルを睨みつける。

肉体の大きさに耐えられず破れたユニシロの切れ端が貼り付いていても、その威厳は本物だ。

「大天使ガブリエル、貴様、一体なんのつもりだ」

「なんのつもりも何もないよ。僕ら天使が、特別人間の味方じゃないことは日本のことでよく分かってるっしょ？ ほら、喜びなよ。念願のエンテ・イスラ帰還だよ。魔力もばっちり戻



つて、もうスーパ―をハシゴして洗剤の値札とかとにらめっこしなくて済むんだよ？」

腕を広げて胡散くさいアビールをかますガブリエル。

「つてまあ、嘘くさいのは分かってますよ。ごめんごめん」

アルシエルが反応しないので、ガブリエルは自らポケを引っ込めた。

「……ここは、本当に蒼天薙なのか」

「そうだよ。見る？」

「フン」

アルシエルは鼻を鳴らすと、玉座を降りてガブリエルの傍らを通り過ぎる。

「う……うう……」

その背を追うように、倒れ伏した騎士達のうめき声がかかる。

「だらしのないねー。エフサハーンの精銳・八巾騎士団が聞いて呆れるよどいつもこいつも。敵

いっこないからやめろつつたのにみんなもー君の変身に泡食っちゃって止める間もなくてさ。

ありがとねー、殺さないでいてくれて」

「……殺す価値もないし、意味もない」

大天守閣のバルコニーから出たアルシエルは、そう吐き捨てた。

貴族がアルシエルの姿を取り戻したことで、見張りの八巾騎士達は恐慌をきたしてしまった

のだ。

特別暴れる気配もなかったのにアルシエルを玉座に拘束しようとした結果がこの有様である。アルシエルは眼下に広がるエフサハーンの皇都の光景を見ても表情一つ動かすことすらせず、背後でへらへらと笑うガブリエルを振り返った。

「私に、一体どんな役割を押しつけようというのだ」

「おや、分かっちゃった？」

「あのアパートにエミリアの父親が来たのは偶然だ。佐々木千穂の学校で騒ぎが起これば当然ベルが出勤することになる。となれば、目的は私の身柄以外にあるまい」

「ルシフェルとかサタンってこともあるかもよ？」

「ならば、二人がいる間に来なければおかしい。ターゲットの不在も確認せずに襲ってくるような貴様でもなからう」

「はは、おーけーおーけー、確かにそうだね。君の役割はごくシンプルだよ。ただあの玉座にふんぞり返っていてくれればそれでいい。あとは勝手に話が進む」

「……」

アルシエルはガブリエルの軽薄な瞳を振り返ると、しばし瞑目する。

「おかしい話だ」

「へ？」

「ならば、貴様は何故、私に外を見せた」

「えーと？ 何か問題？」

「貴様らが想定する私の役割が本当にただあの玉座（きぎざ）に配置されるだけならば、ガブリエル、貴様は私に、絶対に外を見せてはならなかったはずだ。この、ほとんどマレブランケの姿が見えない、皇都・蒼天蓋（ソラノカサ）の姿をな」

「……おおう」

ガブリエルの言葉は軽いが、表情は思いがけず真剣に感心しているようだった。

「もっと言えば、貴様本人が私の前に姿を見せることすら本来はあってはならないはずだ。私の誘導（すうどう）はマレブランケ共と、人間だけで行うべきだった。そうだろう」

「一応聞いていい？ なんでそう思うの？」

「ごく簡単なことだ。マレブランケの頭領格が東になったところで、貴様の足元にも及ばん。そして貴様らは人間が聖典で崇めて（あがめ）いるような、行いの清い存在ではない。ならば全ては貴様らの、天界勢力の手の内の出来事だと考える方がずっと簡単だ。オルバ・メイヤーも、バーバリッティアも、全員が貴様らの甘言（かぎご）に乗せられて今この地にいるのだろう。違うか」

「……」

「天使の姿が見えた時点で、マレブランケが新たな魔王軍を興（おこ）したことも、マレブランケの先導でエフサハーンが他の大陸相手に戦争を起こしたことも、全て表面上の出来事に過ぎなくなる。その裏には、貴様らの目的が隠されている。だからこそ貴様は、本当なら私の前に姿を現

すべきではなかったのだ」

「うーん……参ったねこりや」

ガブリエルはだらしなく腹を掻きながら、降参の姿勢を示した。

「君の読み通りだよ。本来なら僕は君の前の姿を見せちゃいけない。君が目覚めたときに傍に
いるのは、バーバリッティアじゃなきゃいけないかった。君を……」

「私を『帰ってきたアルシエル』にするためだろう」

ガブリエルを遡って、アルシエルはそう切り出す。

「どっかの巨大宇宙ヒーローみたいだね」

「四人の大元帥の中で、エミリアが討伐した記録が無いのは私だけだからな」

「突っ込みは無しなのね……ン？ 今の場合は僕が突っ込みになるのか」

「中央大陸の魔王城での戦いの顛末に関して、正確かな情報が流布していると聞く。そこに、
悪魔大元帥アルシエルがマレブランケの支配するエフサハーンに帰ってきたとなれば、誰もが
魔王軍の再来と思うことだろう」

「ふむふむ、それで？」

「そして……エンテ・イスラの民は、再び現れた魔王軍を駆逐する、勇者の再来を待ち望む。

貴様ら、そのためにエミリアをどのような手でか、こちらに留めたな」

「この際だから最後まで聞こうか」

「……魔王軍の復活と並ぶ勇者の復活。民は勇者の勝利を願ひ、実際に貴様らはエミリアに私やバーバリツティア共を倒させるつもりなのだろう。エフサハーンを再び支配した悪しき魔王軍を、復活した勇者エミリアが駆逐し、エンテ・イスラに二度目の光をもたらす。実に分かりやすい」

「そう分かりやすくもないと思うけど……まあ君は当事者だから推測はし易いか」

「だがここに、疑問が二つ。何故今更エミリアを担ぎ出したか。何故貴様ら天使がそれを裏で操っているかだ。抹殺されかかったはずのエミリアが担ぎ出されていることに關しては、オルバ・メイヤーの奸計を大法神教会が認め、自浄作用が働いたと考えることもできる。だが貴様らが暗躍している理由は、今もって見えん」

「まあ、見せてないしね」

どこまでも軽いガブリエルだが、アルシエルは構わず続ける。

「でもあれだよ、僕らだって一応天使なんだ。魔界の悪魔達の力を削いで、今後のエンテ・イスラの平和を守るために、敢えて悪魔達を誘い出して人間達に希望を与えようと……」

「我ら魔王軍がエンテ・イスラを八割方手中に収めて尚、微動だにしなかった貴様らが何を言うか」

「……ですよねー」

「たかがマレブランケの頭領格如きを抹殺するために暗躍するなど、有り得るはずがない。そ

れこそ日本にいる間に、私や魔王様を圍討ちすれば良いだけの話だ。……何が目的だ、ガブリエル」

「ん？ それはどういう意味？」

「このまゝ時が過ぎれば、いずれエミリアがこの地に現れて私やマレブランケ共と戦うことになり、力を持った悪魔が大勢滅び、エンテ・イスラの人間共に希望が戻るという目的だけは達成される。だが……貴様にはそのつもりがない」

「どうしてそう思うのかな」

「色々理由はある。私に外を見せたこと、私に状況を把握する時間と材料を与えたこと、それだけとっても、貴様が私とエミリアを使って何かをしようとしているのは想像がつく。「天界の本来の目的」以外の目的のためにな」

「……本当に、スーバーで卵のサイズに悩んでいるだけの男じゃなかったってことか」

「……貴様……どこで見ていた、薄汚いネズミめ」

今まで毅然と話していたアルシエルが、こんなことで動揺する。

ガブリエルは苦笑しながら、バルコニーの縁に座って遠く蒼天蓋の城下を眺めた。

「悪いけど、僕は君にもエミリアにも大して期待しじゃない。ご想像通り、この茶番の表面の目的はエミリアに君やマレブランケ達を倒させること。ノルド・ユステイナまで手に入つたのは本当に僥倖だったよ。勇者エミリア、仇敵の悪魔大元帥を再び打ち倒し、エンテ・

イスラを再び救う。そこで生き別れの父親と運命の再会とかしてみなよ。全米号泣、アカデミ
ー賞間違いなした」

「……」

「そんでね、僕はそういう三文芝居に、いい加減飽き飽きしてるんだよ」

「……？」

「僕は怖いんだよ。イエソドにしろゲブラーにしろ、本来僕らがどうこうしていい存在じやない。君を日本から誘拐したときに出会った、完成した『黒』の血。怖かったよ。久しぶりに本気で死ぬと思つたもん」

「完成した黒……？」

「僕はね、天界を救いたいんだ」

「何を言っている？」

アルシエルは、低い声で尋ね返した。

「天界は、別に何者かの侵略に晒されているわけではあるまい」

「そうだね」

ガブリエルは苦笑する。

「天界は今、かつての過ちを繰り返そうとしている。かつて違ってきたたった一度のチャンス
を『大災厄』と称して無かったことにした。今の怠惰な平和を享受するために。でも悲しい

ことに、僕一人の力じゃどうにもならないんだよねー。いくら僕がイケメンで超強くても、やっぱ数の暴力相手にはどうにもならんのだよ」

「……」

「今のは突っ込むとこだよ。でもま、そんなに救えない連中でも、僕にとってはやっぱ捨てがたい仲間なんだわ。どんなにバカで怠惰で傲慢でも、一万年の時を共にした仲間なんだよ」

「一万年は言いすぎだろう。さしもの悪魔も、四千年以上の時を生きた者はいない」

「……本当に、君はボケ殺しだねえ」

ガブリエルは心底楽しそうに笑うと、バルコニーの縁から降りて腰を伸ばした。

「僕が君に願うことは、たった一つだ。エミリアが来たら、できるだけ長い時間戦い続けてくれ。安全マージン考えたら、九二日間くらいぶっ続けで戦い合ってもらいたいね」

「……」

ガブリエルはアルシエルの肩に手を置いてそう言うのと、ゆっくりと歩き去った。

アルシエルはその背を目だけで追う。

「初めて会ったときはまるで期待していなかった。だってあんなに軽々しく自分の命を差し出そうとするんだもんね。でも……何か『あの世界』で過ごす間に、色々被なりに思うところ、あったんだろうね」

「なんのことだ」

「二千年待った。新たな『大魔王』が生まれるのを。これが最後のチャンスだと思ってる」
ガブリエルの、相変わらずの飄々とした声は、天守閣を抜ける風に散って、アルシエルの耳には届かなかった。

※

「ええい、何故だ！ 何故こんなことになる！」

甲高い叫び声が、蒼天蓋を揺らす。

「オルバはどこに消えた！ 何故戻らんのだ！」

身の丈は普通の成人男性より少し上背がある程度だが、身に纏うローブから垣間見えるのは、隠しようのないマレブランケの証、鎌のように長い左右の一本爪。

並みのマレブランケよりも圧倒的に長く、洗練された鎌のような強く美しい爪の持ち主こそ、マレブランケ一族現筆頭頭領格、バーバリッティアである。

「落ちてかれよバーバリッティア殿、喚いたところで状況は変わらん」

「黙れファール！ これが落ちていていられるか！」

バーバリッティアと呼ばれたマレブランケは、座っていた椅子を翻倒す勢いで立ち上がると、奇立ち紛れに爪をかざして振り下ろした。

かつてセフィラ・ダブラーの化身イルオーンを率いて日本で真奥達と対峙した、若き頭領格
 ファーフアレルロ。

彼は長であるバーバリッティアを諫めながらも、無残に砕けた会議卓を見下ろして、小さく
 ため息をついた。

「ラダエル！ 貴様一緒に行動していたはずだろう！ オルバ・メイヤーはどこに消えた！」
 ファーフアレルロのそんなあからさまな態度にも気づかず、バーバリッティアは卓の向かい
 にだらしなく腰かけていた、アフロの男を睨んだ。

「……オレも知らんのだなあ」

「フザけるな！ 知らんで済むか！」

「そんなこと言っただって知らないんだもの。それよりもこの状況、マズいんとちゃうの？ オ
 ルバ一人いてもいなくても、あんな方の不利は変わらんのじゃないのかい？」

「ぐぐぐぐ」

悪魔大元帥マラコダ亡き後、マレブランタの総頭領の座についたバーバリッティアは、自
 分が砕いた会議卓の上から滑り落ちたエフサハーンの全国地図を睨み下ろした。

「一体ファイガンやグエンヴァンで何が起きたと言うのだ！」

バーバリッティアは、その全国地図すら踏み潰して歯噛みする。

「まあマズいことが起きてるのは、間違いないだろうねえ」

ラグエルは足を組んだ姿勢のまま微動だにせず、バーバリッティアに踏みつけられた全国地図を見下ろした。

「で、どうすんの。皇都に残った八巾騎士の報告だと、マレブランケの頭領格は、異世界日本で重傷を負って蒼天靈城で静養してるリヴィクオッコを除けば、もうあんた達二人だけみたいだよ？」

ラグエルの声には全く緊迫感というものが無かった。

だがその言葉に、バーバリッティアもフアーファレルロも暗い顔を隠せない。

「こういう緊急時に我々を補佐するのが、貴殿らの役割であつたと思つたが？」

フアーファレルロもさすがに声に陰をこもらせるが、勿論パンキーな天使はそれを鼻であしらつた。

「緊急時の解釈の違いだね。第一、エンテ・イスラ侵略は最初からあんた達の手だけでやるって言つてたじゃないの。そうじゃないと魔王サタンに申し訳が立たないとか言つてさ。オレらは確かに君達の再侵略のお断立ではするって言つたけど、そんな甲斐甲斐しく世話焼くなんて一言も言つた覚えはないよ」

「き、貴様……」

「それに、既にそれだけの働きはしてる。君達の総大将になり得る悪魔大元帥アルシエルを帰還させ、あんた達が望んでいたもう一振りの聖剣の持ち主、勇者エミリアの父親まで連れてき

てやったんだ。ここまでしてやったのにまだ自分達じや何もできないって言うつもりなんかい？」

アルシエルの名に、バーバリッティアは微かな安堵の色を浮かべたが、ファーフレルロは逆に消沈したような顔になる。

「やはり、魔王様の仰せに従うべきだったか……」

「なんだファールー！」

「……いえ」

「とにかくだ、ドウオラギニエツイーノとスタルアミリコーニの安否を確かめると、ファイガンに興って蒼天蓋に向けて侵攻している軍勢の正体を確かめることが先決だ！ ファールー、貴様が飛んで現地の状況を……」

バーバリッティアがあまり熟考の末とは言えない指示を飛ばそうとしたその瞬間だった。

会議堂の重々しい扉が開き、一人の男が姿を現すと同時に、バーバリッティアとファーフレルロは、思わず姿勢を正した。

相変わらずラグエルは微動だにしないが、表情だけはかすかに緊張して開いた扉を見やる。

「あ……」

「アルシエル……様……」

「状況を簡潔に述べよ」

低い声でそれだけ言ったアルシエルは、指を少し動かしただけで、パーバリツティアが碎いた会議卓と滅茶苦茶めちゃくさになつてしまつた全国地図を、元の形に復元して見せる。

「あ、アルシエル様、ファールから異世界日本での仔細しじゆは聞き及んでおりまして、お怒りの程はあろうとは存じますが、我々マレブランケ一党は決して魔王サタン様には」

「状況を簡潔に述べよと言つたぞ」

悪魔大元帥アクマダイスウイの威厳に打たれ、慌てながらも敬意の口上を述べようとした新生魔王軍の頭領パーバリツティアの口は、アルシエルのたつた一言で引き結ばれた。

「アルシエル様、私の口から申し上げます」

絶句してしまつたパーバリツティアに代わり、復元された会議卓の前に立つたのは若いファーフアレロだった。

そのやや疲れた表情を見やつたアルシエルは一つ頷く。

「……貴様がイルオーンを使役しやくしていたという」

「は、異世界日本にて魔王サタン様と新元帥マダロナルド・パリスタ・チホ閣下チホカクカに無礼を働きましたのは私めにございます。アルシエル様の怒りは後にこの身命にてお受けいたします。まずは閣下のご質問に回答を奉ることお許しください」

ファーフアレロは一礼すると、全国地図を長い爪で指し示す。

「我々マレブランケは、オルバ・メイヤー、そして天界よりの使者ラダエル殿らと共にエフサ

ハーンに侵攻し、これを占拠。エフサハーンの主要都市を制圧致しました。そこよりまずは将
家魔王サタン様をお迎えするにあたり、中央大陸にあるサタン様の魔王城を奪還することが決
まりました。中央大陸の復興を画策する五大陸騎士団を解体せしめるべく、敢えてエフサハ
ン八巾騎士団を増強し全世界に宣戦を布告致しました」

「ふむ」

「甲斐あって、人間共の騎士団はそれぞれの大陸の防備に戻り、中央大陸は手薄になりました。
勇者エミリアの聖剣を西大陸の大法神教会が隠し持っていたことを責めることで、各大陸の軍
事バランスの均衡を揺るがし、かつてのように人間共の勢力が一致団結できぬよう離間工作に
も努めてまいりました」

「では何故今、貴様らは窮地に立っている？」

アルシエルは、こちらをにやにやしながら眺めているラグエルに一瞬だけ目をやってから、
またすぐ質問した。

ファーフアレルロは、爪で地図の各点を指し示しながら淀みなく答えた。

「頭領格とその配下のマレブランタの部隊、そして制圧した八巾騎士団によって守られた各都
市が、この数日の間に相次いで陥落しておるのです」

「ほう」

アルシエルは真面目に頷いたが、既に目は地図ではなく、事の行く末を見守っているラグエ

ルをはつきりと睨んでいた。

「蒼天蓋とファイガン軍港の間にある二拠点に配された頭領格スタルアミリコーニ、ドウオラギニエツイーノらとの連絡が相次いで途絶え、異世界日本で負傷し、蒼天蓋にて治療中のリヴィタオツコの副団地域もはや時間の問題かと……」

「成程」

アルシエルはなんの感慨もなく頷くと、ラグエルを見たまま腕を組んだ。

「つまり貴様らは、愚かにもオルバと天界のネズミの甘言に乗せられ、我が征服地を荒らした挙句に、魔王城を奪還するどころか魔王サタン様の民の命を徒に費消するだけに終わっている、ということだな」

「……返す言葉もございませぬ」

「そ、それはしかしアルシエル様……」

ファーフアレルロは神妙な面持ちで頷くが、バーバリツティアはそれに異を唱えようとし、

「黙れバーバリツティア！ この愚か者め!!」

それをアルシエルは一喝した。

「軍を挙げたことは今更責めはすまい。元はといえば我らの不申變なき敵の貴様らの義憤であろう。だが！ このファーフアレルロに魔王サタン様が申し伝えたこと、何故忠実に実行しなかった！ 魔王様は、貴様らに魔界に帰還せよと申し渡したはずだ！」

「……」

「面目次第も……ごさいません」

「あんまり怒ってやんなよな。彼らだって引っ込みつかなくなったんだってばさ。一時は確かにうまくいきそうだったんだし」

「それこそ、貴様らの思う壺なのだろう、コソコソと動き回る天界のネズミめ」

マレブランケ達を擁護するかのようなラグエルにも、アルシエルは容赦がない。

「ネズミってひでよなあ。オレら、今回はどっちかつーとあんたらの味方なのに。本当に色々お膳立てしてあげたんだぜ？」

「貴様ら天使共の腹芸には飽き飽きしている。我らを使って一体何をするつもりか知らんが、このアルシエル、貴様らのいいように動くほど大人しくはないぞ！」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、アルシエルは霞のように消え、次の瞬間にはラグエルの背後からそのあまりに狙いやすい大きさの頭部を打ち砕かんと爪を閃かせたが、

「ぬっ！」

その腕が、さらに背後から止められた。

しかも、ただ止められただけではない。

魔界最硬の肉体を持つアルシエルの手首を、万力のように締めつけるその手は、あろうことが子供のようになさかった。

「き、貴様は……」

アルシエルは、背後から自分の腕を制する、浅黒い肌の少年を振り返り驚愕の声を上げる。黒い前髪に、一房の赤い束。

「貴様が、イルオーン……か……ファーフレルロに使われていたという……」

アルシエルは思わず若きマレブランケ頭領の謀反を疑うが、

「ああ、彼は、うちから貸し出してただけだから、そこの若者があんたを裏切つてるとかじゃねーから安心しな」

「貸し出したと……？ うぐっ？」

アラス・ラムスと融合した、進化聖剣・片翼の刃を突き、鈴乃の全力の制止を軽々と吹き飛ばしたセフィラ・グブラーから生まれた少年イルオーンの誓力には、魔力を取り戻した悪魔大元帥アルシエルですら逆らうことができなかった。

イルオーンは無表情のまま、恐ろしい力でアルシエルを引き倒し、そのまま背後の壁目がけて投げ捨てたではないか。

「うぬっ!!」

アルシエルはなんとか激突は免れたものの、その計り知れない誓力に愕然とする。

「ま、こういう子貸し出しちゃったから、彼らが色々勘違いしちゃったってのもあるんだわ。あんまり責めないでやってよ」

アルシエルの驚きを尻目に悠然と立ち上がるラグエル。

イルオーンの髪を一撫ですると、アルシエルの目の前まで悠然と歩み寄り、そしてそのバンキーなアフロの影で、邪悪に笑った。

「ドーせどっちに転んでも、魔界に未来はないんだし」

「何……？」

「いやまあ、君がこの後起こる戦いの中で善戦すればその限りではないけどさ、でも」

その言葉がアルシエルの耳を打ち、次の瞬間ラグエルとイルオーンは淡い光に包まれて、忽然と姿を消した。

「悪魔は滅びなきゃいけない。オレらの未来のために。ま、せいぜい頑張るな」

アルシエル、ファーフアレロ、パーバリッティアの三人は、悪辣な天使が消える様を、ただ眺めているしかできなかった。

「い、一体どういうことだ、ラグエルめ！ このままでは魔王城奪還どころか、エフサハーンすら手放す羽目に陥るではないか！」

「……最初から貴様らマレブランケ共の器は、その程度だったということだ」

アルシエルはイルオーンに振り回された手首をほぐしながらため息をつく。

「ラグエル以外に何人の天使がいるのか知らんが、下手をすれば私や貴様らが束になっても、その中の一人にすら敵わんかもしれんのだ。完全に陥らされたな」

ガブリエルの口ぶりから天界がアルシエルやバーバリツティアに何かをさせようとしていることは確実で、そもそもバーバリツティア達が新生魔王軍を興した（たてた）ことすらその目的のために仕向けられていたのだろう。

生き残りの頭領格達の実力はいずれも死んだマラコーダには遠く及ばず、圧倒的な力を持つ天使達に背後から操られていた時点でバーバリツティア達の命運は最初から決まっていたと言つて良い。

「し、しかしアルシエル様、我らとて天使共の力は承知しておりました！ 聖剣さえ、聖剣さえ手に入れば決していいようにはされなかったはずなのに、ラグエルめ、聖剣を持つエミリアの父親などと言つてどこの馬の骨とも知らぬ男を連れてきて……」

バーバリツティアは、なおも自らの不明を理解できないのか、アルシエルに言い募る。だがアルシエルにしてみれば、そもそも悪魔が聖剣を手に入れようとする（こと）自体があり得ないことだった。

「愚か者め。エミリアの持つ『進化聖剣・片翼』はただの武器ではない。生命の樹に成る世界組成の宝珠セフィラ・イエソドを核にして生まれた聖なる存在だ。聖法氣（せいぽうき）を持たぬ我ら悪魔が手に取ったところで、なんの力にも……」

「は？ い、いえ、アルシエル様、それは違います」

「……何？」

バーバリツティアが慌てながらも腕に手を入れ、

「ファールがああイルオーンめを使投していたことは、御存知のことと思いますが……」
 そう言いながら取り出した「それ」を目にしたアルシエルは、驚愕に目を見開いた。

「セフィラの力は、決して天使や人間にのみもたらされるものではございません」

巨大な爪の先端に乗せられた、小さな紫色の石。

それは間違いない、これまでアルシエルが、芦屋四郎が何度も目にしてきた、セフィラ・イエソドの欠片そのものであった。

「これこの通り、我らの魔力にも強く反応致します」

バーバリツティアがかすかに念を込め、爪から欠片に魔力を注ぎ込むと、

「ば、バカな……こ、これは」

アルシエルもちはや見慣れた淡い紫色の光が、欠片を包み込むではないか。

呆然とするアルシエルに、バーバリツティアは早口で説明する。

「我らが最初に異世界日本にチリアットの兵を差し向けたときには、この欠片と念話晶球にて、エミリアの聖剣の行方を探そうと試みておりました。結局チリアットは戻らず計画は失敗に終わりましたが、魔力を込めたこの欠片が、一度だけ別の欠片と引き合う瞬間がございました」

その現場をアルシエルは直接見たわけではないが、日本の千葉県銚子の沖合に現れたチリ

アットが、惠美の聖剣に反応する念話品球を持っていたという話だけは知っていた。

アルシエルは、今までずっと惠美だけがイエソドの欠片を扱っていたこともあり、当然のように聖剣もセフィラも、聖法氣を持つ者にしか扱えないと思ひ込んでいた。

だが、今まさにバーバリッティアによつてもたらされた事実は、その大前提を完全に否定している。

「聖剣が……セフィラが、聖なるものでは、ない？」

自分に言い聞かせるようにその事実を飲み込むようにして、

「……っ!!」

アルシエルは、あることに気がついた。

そしてその瞬間、蒼天蓋のバルコニーでガブリエルが語った「ガブリエルだけの目的」の一端に、迫り着きかける。

「バーバリッティア、フアーファレルロ!!」

「は!!」

「ノルド・ユステイナー……私と共に連れてこられたエミリアの父親は、今どこにいる!」

「は、その、蒼天蓋城の一室に監禁しておりますが……やはり、あれはエミリアの父親なのですか?」

「イエソドの欠片を持つ貴様がそこまで疑うということはつまり……」

アルシエルの脳裏に、あの瞬間の光景がフラッシュバックした。

大雨のヴィラ・ローザ邸塚。

真奥に部屋に蔵り込まれた、アルシエルの目にはただの人間にしか見えなかったノルド。

そして、真奥と共に空に消えた、銀の髪の少女。

「ノルドは、聖剣を持っていなかったのだな？」

「お、仰る通りで……」

アルシエルが何を考えているか分からないパーパリツティアとファーフアレルロは顔を見合わせるだけ。

しかしアルシエルの頭の中は今この瞬間までの情報がめまぐるしく交錯していた。

そして、数瞬の黙考の後。

「目的は今もって見えんが、この地でガブリエルが画策する状況が、分かってきた」

「は？」

アルシエルはもう一度頭の中で情報を整理し、そして忘々しげに舌打ちをする。

「請けない、私ともあろうものが、奴の手の上で踊るしか状況を打開する術が無いとは」

「ど、どうされたので……」

アルシエルは会議卓に向かうと、地図を順に指し示す。

「簡潔に言う。今貴様らの頭領格を廢り、蒼天臺に近づいているのは、勇者エミリアだ」

「え、エミリアは？」

「エミリアは、異世界日本にいるのではないのですか？」

「エミリアがエンテ・イスラに帰還したのはもう数週間前の話だ。天使共とオルバ・メイヤーはなんらかの方法でエミリアを従わせ、軍を興してこの皇都に向けて進軍している。目的はこの地で、エミリアに我々を救させることだ」

「なんですと？」

「い、一体なんのために……？」

「ラグエルと天界の本来の目的は、魔界の更なる弱体化、そして悪魔討伐に伴うエンテ・イスラの人間の信仰と希望の底上げだと推測できる」

アルシエルはエフサハーンの全国地図上に示されたエフサハーンを制圧していたマレブランテ頭領格達を隔った「謎の勢力」の侵攻状況を見る。

「エミリアめ……数々偉そうなことを言いながら、面倒事に巻き込まれおつて……」

「アルシエル様？」

「バーバリツティア。私がこの地に戻ってから、幾日経った？」

「は？ あ、え、ええと、この地の時間で七日程でございます」

「七日……ふむ」

アルシエルは素早く頭の中で状況を整理する。

ガブリエルのことは置いておくとしても、ラダエルとオルバが恵美に自分を倒させたいならば、自分が魔力を取り戻し、アルシエルとして覚醒するまでは蒼天蓋に攻め入ってはこないだろう。

遂に目覚めた今となつては、ラダエルがオルバに連絡を取り、進路を蒼天蓋に向けさせたことは想像に難くない。

ガブリエル、ラダエル以外にどれほどの数の天使がいるか分からない以上は、如何に悪魔型を取り戻したアルシエルと云えど、迂闊な行動はできない。

恵美もまた、理由は分からないがオルバの軍に大人しく加わっているところを見ると、自分と同じく力だけではどうにもできない状況に置かれているのだろう。

アルシエルには全く自覚は無かったが、彼は不思議と、天界を出し抜き自分と恵美と共に窮地を切り抜ける方法について真剣に検討していた。

「……アルシエル様……」

ファーフアレルロが、黙り込んでしまった大元帥を心配げに見ていたが、やがてアルシエルは口を開き、

「(今週の魔王様のシフトは月曜朝出の早上がり、火曜夜のみ、水曜全日、木曜昼出店代午後ラスト、金曜昼出終日、土曜休み、日曜全日、その後月曜がまた休みで火曜が朝出……)」

「は？」

マレブランケの二人には耳慣れぬ言葉で、妙なことを言い出した。

「フアーレ、アルシエル様は何を……？」

「さ、さあ……異世界の言葉のようでしたか……」

囁き合うマレブランケをよそに、アルシエルの思考は進む。

「目曜全日の代行が見つかるかどうかと本曜の店長代理目がネックか。その日は他のクルーの出動状況も薄かったはず。魔王様が動き出せるのは最速で本曜の午後と考えるべきだな」

アルシエルは、ヴィラ・ローザ後継までの騒動が起こる前から、真奥が恵美とアラス・ラムスを進めるよう準備は整えておいた。

大黒天符に託した言葉が真奥に正確に伝わっていれば、真奥は必ず動くはずだ。

「（あとは一秒でも長くかつ自然に、我々が生き延びれば……）パーパリッティア」

「……は、はい！」

唐突に話しかけられて、パーパリッティアは慌てて姿勢を正す。

「統一蒼帝はどうした。まさか、殺してはいまいな？」

東大陸、即ち大帝國エフサハーンの頂点に立つ絶対権力の持ち主、統一蒼帝の姿を、アルシエルはまだ目にしていない。

「は、あの老人はエフサハーンの旗印として世界に宣戦するのに重要ですので、我ら悪魔の魔力に当てられて死なぬよう、蒼天蓋城の小天守「雲の離宮」に法術結界の術を行使できる正

着巾騎兵を傍につけて軟禁しておりますが」

「ふむ、貴様らにしては良い判断だ」

アルシエルは頷く。

「統一着帝に話をする。案内しろ」

「は？ い、いやしかし……」

「天使共のことなら気にするな」

アルシエルには、確信があった。

「奴の望み通りに踊ってやるんだ。少しは演出家として働いてもらわねば」

戸惑いながら、アルシエルを小天守に案内するマレブランケ頭領格二人の様子を、ガブリエルは屋根の上で聞きながら苦笑する。

「演出家として働く、ね。分かりました分かりましたよ。その代わり、ちゃんと踊ってよね」
そして軽く拍手を打つと、その場から忽然と姿を消したのだった。

統章 魔王、吐く

翌朝、鈴乃は、自分の頬を叩く衝撃で目を開けた。

最初はアシエスの寝相にまた叩き起こされたと思ひ、諄め気味に目を開けたのだが、

「……………」

テントの裏地の暗がりの中に真奥の顔を見つけたとき、鈴乃の心臓は口から飛び出すのではないかと思うほどに跳ね上がった。

「まおむぐっ!!」

思わず叫びそうになった鈴乃だが、すぐに真奥の手が口に当てられて息が詰まる。

「????」

真奥の行動の意味が分からず、鈴乃は目を白黒、顔色を紅白にめまぐるしく変える。

昨夜の行動はいかにも自分らしくないとは思ってはいたが、まさか真奥がこうも妙な行動に出るほどおかしかったかなどとバニツタに陥る。

さらに真奥が耳に顔を寄せてくるので完全に酸欠になりかけたが、

「声出すな。誰かが近づいてくる」

その一言で、頭に上っていた血がすつと下がり、状況を理解したことを目で伝える。

真奥の目の周りには、寝つけなかったのかうつすらとクマが浮いていたが、そんなことは今はどうでもいい。

「……肉チョコの浅漬けがレンジの油で解凍したサシミ……………うむぐ」

真奥はもうなんの夢を見ているのかも分からないアシエスの寝言を押さえると、目と指だけで鈴乃に方向を知らせる。

寝袋にこもっていた鈴乃は、ここぞとばかりに足と手を寝袋から出して、簪を引き抜き警戒態勢に移る。

寝袋の口の中から鈴乃の長い髪の毛が漏れて、極彩色の色と相まってはやみノムシというより食虫植物のような有様だが、とにかく鈴乃が臨戦態勢に入ったことを確認すると、真奥はテントの隙間から外を窺う。

「敵か」

「この状況で味方が来るなら大歓迎だがな」

鈴乃と真奥は、小さな声で囁き合う。

「ほんと心当たりがない。通りすがりの旅人たといいたが」

「……その線は、薄そうだな」

鈴乃はしっかりと簪を握りしめて、いつでも大槓を顕現させられるよう用意する。

もはや聞き逃しようもない足音が、朝もやの森の中をこちらに向かつて歩いてくる。

音は一人だが、なんの理由もなく街道から外れた森の中に踏み込むような物好きな旅人がいるとも思えない。

「アシエスは、眠っていても機能するのか？」

「叩き起こされたって後で文句言われる以外は、大丈夫だと思う」

真奥も、楽観はしていないようだ。

足音の主は、森の下生えを踏みしめる音を隠そうともせず、一直線に真奥達のキャンプに向かってきた。

巡回の八巾騎士団が、そうでなければ真奥達のことを察して現れた天使か悪魔か。

いずれにせよ戦いは避けられないだろうし、スクーターも大半のキャンプ道具も、この場に捨てなければならぬだろう。

皇都を目前に逼るが無いと、真奥と鈴乃が諦めかけたそのときだった。

「（……………これは…………）スクーター（とか言うんだったか）」

聞き覚えのある低い男の声が、妙なことを言ったのを、真奥も鈴乃も聞き逃さなかった。

言葉は、エンテ・イスラの言葉だ。だがその途中で「スクーター」と言わなかったか？

「（……………あ……………うん）、そこにいるのは、誰だ」

そして「瞬の発声練習の後、飛び出してきたのは、間違いなく日本語であった。」

「魔王か、アルシエルか、ルシフェルか、ササキの纏（まと）ちゃんか、それともタレスティア・ベルつて奴（やつ）か」

「な……」

鈴乃は先程、寝起きに真奥の顔を間近に見たときよりもっと驚く。

日本語を用いて、その五人を纏めて名指しする者は、エンテ・イスラにも日本にも、そうはいない。

「どういうことだか分からんが……」

真奥も同じ考えに至ったようで、アシエスから手を離すと、ふっと警戒レベルを緩めた。

「驚いたことに、敵じゃないみたいだな」

呼びかけに答えるようにして、真奥はテントから体を出し、鈴乃も慌ててその後が続く。

早朝の闖入者（うちりこ）は、まるで毒の木々のような頑強（がんかう）そうな肉体と日焼けした肌、そして見上げるような上背の男で、なぜか鈴乃を認めた途端に顔を壁（か）めて身構えた。

「お、おいなんだそいつは。新種の悪魔か？」

「だ、誰が新種の悪魔だ！」

鈴乃は抗議の声を上げるが、

「ああ、そう言いたくなる気持ちは分かる。やっぱ変だよねあ、これ」

真奥は背後でいきり立つ鈴乃の顔をした食虫植物を見てから、改めて男に向き直った。

「それよりも、こんな所で鉢合わせしたのは偶然じゃねえよな。お互い紳士的に、情報交換といかないか。アルバート・エンデ」

「お、おう……そ、そっちのは本当に悪魔じゃないんだな？」

「まだ言うか！」

魔王討伐の恵美の仲間である北大陸出身の仙術道士、アルバート・エンデは、魔王である真奥よりもむしろ奇怪な姿をしている鈴乃を警戒しながらも、しっかりと頷いたのだった。

「にしても、どうして狙いすましたようにここに來ることができたんだ」

真奥は自身が食べ物になってしまったかのような寝言を口走るアシエスを叩き起こし、鈴乃に寝袋を脱がせてから、改めてアルバートと対峙する。

「いや、狙いすましたわけじゃないんだが」

アルバートは、寝起きミノムシのアシエスを困ったように見ながら、本立の影にあるスターターを指差した。

「大法神教会の法衣を着て妙な荷車に乗った連中の噂を追ってたら、つい昨日追いついたってとこだな」

「う、噂になるほど人目についてたのか？」

真奥と鈴乃は思わず顔を見合わせる。

極力人里も人目も避けてきたつもりだが、完全に人の目に触れない、というのは不可能だったのだろうか。

「いや、今エフサハーン中を駆け巡ってる数ある噂の中で、俺が単純にピンときたってだけの話だ。お前らがそれほど悪目立ちしてるってことはないと思うぜ」

アルバートは手を振って二人を落着かせる。

「今のエフサハーンは魔王、お前が侵略をしてた頃よりも、民衆が不安を抱えて生活している。いっそのことまた一気に悪魔に征服されちまえば身の振りようもあんのに、皇都・蒼天蓋が制圧されたって話だけが広まって国内情勢に大きな変化がないから、あちこちで毒にも薬にもならねえ噂が大量に流れてんのさ」

それは昨日の食堂の女将が言っていたことと一致する話ではあった。

「一番多いのはどこそでという悪魔を見たって話だな。大体は野生動物の見間違いや、犯罪者のプラフ。そんな噂の中で聞いたその荷車ってのが、俺がお前らの世界……って言うのは変かもしれないが、日本で見たものとそっくりだったからな。どうせ蒼天蓋に向かう用事もあったし、ついでに調べてみるか、くらいのつもりだったんだが」

例本に腰を下ろしたアルバートは、少し前かがみになって、三人に鋭い眼光を向ける。

「お前ら、エミリアを助けに来たのか」

「その通りだが、その話をする前に一つ聞きたい、エメラダ殿は一体どうされたのだ」

アルバートの言葉を肯定しつつ、鈴乃が質問を投げかけた。

「エミリアと連絡が取れなくなつてからすぐに、エメラダ殿に概念運受で通信を送った。だがエメラダ殿からの返信はなく、つい最近日本にある情報もたらされるまでエミリアがこちらで虜囚の憂き目に遭つたということを我々は把握できずにいたんだ」

「あー……それについては色々複雑なんだが……」

アルバートは頭を掻きながら説明する。

「一言で言うくと、エミリアと合流するはずだった日に、エメにセント・アイレ帝都からの招喚令が出た」

「帝都からの招喚？」

「ああ、元々エメはエミリアの村近辺の復興計画の不正を洗い出すための視察にかこつけて、エミリアを送り迎えするつもりだったんだが……」

「それが露見したのか？」

「いや、ある意味もっと悪い」

アルバートは鈴乃の着ている法衣を指差す。

「お宅んところが動いたのさ。いよいよエメに教会の意志に逆らう背教者の烙印を押して、なんとかオルバの不正を露見させまいとしたんだ。帝都の司教座で宗教裁判を受けなきゃならん

だと」

「……今頃になってか？」

鈴乃はその説明に納得しなかった。

エメラダとアルバートが教会に反旗を翻したのはそれこそ鈴乃が日本に渡るより前の話だ。

それから何ヶ月も経った今になって、何故焦ったようにエメラダの身柄を教会が拘束するようなことを？

「俺やエミリアの公的な安全を権力で保障できるのも、エメの今の立場があつてのことだ。戦うにしろ服従するにしろ、一度は戻らなきゃならん。それならそれで勝手に動ける俺がエメの変わりにエミリアの送迎を買って出りや済んだ話だったんだが……」

アルバートは暗い顔をして、東西の空、蒼天臺のある方向に顔を向ける。

「俺がエミリアの村まであと半日つてとこまで追り着いたところで、とんでもねえ数のゲートが、エミリアの村の方向に開いたのを感じ取った。焦ったぜあんときは。で、とにかく急いでエミリアの村に着いてみりゃ、妙な連中が何やらエミリアの故郷の村や畑をいじりまわってる」

「悪魔や天使とかか？」

アルバートが妙な連中というからは相当妙なのだろうと思いきや、真奥の質問にアルバートは首を横に振った。

「いいや、近場のカシアス城塞市（カシアス城塞市）から保護された、教会騎士の連中さ」

「カシアス城塞市というところ、司教座直属の聖堂がある町か……その教会騎士が何故？」

鈴乃が記憶を探りながら問うが、アルバートは首を横に振る。

「そりゃこっちが知りてえよ。だが、とにかく教会騎士相手じや迂闊にすこむわけにはいかない。かといって、あんなゲートを開くような聖法（せいぽう）が活性化された場所で、一体何をしてんだって聞いてみりゃ、一番の復興計画推進のための機地だ。おかしい話だ。エメが復興計画の遅れを視察しにきて、それがとんぼ返りになった後に異常なゲート反応、そんで取ってつけたような機地の開始。もちろん、って言っちゃおしまいだが、エミリアの姿は影も形も無かった。これでも二日かけて周囲を探したんだぜ」

アルバートはやれやれと手を広げてから話を続ける。

「でだ、エミリアと接触できない以上はエメの指示を仰いだ方がいいたろうって思ってた。セン・アイレ番都に戻ってみりゃ、エメの奴が所管する法術監理院が近衛將軍のビンの命令で封鎖されてんだ。なんでも裁判の間にエメが証書を不正に処分するのを防止するためなんだと。結果的にゲートを開ける天使の羽ペンも建物ごと押さえられちゃったことになるから、移動するのにも、えらく時間を食っちゃった」

「……それで私と連絡できなかったのか……」

鈴乃の言葉に、アルバートは頷く。

「ああ、あんたは元々教会の密命で日本にいたんだろ？ 迂闊にあんたと連絡取ったことを察知されれば、あんた達にも迷惑がかかることになる。俺もコレはエミリアに持たされてたんだが……」

そう言っただけでアルバートが上着のポケットから取り出したのは、恵美が持っているのと似たような、スリムフォンだった。

「エメからあんたのデンワの番号を聞いたときやよかったとあんときは後悔したことはねえな。迂闊に日本にツナヘなんか打った日にゃ、それこそ誰に聞かれるか分かったもんじゃないぜ」

「よし、今後のためにも、今のうちに携帯の番号交換しようぜ」

こんなときなのに、真奥と鈴乃はそれぞれ携帯電話を出してアルバートの番号を聞き出すとする。

だが当然というかなんというか、真奥と鈴乃の電話はもちろん、アルバートのものもとつくの昔に電池が切れている。

概念送受の増幅器としてはそれでも良いのかもしれないが、このままでは番号が登録できず発着の安定感に影響する可能性がある。

電池が無くても概念送受の増幅器としては機能するが、中に電話番号が登録されているかないのかは、増幅効果を上げるためには重要なのだ。

真奥は鈴乃と数々揉めた末に購入した、ラジオと太陽電池、さらに真奥の古い携帯電話にも

対応した手回し携帯充電器まで付属したLEDランタンをここぞとばかりに持ち出し、アルバートの持つスリムフォンを充電する。

明らかに操作に慣れていないアルバートと、機械に疎い鈴乃、最新機種を触り慣れていない真奥ががああでもないこうでもないとなげきながら長い時間をかけて、ようやく全員の番号交換が完了した。

「みんないいナー。私もケータイ欲しい」

「……お前は迂闊に有料サイト登録しまくりそうだから、買うとしても子供用だな」

「むうう……でも買ってもらえるならそれもイタシカタナシ」

アシエスはそれでも涙ましそうに三人の携帯を眺めていて、特に真奥が買うとも言っていないのに、もう買ってもらえる気分ている。

「それでアルバート、そこからどうしてお前はエフサハーンに足を延ばすことになったんだ」

「ごくごく単純な理由だ。蒼天蓋の周辺ばかり、戦争でもやってるのかってくらいやたらと巨大な聖法気反応が渦巻いてたっただけのことだ。もちろん北大陸や南大陸にも俺個人の手勢を放っちゃいるが、エミリアがいなくなったたたり瞬間のことを考えると、やっぱ俺が直接見るべきはここだろうと思っただけのことなんだが……お前らがここにいて、俺の勘は正しかったことが証明されたようなもんだな」

「ああそうだ、恵美は皇都・蒼天蓋にいる。いや正確には、これから皇都に現れるらしい」

「一応聞くが、その根拠は」

「カンで動いてるお前に根拠を聞かれるのも難だが、裏で糸引いてるバカ野郎に直接聞いたんだよ」

と、真奥は右手の指と小指で、電話の受話器の形を作って見せた。

「アルバート。お前にも後で聞きたいことは色々あるが、まずは俺達に協力しろ。分かっているだろうが、事は恵美を助け出してハイおしまいじゃ済まねえんだ。身内の恥を晒すように情けない限りだが、実はうちの芦屋……アルシエルも、恵美をさらった奴らと同じ連中に誘拐されてる」

「あな？ アルシエルが誘拐されたあ？」

アルバートは信じられない様子で眉を上げる。

「もつと信じられない話をしてやろうか。恵美の親父、ノルド・ユステイナーも、アルシエルと一緒に誘拐された」

「んあつ？ え、エミリアの親父だと？ そ、それは……」

「ついでに言うよ、そこでさっきから俺達の携帯電話を渡さしうに見て、それだけで済まずに俺の携帯電話を奪おうとしているこの子は」

「ひうッ!? ま、マオウ、ごめん謝ル！」

真奥は自分の携帯電話を勝手に操作しようとしているアシエスの首根っこを掴んで持ち上げる。

叱られると思ったか思わず身を凝めるアシエスだったが、真奥はアシエスをアルパートに突きつけると、堂々と宣言した。

「この子は……もう一振りの聖剣の化身だ」

「はああああ？」

「ひえええエエ」

「……真面目な話のはずなのだが……」

真奥に猶の子のようにつままれた極彩色のアシエス・ミノムシを凝視するアルパート。

当事者の鈴乃が首を傾げなくなるほど、なんとも不思議な光景である。

「俺の考えが正しければ、今回の茶番を計画した奴は恵美と芦屋を使って世の中を自分のいい方向に回そうとしてる。俺はハナっから自分の手を汚す覚悟がない奴が死ぬほど嫌いでな」

「ま、マオウ、ちよつと下ろしてホシ……」

「俺達だけじゃ厳しかったが、アルパート、お前が協力してくれれば道行きがぐっと楽になる。俺達で、俺達の仲間を好き放題弄んでくれた連中の茶番を引っ掻き回してやろうぜ」

「引っ掻き回すのは構わねえがあれか？ その娘はなんとか言うエミリアの聖剣と融合したって……」

「いや、違う。アラス・ラムスとは別個の存在だ。この娘自身がもう一振りの聖剣の核って言っても過言じゃねえ」

「人間が聖剣の核っていうのもよく分からねえが、詳しい仕組みは置いておくとして、進化聖剣・片翼^{ツバ}がもう一本あるってのは飲み込んだ。だがまさか魔王、お前がそれを使うわけじゃねえよな。ベル、あんたが使うのか？」

「え？ いや、私は……ん？」

アルバートの疑問は至極最もだが、鈴乃は意表を突かれて真奥の顔を見る。

真奥は魔力を行使する悪魔の王であり、恵美の持つ、進化聖剣・片翼^{ツバ}と同じものだと思われれば、当然聖法氣^{セイポウキ}を媒介^{バイゴ}に発動するものだと思うのが普通だろう。

だが鈴乃は、真奥が魔力でも聖法氣でもない力を用いて聖剣を振るう姿を目の当たりにしており、恵美とアラス・ラムスがそうであるように、真奥とアシエス・アールがイエソドの欠片^{かけら}を媒介に融合していることも疑う余地は無い。

「ん？ んん？ 待て、何か、何かがおかしい」

「どうしたんだ鈴乃」

「いや、私は何か重要なことを見落としているような……」

額^{ひたい}に手を当てて考え込んでしまった鈴乃を見て真奥は首を傾^{かたむ}けるが、

「まあ、そこは見て驚け。アシエス、剣の形を取ってくれ」

「あ、ウン、でも、なんか体調悪くて、うまくいかないカモ」

「体調？ なんだ、食いすぎて腹壊したか？」

「そんなんじゃないヨ― シツレイな― いや、この国来てからナーンかお腹空きやすくて、いまいちチョコシ出ないんだよね」

真奥につまみ上げられたままの格好で、首をひねってみたり肩を回してみたりするアシエスだったが、とりあえず頷くと、

「まあ当たって挫けるダネ― いったん戻るヨ」

「いや、挫けるなよ……」

不吉な言い間違いに突っ込んでゐる間に、アシエスの輪郭がおぼろげに光りはじめ、次の瞬間には紫色の光の粒子になって真奥の体へと戻ってゆく。

「お？ 今のは確かにエミリアの……」

アルバートは驚いて身を乗り出す。

真奥は次の瞬間のアルバートの驚く顔を想像しながら、右手を目の前にかざした。

「出てこい！ アシエス!!」

気合いと共に掌に意識を集中すると、先ほどの光の粒子が右手に凝結し、そして……。

「……………あれ？」

最初に疑念の声を上げたのは、大見得切っていたはずの真奥本人であった。

「なんだそりや。聖剣って割には随分とこう……」

アルバートも、真奥の右手に現れたものを見て眉根を寄せる。

「お、おいアシエス、なんだこれ、どういうことだ？」

「……イヤー、なんでだろうーネ？」

真奥の問いかけに、頭に響くアシエスの声も珍しく真剣に困惑していた。

「これでもソコソコ全力なんだケド……」

「そ、そんなハズねえだろ。もっとぶわーってなつたらぶわーって」

「どうしたんだ、魔王」

心に浮かんだ疑問を解決できないまま顔を上げた鈴乃を、真奥は情けない顔で見送すしかなかった。

それも仕方がない。

真奥の手に出現した「聖剣」は、果物ナイフのような貴相な姿だったからだ。

一応、柄の部分にはイエソドの欠片らしき宝石があしらわれているが、刃体は笹塚の百円シ
ョップに売っているようなナイフと大差なく、握り手も真奥の手が若干余るほどの貴相なもの。
笹塚北高校で見せた「もう一振りの『進化聖剣・片翼』」とも言うべき神々しきや力強さな
ど欠片も見られず、さらには、

「う」

突然真奥が顔を撃つて口を押さえてしまう。

「ど、どうした、魔王？」

それどころか顔色が一瞬で青ざめてよろめき後ずさり、鈴乃は慌ててその背を支える。だが鈴乃の支えも虚しくその場に膝をついてしまった真央は、

『**ア**』

それだけ言うと、鈴乃の手を振り切って突然森の奥目がけて走り出すではないか

附生?

「おいおい、どうしたんだあいつ」

鈴乃とアルバートは、脱兎の勢いで森の木陰に飛び込んだ真奥を見送っていたが、やがて

「うげええええええええええ……」

朝のさわやかな森の木陰に全く相應あはさしくないうめき声と、何か出てきてはいけないものが出てきてしまった聞きくに堪たえない湿った音が響き渡った。

大見得切った流れからの、聖剣の顯現失敗、唐突な消化器系逆流現象の連鎖に、鈴乃もアルバイトも為す術も無ければ二の句も継げない。

やがて出てきてはいけなものが出切った気配がしてから、森の奥から具現化したアシエスに支えられ、顔が真つ青になった真奥が戻ってきた。

「大英帝國」

「さう……見えてるか……うん」

えずきながら涙目で戻ってきた真奥は、アシエスの肩から手を離し、その場にへたり込んでしまう。

「アシエス、一体どうしたというんだ」

真奥の人事不省な状態を見て、鈴乃は心配そうに真奥を見下ろすアシエスに問いかける。

「んーよくワカランのだけど、何かね、力出すのをキョヒられてるってカンジ」

「キョヒられ……拒まれてるということか？」

アシエスの若者言葉の文章を正確に言い直した鈴乃は、アシエスと真奥を交互に見る。

「誰が、拒んでいるんだ？」

アシエスは本当に何げなく、視線を落とした。

「そりゃ、もちろんマオウが」

「ああ？ 俺が？」

真奥は息も絶え絶えでアシエスを見上げる。

「俺がお前に出ろつつったのに、なんで俺が拒否してることになるんだよ……」

「知らないヨ。だってそう感じたんだモン。私ちよつとショツク。この前はあんなに相性よかったノニ」

「おま……うっ」

まるで深刻そうでないアシエスに食ってかかろうとした真奥だが、胸のむかつきが収まらな

いのかすぐに口を押えてうずくまってしまふ。

「よく分からんが、要するに聖剣は使えない、ってことでいいのか？」

成り行きを見守っていたアルバートが困ったようにそう尋ねる。

「のようだが……そうなると少し困ったことになるな」

鈴乃の印象では、アシエスの力を手に入れた真奥の力は圧倒的で、それこそ大天使を一方的に屠る恵美とはば同格か、場合によってはそれ以上の力を持っていた。

その力が使えないとすると、もしエフサハーンで暗躍する天使達と事を構えなければならなくなつたとき、戦力が不足する恐れが出てきてしまふ。

だが一方で、笹幡北高校では、初めて手に入れた力をなんの問題なく操るい、それから今日に至るまで真奥の体にはなんの異変も体調不良も起こらず、アシエスの具現化と融合も滞りなかつたはずだ。

「ん？」

再び、鈴乃の脳内に、正体の分からない警鐘が發せられる。

今、また何か重要なことを見逃しかけている。

青白い顔の真奥と、龍天気なアシエス、口を扶めず困っているアルバートの様子を見ながら、鈴乃は必死で、必死で考えた。

「あー……くっそ、なんでこんなことになるんだ。今日までなんの変化もなかったのに……」

ようやく少し顔色が戻ってきた真奥が、そうボヤいた瞬間だった。

「っ？」

鈴乃は、重大な疑問の尾を掴んだ。

そうだ。最初からおかしいと思うべきだった。それなのにおかしいと思えなかった。それは何故か。

鈴乃は、目の前の「真奥貞夫」という「人間」と、あまりにも長く接してきたからだ。

「魔王、お前エンテ・イスラに戻ってきたのに……何故悪魔型に戻らない？」

「……あ？」

「戻らないまでも……魔力はどうした。少しくらい魔力が戻ってきていないのか？」

「……あ」

声が震える鈴乃の問いに、真奥は息を呑む。

「あ、あれ？ そうだね……魔力……あれ？ おかしいぞ？」

真奥も鈴乃の言うことの重大さに気づいたらしく、折角戻った顔色がまた青ざめる。

真奥の肉体に、魔力が戻っていない。

エンテ・イスラの地は確かに人間の世界だが、それでも魔王サタンが悪魔型を維持できるほどの魔力は常に得られる世界だったはずだ。

そして魔力が戻った体は、意識しない限りはほぼ自動的に「魔王サタン」へと「変身」する

はずだ。

真奥は自分の足や頭を憶たたくし、触りながら、肉体構造に全く変化が起きていないことを確認して、愕然とする。

「アシエスの力のせいか……？」

「シランけど」

アシエスはどこまでも無責任だが、問い詰めたところで真奥の身に魔力が戻らない理由をアシエスが把握しているとは思えない。

そして、狼狽する真奥を見ながら、鈴乃はさらに重大なことに気づきアシエスを見た。

「魔王、お前は、日本でアシエスと融合したのだったな」

「あ、ああ……」

その問いは、先の魔王軍のエンテ・イストラ侵攻に関わる全ての人間、悪魔に、衝撃を与える問いであった。

「何故魔力の持ち主である魔王が聖剣と……『イエソドの欠片』と融合できた？」

作者、あとがく — AND YOU —

「無人島に何か一つだけ持っていけるとしたら、何を持っていく？」という質問を、人にされたり、人にしたりしたことはあるでしょうか。

和ヶ原は昔からこの「無人島」の条件が気になって仕方ありませんでした。

勝手な想像なのですが「むじんとぅ」という音の響きから多くの人が、きつと海の中にヤシの木一本だけあるような島を想像し、それからちよつとジャングルとか動物とかいるのかな、くらいまで想像すると思うんです。

でも、ちよつと待つてください。

火山性の無人島の場合は動植物の生育がきわめて限定されている可能性があります。

岩礁系（いづみ）の無人島の場合、飲料水の確保が困難でしょう。

無人島は寒冷地にもあるのです。北極圏や南極圏の無人島と、赤道直下の無人島では「人間がない」ということ以外は全く条件が異なる土地であるはずです。

それらの諸条件が分らないのに「何か一つ」しか持っていけないって、それは無茶が過ぎるでしょう。

日常会話の遊び問答に何をマジになつてんだとお思いの向きもあるでしょうが、そこを押し

てこの「無人島問答」を真面目に考えると、詰まるところ「未知の土地に放り出されたときに、優先するべきことは何か」を考えるべき問答ではないかと思うのです。

で、何が言いたいかと言うと、もし皆さんが「異世界」に飛ばされた場合、生き延びるために最も重要なことは何かを、本書執筆に当たり和々原、真面目に考えました。

大気組成、人類以外の有機生命体、地質・土壌の組成などの諸条件が地球人類の生存に適していない異世界の場合は即死するしかありませんので「地球人類が生命活動を行うのに支障がない環境」という条件だけは整っているという仮定の下、我々が「異世界」に飛ばされたときの行動を検証していきたいと思います。

最優先で行うべきは、位置情報の収集です。

人間はなんの目印もない状態で一定方向に移動するのが困難な生き物です。ホワイトアウトした雪山で闇雲に歩くと同じ場所をぐるぐる回ってしまうという話は有名です。方角と気候を把握することで、未知の土地で一定方向に向けて移動する指針を確保します。

東西南北と、大体の気候を把握したら、次にすべきは飲料水の確保。湖沼や池は水が浚いで飲用に適さないこともあるため、贅沢を言えば湧き水や清流、最低でも水が流動している河川を見つけないです。

そして水の確保以外にも、川は進路の目印になると共に、川沿いには人里も多くあるので、人間に救助を求められる確率も上がります。

また河川沿いには動植物が集まるため、食料を手に入れる期待も持てます（危険な野生動物に遭遇する可能性もありますが）。

そうしてなんとか命を繋いで、人や人里に救助を求めることができれば、そこからあなたの冒険が始まります。

もちろん最初にお話しした「無人島」の条件が一定ではないように、飛ばされた「異世界」のスタート地点が寒冷帯だったり乾燥帯だったり高山帯だったりする可能性が否定できないため、そのような場合前述の道を模索したとしても、生存確率は極めて低くなるでしょう。

異世界の人類の文明レベルも重要ですし、運よく人口密集地帯に漂着したとしても、現地人類が類人猿を祖とした人類でない場合、見通しはかなり暗くなります。

なので、日頃から異世界に飛ばされそうな気配がある人は、何か一つだけと言わず、長袖長ズボンを常に着用し、できればコートを羽織り、方角を確かめるための方位磁針、虫よけスプレー、ミネラルウォーターを携帯してください。

これだけで生存確率は圧倒的に上昇します。長袖長ズボンは、寒冷地は言うに及ばず強烈な太陽光が降り注ぐ乾燥帯でも重度の日焼けから肌を守ってくれます。

方位磁針とミネラルウォーター携帯の理由は言わずもがな。

虫よけスプレーは、異郷の地で虫に刺されると、それだけで死に直結する可能性があるので必須のアイテムです。

それらの道具を持っていれば、類人類以外の生物から進化した人類からも、なんらかの文明的背景を持った生き物だと認識してもらえらるでしょう。

ただしこれらの物を目頃から携帯して今の世界の人達に不審がられても、和ヶ原は責任を負いかねます。異世界に旅立つための準備は自己責任にて整えてくださいませ。

こんなことを毎日考えている和ヶ原ですから、「はたらく魔王さま!」の物語を進めるにあたって、恵美や鈴乃の故郷「聖十字大陸エンテ・イスラ」を物語の主な舞台とするお話が出来上がるのははや必然でした。避けて通れない、と言った方が良いでしょう。

本書は二つの世界の狭間で、今日を一所懸命に生きるけど何かと思い通りにならないことが多い人間や悪魔や天使達が、己の分を全うすべく必死に足掻くお話です。

「はたらく魔王さま!」という物語を新たなステージに進めるため、真奥貞夫や遊佐恵美や佐々木千穂の行く末を見るのを心待ちにしている読者の皆様を、再びこのような形でお待たせすることになり、申し訳ありません。

本書もまだまだ通過点ですし、次巻は記念すべき十巻目にして「はたらく魔王さま!」の世界に生きる彼らが、新しい世界に進むための物語の大きな節目。

今しばらく、魔王と勇者達の道行きに、お付き合いいただければ幸いです。

また、次巻にてお会いできることを願って。

それでは!!

『はたらく魔王さま! 9』
巻末特別企画

履歴書集

[illegible]

年	月	出来事・出来
		天界時代のもつとラでもいい
平成22年		センタリー・フロンティア 潜入 現職
未来1		我々が神と心で通じ合う
未来2		マクロナードとセンタリー・フロンティアの融合を以て、女神との融合を成す
未来3		愛に溢れた生活の質、という
未来4		愛に溢れた生活の質、という

著者	飯島七太郎、藤田謙治、東京衛生書林、厚生省医務局 刑事警察検定第一級、愛の伝説師、百種の未来の作偽		
題名・副題	女科癡美眼、ヒサ花、木崎真弓の存在と隠微対比		
本誌掲載	木崎真弓のハートと刺止めない		
本人の自筆	木崎真弓との愛に、参った生活		
収録時間	徒歩 10分	収録距離の 有無	将来の予定
			収録者の 名前

●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」
〔豪華版〕

「はたらく魔王さま！2」
〔前〕

「はたらく魔王さま！3」
〔前〕

「はたらく魔王さま！4」
〔前〕

「はたらく魔王さま！5」
〔前〕

「はたらく魔王さま！6」
〔前〕

「はたらく魔王さま！7」
〔前〕

「はたらく魔王さま！8」
〔前〕

「はたらく魔王さま！9」
〔前〕

本書に対する意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dengekibunko.dengeki.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお見みください。

ファンレターあて先

〒100-8284 東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和+原研司先生」係

「029先生」係

※冊は着が下ろしです。



はたらく魔王さま! 9

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

2013年1月1日 星期三

100

株式会社アスキー・メディアワークス

甲二〇一八年度國家經濟發展委員會第一八十九次

圖 2-3-2 六人合組一組

1000

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

THE CHELSEA + KILKENNY

Figure 1

圖書在版編目(CIP)數據

[illegible]

「藤原一門の本懐は朝廷を動かしたはず。藤原がそれだけ強大な勢力を築いた上で、神皇正統系の人々よりアサリマスウを道義問題においてお譲りしたのだ。藤原が時勢を察して内閣を動かしたのだよ」。

和し、右の型で煮物や餅人形等作っている。餅の原料は、餅上りである。餅上りは、餅上り（餅上り）に餅上りして作る。

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名書を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐える作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changing Times/Changing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦



電撃文庫

はたらく魔王さま！

和文原題

ISBN/A / 029

ISBN 978-4-04-870270-6

世界は謎解きだった魔王が、勇者に敗れて語り継いだ先は、異世界「東京」だった。六重二層のアバウトを食った魔王様、フリーターとして働く魔王の明日はどんなのだ？

わ-6-1 2278

はたらく魔王さま！2

和文原題

ISBN/A / 029

ISBN 978-4-04-870547-9

高橋代理に再会し、ますます盛り上がる魔王。そんなある日、魔王城に謎の扉の六重二層の扉に、女の子が叩き開いてきた。心臓が止まらぬという手帳と勇者だった彼女。

わ-6-2 2141

はたらく魔王さま！3

和文原題

ISBN/A / 029

ISBN 978-4-04-870815-9

東京・魔法の六重二層の魔王城に、勇者界からのダイトが開く。そこから現れた幼い少女は、魔王をパパ、勇者をママと呼んで……。魔法と勇者の第3巻登場！

わ-6-3 2213

はたらく魔王さま！4

和文原題

ISBN/A / 029

ISBN 978-4-04-886544-5

ダイト達の体罰により戦を失った魔王。しかもアバウトも破壊のため一時退去となる。魔王と魔王城を一気に使い、先達の魔王は、なぜか、海の下ではたらくことになる。

わ-6-4 2281

はたらく魔王さま！5

和文原題

ISBN/A / 029

ISBN 978-4-04-886634-5

魔王と通話中の魔王が、まさかの謎のダイトに侵入を許す！ 異世界の勇者と、神乃もそれに使われることに。そんな中、現れる女子魔王・手帳に危機が迫っていた。

わ-6-5 2348

はたらく魔王さま! 6

和ヶ原駿 著

イラスト／0229

ISBN978-4-04-062990-1

マダロナルドに復帰した魔王は、心機一転新たな変身をする。そんな中、千穂が魔念探知を覚えたと言いつつ、敵乃が怪行の端に張ったのはなぜか謎で、

わ-6-6 2423

はたらく魔王さま! 7

和ヶ原駿 著

イラスト／0229

ISBN978-4-04-063166-2

真奥と真美がアリス・ラムスのお世話を買いに3人でお出かけ。千穂が真美と初めではあった頃のエピソードなど、魔王等は他2編を増えた特別編でお届け!

わ-6-7 2490

はたらく魔王さま! 8

和ヶ原駿 著

イラスト／0229

ISBN978-4-04-063180-9

真美がエンチ・イスラに誘われることになり、羽を飛ばす真奥、心配する千穂。一方真美はマッドの新魔界のために覚悟試験を受けるが、試験場で思わぬ出会いが、

わ-6-8 2519

はたらく魔王さま! 9

和ヶ原駿 著

イラスト／0229

ISBN978-4-04-063180-9

真奥と真美を救済に向かう魔王達は何か持っていくか不安。日本の生活に慣れた真美はエンチ・イスラでの放浪に大苦戦。魔界派ファンタジーは真美界でも馴染むらずです!

わ-6-9 2587

魔法科高校の劣等生 ① 入学編 (上)

佐島勤 著

イラスト／石田洋次

ISBN978-4-04-063180-9

累計300万部のWEB小説が電撃文庫で登場! 今こそ連載した兄と、彼に密かに想いを寄せる妹。二人が魔法科高校に入学したときから、その波乱の日々は始まった。

わ-4-1 2157

魔法科高校の劣等生 ② 入学編（下）

定価 助

イラスト／石田可弥

ISBN 978-4-04-070598-1

優等生の時、国費が加入した魔法科高校生候補。劣等生の兄・連ははその生徒会の強引な就学で、魔法行為を取り締まる魔装機員メンバ―となるが、その中でも魔装の日々は厳格……

8-14-2 2171

魔法科高校の劣等生 ③ 九校戦編（上）

定価 助

イラスト／石田可弥

ISBN 978-4-04-070600-6

「九校戦」の準備が整って来た。全国から集まった魔法科高校生の、悪きプライドを磨いた勝負が始まる。夏の一大イベントに決ま定つ争奪戦も、唯一、両陣営が勝つ……

8-14-3 2220

魔法科高校の劣等生 ④ 九校戦編（下）

定価 助

イラスト／石田可弥

ISBN 978-4-04-070699-0

「九校戦」に優勝として無条件進級参加させられた「劣等生」の連。彼は、未来の魔法師たちがあつかりあつたこの競技の裏で暗闘する、ある組織の存在に気づく……

8-14-4 2239

魔法科高校の劣等生 ⑤ 夏休み編（上）

定価 助

イラスト／石田可弥

ISBN 978-4-04-070697-6

今度の「魔法祭」はウェブ史公認の書を手ずろしをかけた大規模の特別編――連生と連生の姉妹の魔で成り立っている、彼ら連生らの意外なエピソードが隠れる……

8-14-5 2306

魔法科高校の劣等生 ⑥ 横浜騒乱編（上）

定価 助

イラスト／石田可弥

ISBN 978-4-04-070700-9

全国の高校生による、魔法学・魔法能力・魔法技術を競奪する異色「魔法学園文コンベンション」が、司達連を交戦つ闘いあつた魔装機能力は、その中で大いに磨かれ……

8-14-6 2359

魔法科高校の劣等生 ⑦ 横浜騒乱編(下)

佐藤 勤
イラスト／石田可奈

ISBN 978-4-04-120670-9

「魔法文コンペ」会場である横浜に、異国の魔術師たちが参入した。ついに町内騒乱は、恐ろべき「横浜の力」の解放に導くのである。た。華麗なる魔術対決の連続に、注目せよ。

3-14-7 2393

魔法科高校の劣等生 ⑧ 遠征編

佐藤 勤
イラスト／石田可奈

ISBN 978-4-04-120110-0

半から三年前、魔法学園にとって、忘れられない「出来事」があった。その「出来事」から遠征は始まった。足と足の関係も、口に向ける、自分の心も……

3-14-8 2451

魔法科高校の劣等生 ⑨ 来訪者編(下)

佐藤 勤
イラスト／石田可奈

ISBN 978-4-04-120141-9

早く「文庫版」で魔法科高校にやってくるた。全編の魔法をより一歩、深まる見方と視点で、同時にその「魔法」に気づき……。魔法の時の魔法は、再び魔法の魔法である。

3-14-9 2500

魔法科高校の劣等生 ⑩ 来訪者編(中)

佐藤 勤
イラスト／石田可奈

ISBN 978-4-04-120160-7

「来訪者」事件の全部は本編に明かすに足りつづいた。遠征の魔法ではまだ行かぬ。未知からの「来訪者」である彼らだ。ついに魔法科高校に参入する――

3-14-10 2548

魔法科高校の劣等生 ⑪ 来訪者編(下)

佐藤 勤
イラスト／石田可奈

ISBN 978-4-04-120161-5

魔法科に参入した「パラサイト」――ピラシーは、遠征に付随するものである。魔法科からの「来訪者」を導く魔法は、魔法科高校を舞台に魔法対決を導く――

3-14-11 2582



電撃文庫

アリス・リローデッド

ハロー、ミスター・マグナム

既刊あり

イラスト／須藤健

15歳20分、16歳10分、17歳10分

わたしの名前はミスター・マグナム。見
ての通り、華やかで、一流の超能力者。大
量の武器、金銭、名声、未来を切り開くマジッ
ク・ガン・アクションが大好き！

1-37-1 2483

アリス・リローデッド2

ヘヴィ・ウェイト

既刊あり

イラスト／須藤健

15歳20分、16歳10分、17歳10分

破滅の未来を回避することに成功したミ
スター・マグナム。だが、もう一人の「宇
宙する者」により、新たな危機が迫る。
ロッキーの「究極の死」とは――

1-37-2 2542

アリス・リローデッド3

サクリファイズ

既刊あり

イラスト／須藤健

15歳20分、16歳10分、17歳10分

悪魔のステイルを出し抜き、強敵だっ
たロッキー・ローとの約束を果たすべく
動くミスター・マグナムとアリスたちに
迫る未知の影が迫る。異世界の魔法学校――

1-37-3 2595

放課後の魔法戦争

既刊あり

イラスト／宮内もよみ

15歳20分、16歳10分、17歳10分

世界の裏側で喧嘩する「魔法使い」。魔法使い
の本拠地、魔法戦争を始める彼らは、ある学校を
舞台に、魔法戦争を闘った。魔法と化した
放課後の戦争となるのは、果たして――

1-5-20 2514

アフタースクール・魔法戦争

放課後の魔法戦争2

既刊あり

イラスト／宮内もよみ

15歳20分、16歳10分、17歳10分

魔法三九郎の「魔法使い」を敵しがる謎の美
女が登場。しかしそんな大逆無道の日常の
裏で、再び「魔法戦争」たちの陰謀が動き始
める。シリーズ第2巻！

1-5-20 2588



アイドル
俺の天使は恋愛禁止！

徳岡のん
イラスト／藤乃清樹

ISBN 978-4-04-071556-7

魔法を使える俺たちが決して逢うけない、
華やかなアイドルの世界。けれど運命の面
車は本意無識だ。そんな天使のような彼女と
も、いま僕の目の前に――。

4-20-1 2477

アイドル
俺の天使は恋愛禁止！2

徳岡のん
イラスト／藤乃清樹

ISBN 978-4-04-071762-9

アイドルへの第一歩を踏み出したばかりの
ソフィアに、なんと同じ魔法のオファアが
臨く。しかしこの魔法ソフィアとの最初の顔を
わせて、いきなりトラブルが発生――

4-20-2 2590

無限のドリフター
世界は天使のもの

徳岡のん
イラスト／崎山けい吉

ISBN 978-4-04-071601-1

魔法を使え、すべてが壊れた世界の地上。僕に
光を照り合わせる世界で、マサキは羽を振っ
ていた。僕に命を捧げようとした少女――僕
は、無限の天使を救った。

4-6-1 2540

無限のドリフター2 世界は天使のもの

徳岡のん
イラスト／崎山けい吉

ISBN 978-4-04-071856-5

すべてが壊れ、灰色に染まっている地上へ、
彼は戻ってきた。愛する天使マサキを自覚のさ
すめのため、そして世界を救うため、マサキが
できることは――。

4-6-2 2591

失恋探偵ももせ

阿部美知
イラスト／2000000000

ISBN 978-4-04-071553-5

「あなたはいつか終わります」そう言いながら
失恋の話を解き明かす年代記漫画は、け
れと恋をしたことがなくて……。これは
恋くて甘い、恋の終わりの物語。

4-21-1 2607

失恋探偵ももせ2

時 間 表

イリスと / Moribiki

ISBN 978-4-04-091860-2

危機を乗り切り、再び失恋探偵として活動を開始した伊リスと九十九。だが、四週間の休にもならない期間はやっやうる——これは恐ろしくて、次の事件の時。

み-21-2 2594

エーコと「トオル」と部活の時間。

時 間 表

イリスと / MACCO

ISBN 978-4-04-091861-9

半学期に起こった事件のせいでクラスから孤立したエーコは、唯々人形演劇の「トオル」君と知り合い……。ひねくれ少女のシニカルな探偵活動スリリー。

や-7-1 2485

エーコと「トオル」と真夜中の落忍少女。

時 間 表

イリスと / MACCO

ISBN 978-4-04-091862-6

エーコの学校を去る直前「不審者」が徘徊していると噂が立ち、エーコは疑いを掛けられてしまう。調査を開始したエーコが夜中の学校で見たものは……。

や-7-2 2595

灰燼のカーディナル・レッド

時 間 表

イリスと / 藤原

ISBN 978-4-04-091863-3

「魔物の遺産」を巡る戦いに終止符を打つ男が現れた。それは、魔人ベリアルの手を持つ最強の最強の「カーディナル・レッド」——イカした「不審者の遺産」の一人である。

に-7-1 2432

灰燼のカーディナル・レッドⅡ

時 間 表

イリスと / 藤原

ISBN 978-4-04-091860-2

魔人ベリアルの手を持つ最強の最強の「カーディナル・レッド」、そして魔人アスタロトの再来を持つ鬼の騎士「カーディナル」——両方に顔面を打つ魔物の真の出現の時、新たな戦いが幕を開ける。

に-7-2 2597

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー!

上屋野浩平（『ブギーポップは笑わない』）、高橋秀七郎（『灼熱のシナナ』）、
成田良悟（『バッカーノ!』）、支倉凍砂（『狼と香辛料』）、
有川 浩（『図書館戦争』）、川原 礪（『アクセル・ワールド』）など、
常に時代の一端を渡るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」、
新時代を切り開く才能を毎年募集中!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

※第2次選より賞金を増額しております。

賞
(共通)

大賞……………正賞+副賞300万円
金賞……………正賞+副賞100万円
銀賞……………正賞+副賞50万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞100万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞30万円

編集部から選評をお送りします!

小説部門・イラスト部門は1次選考以上を通過した人全員に選評をお送りします!

イラスト大賞はWEB応募も受付中!

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

<http://asciimw.jp/award/taisyo/>

編集者のワンポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載!